

平成 29 年度メディア芸術連携促進事業 連携共同事業

マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発 実施報告書

学校法人 京都精華大学

平成 30 年 2 月

目次

第1章 概要（事業の目的、実施内容、成果、課題の概要）	5
1.1 事業の目的	5
1.2 今年度事業の目的	5
1.3 実施内容	5
1.4 成果	6
1.5 今後の課題、展望	7
第2章 事業の目的、主旨	8
2.1 背景	8
2.2 事業目的	8
第3章 実施体制	9
3.1 事業の進行管理体制	9
3.2 京都国際マンガミュージアム／京都精華大学国際マンガ研究センター	9
3.3 横手市増田まんが美術館	9
3.4 明治大学 米沢嘉博記念図書館	9
3.5 北九州市漫画ミュージアム	10
3.6 その他協力機関	10
第4章 実施スケジュール	11
第5章 実施内容	13
5.1 実証実験・調査	13
5.1.1 〈収集〉 各館の〈収集〉の状況	13
5.1.1.1 京都国際マンガミュージアムの〈収集〉の状況	13
5.1.1.2 横手市増田まんが美術館の〈収集〉の状況	14
5.1.1.3 明治大学米沢嘉博記念図書館の〈収集〉の状況	14
5.1.1.4 北九州市漫画ミュージアムの〈収集〉の状況	14

目次

5.1.2	〈整理・保存〉 各館の整理・保存の状況	14
5.1.2.1	京都国際マンガミュージアムの〈整理・保存〉の状況	14
5.1.2.2	横手市増田まんが美術館の〈整理・保存〉の状況	16
5.1.2.3	明治大学 米沢嘉博記念図書館の〈整理・保存〉の状況	17
5.1.2.4	北九州市漫画ミュージアムの〈整理・保存〉の状況	18
5.1.3	利活用 各館の利活用の状況	18
5.1.3.1	京都国際マンガミュージアムの利活用の状況	18
5.1.3.2	横手市増田まんが美術館の利活用の状況	18
5.1.3.3	明治大学米沢嘉博記念図書館の利活用の状況	18
5.1.3.4	北九州市漫画ミュージアムの利活用の状況	18
5.1.3.5	原画ダッシュ	18
5.2	研究会・報告会	19
5.2.1	保存修復研究部会	19
5.2.2	マンガ家インタビュー部会	19
5.2.3	中間報告会	20
5.2.4	全体会議	20
5.2.5	シンポジウム「マンガ〈原画〉のアーカイブに向けて」	20
5.3	モデル開発	20
5.3.1	マンガ原画の利活用モデルの開発	20
第6章	広報・広報制作物	21
6.1	広報物・報道	21
第7章	成果・課題・評価	24
7.1	成果 各連携館における原画アーカイブの実証実験の成果	24
7.1.1	京都国際マンガミュージアムの成果	24
7.1.2	横手市増田まんが美術館の成果	24

目次

7.1.3 明治大学 米沢嘉博記念図書館の成果	25
7.1.4 北九州市漫画ミュージアムの成果.....	25
7.2 各連携館の課題	25
7.2.1 京都国際マンガミュージアムの課題	25
7.2.2 横手市増田まんが美術館の課題	25
7.2.3 明治大学 米沢嘉博記念図書館の課題	26
7.2.4 北九州市漫画ミュージアムの課題.....	26
7.3 展望.....	26
7.4 調査と研究	27
第8章 総括	28
8.1 総括.....	28
付録.....	29
1 タイプ分類モデル図	29
2 各機関の作業マニュアル	31
3 議事録	66
4 シンポジウム「マンガ〈原画〉のアーカイブに向けて」要約・全文	204

第1章 概要（事業の目的、実施内容、成果、課題の概要）

1.1 事業の目的

マンガアーカイブの豊富な経験を持つ文化関連施設である「京都国際マンガミュージアム」（京都 MM）、「横手市増田まんが美術館」（横手 MM）、「明治大学 米沢嘉博記念図書館」（米ト）、「北九州市漫画ミュージアム」（北九州 MM）と連携し、マンガ〈原画（＝原稿）〉のアーカイブ——〈収集〉〈整理・保存〉〈利活用〉——の作業を実践、その成果を、マンガ家や出版社、他分野の研究者らと共有し、検証することで、作業手法の深化や開発を図る。

1.2 今年度事業の目的

マンガ家やその家族、コレクターなどの個人や出版社、文化施設など、文化資源としてのマンガ史資料の所有者の形態は様々であり、物量も膨大である。大量かつ多様な事情を持つマンガ史資料を一か所において一括保管するには、広大な施設と膨大な経費が必要となり、現実的ではないだろう。重要な点は、それらの所在を明らかにした上で、早期に適切な〈整理・保存〉処理を行い、所有者の意向に沿った〈利活用〉がなされることである。

本事業では、マンガアーカイブの豊富な経験を持つ複数のマンガ文化関連施設と連携し、特に緊急性の高いマンガ〈原画〉のアーカイブ——〈収集〉〈整理・保存〉〈利活用〉——を試みる。その成果を、マンガ家や出版社、他分野の研究者らと共に検証することで、作業手法の進化や開発を図ることを目的とする。その上で、こうした実践をタイプ別モデルとして提案し、マンガ史資料の多様な所有者に資するのみならず、今後整備されるべきその他のポピュラーカルチャーのアーカイブ構築や、その史資料の価値付けの際に参考となる指標の提供を試みる。

1.3 実施内容

各連携施設において、それぞれが〈収集〉し所蔵しているマンガ原画を使った〈整理・保存〉に関する実証実験——一定の仕様にもとづき、各館にて一定量の作業を実施——することで、作業の品質やそれに伴う手間、効率性などの検証を行った。京都国際マンガミュージアムにおいては、マンガ原画の〈利活用〉の実験として、精巧な複製原画を制作する「原画ダッシュ」プロジェクトを推進した。また、明治大学 米沢嘉博記念図書館ではマンガ原画を〈利活用〉した展覧会を想定し、原画貸出しのマニュアルを作成した。

また、「保存修復研究部会」と「マンガ家インタビュー研究部会」はそれぞれ、〈収集〉〈整理・保存〉〈利活用〉に関する調査等を行った。

上記の作業も踏まえ、プロジェクトメンバー全員が参加する「モデル開発研究部会」では、マンガ原画のアーカイブに関するモデル化を試み、そのモデル図は、一般参加型のシンポジウムにおいて発表され、検討された。

1.4 成果

【各連携施設におけるマンガアーカイブの実証実験に伴う成果】

<京都国際マンガミュージアム>

- 杉浦幸雄原画 207 点の整理、初出調査、書誌登録（文化庁メディア芸術データベース予備登録）、デジタルカメラ撮影を行った。
- ささやななえ原画 485 点の整理と初出調査、及びデジタルカメラ撮影を行った。
- 谷ゆきこ原画 70 点のデジタルカメラ撮影を行った。

<横手市増田まんが美術館>

- 矢口高雄原画 148 点、能條純一原画 476 点、小島剛夕原画 456 点の高精度スキャン、原画単位にて ID を付与した原画台帳（作品単位 1 枚）の作成、保存作業（中性紙封筒への保管）を行った。

<明治大学 米沢嘉博記念図書館>

- 三原順原画 446 点の整理、初出調査、デジタルカメラ撮影、文化庁メディア芸術データベース予備登録、作品カードの作成、保存作業（中性紙封筒、中性紙箱への保管）を行った。また、イラスト原画以外に手描きのネーム、プロット、スケッチ等の資料類 75 点の整理も行った。ネーム、プロット、スケッチが多く含まれるノート類は 1 冊を 1 点とし、子どもの頃の絵や文集なども含む 1,573 ページを撮影した。

【各研究部会における調査・研究の成果】

<保存修復研究部会>

- 新潟市／新潟市マンガ・アニメ情報館、横手市増田まんが美術館、北九州市漫画ミュージアム、京都国際マンガミュージアム各関係者及びマンガ家・竹宮恵子氏に対するインタビュー調査を実施し、マンガ原画アーカイブの現状を明らかにした。
- 東洋美術学校の協力のもと、保存科学の観点から、モノとしてのマンガ原画の〈整理・保存〉の問題点や対策等について議論し、研修会において、知見を共有した。

<マンガ家インタビュー研究部会>

- マンガ家・ささやななえこ氏、マンガ編集者・佐川俊彦氏、マンガ家・竹宮恵子氏、大手マンガ出版社 A 社編集者に対するインタビューおよび原画の実態調査を実施し、マンガ原画アーカイブの現状を明らかにすると同時に、特に原画の将来的な利活用に関する知見を得た。

<モデル開発研究部会>

- 各連携施設及び各研究部会における知見を踏まえ、プロジェクトメンバー全員及びデザイナーとで、マンガ原画のアーカイブに関するモデル化を試みた。そのモデル図は、一般参加型のシンポジウムにおいて発表され、検討された。

【その他の成果】

- 本事業は、定期的に行われた全体会議や研究会等を通じ、常に、連携施設メンバーとの情報共有がなされながら行われたこともあり、施設間の連携体制が、より強化された。その結果、アーカイブ作業の実証実験において、ある施設の所蔵する原画の初出調査を、書籍資料が充実している別の施設が行う、といった共同作業も行われた。

- 各施設のアーカイブ作業実践に携わった作業者に、マンガ原画の〈整理・保存〉の機会を提供したことで、マンガのアーカイブの専門的・実践的な知見と経験を持った人材を育成することができた。

1.5 今後の課題、展望

- 抽象的なモデル図が提案されたことで、既にマンガ原画を所蔵している、あるいは今後マンガ原画を〈収集〉したいと考えている個人・施設が、取り組むべき課題や相談先などを具体的にイメージできるようになった。
- ⇒ 原画アーカイブを実践する個人や施設等との幅広いネットワークを構築することで、マンガ原画の〈収集〉〈整理・保存〉の方法論を深化し、〈利活用〉パターンの多様化を模索することが可能となるだろう。
- 保存科学を専門とする研究者との共同研究は、これまで人文・社会科学的なアプローチで構築されてきたマンガ史資料のアーカイブとは別の視点を提供した。
- ⇒ 保存科学を始め、より幅広い分野の研究者との共同研究が必要となるだろう。
- マンガ史資料アーカイブの事業が継続して実施されたことで、そこに関わるスタッフのマンガ原画を扱うスキルは確実に蓄積されたが、そうしたスキルが発揮されるべき場の「制度」が整備されていない。
- ⇒ スキルを磨く場を提供しつつ、「ポスト」の確立や「資格」の付与といった制度の構築が必要となってくるだろう。

第2章 事業の目的、主旨

2.1 背景

マンガ作品に関する史資料は、〈原画（＝原稿）〉と、それを元に大量印刷されたところの〈雑誌・単行本〉という、二つの主要な資料群から構成される。これらは、メディア芸術分野の文化資源として重要な位置を占めていると認識されているが、その状況に関しては、それぞれ以下のような大きな課題に直面している。

【〈原画〉を巡る状況】

戦後マンガ文化を支えてきたマンガ家の逝去や出版不況の影響で、遺族によって廃棄されたり、出版社が預かれなくなったりするなど、従来のマンガ史資料保管基盤が、ここ数年急速に崩壊しつつある。国内においてはマンガ史資料の〈原画〉の価値付けは定まっていないため、それらが美術作品と見なされ、蒐集（しゅうしゅう）の対象となっている海外に四散流出する可能性は、極めて高いと言える。

また、現在、マンガ原画の制作はデジタル化が急速に進行しており、今後マンガ〈原画〉がフルアナログで制作される機会は失われていくだろう。このため、対象とすべきアナログ〈原画〉の量は、およその推測が可能である。

【〈雑誌・単行本〉を巡る状況】

マンガ史資料のアーカイブを担っている日本国内のマンガ関連文化施設の多くは、大量複製物である〈雑誌・単行本〉を対象とした収蔵を目的としているところが多いが、ほとんどの施設が資源（収蔵スペース、運営資金、専門的な知見を持つ人材など）の不足という課題を慢性的に抱えており、解決策を模索している状況である。

2.2 事業目的

マンガ家やその家族、コレクターなどの個人や出版社、文化施設など、文化資源としてのマンガ史資料の所有者の形態は様々であり、物量も膨大である。大量かつ多様な事情を持つマンガ史資料を一か所において一括保管するには、広大な施設と膨大な経費が必要となり、現実的ではないだろう。重要な点は、それらの所在を明らかにした上で、早期に適切な〈整理・保存〉処理を行い、所蔵者の意向に沿った〈利活用〉がなされることである。

本事業では、マンガアーカイブの豊富な経験を持つ複数のマンガ文化関連施設と連携し、特に緊急性の高いマンガ〈原画〉のアーカイブ——〈収集〉〈整理・保存〉〈利活用〉——を試みる。その成果を、マンガ家や出版社、他分野の研究者らと共に検証することで、作業手法の進化や開発を図ることを目的とする。その上で、こうした実践をタイプ別モデルとして提案し、マンガ史資料の多様な所有者に資するのみならず、今後整備されるべきその他のポピュラーカルチャーのアーカイブ構築や、その史資料の価値付けの際に参考となる指標の提供を試みる。

なお、本事業は、平成28年度連携共同事業「関連施設の連携によるマンガ原画管理のための方法の確立と人材育成環境の整備」を引き継ぎつつ、いったんの総括を目指すものである。

第3章 実施体制

3.1 事業の進行管理体制

本事業は、「京都国際マンガミュージアム」、「京都精華大学国際マンガ研究センター」(IMRC)、「横手市増田まんが美術館」、「明治大学 米沢嘉博記念図書館」、「北九州市漫画ミュージアム」の連携により、実施された。

また、事業内容に応じて、「保存修復研究部会」(責任者：ヤマダトモコ)、「マンガ家インタビュー研究部会」(責任者：倉持佳代子)、「モデル開発研究部会」(責任者：伊藤遊)を設置、各連携施設のメンバーが、随時それぞれの部会に関わる形で運営した。「保存修復研究部会」に関しては、マンガ原画の保存修復の知見と経験を持った「東洋美術学校」の協力のもと、運営された。

各施設と各部会における作業状況等の共有や、事業全体の進行管理は、京都精華大学国際マンガ研究センターが担当した。

メインコーディネータ：伊藤遊（京都精華大学国際マンガ研究センター）

プロジェクト運営補助：倉持佳代子（京都国際マンガミュージアム）

プロジェクト推進オブザーバー：吉村和真（京都精華大学）

3.2 京都国際マンガミュージアム／京都精華大学国際マンガ研究センター

責任者：伊藤遊（京都精華大学国際マンガ研究センター）

副責任者：倉持佳代子（京都国際マンガミュージアム）

作業員＝業務請負スタッフ3名（本事業専従者）：

市川圭（日本アспектコア株式会社）

日高利泰（日本アспектコア株式会社）

カーロヴィチュ・ダルマ（日本アспектコア株式会社）

3.3 横手市増田まんが美術館

責任者：大石卓（横手市増田まんが美術館・横手市まちづくり推進部増田まんが美術館事業室）

作業員＝横手市増田まんが美術館職員3名（原画取扱いに指定された者）：

石田実奈（一般財団法人横手市増田まんが美術財団）

松川ひとみ（一般財団法人横手市増田まんが美術財団）

川越菜々子（一般財団法人横手市増田まんが美術財団）

3.4 明治大学 米沢嘉博記念図書館

責任者：ヤマダトモコ（明治大学 米沢嘉博記念図書館）

第3章 実施体制

作業者＝業務請負スタッフ4名（本事業専従者）：

米津雅代（日本アспектコア株式会社）

伊藤真由子（日本アспектコア株式会社）

鈴木紀成（日本アспектコア株式会社）

新美琢真（日本アспектコア株式会社）

3.5 北九州市漫画ミュージアム

責任者：表智之（北九州市漫画ミュージアム）

作業者：なし

3.6 その他協力機関

東洋美術学校

第4章 実施スケジュール

第4章 実施スケジュール

事業の実施スケジュールは、以下のとおりである。

【連携施設におけるマンガ原画のアーカイブに関わる作業】

- ・原画に関する各種作業を実施した期間：2017年9月16日（土）～2018年1月31日（水）

【各研究部会による活動】

- ・「モデル開発研究部会」：研究会

2017年10月3日（火）15：00～17：30 於・京都国際マンガミュージアムにて開催

- ・「保存修復研究部会」：新潟市／新潟市マンガ・アニメ情報館における原画アーカイブに関する調査

2017年10月19日（金）13：00～16：00 於・新潟市役所

- ・「保存修復研究部会」：横手市増田まんが美術館における原画アーカイブに関する調査

2017年11月27日（月）15：30～18：00／11月28日（火）10：00～18：00 於・横手市役所増田庁舎会議室／横手市増田まんが美術館事業室／増田まんが美術館

- ・「マンガ家インタビュー研究部会」：ささやななえこ氏／佐川俊彦氏への原画アーカイブに関するインタビュー

2017年12月5日（火）18：00～21：30 於・ドルフ

- ・「保存修復研究部会」：北九州市漫画ミュージアムにおける原画アーカイブに関する調査

2017年12月9日（土）14：00～18：00 於・北九州市漫画ミュージアム

- ・「保存修復研究部会」：竹宮恵子氏への原画アーカイブに関するインタビュー

2017年12月10日（日）13：00～16：00 於・北九州市漫画ミュージアム

- ・「マンガ家インタビュー研究部会」：竹宮恵子氏へのマンガ原画および原画ダッシュ活用に関する現状調査

2017年12月10日（日）14：00～17：00 於・北九州市漫画ミュージアム

- ・「モデル開発研究部会」：研究会

2017年12月10日（日）18：00～21：00 於・北九州市漫画ミュージアム

第4章 実施スケジュール

- ・「保存修復研究部会」：京都国際マンガミュージアムにおける原画アーカイブに関する調査
2017年12月19日（火）11：30～16：30 於・京都国際マンガミュージアム
- ・「マンガ家インタビュー研究部会」：A出版社のマンガ原画保存状況に関する調査
2017年12月25日（月） 於・A社（東京都内）
- ・「モデル開発研究部会」：研究会
2018年1月25日（木）11：00～12：00 於・京都精華大学
- ・「保存修復研究部会」：研修会
2018年1月27日（土）11：00～18：30 於・東洋美術学校
- ・「モデル開発研究部会」：研究会
2018年2月3日（土）18：00～19：00 於・京都国際マンガミュージアム
- 【全体会議など】
- ・全体会議
2017年10月3日（火）15：00～17：30 於・京都国際マンガミュージアム
- ・中間報告会（メディア芸術連携促進事業連携共同事業全体）
2017年12月8日（金）13：00～16：15 於・国立新美術館
- ・中間報告会（事業内）
2017年12月8日（金）18：00～20：50 於・TKP スター貸会議室
- ・全体会議
2017年12月10日（日）18：00～21：00 於・北九州市漫画ミュージアム
- ・シンポジウム
2018年2月10日（土）13：00～16：00 於・京都国際マンガミュージアム
- ・最終報告会（メディア芸術連携促進事業連携共同事業全体）
2018年2月25日（日） 12：00～16：00 於・DNP 五反田ビル

第5章 実施内容

各連携施設において、それぞれが〈収集〉し所蔵しているマンガ原画を使った〈整理・保存〉に関する実証実験——一定の仕様にもとづき、各館にて一定量の作業を実施——することで、作業の品質やそれに伴う手間、効率性などの検証を行った。京都国際マンガミュージアムにおいては、マンガ原画の〈利活用〉の実験として、精巧な複製原画を制作する「原画ダッシュ」プロジェクトを推進した。また、明治大学 米沢嘉博記念図書館ではマンガ原画を〈利活用〉した展覧会を想定し、原画貸出しのマニュアルを作成した。（「5.1」）

また、「保存修復研究部会」と「マンガ家インタビュー研究部会」はそれぞれ、〈収集〉〈整理・保存〉〈利活用〉に関する調査等を行った。（「5.2」）

上記の作業も踏まえ、プロジェクトメンバー全員が参加する「モデル開発研究部会」では、マンガ原画のアーカイブに関するモデル化を試み（「5.3」）、そのモデル図は、一般参加型のシンポジウムにおいて発表され、検討された。



図 5-1 本事業の実施概念

5.1 実証実験・調査

5.1.1 〈収集〉 各館の〈収集〉の状況

5.1.1.1 京都国際マンガミュージアムの〈収集〉の状況

本事業のための〈収集〉作業は行われていない。

同館所蔵の杉浦幸雄原画約 12,000 点のうち、初出情報を伴う掲載誌切り抜きスクラップ

第5章 実施内容

ブックが存在した「東京チャキチャキ娘」「大変だァ」原画 207 点、ささやななえこ氏から借用した同氏による原画 485 点、同館所蔵の谷ゆきこ原画 70 点を本事業の対象とした。

5.1.1.2 横手市増田まんが美術館の〈収集〉の状況

本事業のための〈収集〉作業は行われていない。

同館が管理している矢口高雄原画約 45,000 点、能條純一原画約 20,000 点、東村アキコ原画約 15,000 点、小島剛夕原画約 25,000 点、計約 105,000 点の原画の一部を本事業の対象とした。

5.1.1.3 明治大学米沢嘉博記念図書館の〈収集〉の状況

本事業のための〈収集〉作業は行われていない。

同館に委託されている三原順原画（カラー原画、カット原画類）約 400 点を本事業の対象とした。

5.1.1.4 北九州市漫画ミュージアムの〈収集〉の状況

本事業のための〈収集〉作業は行われていない。

5.1.2 〈整理・保存〉 各館の整理・保存の状況

5.1.2.1 京都国際マンガミュージアムの〈整理・保存〉の状況

★同館の〈整理・保存〉に関しては、別紙「京都 MM 〈整理・保存〉作業マニュアル」を参照のこと。

【対象マンガ原画】

1. 杉浦幸雄：「東京チャキチャキ娘」「大変だァ」207 点
2. ささやななえこ（ささやななえ）：「おかめはちもく」他 485 点
3. 谷ゆきこ：「白鳥ののろい」他 70 点

計 762 点

【作業の流れ】

1 仕分：原画を、作品や掲載誌の発行年などによって仕分け、現状の把握を行う。



2 入力：入力項目に沿って、文化庁メディア芸術データベースにデータ入力を行う。



3 撮影：1点1点デジタルカメラで撮影し、1話毎にデータ格納する。



4 保管：1話毎市販の封筒等に入れて貴重書庫で保管。指定用紙や奥付版下など原画以外の用紙も元あった場所に格納。



図 5-1

① 表作成

杉浦幸雄原画を対象に、杉浦幸雄氏の遺族が作成していたスクラップブックを「定本」とし、一覧表を作成した。Excel 上に各話数、各話テーマタイトル、初出誌とその掲載誌の発行日、各作品サブタイトルを入力し、仕分の資料とした。ささやななえこ作品は京都 MM 所蔵の単行本を定本とした。谷ゆきこ作品に関しては定本となる書籍資料が京

第5章 実施内容

都 MM に所蔵がなかったため、今回は撮影のみにとどめた。

初出調査は、杉浦作品に関しては、原画と共に京都 MM に寄贈された掲載誌スクラップブックを、ささや作品に関しては、同館所蔵の雑誌資料を元に行った。

ここで〈収集〉した情報を元に「文化庁メディア芸術データベース」予備登録作業を行った。

② 仕分

各原画を事前に作成した表のとおり並べ替え、「定本」と照合した。谷ゆきこ原画についてはこの作業は行っていない。

③ 撮影

カメラ台を設置し、色味や露出を統一できるようカメラ設定を固定。撮影位置についても、マスキングテープなどで印を付け、原画の撮影場所を固定した。その際画角に幅を持たせるため、実際の原画のサイズよりも一回り大きく写る位置でカメラを固定した。写真に付けるファイル名は末尾の数字が単行本のページ数と合うようにし、1枚の撮影が終わると自動的に新たな番号が振られるように設定した。「定本」が単行本の場合、撮影した写真データは1話ごとのフォルダに入れたのち、巻ごとのフォルダにそれぞれ入れている。

④ 保管

撮影の終わった原画は1話ごとにOPP袋に封入した。原画以外の用紙(下絵、指定用紙、奥付の版下など)も元あった場所から動かさないよう、各原画の後ろに入れた。それぞれの封筒には管理や内容の確認のため、情報が印刷されたラベルを貼り、利便性の向上を図った。作業後、一箱に平積みにして入れ、施錠、温度・湿度管理された貴重書庫で保管した。

作業については、Excel シート上で枚数を記録した。

	A	B	C	D	E	F	G
	作者	内容	原画枚数	原画整理	初出調査	登録(文化庁DB)	撮影
1	杉浦幸雄	大変だァ	156	156	156	156	156
2	杉浦幸雄	東京チャキチャキ娘 週刊東京版 単行本1巻前半分	28	28	28	28	28
3	杉浦幸雄	東京チャキチャキ娘 週刊東京版 未単行本化後半分	23	23	23	23	23
4	杉浦幸雄	2017年度全体	207	207	207	207	207
5	ささやななえ	おかめはちもく第4集	29	29	29		29
6	ささやななえ	おかめはちもく第7集	105	105	105		105
7	ささやななえ	おかめはちもく第8集	152	152	152		152
8	ささやななえ	遠くにおいて...	102	102	102		102
9	ささやななえ	囃う女	97	97	97		97
10	ささやななえ	2017年度全体	485	485	485	0	485
11	谷ゆき子	白鳥ののろい第1話	13				13
12	谷ゆき子	白鳥ののろい第2話	13				13
13	谷ゆき子	白鳥ののろい最終回	13				13
14	谷ゆき子	のろいのトゥシューズ	18				18
15	谷ゆき子	その他の原画	13				13
16	谷ゆき子	2017年度全体	70	0	0	0	70
17		合計	762	692	692	207	762

図 5-2

第5章 实施内容

5.1.2.2 横手市増田まんが美術館の〈整理・保存〉の状況

★同館の〈整理・保存〉に関しては、別紙「横手 MM〈整理・保存〉作業マニュアル」を参照のこと。

【対象マンガ原画】

1. 矢口高雄：「釣りバカたち」110点 及び 「釣りキチ三平」（扉絵）38点
2. 能條純一：「奇跡の少年」476点
3. 小島剛夕：「土忍記」456点

計 1,080 点

- 1: 原画スキャニング
解像度1,200dpi
- 2: 原画台帳（紙ベースとExcel形式）作成
- 3: 保存：原画を1枚ずつ中性紙で挟み、話数単位で中性紙封筒に入れる。
- 4: 1巻毎に中性紙箱にて保管。

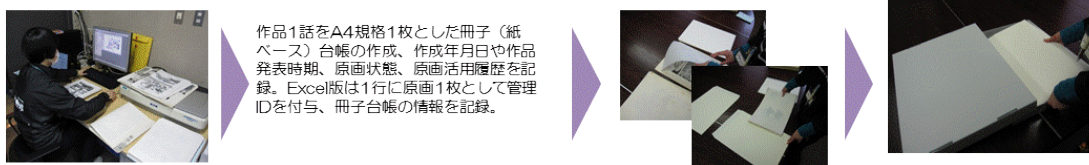


图 5-3

【取り組み内容】

デジタルデータ化のために、全原画のスキャン作業を実施する。その際、恒久的なデータ保存及び活用を視野に入れた高解像度やサイズ変更なしを基本とする。次に、作品一話につき A4 規格 1 枚の原画台帳を作成し、作成年月日、発表時期、保管状態、展示等活用に伴う貸出し履歴などを記録する。その後、原画台帳のデータベース作成に取り組み、管理 ID を設置する。こうした作業に平行しながら、原画の適正保管方法の確立を目指し、具体的な作業工程や課題を記録、通信や研究会を通じてその他連携施設との情報共有に努める。

原画を整理する際は、作品が掲載された雑誌・単行本を定本として作業を行うが、横手 MM は書籍（収集）をしてこなかった。対象原画の初出調査に難航しているため、京都 MM など連携館の協力を得ながら特定作業を進めた。

[illegible]

图 5-4

第5章 実施内容

5.1.2.3 明治大学 米沢嘉博記念図書館の〈整理・保存〉の状況

★同館の〈整理・保存〉に関しては、別紙「京都 MM 〈整理・保存〉 作業マニュアル」を参照のこと。

【対象マンガ原画】

1. 三原順：カラーのイラスト・カット 446 点。手描きのネーム、プロット、スケッチ等の資料類（ノート、バインダー類、子どもの頃の絵や文集など）75 点。ノート類は 1 冊 1 点とするが、各ページの撮影もしており、それらを合わせると総撮影点数は 1,573 点。

【作業の流れ】

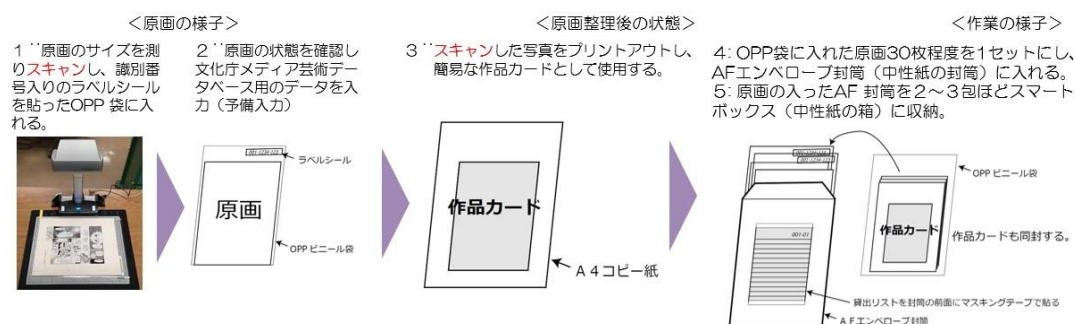


図 5-5

- ① イラスト原画をサイズで仕分ける
さらにサイズごとに、わかる範囲で作品ごとに分類する。
- ② スキャン
原画に整理番号（原画 ID）を振りその番号とともに原画をスキャン。
画像の撮影方法として上向きスキャナを導入。
- ③ 状態の入力
原画の状態備考、原画サイズ、ID などの入力を行う。
- ④ 調査
スキャンした画像を元に初出調査を進める。作業者が三原順調査を本事業以前から行っており、また、2015 年の同館における展覧会準備のため比較的調査が進んでいたとはいえ、本年度は主にカラーのイラスト・カット原画が対象だったため、前年度までのように「定本」は用いることができておらず、雑誌・画集その他の資料との突き合わせ作業などの初出調査にある程度時間をかけた。
その後集めた情報をもとに、「文化庁メディア芸術データベース」予備登録作業を行った。
- ⑤ 保存
原画は、不活性ポリプロピレン製リングファイル用リフィルに中性紙の間紙を入れファイリングし、中性紙の箱に移し替え保管する。
- ⑥ 管理

第5章 実施内容

スキャンした写真を刷り出し、原画とともに保管する。スキャンは、原画を見なくてもその状態をある程度確認できるようにする。また、貸出し時の作品カードとして使用するために1枚ずつ刷り出して原画とともに保管する。

★詳細については、別紙の作業マニュアル「イラスト原画用」を参照のこと。

5.1.2.4 北九州市漫画ミュージアムの〈整理・保存〉の状況

本事業として、マンガ原画の〈整理・保存〉作業は実施していない。

5.1.3 利活用 各館の利活用の状況

5.1.3.1 京都国際マンガミュージアムの利活用の状況

精巧な複製原画を制作する「原画ダッシュ」プロジェクトを推進した。5.1.3.5にて詳細記載。

5.1.3.2 横手市増田まんが美術館の利活用の状況

本事業として、マンガ原画の利活用の実験は行っていない。

5.1.3.3 明治大学米沢嘉博記念図書館の利活用の状況

〈整理・保存〉した同館管理の原画資料を、館外における展覧会等に貸し出すという形で〈利活用〉を想定し、原画借用の手順を示すマニュアルを作成した。

★詳細については、別紙の作業マニュアル「整理・保存作業マニュアル①②」を参照のこと。

5.1.3.4 北九州市漫画ミュージアムの利活用の状況

本事業として、マンガ原画の利活用の実験は行っていない。

5.1.3.5 原画ダッシュ

西谷祥子氏、ささやななえこ氏を対象に、両氏作品の原画ダッシュ制作にあたる準備として、作品リストの作成、初出調査などを行った。

西谷氏は17点の原画ダッシュ制作を実施し、それらは京都国際マンガミュージアムで開催の「幻想と日常の間」展（2018年2月1日（木）～5月27日（日））に出展、活用されている。

ささや氏は制作までには至っていないが、それに当たる原画の集荷、整理、リスト化などがなされた。

★「原画ダッシュ」とその制作過程等については、別紙2018年2月10日（土）シンポジウムの倉持佳代子発表資料を参照のこと。

5.2 研究会・報告会

5.2.1 保存修復研究部会

(1) 調査①

★詳細については、別紙報告書を参照のこと。

新潟市／新潟市マンガ・アニメ情報館における原画アーカイブに関する調査を実施した。

(2) 調査②

★詳細については、別紙報告書を参照のこと。

横手市増田まんが美術館における原画アーカイブに関する調査を実施した。

(3) 調査③

★詳細については、別紙報告書を参照のこと。

北九州市漫画ミュージアムにおける原画アーカイブに関する調査を実施した。

(4) 調査④

★詳細については、別紙報告書を参照のこと。

マンガ家・竹宮恵子氏への原画アーカイブに関するインタビューを実施した。

(5) 調査⑤

★詳細については、別紙報告書を参照のこと。

京都国際マンガミュージアムにおける原画アーカイブに関する調査を実施した。

(6) 研修会

★同研修会に関する別紙議事録、一部レクチャー等文字起こしテキスト、プレゼン資料等を参照のこと。

東洋美術学校保存修復科の協力のもと、同研究部会の調査報告、マンガ原画修復に関するワークショップや専門家によるレクチャーを実施した。

5.2.2 マンガ家インタビュー部会

(1) インタビュー調査①

★詳細については、別紙報告書を参照のこと。

マンガ家・ささやななえこ氏、マンガ編集者・佐川俊彦氏への原画アーカイブに関するインタビューを実施した。

(2) インタビュー調査②

★詳細については、別紙報告書を参照のこと。

竹宮恵子氏へのマンガ原画／原画ダッシュ活用に関するインタビューを実施、北九州市漫画ミュージアムで開催中の原画／原画ダッシュ展「竹宮恵子展」を見学した。

(3) インタビュー調査③

大手マンガ出版社A社のマンガ原画の保存状況に関して、担当部署スタッフに現状調査した。

5.2.3 中間報告会

事業の中間報告会を実施し、以降の事業の課題などについて議論した。

★詳細については、別紙議事録を参照のこと。

5.2.4 全体会議

連携施設の責任者が集まり、各施設、各研究部会の進捗状況を共有しつつ、問題点などを議論する全体会議を3回実施した。

★各会議の詳細については、別紙議事録を参照のこと。

5.2.5 シンポジウム「マンガ〈原画〉のアーカイブに向けて」

本事業の成果を広く一般に報告するとともに、上記モデル図を、参加者と共にブラッシュアップした。

★詳細については、別紙文字起こしテキスト等を参照のこと。

5.3 モデル開発

5.3.1 マンガ原画の利活用モデルの開発

連携施設の責任者に加え、デザイナーが集まり、各施設及び各研究部会それぞれの成果を踏まえつつ、マンガ原画アーカイブに関心のある施設・個人らが、アーカイブを始めるに当たって、自身の立ち位置を確認するための一種の“地図”“指標”としてのモデル図の作成を行った。

シンポジウム「マンガ〈原画〉アーカイブに向けて」において、モデル図が公開され、フロアの参加者も交え、検討を行った。

★別紙モデル図を参照のこと。

第6章 広報・広報制作物

6.1 広報物・報道

【広報物】

- ・シンポジウム「マンガ〈原画〉のアーカイブに向けて」チラシ・ポスター

★文化庁

平成28年度 文化庁メディア芸術産業推進事業 連携共同事業

「マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発」シンポジウム

マンガ〈原画〉のアーカイブに向けて

マンガが公的な文化として社会的に重視されている現代において、近年、その〈原画〉（一原稿）の価値にも注目が集まっています。しかしながら、戦後マンガ文化を変えてきたマンガ家の遺志や出版不況の影響で、従来の〈原画〉の保管基盤が、ここ数年急激に崩壊しつつあります。また、海外においてマンガ原画は美術作品と見なされ、アーカイブの対象となっていますが、日本国内におけるその価値付けは、定まっているとは言えません。その結果、剥離されたり、海外をめぐり回ったりといった状況を招く可能性が小さくありません。マンガ原画の価値をどのように評価し、それらをもとにアーカイブする、ということの意義は従来の課題なのです。

このシンポジウムでは、同事業に参加したマンガ原画文化施設に、原画アーカイブの課題を報告してもらいます。また、個人から公立文化施設までを網羅したマンガ原画のアーカイブ——〈収集〉〈整理・保存〉〈活用〉のタイプモデルを提示し、参加者間の議論を促すことで、原画アーカイブのあり方を模索し、ひいては原画の価値とは何か、ということを考えたいと願います。

●定員 100名
●料金 参加無料
(ただし、ミュージアム入館料[大人800円、中学生300円、小学生100円]は別途必要)
●出演者
大石 卓 (横浜市川田老人が館館長)
ヤマダ トモコ (明治大学 文学部文化政策学専攻)
表 智之 (北九州国際ミュージアム)
古村 和真 (京都府立大学)
イトウ ユウ (京都市立大学マンガ研究センター／京都府立マンガミュージアム)

2018年
2月10日(土) 13~16時
京都国際マンガミュージアム
1階 多目的映像ホール

【主催】
文化庁
京都市立大学マンガ研究センター／京都府立マンガミュージアム
【問い合わせ】 京都府立マンガミュージアム

M 京都国際マンガミュージアム
KYOTO INTERNATIONAL MANGA MUSEUM
<http://kyotomm.jp> @kyotomm
〒604-0848 京都市中京区烏丸九条上ル (丸の内線) 丸太町駅
TEL: 075-854-7414 (代) FAX: 075-854-7424

京都国際マンガミュージアム

図 6-1

【報道等】

- ・東洋美術学校 学校案内冊子



メディア芸術的価値促進事業紹介

本校保存修復科は、文化庁の事業「メディア芸術価値促進事業」に協力しています。この事業は、マンガ、アニメーション、ゲームおよびメディアアートにわたるメディア芸術分野において必要とされる新領域創造と調査研究等を、分野・領域を横断した産・学・館（官）の連携・協力により実施して、包括的にメディア芸術分野の文化資源の活用・振興を図るための新たな創造の促進と、専門人材の養成・発展的な協力関係の構築を目指しています。我々はこの中で、既に国際的にも認知されているマンガ原画についての保存プロジェクトに参加し、日本文化の継承と発展のために尽力してまいります。

【マンガ原画の保存プロジェクト連携機関】



保存修復アドバイザー

近年、様々な場所でもマンガの原画が展示されていますが、これは作品が台紙で挟まれたマンガ原画の状態で展示されていることが多く、この状態で展示されている原画は、展示期間が長くなると、紙の劣化や色褪せ、変色などが発生し、結果としていくつにもわたる文化財の価値を失ってしまう可能性があります。特にマンガ原画は、紙の劣化や色褪せ、変色などが発生すると、その価値が大幅に低下してしまうことが多く、保存修復科では、このような状況を防止するために、マンガ原画の保存修復に関する調査研究や、保存修復の実施を行っています。また、マンガ原画の保存修復に関する調査研究や、保存修復の実施を行う際には、マンガ原画の保存修復に関する専門知識や技術が必要となります。保存修復科では、このような専門知識や技術を持つ人材を養成・発展させることを目指しています。また、マンガ原画の保存修復に関する調査研究や、保存修復の実施を行う際には、マンガ原画の保存修復に関する専門知識や技術を持つ人材を養成・発展させることを目指しています。

なぜ東洋美術がマンガ原画の保存に取り組むのか？

本校では、漫画家としての才能、イラストレーターやキャラクターデザイナーなどのクリエイターを育成する学科を開設しています。また、漫画家や文化財の保存修復にも力を注いでおり、2004年より保存修復科の専門コースを開設いたしました。制作と保存の両面において人材育成を行ってきた結果、本校は、マンガ原画の取り扱いに慣れている多くの人たちに協力していくこと、教育・研究機関としての役割の一つの項目と考えています。迅速な対応で失われつつあるこのマンガ原画を、どうすれば確実に残していくことができるか、皆さんと一緒に考えながら、少しでもマンガ文化の発展に貢献できるよう活動していきたいと考えています。

【保存修復科2年生を対象にした「マンガ原画保存」授業の様子】

授業内では漫画家 花村えい子氏の原画作品に対する保存状態の調査と保存対策を行っています。



岡本 拓也

活動実績

【文化財保存修復学会発表経歴】 文化財保存修復学会は、文化財の保存に関わる科学・技術の発展と普及を図ることを目的とした学会です。

第三十五回大会(2013)	『19世紀初頭イタリアの古地図』に関する保存修復報告-教育機関における修復実習の一事例- RTI技術による『19世紀初頭イタリアの古地図』のドキュメンテーション
第三十六回大会(2014)	油彩画『聖ヒエロニムス像』に関する基礎調査-素材分析に基づく歴史的考察-
第三十七回大会(2015)	地域文化遺産の保存と活用-被災した埼玉県熊谷市浄安寺の千体地蔵- RTIと赤外線透過法の同時併用による新たな調査を用いた油彩画作品の劣化・損傷診断 油彩画『聖ヒエロニムス像』に関する基礎調査-RTIと赤外線透過法の同時併用による新たな調査診断-
第三十八回大会(2016)	ΔEab (デルタ・イースター・エー・ビー) 画像を用いた修復処理の定量的評価法の提案 被災した浄安寺千体地蔵の保存活動-予防保存対策と地域主体による保護継承- アクリル絵画作品の劣化抑制対策におけるニス塗布の有効性 東大寺南大門仁王像(彫刻)の顔面修復活動-教育普及活動を目指して-
第三十九回大会(2017)	絵画表面のクリーニングのための総合的分析によるイメージング技術 地域文化遺産としての浄安寺「千体地蔵」の現状と今後の保存に関する調査 重要美術品の長期保存のための新たな取り組み キャンバス画の劣化抑制を目的としたストリッピング-REVAフィルム部材のための電気アイロンによる加熱方法の検討- 文化遺産の国際協力における国内研修の実施状況と人材育成の発展に向けた提案

図 6-2

第 6 章 広報・広報制作物

・NHK 京都放送局『京いちにち 630』（NHK 総合、2018 年 2 月 9 日（金）18：30～19：00）内
コーナーにてイベント告知

第7章 成果・課題・評価

第7章 成果・課題・評価

7.1 成果 各連携館における原画アーカイブの実証実験の成果

7.1.1 京都国際マンガミュージアムの成果

施設名	対象資料	全体点数	予定枚数	今年度作業						想定作業量
				原画枚数	原画整理	初出調査	書誌登録	画像撮影	原画台帳	
京都国際マンガミュージアム	杉浦幸雄	約12,000	0	207	207	207	207	207	0	全点終了予定
	ささやななえこ	485	0	485	485	485	0	485	0	
	谷ゆき子	70	0	70	0	0	0	70	0	

表 7-1

7.1.2 横手市増田まんが美術館の成果

施設名	対象資料	全体点数	予定枚数	今年度作業						想定作業量
				原画枚数	原画整理	初出調査	書誌登録	画像撮影	原画台帳	
横手市増田まんが美術館	矢口高雄	45,000	148	148	148	148	0	148	148	全点終了予定
	能條純一	20,000	476	476	476	476	0	476	476	
	小島剛夕	25,000	456	456	456	456	0	456	456	

表 7-2

第7章 成果・課題・評価

7.1.3 明治大学 米沢嘉博記念図書館の成果

施設名	対象資料	全体点数	予定枚数	今年度作業						想定作業量
				原画枚数	原画整理	初出調査	書誌登録	画像撮影	原画台帳	
明治大学米沢嘉博記念図書館	三原順	446	446	446	446	446	446	446	0	全点終了

表 7-3

その他原画相当資料 75 点（ネーム、プロット等）の整理を進めた。

7.1.4 北九州市漫画ミュージアムの成果

本事業として、マンガ原画アーカイブの実証実験は行っていない。

7.2 各連携館の課題

7.2.1 京都国際マンガミュージアムの課題

〈整理・保存〉の実証実験に関しては、原画自体の〈整理・保存〉は予定通り進めることができたが、原画のメタデータ（初出情報など）を作成する上で非常に有用だった、掲載誌のスクラップブック等の周辺資料の〈整理・保存〉はできなかった。また、整理した原画や周辺資料についての情報を検索できる「原画 OPAC」のようなデータベースの構築と公開も、将来的な大きな課題と言える。

原画〈利活用〉の実践として実施された「原画ダッシュ」の作成については、展覧会での公開まで行うことができたが、今後は、「原画ダッシュ」のさらなる利活用と、そうした利活用を想定した制度（作家との再契約など）の整備が課題となるだろう。

7.2.2 横手市増田まんが美術館の課題

原画収蔵に関しては、同館は郷土出身作家や関係性のある作家を対象に収蔵年次計画に基づき進めているが、作家や作品の状況は日々変化していることから、予定外の収蔵対応を求められるケースに柔軟な対応が求められている。一方で、同館がそうしているように、行政として公費を投入しての収蔵・アーカイブは、当然のことながら市民の理解を得られた形で進めなければいけないため、即効性も備えた原画集積の仕組みを構築していく必要があるだろう。

〈整理・保存〉作業はこれまで進めてきた作業が形になっており、その〈利活用〉も含め、

一定のモデルを提案できるレベルに到達している。ただ、書籍資料の現物調査が必要な「作品の初出調査」については、雑誌・単行本のアーカイブが充実していないため、その分野を得意としている連携館からの協力を得る形で今後も補完していく必要がある。

7.2.3 明治大学 米沢嘉博記念図書館の課題

マンガ原画の〈整理・保存〉に関しては、想定していた三原順作品の本編原画、イラスト・カット類が、モノクロ用カラー用ともに初出調査も含めほぼすべて完了した。さらに、ネーム、スケッチブック、アイディアノート、幼いころの絵など原画相当資料の記録もある程度済んだ。原画相当資料に関しては、さらなる調査が必要である。整理中の原画の貸出しなど〈利活用〉の機会もあり、本事業による整理作業が〈利活用〉に資するものであることが実感できたが、〈収集〉〈整理・保存〉に関してはいまだあまり意識できていない。今年度行った保存修復研究部会から得た知見をこの先どのように生かすのかも含め、学び、先を見通すことが同館の今後の課題といえる。

7.2.4 北九州市漫画ミュージアムの課題

今年度は、開館5周年という節目の中で様々な事業が集中し、原画アーカイビング作業の優先度を館の年間運営計画の中で高めることができず、本プロジェクトとしての〈整理・保存〉や〈利活用〉の実践には至らなかった。

一方、原画の保存・修復に関して今年度の本プロジェクトで得た知見は、当館の原画アーカイブ体制をあらためて見直す上で大変有益であり、今後は、館の年間運営計画の中で原画アーカイビング作業をしっかりと位置づけつつ、より効果的で効率的な作業体制の構築に努めることが課題である。

7.3 展望

- 抽象的なモデル図が提案されたことで、既にマンガ原画を所蔵している、あるいは今後マンガ原画を〈収集〉したいと考えている個人・施設が、取り組むべき課題や相談先などを具体的にイメージできるようになった。
- ⇒ 原画アーカイブを実践する個人や施設等との幅広いネットワークを構築することで、マンガ原画の〈収集〉〈整理・保存〉の方法論を深化し、〈利活用〉パターンの多様化を模索することが可能となるだろう。
- 保存科学を専門とする研究者との共同研究は、これまで人文・社会科学的なアプローチで構築されてきたマンガ史資料のアーカイブとは別の視点を提供した。
- ⇒ 保存科学を始め、より幅広い分野の研究者との共同研究が必要となるだろう。
- マンガ史資料アーカイブの事業が継続して実施されたことで、そこに関わるスタッフのマンガ原画を扱うスキルは確実に蓄積されたが、そうしたスキルが発揮されるべき場の「制度」が整備されていない。

⇒ スキルを磨く場を提供しつつ、「ポスト」の確立や「資格」の付与といった制度の構築が必要となってくるだろう。

7.4 調査と研究

【各研究部会における調査・研究の成果】

<保存修復研究部会>

- 新潟市／新潟市マンガ・アニメ情報館、横手市増田まんが美術館、北九州市漫画ミュージアム、京都国際マンガミュージアム各関係者及びマンガ家・竹宮恵子氏に対するインタビュー調査を実施し、マンガ原画アーカイブの現状を明らかにした。
- 東洋美術学校の協力のもと、保存科学の観点から、モノとしてのマンガ原画の〈整理・保存〉の問題点や対策等について議論し、研修会において、知見を共有した。

<マンガ家インタビュー研究部会>

- マンガ家・ささやななえこ氏、マンガ編集者・佐川俊彦氏、マンガ家・竹宮恵子氏、大手マンガ出版社A社の編集者に対するインタビュー調査および原画保存、活用における現状調査を実施し、マンガ原画アーカイブの現状を明らかにすると同時に、特に原画の将来的な利活用に関する知見を得た。

<モデル開発研究部会>

- 各連携施設及び各研究部会における知見を踏まえ、プロジェクトメンバー全員及びデザイナーとで、マンガ原画のアーカイブに関するモデル化を試みた。そのモデル図は、一般参加型のシンポジウムにおいて発表され、ブラッシュアップされた。

第8章 総括

8.1 総括

複数のマンガ文化関連施設が連携し、マンガの〈原画（＝原稿）〉のアーカイブ——〈収集〉〈整理・保存〉〈利活用〉——の作業を実践、その成果を、マンガ家や出版社、他分野の研究者らと共有し検証することで作業手法の深化や開発を図る、という目的に関しては、一定程度の成果を得た。

平成27年度及び平成28年度に実施された連携共同事業「関連施設の連携によるマンガ原画管理のための方法の確立と人材育成環境の整備」を引き継いだ本事業であるが、本年度は特に、それぞれの施設が実施していた具体的な作業を抽象的なモデル図としてまとめたことで、連携施設の所蔵している原画アーカイブを豊かにしただけでなく、既にマンガ原画を所蔵している、あるいは今後マンガ原画を〈収集〉したいと考えている個人・施設が、それぞれが抱えている〈利活用〉のイメージによって、取り組むべき具体的な課題や相談先などにアクセスできるようになったのではないかと。

今後は、原画アーカイブに取り組むことが期待されるこうした個人や施設等とのネットワークを構築し、マンガ原画の〈収集〉〈整理・保存〉の方法論を深化や、〈利活用〉パターンの多様化を模索することが可能になった。

保存科学を専門とする研究者との共同研究は、これまで人文・社会科学的なアプローチで構築されてきたマンガ史資料のアーカイブに、化学的な視点におけるアプローチが必要であることを痛感させた。マンガ原画・マンガ書籍の基礎素材である紙の脆性（ぜいせい）を知ったことで、マンガの史資料アーカイブの緊急性の認識はより高まったと言える。

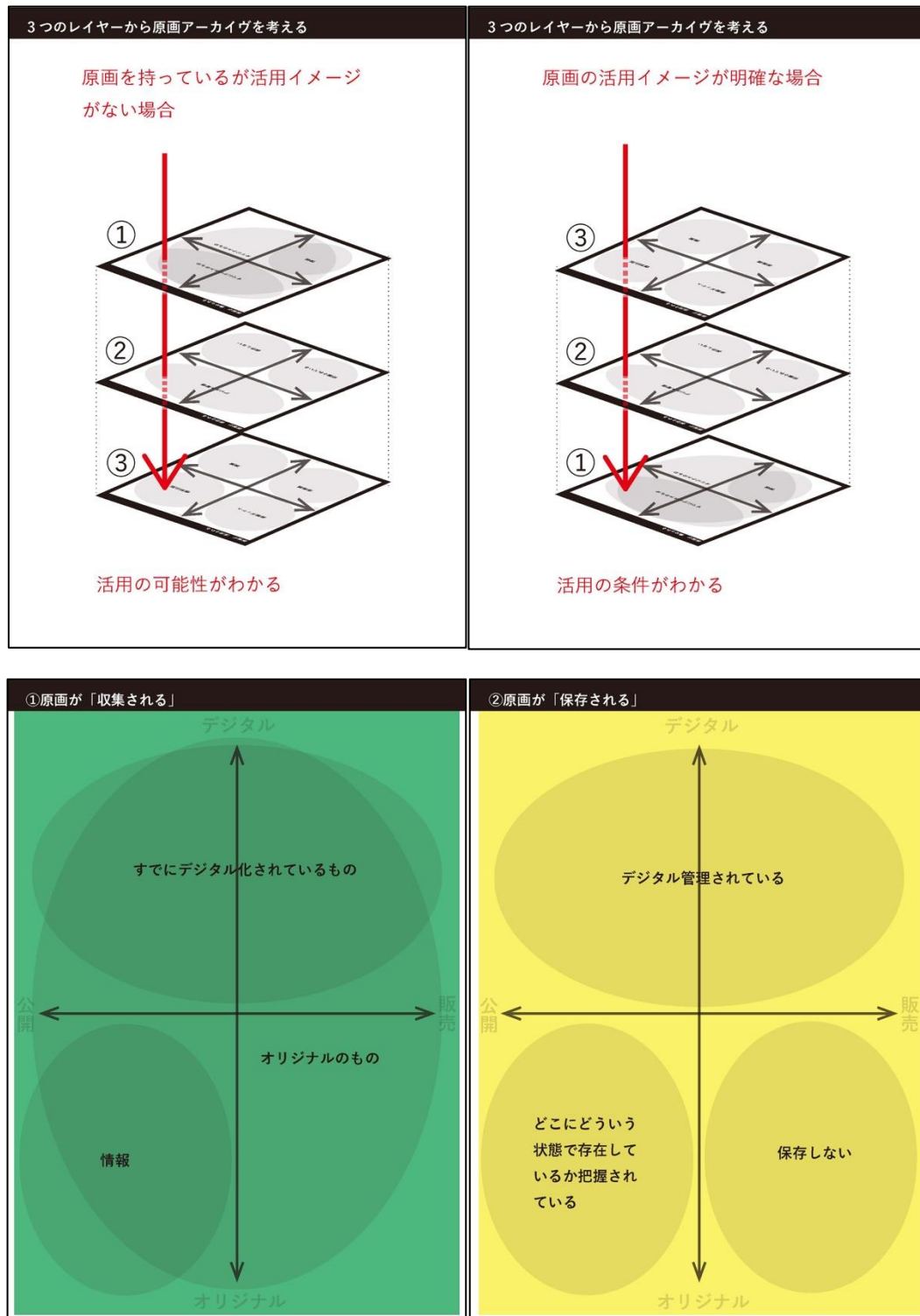
今後は、保存科学を始め、より幅広い——そして、既に多くの知見を有している——分野の研究者との共同研究が欠かせなくなるだろう。

マンガ史資料アーカイブの事業が継続して実施されることで、そこに関わるスタッフのマンガ原画を扱うスキルは確実に蓄積されている。しかしながら、そうしたスキルが発揮されるべき場の「制度」が整備されていないため、せっかく育成した人材も、活躍の場を見つけれないままである。

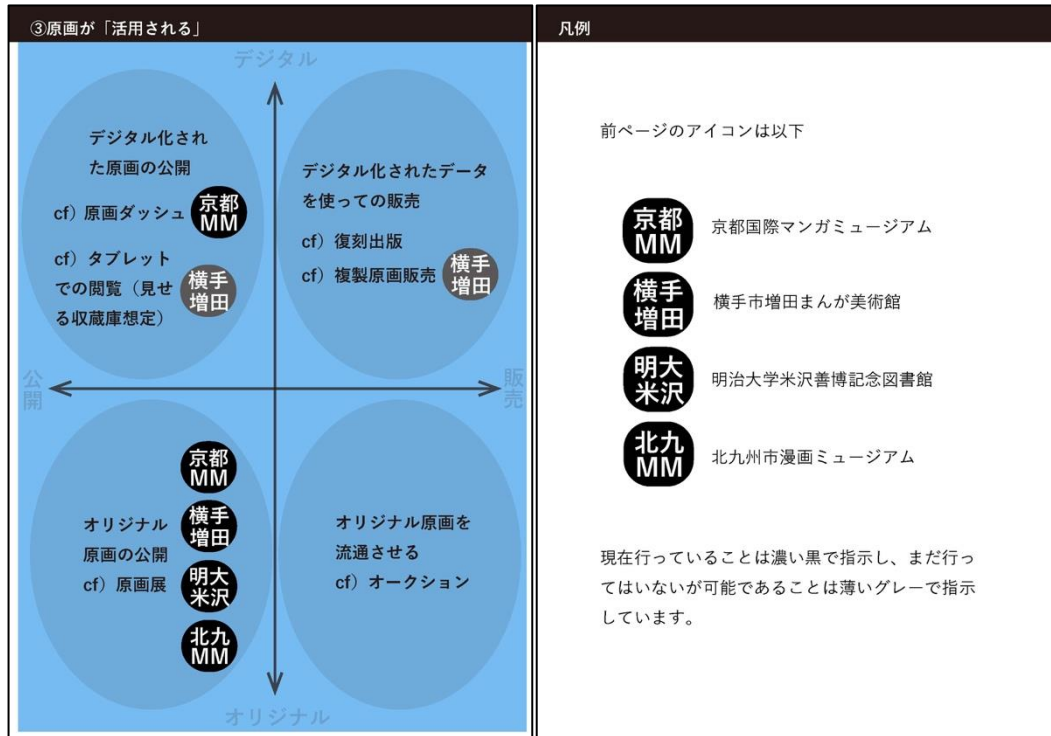
今後は、スキルを磨く場を提供しつつ、「ポスト」の確立や、「資格」の付与といった制度の構築が必要となってくるだろう。

付録

1 タイプ分類モデル図



付録



2 各機関の作業マニュアル

■ 5.1.2.1 京都国際マンガミュージアムの整理・保存の状況

京都国際マンガミュージアム 整理・保存作業マニュアル

◆はじめに

原画が届いたら、まず中身の確認をし、「原画」と「原画以外」に分類するなど、段ボール箱や封筒に記載されている情報を元に大雑把に内容を把握する。

その際、量が多かったり、複数の作品の原画が未整理に混在していたりなど、全体を把握するのが困難な場合、封筒など原画のまとまりごとにナンバリングをし、以下のように A、B、C 等の基準を設けて仕分け、表などにまとめることで、以後の作業をやりやすくする。

A＝原画（作品名・雑誌名が判り、掲載号や収録されている単行本まで判るもの）

A'＝原画（作品名・雑誌名が判るが、掲載号や収録までは判らないもの）

B＝原画（作品名・雑誌名などが判らないもの）

C＝その他（原画以外、色紙や書き損じや下書きも含む）

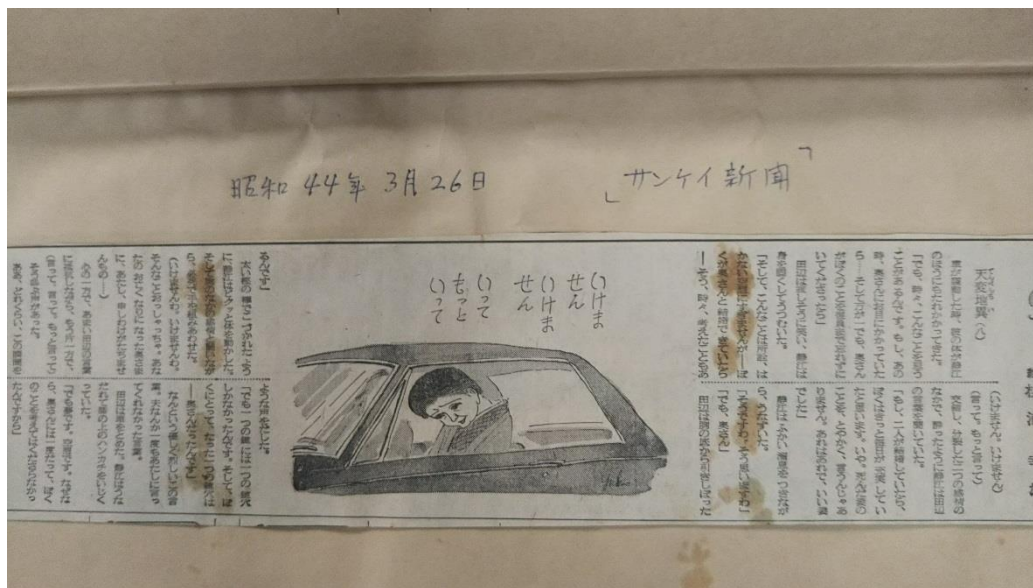
	封筒名	作品名	枚数	箱番号	備考
A-1	杉浦ゆきお 2001 No. 17～50	面影の女		SA1	漫画サンデー
A-2	杉浦ゆきお 95 No. 2～5	面影の女		SA1	漫画サンデー
A-3	杉浦ゆきお 2003 No. 1～14	面影の女		SA1	漫画サンデー
A-4	杉浦ゆきお 2000～2001 No. 31～15	面影の女		SA1	漫画サンデー
A-5	杉浦ゆきお 1998～2000 No. 41～30	面影の女		SA1	漫画サンデー
A-6	杉浦ゆきお 1991～1997 No. 1～12	面影の女		SA1	漫画サンデー
A-7	杉浦ゆきお 1997～1998 No. 13～45	面影の女		SA1	漫画サンデー
A-8	杉浦幸雄 「面影の女」傑作選	面影の女		SA1	漫画サンデー
A-9	面影の女④ 55 話～12 話 在中	面影の女		SA1	漫画サンデー
・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・		・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・

最初の仕分けリストの例（杉浦幸雄の原画）

◆初出調査

把握した内容から研究員が初出調査をする作品を決め、作品の初出調査をする。調査は基本的には京都 MM の所蔵資料を元に行うが、原画とともに掲載誌や作者が作成したスクラップブックなどが存在する場合には、それらも参照する。

付録



作者が作成したスクラップブックの例（杉浦幸雄『大変だァ』）

◆原画確認用の表づくり

上記の調査を元に、原画と対応する資料(多くは初出誌)を決め、1枚1枚の原画がそれぞれ資料のどのページと対応しているのか把握するため、確認用の表を制作する。表にはサブタイトルなど多くの情報を入れることで、対応する原画の同定をしやすいとする。

スクラップ 帳数	話数	掲載日	掲載頁数	原行本頁 数	備考	テーマタイトル	1ページ目	2ページ目	3ページ目	4ページ目
見本 01	1	1966/1/12 19	145-148			淑女の元旦	令夫人	BG	令嬢	ホステス
見本 01	2	1966/1/26	107-110			おしゃべり	団地	ホステス(2ページ見開き)		女子高校の同窓会
見本 01	3	1966/2/2	107-110	69-72		全館離れ	入口	バス	部屋	お祭り
見本 01	4	1966/2/9	107-110	68		旅行	古寺巡礼	スキー旅行	スケート旅行	一人旅 単P68
見本 01	5	1966/2/16	107-110			女優大会	女社長	大女優	大女将	駅前商店街のオビニ オンリーダー
見本 01	6	1966/2/23	107-110			ホテルの新婚さん	宿泊申し込み	バスタイレ	初夜	食事
見本 01	7	1966/3/2	107-110			マダム大会	喫茶店のマダム	バーのマダム(1)	バーのマダム(2)	鉄板焼き屋のマダム
見本 01	8	1966/3/9	107-110			ファン大会	歌舞伎ファン	宝塚ファン	新劇ファン	歌謡曲ファン
見本 01	9	1966/3/16	107-110			ド美人大会	正体不明のド美人(A)	正体不明のド美人(B)	水商売がたのしくて しょうがないド美人	説明不要のド美人
見本 01	10	1966/3/23	107-110	17-20		淑女が飲むとき	ホテルのバー	ゲイバー	ボーイハントむきバー	飲み屋
見本 01	11	1966/3/30	131-134	13-16		淑女が食べるとき	ピッツア	スシ	ヤキソバ	ラーメン
見本 01	12	1966/4/6	107-110	143-144		第三次産業従業員(和服 編)	温泉芸者 単P143	温泉マークの女中	民謡酒場従業員 単 P144	料亭の仲居
見本 01	13	1966/4/13	107-110	145-146		第三次産業従業員(洋服 編)	美人喫茶 単P145	パーティー会社社員	キャバレー 単P146	駅前一流バー
見本 01	14	1966/4/20	107-110			職業婦人(インテリ編)	女記者	テレビのFD	女医	秘書

原画確認リストの例（杉浦幸雄『図解淑女の見本』）

◆仕分け

原画と資料を照合し、確認用の表を使い同定できた原画をチェックしていく。これで、作品内のどの原画があり、どの原画が抜けているか、把握する。また同時に、原画がバラバラの場合はこの過程で原画を並びかえる。

付録

並びかえを行う際は、作品のまとまりごとにクリアファイルに入れ、鉛筆で情報を書き入れた紙を挟むことで、一度チェックした原画が混ざらないよう工夫する。



並びかえ作業の例（杉浦幸雄『淑女の見本』）

◆撮影

記録用に原画の撮影をする。手順は以下。

① カメラを撮影台に固定。

撮影時の高さを固定するため、原画より一回り大きい範囲が画角に入る高さの場所にマスキングテープで撮影台にしるしをつける。

原画の位置についてもマスキングテープなどでしるしをつけ、同じ位置に原画を置いて撮影できるようにする。

② PC とカメラを接続

ライン、ケーブル、付属のコネクターをカメラと PC に接続し、カメラを起動させる。

デスクトップにそれぞれの原画タイトルのフォルダを作成し、撮影したデータはそこに保存されるようにする。

③ 撮影ソフトの起動と保存の設定

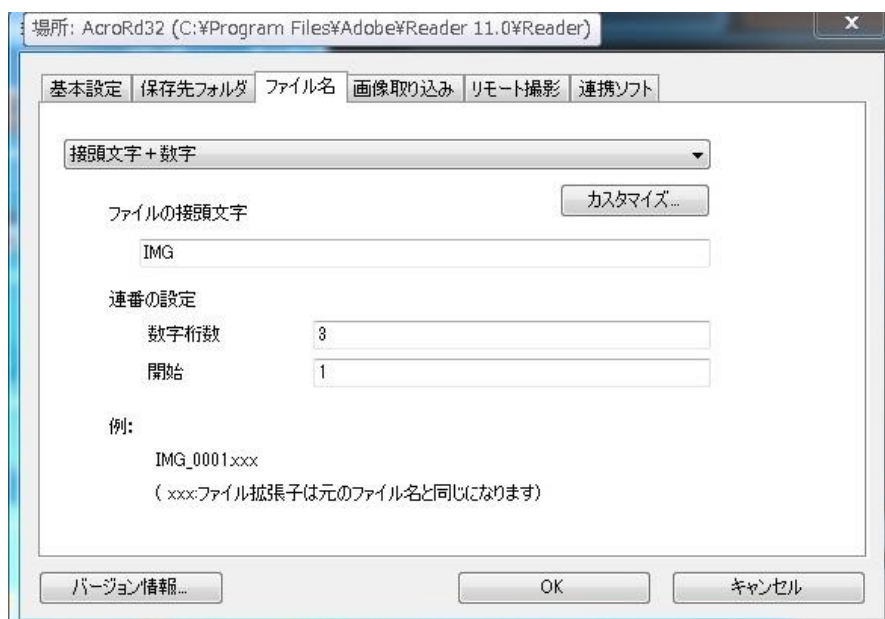
「EOS utility」を立ち上げる。

ファイル→環境設定→保存先フォルダ→参照ボタンをクリックし、デスクトップに作成したそれぞれのフォルダを選択。

さらにファイル名→プルダウンを押し、「接頭文字+数字」を選択（図 3-1）。

その下のファイル接頭文字を「作品名-001（連載時話数）」のように入力し、連番の設定は数字桁数を「3」、開始を原稿のページ数と対応するように設定し、OK ボタンをクリック。

付録



④ ホワイトバランスの設定

カメラのホワイトバランスは、以下のように設定した。

- ・ホワイトバランス→日陰モード
- ・明るさ→1/3～2/3

⑤ 撮影

リモート撮影をクリックし、撮影ボタンを出し、撮影ボタンをクリックして撮影。

画像はそれぞれの指定フォルダに RAW データと JPEG で保存される。

◆原画入力作業フロー

文化庁メディア芸術データベース（以下、文化庁 DB）への登録には、文化庁 DB に直接入力する方法と、Excel 上で作成したデータを文化庁 DB へインポートする方法の 2 つがある。

●1. 文化庁 DB に直接入力する場合

「文化庁メディア芸術データベース」
<https://mag-archivepro.jp/manga> にアクセス
↓
一段階目ユーザー名、パスワードを入力
↓

付録

二段階目ユーザー名、パスワードを入力（原画作業用の京都 MM 各個人専用アカウント）し、ログイン

↓

文化庁メディア芸術データベース マンガ運用システム

<https://mediaarts-db.jp/manga/menus>

↓

新規登録項目

マンガ原画登録

以下の項目を入力

① マンガ原画情報					
マンガ原画ID	MOP000000405	マンガ作品ID	MMT000138971		
マンガ原画作品名 ※	図解淑女の見本				
マンガ原画作品名ヨミ	ズカイシュケンジョノミホン				
順序	3話	順序ソート ※	3		
		枚数	4		
詳細説明(紹介文)	全館離れ				
初出	週刊漫画サンデー / 1966/02/02 / 表示号数5 / NO.5 / 巻8 / 号5 / 通巻332		初出ID	WMSNrgl19660202	
収録			収録ID		
作画者・共著者	[著]杉浦幸雄 / 岡部冬彦				
作画者・共著者ヨミ	スギウラユキオ / オカベフユヒコ				
著者典拠ID	A100074673 / A100059156				
大きさ	34.5cm × 26cm		執筆時期		
言語区分	日本語	色数	2色カラー	画材	
状態	P107~110 / No.3 / 写植なし / 「8折」表記あり / セロテープ汚染みあり / 裏面にセロテープあり				
マンガ原画タグ					

文化庁メディア芸術データベースマンガ原画登録画面

① マンガ原画情報

- ・マンガ原画作品名
- ・マンガ原画作品名ヨミ
- ・順序
- ・順序ソート
- ・初出
- ・初出 ID
- ・収録
- ・収録 ID

付録

- ・ 作画者・共著者
- ・ 作画者・共著者ヨミ
- ・ 著者典拠 ID
- ・ 大きさ
- ・ 執筆時期
- ・ 言語区分
- ・ 色数
- ・ 画材
- ・ 状態
- ・ マンガ原画タグ

② 画像・メモ

③ 所蔵情報

② 画像・メモ

画像1

画像2

画像3

メモ

画像1のステータス

画像2のステータス

画像3のステータス

所蔵館表示

所蔵館表示

所蔵館表示

③ 所蔵情報

所蔵館	登録日時	登録者	削除
京都国際マンガミュージアム(1/1)	2016/10/10 14:59:23	C00421 佐和	☐

京都国際マンガミュージアム(1/1)

登録番号(館固有割拠ID)

SA淑女の見本

所蔵情報ID C00401MOP000000405

所蔵情報テーブルの非表示フラグ ☐

館独自の備考

+ 所蔵情報追加

文化庁メディア芸術データベースマンガ原画登録画面

① マンガ原画各項

- ・ 番号情報
- ・ 色
- ・ 画像番号
- ・ 内容の備考
- ・ 状態

↓

更新

最後のステータスは、作成中のままにする。

36

付録

④ マンガ原画各頁情報

各頁	番号情報	削除	各頁	番号情報	削除	各頁	番号情報	削除	各頁	番号情報	削除
1/4	1	☐	2/4	2	☐	3/4	3	☐	4/4	4	☐

マンガ原画各頁1/4

枝番 1 番号情報 1 色 2色カラー 画像番号

内容の備考 1 / 全館離れ 状態

マンガ原画各頁2/4

枝番 2 番号情報 2 色 2色カラー 画像番号

内容の備考 2 / 内場 状態

マンガ原画各頁3/4

枝番 3 番号情報 3 色 2色カラー 画像番号

内容の備考 3 / 平面図 状態

マンガ原画各頁4/4

枝番 4 番号情報 4 色 2色カラー 画像番号

内容の備考 4 / カツラだとかいう時に便利 / 朝博り(前夜大雨) 状態

+ マンガ原画各頁追加

更新

文化庁メディア芸術データベースマンガ原画登録画面

●2. Excel 上で作成したデータを文化庁 DB ヘインポートする場合

文化庁 DB から取り出した Excel データ（マンガ原画情報の項目は集合データ、マンガ原画各頁情報の項目は 1 枚データという 2 つのファイルにわかれる）を元にして、登録画面と対応する項目に直接入力する場合と同様に入力していく。完成したデータは自分でインポートせず、文化庁 DB の担当者に送って確認後にインポートしてもらう形をとる。

	C	D	E	F	G	H	I
1	マンガ原画作品	枝番	番号情報	色	内容の備考	状態	画像番号
13413	東京チャキチャキ	5	71	モノクロ	No.70 / 単行本71P収録	「左右4寸3分」「第71頁」「5.0寸」表記に二重線あり / 中央に折り目あり	
13414	東京チャキチャキ	6	74	モノクロ	No.71 / 単行本74P収録	「左右4寸3分」「第74頁」表記あり / 左下に破れあり	
13415	東京チャキチャキ	7	75	モノクロ	No.72 / 単行本75P収録	「左右4寸3分」「第75頁」表記あり / 裏に「5寸」表記あり	
13416	東京チャキチャキ	8	76	モノクロ	No.73 / 単行本76P収録	「左右4寸3分」「第76頁」表記あり / 「4寸9分」表記に二重線あり / 裏に「週刊東京」表記あり	
13417	東京チャキチャキ	9	77	モノクロ	No.74 / 単行本79P収録	「5寸」表記あり / 「左右4寸3分」「第77頁」表記に二重線あり	
13418	東京チャキチャキ	10	80 / 64	モノクロ	No.75 / 単行本80P収録	「左右4寸3分」「第80頁」表記あり / 「5寸」表記に二重線あり	
13419	東京チャキチャキ	11	81 / 44	モノクロ	No.76 / 単行本81P収録	「左右4寸3分」「第81頁」表記あり	
13420	東京チャキチャキ	12	84 / 93	モノクロ	No.77 / 単行本84P収録	「左右4寸3分」「第84頁」表記あり	
13421	東京チャキチャキ	13	85	モノクロ	No.78 / 単行本85P収録	「左右4寸3分」「第85頁」表記あり / 「5寸」表記に二重線あり	
13422	東京チャキチャキ	14	88 / 80	モノクロ	No.79 / 単行本88P収録	「左右4寸3分」「第88頁」表記に二重線あり	
13423	東京チャキチャキ	15	89 / 86	モノクロ	No.80 / 単行本89P収録	「左右4寸3分」「第89頁」表記に二重線あり	
13424	東京チャキチャキ	16	92	モノクロ	No.81 / 単行本92P収録	「左右4寸3分」「第92頁」表記に二重線あり	
13425	東京チャキチャキ	17	93 / 117	モノクロ	No.82 / 単行本93P収録	「左右4寸3分」「第93頁」「5寸」表記に二重線あり	
13426	東京チャキチャキ	18	94	モノクロ	No.83 / 単行本94P収録	「左右4寸3分」「第94頁」表記に二重線あり	
13427	東京チャキチャキ	19	95	モノクロ	No.85 / 単行本95P収録	「左右4寸3分」「第95頁」「週刊東京5/25号」表記に二重線あり	
13428	東京チャキチャキ	20		モノクロ	No.170		
13429	東京チャキチャキ	21		モノクロ	No.171	「左右4寸」表記あり / 「5寸」表記に二重線あり / 中央をタテにふたつに切り分けられているのを裏からセロテープで止めてある	
13430	東京チャキチャキ	22		モノクロ	No.172		
13431	東京チャキチャキ	23		モノクロ	No.175	「左右4寸9分」「1/31号」「昔」表記にあり	

文化庁 DB 用に Excel 上で作成したデータの例

【入力項目詳細】

以下、杉浦幸雄『図解淑女の見本』を例に項目ごとの入力の詳細を記す。

※文化庁 DB でも Excel ファイルへの入力でも共通

付録

- ・マンガ原画作品名→図解淑女の見本
- ・マンガ原画作品名ヨミ→ズカイシュクジョノミホン
- ・順序→各話数

(例) 1 話

- ・ソート→話数の数字

(例) 1

- ・枚数→原画（下絵を含む）枚数を記入
- ・説明→各話テーマタイトルを入力
- ・初出→初出誌掲載時の情報を入力

(例) 「週刊漫画サンデー / 1966/02/02 / 表示号数 5 / NO.5 / 巻 8 / 号 5 / 通巻 332」

- ・初出 ID→「メディア芸術デジタルアーカイブ」から初出誌 ID を検索した
- ・収録→「図解淑女の見本」と入力
- ・収録 ID→「メディア芸術デジタルアーカイブ」から検索し、単行本の収録 ID を入力
- ・作画者・共著者→作画者・共著者を入力。「メディア芸術デジタルアーカイブ」から検索し、作画者・共著者の正式な表記を入力。

(例) [著]杉浦幸雄 / 岡部冬彦

- ・作画者・共著者ヨミ→作者名をカナ入力。

(例) スギウラユキオ / オカベフユヒコ

- ・著者典拠 ID→「メディア芸術デジタルアーカイブ」から典拠 ID を検索し、「杉浦幸雄・岡部冬彦」の典拠 ID を入力。

(例) A100074673 / A100059156

- ・大きさ→原稿の大きさを計測し、数値を入力。

(例) 34.5cm × 26cm

- ・言語区分→今回入力した原画は日本語のみだったため、すべて日本語と入力。
- ・色数→各話ごとの原稿の色数に準じて「モノクロ」「2 色カラー」「カラー」を入力。
- ・状態→初出掲載ページ、各話数、写植の有無など全体に共通する情報を入力。
- ・執筆時期、画材、マンガ原画タグ→今回は入力しなかった。
- ・マンガ作品 ID→「メディア芸術デジタルアーカイブ」マンガ作品 ID を検索し、「淑女の見本」のマンガ作品 ID を入力。

◆入力規則

上記以外の細かい入力規則は、以下に示す京都 MM の OPAC への登録の際の規則に従う。

付録

■全角・半角について（タイトルなど表示部分の入力）

○数値・アルファベットは半角、ひらがな・カタカナ・漢字は全角

○数値・アルファベット表記にかかわる記号は半角

.,!?:;_+*/='@

（%、&、¥、\$ の半角は別の意味を持つので全角、×÷は全角のみ）

○日本語表記、タテ書き表記にかかわる記号は全角

また、機種依存でない記号は全角

、。・（ナカグロ）…～○×※☆★△□など

→マルは「巻数字のゼロ」「合成用丸」はまぎらわしいので使わない

→…は ひとつ、ふたつ、3 以上は 3 つで止める

→ナカグロとピリオドかどうか迷う場合は奥付に従う

○ダッシュ（横棒）は？

視認性とまぎらわしさ、入力の手間などを考慮し、半角の「-」（マイナス）で対応する。

○かっこは全角

「」『』“”【】（）[] <>《》

→“” は全角で表記するが、既存の欧文表記で半角の ” が使われている場合、（一括変換は無理なので）訂正の優先度は下げる。ただ、タイトルでの ” は“”に直したい。

※責任表示や出版者などにある、半角の[]は役割を表すものとして使うためそのまま

■機種依存文字、特殊な表記 グレーな部分は NDL 差分作業では気にしない

○ローマ数字（機種依存）

→視認性から、[] で囲んだ半角アルファベットでの表記とする

・「キン肉マンⅡ世」→「キン肉マン〔Ⅱ〕世」

→よみで「キンニクマン 2 セイ」「キンニクマンニセイ」と数字フォロー

・「DRAGON QUEST IV」→「DRAGON QUEST 〔Ⅳ〕」

→よみで「ドラゴンクエスト 4」「ドラゴンクエストフォー」と数字フォロー

○マル数字、マル文字

[] で囲み、合成を表現する

① →〔○1〕 よみ「イチ」マルは読まない

マル秘→〔○秘〕 よみ「マルヒ」

Ⓐ →〔○A〕 よみ「エー」

○マルカッコで書かれた文字

付録

(株) → (株) よみ「カッコカブ」

○イレギュラーな使い方

² (2 乗) → [^2]

D.N.A²→D.N.A [^2]

₂ 下つき→ [_2]

H₂O→H [_2] O

○ハートマークなどの記号(トランプ記号) [] でくる

♥→[ハート] もしくは[:heart] などとし、表示で変換できるようにする

※白ハートと黒ハートは区別しない (★☆は区別する)

過去にさかのぼった追加は無理にしないが、統一時ルールとしては

「キャンディ・キャンディ」→「キャンディ [ハート] キャンディ」

→よみでは「キャンディキャンディ」「キャンディ キャンディ」

そのほか、音符記号など

○旧漢字

JIS コードの第一水準および第二水準内で対応する。

出やすいものの優先

→それ以外の漢字は新字とする。(タイトル・人名)

手塚治虫→手塚治虫

ただし、富、斉、吉、高、崎などのユレのあるものは要考慮

採用する別字

高

崎

斎、齋、(齊はないパターンあるので不採用)

涼

共通資料は奥付→館でやれるだけ

独自資料は館のルール

○外国語表記

UTF-8 で対応できる表現は可。

■意味のある記号

○要素が二つ以上ある場合の区切り文字

付録

「 / 」 全角スペース+全角スラッシュ+全角スペース

例 Y84 / 726.1

○名前とそのよみを同じ項目に入れ寝る場合の区切り文字

「 // 」 全角スペース+全角ダブルスラッシュ+全角スペース

例 小学館 // ショウガクカン

○「縦の長さ、横の長さ」で、タテとヨコの間の区切り文字

「 × 」 全角スペース+全角バツ+全角スペース

例 18.2cm × 12.8cm

○「責任表示」など作者の前に役割を表す [] 半角 例: [著]浦沢直樹

◆保管

撮影した画像データは、作品ごとにフォルダを作り、場合によってはさらに連載年ごとのフォルダを作るなどわかりやすい形にしてから、同じデータを 2 台の外付けハードディスクに保存する。また、確認用に作った表なども同じフォルダ内に入れることで、どんな画像があるのか、把握しやすくする。

撮影の終わった原画及び下絵は OPP 袋や封筒などに保管しやすい単位で入れる。原画から落ちた写植なども OPP 袋に入れ、元の原画とともに保管する。

それぞれの封筒には管理や内容の確認のための情報がシール印刷されたラベルを貼り、利便性の向上を図る。

『大変だァ!』挿絵 3 枚 副題: 単行本表紙 掲載: 遠藤周作『大変だァ』 新潮社 1969/8/30 発行 文化庁 ID: MOP000000929	『大変だァ!』挿絵 11 枚 副題: 亭主 連載: 第 1~10 回 掲載: サンケイ新聞夕刊 1968/11/1~12 文化庁 ID: MOP000000929	『大変だァ!』挿絵 9 枚 副題: 娘 連載: 第 11~18 回 掲載: サンケイ新聞夕刊 1968/11/13~21 文化庁 ID: MOP000000929
『大変だァ!』挿絵 11 枚 副題: 亭主 連載: 第 1~10 回 掲載: サンケイ新聞夕刊 1968/11/1~12 文化庁 ID: MOP000000929	備考 1968 年 11 月 29 日掲載 連載 25 回「手紙(七)」挿絵 所蔵なし	『大変だァ!』挿絵 11 枚 副題: 亭主 連載: 第 1~10 回 掲載: サンケイ新聞夕刊 1968/11/1~12 文化庁 ID: MOP000000929
『大変だァ!』挿絵 11 枚 副題: 亭主 連載: 第 1~10 回 掲載: サンケイ新聞夕刊 1968/11/1~12 文化庁 ID: MOP000000929	『大変だァ!』挿絵 11 枚 副題: 亭主 連載: 第 1~10 回 掲載: サンケイ新聞夕刊 1968/11/1~12 文化庁 ID: MOP000000929	『大変だァ!』挿絵 11 枚 副題: 亭主 連載: 第 1~10 回 掲載: サンケイ新聞夕刊 1968/11/1~12 文化庁 ID: MOP000000929

ラベルの例 (杉浦幸雄『大変だァ』)

できあがった封筒は中性紙の文書箱に入れて、貴重書庫で保管する。

付録



京都 MM 貴重書庫内の原画保管用文書箱



原画保管用の文書箱内部



ラベルの例（杉浦幸雄『大変だァ』）

横手市増田まんが美術館 整理・保存作業マニュアル



- 収蔵対象作家の全作品または主要作品原画などをベースに交渉。
- 収蔵承諾→原画移管後、原画整理からアーカイブまで順次取り組む。
- 原画の所有権、著作権は作家のまま。あくまでも物質的な原画のみの収蔵。

- 収蔵対象作家の全作品または主要作品原画などをベースに交渉。
- 収蔵承諾→原画移管後、原画整理からアーカイブまで順次取り組む。
- 原画の所有権、著作権は作家のまま。あくまでも物質的な原画のみの収蔵。



商業的な関わり



3. まんが美術館の運営方針

(1) 「原画」を中心とした保存と活用の両立

「マンガ原画」の保存に取り組みながら、「原画」や「作品」を横手市のまちづくり全体に広く活用し、原画保存が横手市の魅力を大きく向上させる取り組みを展開します。

(2) 人を「育てる」、人から「育てられる」施設（相互関係の醸成）

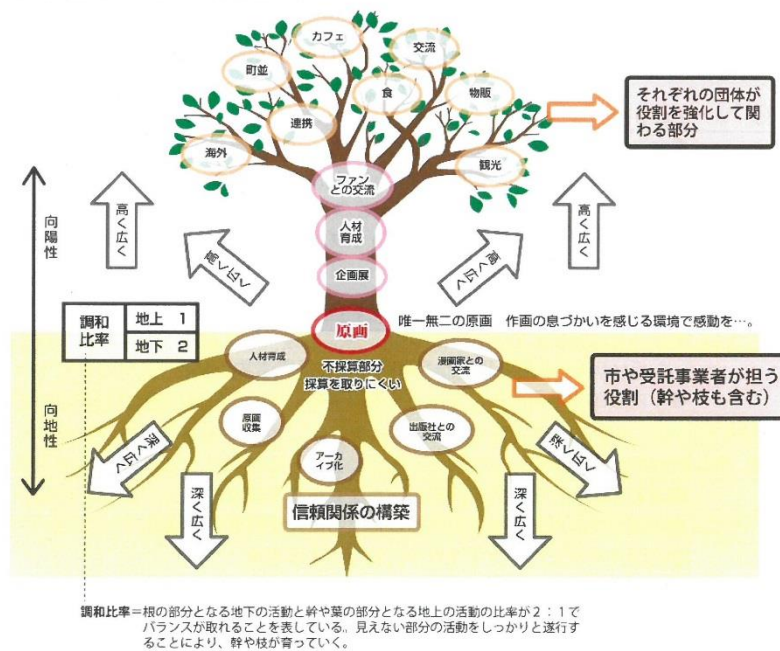
美術館の最大のスポンサーは「利用者」であり「市民」であることを念頭に、様々な取り組みを通じた「利用者の声」を美術館運営に反映させながら、共に成長する施設を目指します。

(3) 「観る」「集う」「学ぶ」を体感する交流拠点施設

マンガの魅力を活用した各種事業を通し、こどもの豊かな感性と創造力の醸成に取り組むと共に、展示内容・関連事業・サービスの充実に努めながら、人々が集い、学べ、体験できる交流拠点施設を目指します。

(4) 地域（市民・団体）と共に大樹に成長し、横手市のシンボルとなる施設

マンガの持つ可能性やまんが美術館の活動を地域（市民・団体）と共有し、まんが美術館が地域のシンボルであり憩いの場となるよう努め、住みたい、住み続けたいと思う街の魅力づくりへつなげます。



付録

■ 5.1.2.3 明治大学 米沢嘉博記念図書館の整理・保存の状況

明治大学米沢嘉博記念図書館 整理・保存作業マニュアル①

■モノクロ本編原画の場合

※2色用原画含む

＜用意するもの＞・中性紙の箱

- ・中性紙封筒（サイズ A3 用）
- ・原画 ID シール
- ・OPP 袋（サイズ No.16～17）

※OPP 袋とはポリプロピレン製の透明袋

- ・カードホルダー
- ・カッターマット
- ・中性紙ピュアガード 45kg（A3 サイズ、平版を半裁したもの[550mm × 800mm]）
- ・A4 コピー紙



中性紙封筒 中性紙の箱

本文原画 ID について

原画 ID は、箱番号(3桁)・封筒番号(2桁)・文庫本の巻数(3桁)ページ数(3桁)とする。

箱番号 封筒 巻数 頁数

Ex. 001-01-001009

※巻数は、三原順白泉社文庫全 20 巻に最初から振られているものではなく、こちらで便宜上出版順にふったもの。

- ・ 001 『はみだしっ子 1』
- ・ 002 『はみだしっ子 2』
- ・ 003 『はみだしっ子 3』
- ・ 004 『はみだしっ子 4』

付録

- ・ 005 『はみだしっ子 5』
- ・ 006 『はみだしっ子 6』
- ・ 007 『三原順傑作選‘70s』
- ・ 008 『三原順傑作選‘80s』
- ・ 009 『ルーとソロモン 1』
- ・ 010 『ルーとソロモン 2』
- ・ 011 『X Day』
- ・ 012 『ムーン・ライティング』
- ・ 013 『Sons1』・ 014 『Sons2』・ 015 『Sons3』・ 016 『Sons4』
- ・ 017 『ビリーの森ジョディの樹 1』・ 018 『ビリーの森ジョディの樹 2』
- ・ 019 『夢の中悪夢の中』
- ・ 020 『三原順作品集 LAST PIECE』

原画整理の手順

1)仕分け整理

- ① 封筒に入った本文原画とカラー原画、カット原画（モノクロ含む）など原画の分類を行う。
- ② 「原画 ID」を振るため、定本の収録順に原画を並べ直して、封筒に入れたのちに、中性紙の箱に入れ「箱番号」と「封筒番号」をつける。中性紙封筒（A3 サイズ）には原画が約 40 枚入り、中性紙の箱には封筒入りの原画が約 80 枚入る。1 作品が 40 頁以上の場合には封筒を分けることにした。

2)「原画 ID シール」を作り、OPP 袋に貼る

- ① 既製品のラベルシールを用い「原画 ID シール」を作る。
- ② 原画のサイズをおおまかに測り、OPP 袋のサイズを決め、シールを右上に貼る。
(ア)OPP 袋のサイズは 16.5 号 [280mm×430mm] を主に使用している。

付録



原画 ID シール

3) スキャニング



上向きスキャナー (SV600)



カッターマットの上に OPP 袋、原画の順に重ねる

- ① 「原画 ID シール」を貼った OPP 袋の上に原画を置き「原画 ID」とともに上向きスキャナーでスキャニング。原画サイズを確認するためにカッターマットを利用している。
- ② 取得したデータのファイル名を「原画 ID」にリネームする。
- ③ 箱単位のフォルダ、その下に封筒単位のフォルダを作り、振り分け、バックアップとして外付けのハードディスクに保存する。データは原画そのものを閲覧しなくとも原画の状態を把握するための画像情報となる。

(参考)

原画を続けて SV600 でスキャニングするための設定

付録

＊スキャナーのデフォルトの設定では、1枚ごとにプレビューで画像確認を求められるため、工数削減のため以下の設定を行った。画像確認は最後にまとめて行う。

- ・タスクトレイ右クリックメニュー→「Scan ボタンの設定」
- ・「クイックメニューを使用する」のチェックをオフにする。
- ・「アプリ選択」タブ→アプリケーションの選択

デフォルト ScanSnap Organaizer を、「起動しません（ファイル保存のみ）」に変更。

- ・「保存先」タブ

PC 上のファイルの保存先フォルダを適宜変更する。

「ファイル名の設定」で、prefix+自動連番可能なので適宜設定する。

- ・「読み取りモード」タブ

画質の選択→300dpi のスーパーファイン（4 段階の上から 2 つめ）にした。（適宜調整）

カラーモードの選択→自動向きの選択→自動判別は間違えることがあるので決めておく。

「継続読み取りを有効にします」チェックを外すと、プレビューがすぐ消える。

- ・「ファイル形式」タブは JPG にする。

- ・「原稿」タブ

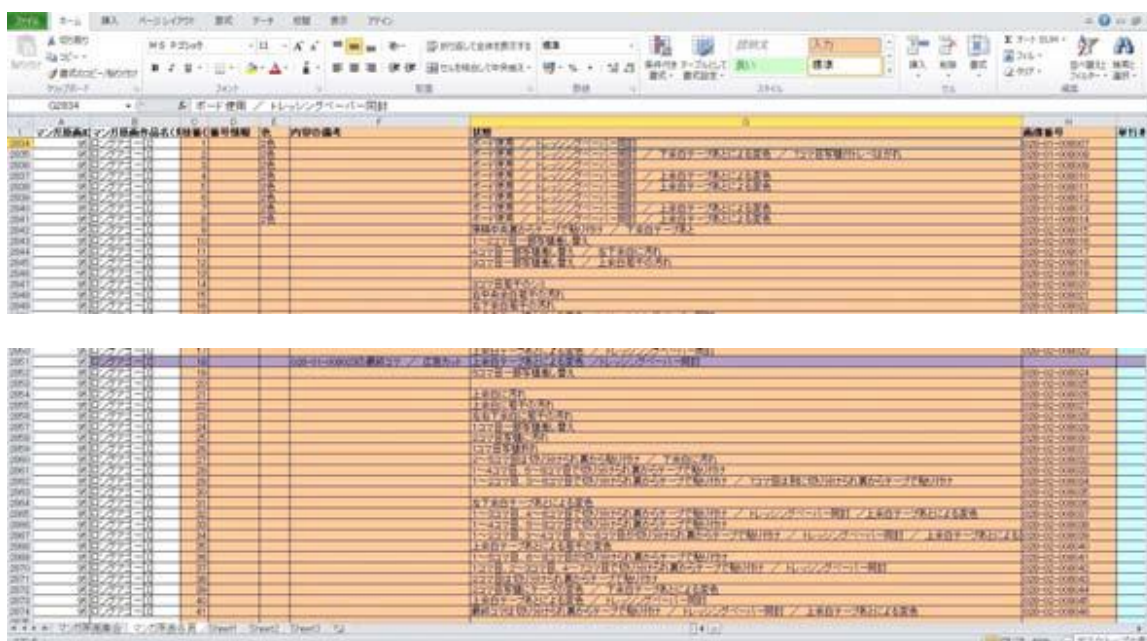
読み取る原稿の選択→「平らな原稿」にしておく。

原稿サイズの選択→デフォルトの自動検出のままにしておく。

「複数の原稿を検出する」チェックを外す。

「読み取り後、保存するイメージを確認する」チェックを外す。

4) 入力作業



データベース予備登録時の PC 画面

付録

- ①スキャニングした原画を OPP 袋へ入れ、状態をチェックし、文化庁メディア芸術データベースに取り込むことを前提としたエクセルの表へ入力。

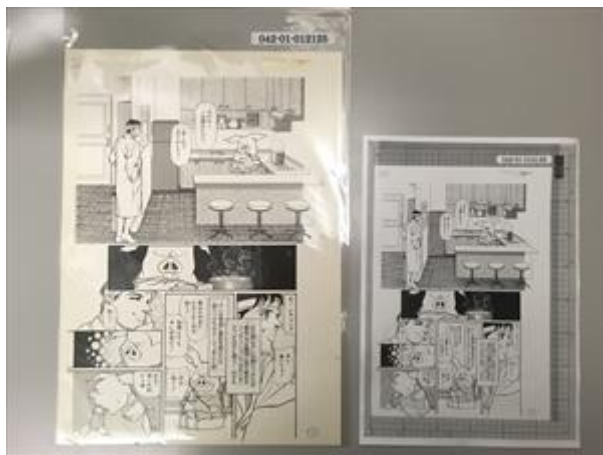
○状態の入力について

ここでいう「状態」とは、メディア芸術データベースのマンガ原画情報内の項目の「状態」のことである。そこに、三原順原画整理の際記入する項目を、別途注記し、整理したのが以下である。

- ・入力をおこなうのは、原画破損、トレーシングペーパーの有無、目立つ汚れ、原画の切り貼り等についてとする。
- ・文庫版と原画の内容が異なることに気がいたら、「内容」の部分に入力をする。
- ・文庫に使われていないタイトルの版下等は、スキャニングした後、タイトル原画と一緒に管理する。
- ・原画のサイズは、当時のマンガ原画の一般的なサイズである B4 サイズに近いものはサイズを記入していない。
- ・原画サイズが、B4 サイズより 5mm 程度以上異なる場合、あらためて測りなおす。測りなおした場合はその結果をそのまま入力。
- ・原画のサイズは cm 表記で小数点以下まで入力。
- ・原画の 1 ページ目部分がカラーイラストで別保存している場合、「状態」にその旨を書き込んでセルの背景を黄色で文字を赤にしておく。

5) 作品カードを作る

- ①スキャニングしたデータを貸出時の「作品カード」として使用するために 1 枚ずつ刷り出して原画とともに保管。1 話分を原画とは別の OPP 袋にまとめて入れている。



原画と作品カード

付録

○「作品カード」の使用方法

原画の貸出時は、ID 番号付き OPP 袋から原画を抜き出し、替わりに対応する「作品カード」を入れて管理する。これにより、原画 ID だけでなく原画の絵柄を参照できるため、返却時の戻しまちがいを無くす。

箱には「貸出原画あり」の印をつけておくことで、箱を開けずとも貸出状況がわかるようにする。



貸出した原画の代わりに「作品カード」を OPP 袋に入れる

6) 中性紙の封筒に貸出リストを貼る

①原画 ID、貸出先、担当者、貸出日、返却日などを記入するリストを作り、封筒に貼る。

7) 中性紙の箱に「カードホルダー」を貼る

①原画と「作品カード」を箱に収め、箱のフタに、「箱番号」「作家名」「作品名」を記入したカードを作りカードホルダーに入れ、貼る。



付録

明治大学米沢嘉博記念図書館 整理・保存作業マニュアル②

■イラスト・カット原画の場合

※主にカラー用原画。2色・モノクロ用原画含む

＜用意するもの＞

- ・中性紙の箱
- ・原画 ID シール
- ・OPP 袋サイズ No.9 (18cm×28cm) ～ポスターサイズ (54cm×80cm)

※OPP 袋とはポリプロピレン製の透明袋



リングファイル (A4 30 穴、B 4 36 穴)

- ・カードホルダー
- ・カッターマット
- ・定規
- ・中性紙ピュアガード 45kg (A3 サイズ、平版を半裁したもの[550mm×800mm])
- ・A4 コピー紙

◎イラスト保管のため、新たに用意したもの

- ・リングファイル (A4 30 穴、B4 36 穴)
- ・不活性ポリプロピレン製 リングファイル用リフィル (A4 30 穴、B4 36 穴)
- ・リフィル専用の間紙 (A4 サイズ、B4 サイズ)
- ・スキャニングの時に使用する紙製スケール (カラー用、モノクロ用を作成)



不活性ポリプロピレン製 リング
ファイル用リフィル (A4 30 穴、
B4 36 穴)



リングリフィル用の間紙
(中性紙) (A4 サイズ、
B4 サイズ)

付録

イラストの原画 ID について

三原順のイラスト原画は、初出調査が進んでいたもので、原画サイズと作品シリーズの初出順で原画 ID 番号を振った。

箱番号(3桁)・ファイル番号(2桁)・発表年(西暦の下2桁)発表順(3桁)とする。

箱番号 ファイル 発表年 発表順

Ex. 062- 01 - 750 010

※発表順の番号は 10、20、30 と 10 番飛ばしに番号を振る、新たなイラスト原画が発見された時に、番号の途中に入れ込むことができる。

原画整理の手順（イラスト原画）

1) 仕分け整理

①イラスト原画をサイズで仕分ける

イラスト原画はサイズが揃っていないカラー(4色)とモノクロ1枚物のイラストである。

A4 サイズ以下、B4 サイズ、A3 サイズ、B3 サイズの 4 つの大きさに仕分けた。

- ・ ~A4 サイズ以下リングファイル (A4 サイズ 30 穴)
- ・ B4 サイズリングファイル (B4 サイズ 36 穴)
- ・ A3 サイズ中性紙の箱
- ・ B3 サイズ中性紙の箱 (新聞用もんじょ箱) に収納

②近いサイズの中で作品シリーズごとに分類する

三原順作品のイラスト分類は、「はみだしっ子シリーズ」「ルーとソロモンシリーズ」「短編」とした。

シリーズ作品の中でさらに初出年代順に並べた。これにより原画の保管場所がコンパクトになる。



③リングファイル (A4 サイズ) に収めているところ

不活性ポリプロピレン製 リングファイル用リフィルに専用の間紙を入れ原画 ID 順に収める。

付録



中性紙の箱に A4 リングファイルなら 2 冊、B4 サイズなら 1 冊入る。

2)「原画 ID シール」を作り、OPP 袋に貼る

①既製品のラベルシールを用い「原画 ID シール」を作る。

②原画のサイズをおおまかに測り、OPP 袋のサイズを決め、シールを右上に貼る。

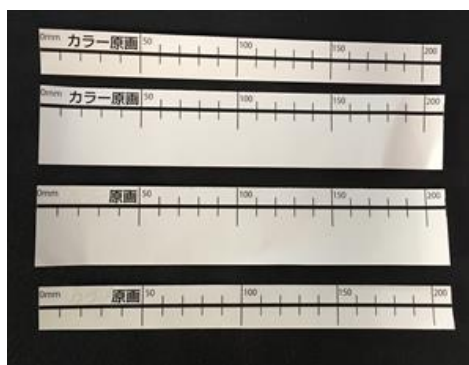


3)スキャニング

①「原画 ID シール」を貼った OPP 袋の上に原画を置き「原画 ID」とともにスキャニング。原画サイズを確認するために紙製スケール（カラー原画用とモノクロ原画用）を作り使用した。本文原画は同じサイズのものが多いが、イラスト原画はサイズにばらつきがあり、PC モニター上の画像では大きさを確認しにくい。また「作品カード」をモノクロコピーした場合、カラーかモノクロか判別できないので、スケールに文字を入れた。

②取得した画像データのファイル名を「原画 ID」にリネームする。

③箱単位のフォルダを作り、振り分け、バックアップとして外付けのハードディスクに画像データを保存する。データは原画そのものを閲覧しなくとも原画の状態を把握するための画像情報となる。



付録

④トレーシングペーパーを中性紙ピュアガードに、かけ替える。



原画サイズに合わせて中性紙ピュアガードをカットし、上下を折りたたんで原画を覆う。
セロハンテープは使用しない。



A3 サイズ以上のイラストは既成品の新聞用もんじょ箱に収めた。新聞用もんじょ箱は B3
サイズまで収納できる。

7) 入力作業

イラストの種類として雑誌の表紙用、扉絵用、単行本のカバー用、総扉用、付録やプレゼント用、予告カットなど分かるものはデータベースに入力するため資料を作成。

付録

シリアル番号	状態	マンガ原画作品名(登録番号)	内容の備考	状態	備考
2834	06	マンガ原画作品名(登録番号)	1	06	1
2835	06	マンガ原画作品名(登録番号)	2	06	2
2836	06	マンガ原画作品名(登録番号)	3	06	3
2837	06	マンガ原画作品名(登録番号)	4	06	4
2838	06	マンガ原画作品名(登録番号)	5	06	5
2839	06	マンガ原画作品名(登録番号)	6	06	6
2840	06	マンガ原画作品名(登録番号)	7	06	7
2841	06	マンガ原画作品名(登録番号)	8	06	8
2842	06	マンガ原画作品名(登録番号)	9	06	9
2843	06	マンガ原画作品名(登録番号)	10	06	10
2844	06	マンガ原画作品名(登録番号)	11	06	11
2845	06	マンガ原画作品名(登録番号)	12	06	12
2846	06	マンガ原画作品名(登録番号)	13	06	13
2847	06	マンガ原画作品名(登録番号)	14	06	14
2848	06	マンガ原画作品名(登録番号)	15	06	15
2849	06	マンガ原画作品名(登録番号)	16	06	16
2850	06	マンガ原画作品名(登録番号)	17	06	17
2851	06	マンガ原画作品名(登録番号)	18	06	18
2852	06	マンガ原画作品名(登録番号)	19	06	19
2853	06	マンガ原画作品名(登録番号)	20	06	20
2854	06	マンガ原画作品名(登録番号)	21	06	21
2855	06	マンガ原画作品名(登録番号)	22	06	22
2856	06	マンガ原画作品名(登録番号)	23	06	23
2857	06	マンガ原画作品名(登録番号)	24	06	24
2858	06	マンガ原画作品名(登録番号)	25	06	25
2859	06	マンガ原画作品名(登録番号)	26	06	26
2860	06	マンガ原画作品名(登録番号)	27	06	27
2861	06	マンガ原画作品名(登録番号)	28	06	28
2862	06	マンガ原画作品名(登録番号)	29	06	29
2863	06	マンガ原画作品名(登録番号)	30	06	30
2864	06	マンガ原画作品名(登録番号)	31	06	31
2865	06	マンガ原画作品名(登録番号)	32	06	32
2866	06	マンガ原画作品名(登録番号)	33	06	33
2867	06	マンガ原画作品名(登録番号)	34	06	34
2868	06	マンガ原画作品名(登録番号)	35	06	35
2869	06	マンガ原画作品名(登録番号)	36	06	36
2870	06	マンガ原画作品名(登録番号)	37	06	37
2871	06	マンガ原画作品名(登録番号)	38	06	38
2872	06	マンガ原画作品名(登録番号)	39	06	39
2873	06	マンガ原画作品名(登録番号)	40	06	40
2874	06	マンガ原画作品名(登録番号)	41	06	41

データベース予備登録時の PC 画面

①スキャニングした原画を OPP 袋へ入れ、状態をチェックし、文化庁メディア芸術データベースに取り込むことを前提としたエクセルの表へ入力。

○状態の入力について

ここでいう「状態」とは、メディア芸術データベースのマンガ原画情報内の項目の「状態」のことである。そこに、三原順原画整理の際記入する項目を、別途注記し、整理したのが以下である。

- ・入力をおこなうのは、原画破損、トレーシングペーパーの有無、目立つ汚れ、原画の切り貼り等についてとする。
- ・原画のサイズは cm 表記で小数点以下まで入力。

8) 作品カードを作る

①スキャニングしたデータを貸出時の「作品カード」として使用するために 1 枚ずつ刷り出して原画とともに保管。

付録



6) 中性紙の箱に「カードホルダー」を貼る

①原画と「作品カード」を箱に収め、箱のフタに、「箱番号」「作家名」「作品名」を記入したカードを作りカードホルダーに入れ、貼る。イラストの箱にはカードに赤いマークをつけて分かりやすくした。



7) パステルなど、描画材が紙やマットの表面に定着していないイラストの保管

＜用意するもの＞

- ・ 中性紙のブックマット（オーダー）①
- ・ 中性紙の平置き用トレイ（オーダー）②
- ・ 中性紙の箱（既製品のもんじょ箱）に入らない原画用のブックマット（オーダー）
- ・ マウント用ストリップ（原画をマットに固定する、強いていえば三角コーナー的なもの）
- ・ 中性紙に無酸性糊を塗布したテープ

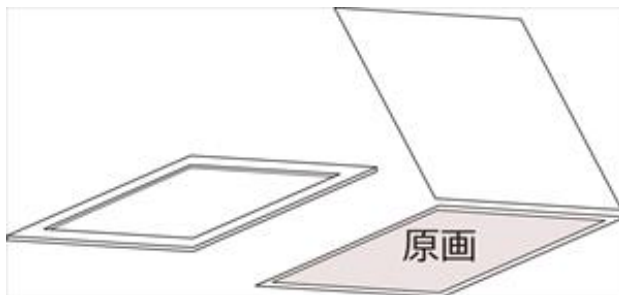
パステルや色鉛筆などの画材が定着していないイラストはピュアガードをかけると画材が擦れて落ち、状態が悪くなる。また、アクリル絵の具で描かれ紙が圧着する可能性のある原画などを保存するため、直接画面に触れない保管方法を検討した。薄い画用紙に描かれた

付録

ものはブックマットをオーダー。イラストボードを用いたものは厚みがあるので、周りに厚い中性紙でガードを作り、ずれないように平置きトレイをオーダーした。

① ブックマット

用紙が薄い原画は、原画サイズにあわせ窓を空けた、下敷きを付のマットにストリップで固定し、1mm厚の中性紙で挟んだ。



中性紙のブックマット状のもの、サイズはモノクロ用原画のサイズに合わせて作った中性紙の箱に丁度収まるサイズにした

② 中性紙の平置き用トレイ



イラストボードが丁度収まり、画面に触れないよう周囲に厚いガードがついたトレイ

付録



中性紙の箱に収めたところ

③中性紙の箱（既製品のもんじょ箱）に入らない原画用のブックマット

サイズ（27.5×75.0 cm）が大きく、パステルを使用していたイラスト原画が折りたたまれた状態で封筒に入っていた。伸ばして保管するため、①と同じく 1mm厚の中性紙 2 枚とマットでブックマット状のものを作り中性紙の封筒を繋げたものに入れた。



原画の状態例および対応



カラー原画の中にトレーシングペーパーが貼りついて剥がれないものがあった（1984 年の作品）。状態の悪い原画について、4 年制の保存修復科を持つ東洋美術専門学校に相談して対処することを検討している。



トレーシングペーパーにカラートーンが貼り付き、原画から剥離したもの（1985 年の作品）

■ 5.1.3.3 明治大学米沢嘉博記念図書館の活用の状況

明治大学 米沢嘉博記念図書館

マンガ原画の利活用例としての三原順原画の貸出

実際に原画が利活用された例が散見されたので報告しておく。

◆マンガ原画の利活用例

2015 年の原画展開催後にも、書籍化・展示・舞台化の際に、印刷、そのまま展示、グッズ化などのためマンガ原画が必要とされる例があった。

これは、本事業によるマンガ原画の整理作業が、その利活用に貢献した事例である。

付録

具体例

- ・平成 27 年度 河出書房新社による総特集本出版
- ・平成 27 年度 復刊ドットコムによる三原順・複製画とグッズ商品化
- ・平成 28 年度 「LaLa（ララ）40 周年記念原画展～美しい少女まんがの世界～」への原画
出展
- ・平成 29 年（本年）度
事業前：劇団スタジオライフ「はみだしっ子」舞台化チラシ用原画 1 枚貸出
事業後：1. 同上の劇場用グッズ制作販売（グッズ用原画 5 枚貸出）
2. 保存修復科の学生（東洋美術学校（東美））の授業に原画を提示
※マンガ原画の実態を把握しマンガ原画の保存に興味を持ってもらうため。

◆原画貸出までの流れ（事業後 1 の劇場用グッズ制作時の作業を例に）

三原順作品「はみだしっ子」舞台化に伴い原画の貸出作業が発生した。

日時：10 月 6 日（金）、14:00～15:30 くらい

所要時間：約 1 時間半

内容：原画取り出しから貸出まで

貸出点数：5 点（内カラーカット 4 点、モノクロ原稿 1 点）

舞台化をする劇団スタジオライフより、三原先生の出版物の大半を出版している白泉社へグッズ制作の依頼あり。白泉社より版權者である遺族に許可取りと同時に、当館への貸出依頼あり。最初は 10 点以上の打診があり、出版社の手元にあるデータが使えるもの以外を貸出すことになった。

白泉社が原画を借用しそれをデータ化、劇団にデータを送付。画像使用者は原画を扱わない方向。

原画取り出しから貸出まで

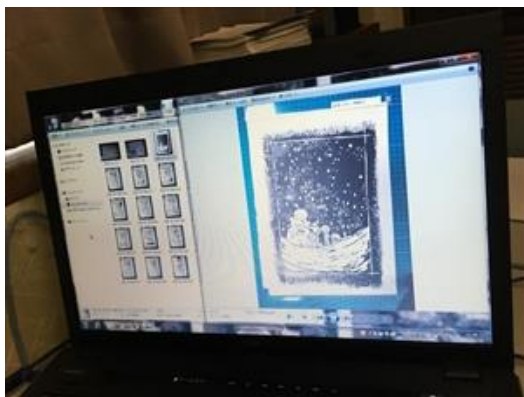
◎整理の終わったモノクロ本編原画とまだあまり整理に取り掛かれていなかったイラスト原画では現状手順が異なる

1. モノクロ用本編原画の場合

※本事業により整理作業済

1-1 収蔵先の特定

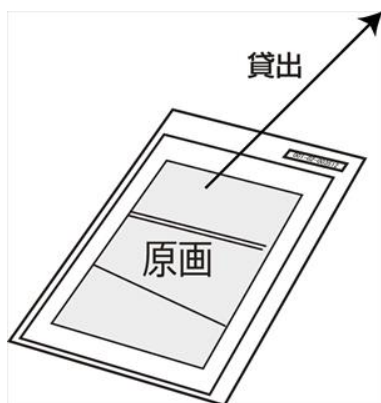
付録



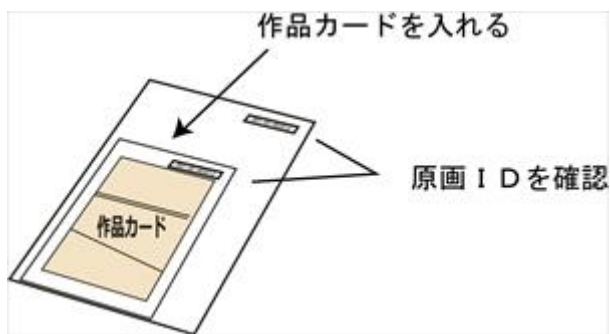
- ・依頼時に送られてきた借用希望の画像入り書類と、原画スキャン画像をつきあわせ、原画 ID を特定
- ・原画 ID から収蔵先を特定
- ・原画 ID から収蔵先（原画入りの箱）を特定

1-2 収蔵先（箱）から原画を抜き出す

- ・箱を開け、必要な ID 番号の原画が入った封筒を特定する
- ・原画 ID シールの貼られた OPP 袋から該当する原画を抜き出す



- ・「作品カード」を 3 枚に増やし 1 枚 OPP 袋に入れる。



原画（中央）、作品カード（左）、原画を入れる封筒（右）

1-3 カードを入れた ID 入りの OPP 袋を元に戻す。

- ・ OPP 袋を戻した封筒表に貼付の貸出メモに、必要項目（貸出先、貸出日など）を書き出す。封筒を箱に戻す。

1-4 箱を収蔵場所に戻す。

- ・ 箱にも貸出中の印をつける

※現状は、白のマスキングテープを箱の前側面に貼付し、年月日と「貸出」の文字を記載

2.カラー用イラスト・カット原画の場合

※2015 年の展示の際、原画をクリアファイルに入れる仕分けまでは完了

2-1 収蔵先の特定および原画の抜き出し

- ・ 原画入りのファイルが入った箱を最初から直接収蔵場所から出す。そして箱からファイルを出す。
- ・ 依頼時に送られてきた借用希望の画像入り書類と、ファイルに入った原画自体をひとつひとつつきあわせる
- ・ 原画をスキャンし「作品カード」を 3 枚作る
- ・ ファイルの中の原画を貸し出した袋に印の付箋を立てる。付箋には貸出先と年月日を書き添える。ファイルを箱に戻す

付録

2-2 箱を元に戻す。箱にも貸出中の印をつける（現状は、白のマスキングテープを箱の前側面に貼付し、年月日と「貸出」の文字を記載）

※この 2-2 の作業は 1-4 の作業と同様。

3.貸出作業

3-1 原画を借主とともに確認する

3-2 貸出書を作成し取り交わす

作ったカードの残り 2 枚は貸出書とその控えに添付

3-3 原画を安全に梱包し借主に引き渡す

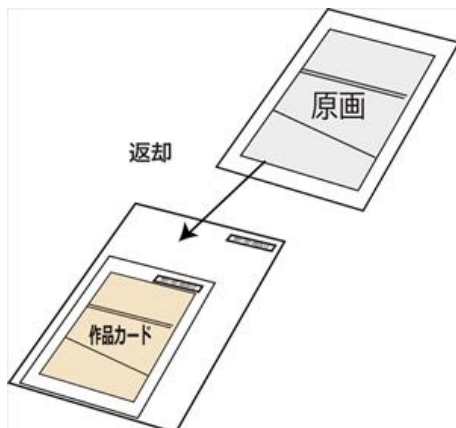
4.返却作業

返却時にはイラスト原画の分類作業がほぼ終了していた。

以下は、返却されてきた原画を貸主とともに確認しひきとったのちの作業。

4-1 原画の収納先の箱を特定しファイルに戻す。

ファイルには原画 I D 番号付きの「作品カード」が原画の代わりに入っているのので、一目で戻す場所がわかり、作業を早く行うことが出来る。



原画 I D と画像入りの「作品カード」は、原画との照合がスムーズ。貸出した時は原画の代わりになり、返却された時の確認もしやすい。

4-2 封筒の表に貼付の貸出メモに返却日を記入、箱に貼った貸出中の印を取る。

原画貸出の所要時間は 1 時間 30 分だったが、返却の所要時間は 30 分ほどだった。

付録

◆利活用の成果としてのグッズ



原画を使用して制作されたグッズ（合計 9 種）。スタジオライフの劇場ロビーと公式サイトで通信販売された。

◆所感

整理作業を進めたことにより、様々な利点から貸出し作業等がスムーズになった。原画の取り出しにかかる時間や身体的負担をそれほど考えることなく利活用に協力できるという大きなメリットがあることが実感できた。

◎本整理作業による利点

- ・ 原画保護
 - スキャンし ID を入れることで原画に触れることなく収蔵場所を特定できた
 - 保存用の箱、袋等をなるべく中性紙に変更したことにより原画の保存環境を整えた
- ・ 作業者の身体的負担の軽減
 - 収蔵用の箱を扱いやすい大きさに変更したことによって、重い段ボール箱を直接取り出し開閉して貸出し用の原画を探す必要が無くなった
- ・ 貸出し作業時間の短縮
 - 各方面からの整理作業により場所の特定、取り出し、借用書作成等の時間が短縮された

付録

- ・貸出し作業の正確性向上

- 短時間で借用作品の画像入り借用書等を作成することが出来るので、貸出し作業がより
確実になった

◎注意点

この整理を長期間使える方法として機能させるためには、貸し出す際に戻す時のことを考えてマーキング等しておくことと、戻ってきたら必ず同じ場所に戻すことが必須である。また、保存と管理の方法をレクチャーする必要がある。あるいは、管理そのものを請け負う場所を想定し、人を育成するということも考えられる。

3 議事録

■ 5.2.4 全体会議 【京都国際マンガミュージアム】

議 事 録

作成日：2017/10/03

作成者：櫻井 壽人

研究会名：マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発事業 全体会議

開催日時：2017 年 10 月 3 日（火曜日） 15 時 00 分～17 時 30 分

場 所：京都国際マンガミュージアム研究室 1 （スカイプ会議）

出席者：京都精華大学 国際マンガ研究センター 伊藤 遊

京都精華大学 国際マンガ研究センター 倉持 佳代子

北九州市マンガミュージアム 表 智之（スカイプ参加）

明治大学 米沢嘉博記念図書館 ヤマダ トモコ（スカイプ参加）

日本アスペクトコア株式会社 櫻井 壽人

議 題：平成 29 年度メディア芸術連携共同事業「マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発」の事業計画と活動方針について

■事業計画について

伊藤：当初の名称より一部変更となったが、計画については、大きな変更なく採択となった。今年度は昨年度までのように作業自体に焦点を当てるのではなく、マンガ原画をどのように管理し、活用するかモデル開発を行い、2019 年 1 月と 2 月で講習会およびシンポジウムを開催し、広く一般に提案することを目的としている。

■課題検討

伊藤：各館で保有している原画作業の状況確認を行いたい。

表：画像データはあるが許諾がないものがある。メタデータレベルでの開発は可能。

付録

ヤマダ：昨年度の継続作業で掘り下げを行うことが可能。

伊藤：今年度はモデル化することが目標。アーカイブ化は原画所有者、所有機関が望んでいることではあるが、原画が膨大にあること、予算、人材不足などさまざまな要因で実施できていない。一般化できる部分は一般化し、マニュアルにしたい。収集の仕方でもA～Cパターン、アーカイブ（保管）の仕方でもA～Cパターン、活用の仕方でもA～Cパターンといった形で、原画所有者が置かれている状況によって自由に選ぶことができるようなタイプ開発を進めたい。

倉持：我々のような専門の研究者が集まる会議だけでなく、マンガ家へのインタビューなどで実際に原画保存に困っている人への会話から、解決策を考えたい。

ヤマダ：原画の保管を考える上で、画材の研究は不可欠だが、マンガの分野ではほとんど進んでいない。東洋美術学校が先駆的に進めており、助言いただけると内諾を得ている。調査に同行いただき、より実践的な原画調査を行いたい。その結果を実習会や報告書でまとめる。

伊藤：原画の活用の面だと、原画の寄贈依頼が有った際、最初に確認することは一覧リストがあるかどうか。やはり一覧リストが無いと寄贈などの申し出があっても受け入れを躊躇せざるを得ない。どのようなリストを作っていれば、次の展開につなげやすくなるかを検討したい。また、その活用方法も単に保管にとどまらず、展示での活用、リスト自体を本にする、原画を販売するなど、広い選択肢を考えたい。展示で活用するには、この程度のリスト作成が必要で、それを作るにはどれだけのコストがかかるかもわかって来るので、より具体的に。

ヤマダ：リスト作りで原画を調査することになるため、人材育成にもつながる。

■シンポジウムについて

伊藤：内容はこれから協議したいが、2月に京都国際マンガミュージアムで行う。

ヤマダ：編集者を呼ぶのも興味深いと思う。また、作家、原画の個人収集者、外注業者など幅広い意見が出る場になると、意義があると思う。何人か知り合いもいるので、調整してみる。

■その他

ヤマダ：今年度から雑誌単行本のプロジェクトが明治大学申請となっている。昨年度までのような連携とはいかないまでも、連携共同事業として事業が並んで動くので、情報交換をしたい。

以上

■ 5.2.1 保存修復研究部会 【調査①】

報 告 書

作成日：2017/11/10

作成者：伊藤 真由子

研究会名：マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発事業 保存修復研究会

開催日時：2017年10月19日（木曜日） 13時00分～16時00分

場 所：新潟市役所 白山浦庁舎 5号棟 3階 新潟市文化政策課内会議室

出席者：新潟県新潟市文化スポーツ部 文化政策課主幹 長谷川 一栄

新潟市マンガ・アニメ情報館、新潟市マンガの家、ガタケット 武田 優子

東洋美術専門学校 保存修復研究室 小野 慎之介（アドバイザー）

明治大学 米沢嘉博記念図書館 ヤマダ トモコ

明治大学 米沢嘉博記念図書館・アスペクトコア 鈴木 紀成

明治大学 米沢嘉博記念図書館・アスペクトコア 伊藤 真由子（記録係）

議 題：マンガ原画の収集、整理、保存、修復、公開について

会議内容：マンガ原画に対する新潟市の対応

（以下敬称略）

■収集

◎新潟市ではマンガ原画を収集保存、あるいは寄託などでお預かりしているか

長谷川→収集は現在特に行っていない

現状手元にあるのは「マンガ大賞」の応募作品の原稿（のちに返却）と、「マンガ大賞」の応援イラスト（過去のものも含めて）程度。ただ「マンガ大賞」の応援イラストは新規に描いていただいた物なので収集したものとはいえないだろう

◎今後原画を収集する予定はあるか

長谷川→新潟市として原画収集を進めないのかと投げかけられてはいる

マンガ・アニメの活用、街づくり構想を行う中の大きな柱の一材料として、将来につなげる素材の伝達というところで取り組むべきと掲げたものの、スペースや保存方法、手が回ら

付録

ないということや活用の問題で保留になっている

仮に収集するとしても、何をどこまで預かるか選定する必要がある

また自治体としては、公費を使用し保管して収集するからには、公開をどのようにするのか、市民還元への道筋はできるのか、という問いかけが必ず出てくる。この問題どう道筋を立てるのが課題

武田→実際に収集を行うためには 1.保管場所、2.管理・修復にかかる人的要因、が高いハードル

◎実現に向けての案などは出ているか

長谷川→公文書館構想があるが、計画をなかなか具体的に進めることができない状態
少子化で閉校した学校の利活用案として資料の保管場所をという案があったりはするが、むしろコミュニティスペースや福祉施設や図書館など文化会館のような利用方法の方へ話が進みがちである。公文書館の資料保管場所と原画の保存を共存させることはできるかもしれない

◎これまで原画寄贈の申し出はあったか。寄贈をお断りしたことはあるか

長谷川→数年前、新潟ご出身の M 先生からお話が来たことがある。それ以外の先生方から積極的なお話は来ていない。それも正式なお申し出という感じではない。収集保存に関する声掛けをしてくださった先生も M 先生のみ

■保存・修復

※この項目は、東洋美術学校・小野慎之介先生による報告書もあわせて参照のこと

◎マンガ原画とは何を指すと思われるか、どこまでを原画として扱うか

武田→現状先生が描かれているものはネームでも設定画でも、スケッチでもすべて原画として扱っている

◎原画の付属物について

武田→かなり年数がたっていてぼろぼろのトレーシングペーパーは先生の許可を取ったうえで借用する側で変えているという例を最近聞いた。原画に悪影響を与えるという理由でだが、写植を貼り付けたり指定をするためのトレーシングペーパーである場合取り換えることには躊躇する。指示自体が資料だったりするため。現状、展示をするために借りるのでこまでそれを触っていいかという判断が現状悩ましく、静かに戻して返すことが多い

◎写植、テープ、そのほかの扱いをどうしているか

付録

武田→ネームが落ちているときに、戻してよいのかどうかが悩ましい。マンガ家がよく使っているペーパーセメントで修正する場合もある

◎違う人が書いたタイトルロゴやネーム、トレーシングペーパー、封筒などの扱いについて
長谷川→それらは原画ではないがいろいろな人がかかわって作品を作っているという証でもあるため、原画から取り外して別管理にしてしまうのも違う気がする。しかし、かさばるという問題もある。ロゴは別の人が書いていても、実際印刷されたものは原画とそれが重なってできているのだから、読んでいる人はそれを一つの作品としてみている

◎セロハンテープ

武田→セロハンテープはこちらでは一切使わない。セロハンテープを使っている原画はある経年劣化してぱさぱさになったテープが原画と一緒に出てくることが多い。テープが劣化して原画の表までシミになり、展示をする際変なところにオレンジ色のシミがついていることなどよくある

テープの粘着力がなくなって取れそうになっている場合は、はずれ具合によるが極力そのままにしている。完全にテープの体をなさなくなっている場合は、ケースバイケースだが、そのままそっと仕舞うこともあれば、これは取ってしまった方が安全だと判断すればカサカサのテープを取ってしまってもマスキングテープまたはドラフティングテープでそっと止める。極力やりたくはない

◎温湿度について

武田→「マンガ・アニメ情報館」の企画展示室と作業室には、湿度の計測器がある。企画展示室は温湿度の記録を三ヶ所、1時間ごとに記録されるようになっている。記録を取ったものは、毎月管理グラフを報告に挙げている。記録を見て加湿や除湿をするかどうかの目安にしている

同じ企画室でも、外気の入りやすさなどの差がどうしても発生するため、場所によって一定の温湿度を保てる場所と保てない場所がある

◎展示期間が終わって原画にトラブルが発生したことは今まであるか

武田→温湿度で問題が起きたことはない。脱落したネームを貼る程度、それはどうしてもやらなければいけない場合のみ多いため

◎借用原画の保管方法について

武田→ B4 以上のサイズの収納にいつも悩む。封筒に入れても端が痛みやすいし、きれいに重ねることも難しい、箱に入れたら運搬が楽になりそう

江口寿史展の巡回時、江口先生が使用していた借用原画が入っている箱を見て良いと思い、

付録

その後米沢記念図書館でも同じものを使用しているのを見た。B4より一回り大きな箱ですごくつかいやすかった。その購入先は？

ヤマダ→それは私の前職・川崎市市民ミュージアムか、当館で使っている箱のどちらかが回っていったのだろう。たぶん「特種紙商事株式会社（TT トレーディング）」で注文した箱ではないか。当館の箱の一部は川崎のころの業者をお願いして作成した。他にも酸性紙ではない箱を受注生産している箱の会社はある。特注でもそれほど高価ではない

小野→温湿度の差の激しいことが、一番資料を痛める。箱に入れることで、温湿度の差が起りにくくなるというメリットがある

◎保険について

武田→保険はもちろん基本的にかける。だが、結局何かあったらいくらかけても取り返しがつかないので、とにかく慎重に扱っている

小野→返却するときはどの程度確認をするのか

武田→あたりまえだが枚数は必ず確認する。後で問題になった最初期の状態を提示できるように、借用の際状態の記録を付けておくか写真を撮るかをしている

ヤマダ→川崎時代はカードを作っていたが、マンガは借用点数が多く大変。今は写真を撮ったうえで、写真に写らない汚れなどを別途記録している。当館では以前、万が一があったときのために、展示前に複製を作ることができる大きなサイズのスキャンデータを取り、さらに保険をかけていた。原画返却の際、作家にデータごと一緒にお渡し、そのデータはもちろん館には残さない。が、そのデータが有効活用される例が少なそうなことと、時間の問題で、今は、簡易なスキャンと保険にしている。大きなデータを取っておくことは、実は作品を残すという意味では、長期的な目で見ると有効なのではないかと個人的には感じている。マンガは基本複製物を発表するものなので。

■公開（利活用）

◎公開時の原画に接着しているトレーシングペーパーをどうしているか

武田→トレーシングペーパーは基本的に、はずさず裏にまわす

どうしても裏に回せないならば、物によってかけたままにするか、はずさせていただいて後できれいに戻す。どうしても外せない場合は、作業工程を見せるという意味合いも含めて付けたまま出す場合も

ヤマダ→生存していても、先生に直接連絡できない展示がマンガの場合はかなり多い。これもマンガ展の特徴かもしれない

付録

◎カラー原画と光源について

武田→「マンガ・アニメ情報館」、「マンガの家」とともにすべて蛍光灯を LED へ変更している

また、スポットに偏光フィルムを貼ったり、照度計をあてることも行っている

◎複製する場合は、原画、雑誌等に印刷されたもの、何に色味を合わせるとよいだろうか
長谷川→本来の色は原画の色だが、原画の色と印刷物の色は異なることがあり、印刷された色のほうが不特定多数の読者の基準となっている場合もある。しかも、絵が描かれた当時の印刷技術や画材では出せなかった色も、現在の技術ならば出せたりするので、作家の脳内イメージに近づけることができたりするだろう。そう考えると何に色を合わせるかに迷いが生じることが興味深い。原画があれば基本それに寄せるのが一般的だろうが

■その他、質問等

◎長谷川→自治体としては原画を預かったときその後の活用はどうなるのかが問題になる。原画を預かっても著作権は作家（著作権者）にあるので勝手に使用することはできない。それらは条件設定次第だと思うが、現在実際に原画を預かって活用している他館ではどのような条件設定をして原画を預かっているのか。展示だけならばよいのか、展示以外にも無償の広報や PR にも使っているのか、どこまでメリットがあるのか、説明ができる事例があったら今後もう一段話を進める参考になるのだが

また、1つの作品にたくさんの人が絡んでいる場合、研究・活用しようとしても権利関係が複雑に入り組んでとても難しいが、そういったものを整理する等どのように行っているのか

ヤマダ→その館で行う展示の場合のみ著作権者に展示の許可を取らずとも展示できる約束を最初に取り付ける場合もある。色々なことが模索されている。おそらく京都国際マンガミュージアムや、秋田県の横手市増田まんが美術館などに知見がたくさんありそうである

◎長谷川→原画の保存からは外れるが、同人誌の公開についてうかがいたい。取り扱う際の指針や展望についてなど

鈴木→現状では米沢氏の私物コレクションを公開している。また、コミックマーケット準備会から、コミケット直後に最新の見本誌を預かり、数か月間公開している。同人誌がいっぱい詰まっているコミケ箱と呼んでいる箱（サイズは 40cm×30cm×20cm ほど）が、毎回 450 箱前後くる。年 2 回総入れ替えする

成年向けに関しては、コミケット側でも新刊は毎回すべてチェックしている。当館は閲覧室に入館できるのが 18 歳以上という条件がある。そのため、あるものは請求があればすべて提供する。また見本誌を館で提供することに関しては、施行前にも現在も、コミケットがカタログ等で告知し周知徹底するようにしている。奥付に住所が入っているものは個人情報に

付録

相当するので公開の有無を確認し、希望があればシールで隠す。最終的には全ての見本誌を収め、過去から現在に至るまですべての同人誌が閲覧できるような図書館施設を作ることが理想としている

新潟市は「新潟市マンガ・アニメ情報館」「新潟市マンガの家」の二つのマンガ関連施設を有する自治体マンガ原画の保存利活用を考えるうえで、これから大いに期待できる自治体が新潟市である。



新潟市マンガ・アニメ情報館



新潟市マンガの家

以上

報 告 書

作成日：2017/10/23

作成者：小野 慎之介

研究会名：マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発事業 原画保存研究会

開催日時：2017 年 10 月 19 日（木曜日） 13 時 00 分～16 時 00 分

場 所：新潟市役所 白山浦庁舎 5 号棟 3 階 新潟市文化政策課内会議室

出席者：新潟県新潟市文化スポーツ部 文化政策課主幹 長谷川 一栄

新潟市マンガ・アニメ情報館、新潟市マンガの家、ガタケット 武田 優子

東洋美術専門学校 保存修復研究室 小野 慎之介（アドバイザー）

明治大学 米沢嘉博記念図書館 ヤマダ トモコ

明治大学 米沢嘉博記念図書館・アスペクトコア 鈴木 紀成

明治大学 米沢嘉博記念図書館・アスペクトコア 伊藤 真由子（記録係）

議 題：マンガ原画の収集、整理、保存、修復、公開について

（以下敬称略）

■用務の概要について

＜環境管理について＞

新潟市：原画資料が存在する企画室、作業室、展示室にはデータログを入れ、一時間ごとの温湿度変化をモニタリングし、状況に応じて除湿機や加湿器を入れ対応している。しかし場所や時期によっては、どうしても温湿度を管理することが難しいことがある。

小野：環境全体の温湿度変化を管理しようとするだけでなく、微小保存空間としてアーカイバルボードなどの中性紙材で制作された「保存箱」に作品を収納し、環境変化に対する緩衝作用を持たせた保存方法を実施することが望ましい。私たちのモニタリングでは、全く環境管理がされていない西日の入るお寺内であっても、保存箱の中では温湿度変化の最大値と最小値の幅が、およそ 50%程度に軽減されていた。

また保存箱の中に収納することのできない展示作品については、額内に「調湿紙」を敷くこ

付録

とで展示期間中の急激な温湿度変化に対応することができる。

アーカイバルボードの入手先は修復資材を扱っている株式会社パレットや株式会社 TT トレーディングなどがある。

＜トレーシングペーパーが作品に与える影響について＞

新潟市：劣化しボロボロになったトレーシングペーパーが作品に貼付されていることがあるが、このままにしておくとも原画にとって良くないと聞いたことがある。どうすれば良いのか？

小野：トレーシングペーパーには、紙を半透明にするための加工方法で幾つかの種類が存在する。そのうち、硫酸紙と呼ばれるものは硫酸によりセルロースを部分的に膨潤・溶解しているため、紙の pH が酸性に偏る傾向がある。酸性紙と接していると、酸が原画用紙に移行する可能性もあるため、その場合は取り外して別置保管することが良いと考えられる。

pH の計測方法についてはフラット型電極を備えた pH メータが存在するが、簡易的に行うのであれば、pH ストリップやペンタイプもある。これらの製品も株式会社パレットにて購入が可能である。

＜接着剤の選択について＞

新潟市：ネームと呼ばれる写植紙が原画から外れてしまうケースが比較的頻繁に起こるが、これを再貼付する際に使用するペーパーセメントには問題はないのか。もしあるとすれば、別の選択肢はどのようなものか。

小野：ペーパーセメントの成分について詳細が分からないが、武蔵野美術大学が画材についてまとめた「MAU 造形ファイル」によれば、成分は天然ゴムと有機溶剤ということである。劣化試験等のデータはないものの、経年による天然ゴムの褐色化と脆弱化が予想される。そこで貼付に際しては原画用紙や写植紙を水分で膨潤させることがない溶剤型修復用接着剤の使用を推奨する。修復用接着剤は成分が明らかな上に劣化試験のデータなども豊富に存在し、経年後の変化についてある程度の予想を立てることができる。樹脂の溶解方法や濃度調整、施工方法などについては少し難しい面もあるので、それについてはマニュアル等を今後作成し、各施設と共有していきたい。

＜LED 照明について＞

新潟市：施設では順次 LED 照明に切り替えていっている。照度測定なども行い管理しているが、これで問題はないか。

小野：カラー原画の変退色について問題を感じている方が多くいるように感じている。また

「LED 照明＝良い照明」のような考えが独り歩きしているようにも思われる。ハロゲンライイトの熱量や消費電力、ランニングコストなどの問題を LED 照明は解決すると思われるが、演色性についてや青色励起光の存在など、十分に解決されていない問題もある。照度計は人の目に合わせて 555nm 辺りの光を計測するよう設計されているため、一般的な LED 照明に含まれ作品にとってもよりダメージが大きい短波長成分がどの程度あるのかを知ることが難しい。最近は民生品の照度計の中にも照明の分光分布を表示できるものがあるので、そのようなものを使い波長成分の分布についても注意を向ける必要がある。また簡易的にはフィルターなどでこれらを除くことも可能であるが、特定の波長成分を取り除くことで、色の再現性を示す演色性が損なわれることが考えられる。

これら照明の特徴や放射照度を知ったうえで、特に耐光性の低いアルコールマーカールなどで描かれたカラー原画を展示する際には、長時間にわたりこれらが光に晒されることがないように、展示スケジュールを見直すなどして積算照射時間を低減させる総合的な取り組みが必要となる。

<原画の複製について>

新潟市：オリジナルの原画を展示することによる負担低減のために、高精細画像から作成される複製品などの使用が考えられるが、そのとき原画のどの状態に対して色合わせをすることが望ましいのか。

小野：原画と印刷された雑誌とでは色味が異なることが予想されるが、どちらが一次資料かという問題は別にして、原画の複製であるならば原画の状態に近づけることが望ましいと考える。ただし「原画のどの時点」であるべきかについては議論の余地がある。保存修復の分野にも「模写・模刻」という形で保存と活用のバランスを取る行為が存在するが、ここにも「現状模写」と「復元模写」という二つの考えがある。現状模写は、文字通り現在の状態を克明に残そうとする行為で、ドキュメンテーションとしての側面が強い。一方で復元模写は、当時の姿を様々な資料や分析などの結果から推測しようとするもので学術的な意味合いが強く、展示などにおいては独自の効果を生み出すことも期待される。

また作家の存命中に退色した原画の色を塗り直そうとする動きが見られるが、保存修復の立場からみれば、作品の存在は世に出た時点で作家本人のものですらく、自立した一つの作品として、作品の現状維持を第一に考えた取扱いが徹底されるべきと考える。

■ 5.2.1 保存修復研究部会 【調査②】

報 告 書

作成日：2017/12/7

作成者：鈴木 紀成

研究会名：マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発事業 保存修復研究部会

開催日時： 2017 年 11 月 27 日（月曜日） 15 時 30 分～18 時 00 分 横手市役所
2017 年 11 月 28 日（火曜日） 10 時 00 分～12 時 00 分 横手市役所
15 時 30 分～16 時 30 分 増田まんが美術館
17 時 00 分～18 時 00 分 横手市役所

場 所： 横手市役所増田庁舎会議室、同増田まんが美術館事業室、増田まんが美術館

出席者： 横手市まちづくり推進部増田まんが美術館事業室 大石 卓
一般財団法人 横手市増田まんが美術財団 石田 実奈
横手市まちづくり推進部増田まんが美術館事業室 佐藤 優子
東洋美術専門学校 保存修復研究室 小野 慎之介（アドバイザー）
明治大学 米沢嘉博記念図書館 ヤマダ トモコ
明治大学 米沢嘉博記念図書館・アスペクトコア 鈴木 紀成

議 題：マンガ原画の収集、整理、保存、修復、公開について

会議内容：マンガ原画に対する横手市増田まんが美術館の対応

※以下、特に指定のない場合は、回答者は大石氏

■収集

◎マンガ原画を収集保存、あるいは寄託などで預かっているか
→積極的に行っている。

矢口高雄先生、小島剛夕先生、能條純一先生、東村アキコ先生ほかの原画を保存している。
寄贈・保管をあわせ、現在約 10 万点の原画を保存している。

◎どんな基準で収集しているか

→1・郷土の作家、2・郷土ゆかりの作家、3・緊急性などを考慮する。3 については公表しないが、重視している。

付録

当館は、もともと矢口高雄記念館として設立しようとしていたところ、矢口先生本人から「自分の個人館ではなく、次代を担う若者のためマンガ原画を展示する美術館にしてほしい。」とのことでまんが美術館となった。また原画の収集においても、矢口先生他、秋田県出身のマンガ家さんより「自分はまだ大丈夫だからほかの作家さんの原画を優先して保存したらどうか」という旨のご理解のもと、郷土の作家にとどまらず収集する方針になった。

◎これまで原画寄贈の申し出はあったか。寄贈を断ったことはあるか

→上記基準に合わなかった原画についてはお断りするか、保留の状態にせざるを得ない場合もある。将来的にはより受け入れることができるようにもっていきたい。

◎原画を収集するうえで困ったことはあるか

→増田まんが美術館に原画収集作家のマンガ書籍・雑誌の所蔵が十分に無いこと。そのため原画の初出調査が非常に難しい。現在は矢口先生所有の『少年マガジン』（週刊、月刊両方）を確認して原画の初出調査をしている。

アーカイブにおいて初出は非常に重要であるので外せない作業だが、ネックになっている。必要な資料が揃った施設との連携が期待される。

ヤマダ→「コレクターや熱心なファンの協力を得られると効果的な場合もある」

◎今後さらに原画を収集する予定はあるか

→増田まんが美術館は原画の保存を目的として単独の施設に生まれ変わるのでは、これからも当然収集保存していく予定。新しくリニューアルする施設では施設全体として約 70 万点を保存する場所を確保している。それでも足りないようであれば新規の場所を用意することも検討している。

作家からの申し出を受けることも、こちらから当館への収蔵を薦めることもある。

目標として「マンガ原画の駆け込み寺」としてすべて受け入れられるのが理想だが難しい。将来的に実現したいと考えている。

他のマンガ図書館施設の倉庫としての役割を担って連携していくことも考えている。本来はそれぞれの地域の作家をその地域でアーカイブできればいいと考えてもいるが、まずは増田まんが美術館が先鋒として活動している。

■マンガ原画の保存・修復について

※この項目は、東洋美術学校・小野慎之介先生による報告書もあわせて参照のこと

◎マンガ原画とは何を指すか、どこまでを原画として扱うか

→作家の直筆のものであれば原画と考えている。

付録

例えば、矢口先生はタイトルロゴを自筆しているので、それも原画として考えている。直筆のものであれば、エッセイなど文章原稿も保存の対象と考えている。特に、ラフやネームについて、これらも直筆であれば原画相当の保存の対象と考えている。しかし、データとして詳細な情報をまとめておく必要は感じない。展示など公開する際にあたっては非常に価値のあるものだと考えている。

◎原画の付属物について

→封筒はあまり重要なものとは考えていない。なぜなら、中身と封筒が入れ違っていることもしばしばだから。封筒から得られる情報は記録しておくが、封筒自体は所有者(先生、出版社)に確認したうえで処分している。

◎写植、テープ、そのほかの扱いをどうしているか

石田→セロテープは残っていても劣化する一方なので、なるべく取って処分している。テープを剥すことで原画がばらけてしまう場合は、バラバラの原画を一つの OPP 袋にいれて保存している。

はがれた写植は基本的に原画と同じ OPP 袋にまとめて保管している。写植を貼りなおすことはしていない。展示の際には、特別にでんぷんのりを使って貼りなおした。

写植は原画の一部ではあるが単行本があれば無くなっても問題ないと考えている。

◎違う人が書いたタイトルロゴやネーム、トレーシングペーパー、封筒などの扱いについて
石田→アシスタントが描いたとハッキリわかる原画類は返却している。保存している原画のうち直筆かそうでないかは、現在は先生やその近親者に直接聞いて確認している。

◎保存の年限についてどう考えているか

→50 年、100 年と続いていけばいいと思っている。寄贈してくれた矢口先生は「マンガ文化自体が無くなってしまう可能性も当然ある」から無くなっても仕方がないとは考えており、その意見も理解できる。しかし長く続いていくように考えている。

マンガの物理的な量が障害となつてすべては保存していけないかもしれない。そのために先に述べたように、各地域それぞれにマンガ原画の保存施設があればと思っている。今の増田まんが美術館では文化庁との連携もあり、ある程度コストをかけてマンガの保存ができていますが、ほかの施設でも同レベルの保存を行う必要があるとは考えていない。マンガの物量に対応するためには、たとえ条件が悪くても、まず保存されることが重要である。そのうえで先行者の、原画保存のアプローチを体系化して共有していけばいいと期待している。コストをかけた保存とかけない保存をあまり分けて考えるのではなく、すべて「保存」と考えたい。それぞれでできるだけのことをして助け合っていくのがいいと考える。

◎温湿度について

付録

→リニューアル後の増田まんが美術館では、原画収蔵庫については 24 時間温湿度管理を実施する。20℃、55%を一つの目安として維持しようとしている。全館の管理は難しい。湿度について、乾燥も多湿も保存に悪影響がある。特に乾燥収縮したものは修復の余地もなくなるので注意している。

■マンガ原画の公開について

◎公開時の原画に接着しているトレーシングペーパーをどうしているか
→外せるものは外して展示している。テープで留めてあるものも同様。外せないものは後ろに回して展示。

◎カラー原画と光源について

→リニューアル後の増田まんが美術館では、ルーブル美術館がそうしたように全館 LED 照明に変更する予定。

■新潟市よりの質問

◎自治体における原画の保存および利活用について

自治体としては原画を預かったときその後の活用はどうなるのかが問題になる。原画を預かってても著作権は作家（著作権者）にあるので勝手に使用することはできない。それらは条件設定次第だと思うが、現在実際に原画を預かって活用している他館ではどのような条件設定をして原画を預かっているのか。展示だけならばよいのか、展示以外にも無償の広報や PR にも使っているのか、どこまでメリットがあるのか、説明ができる事例があったら今後もう一段話を進める参考になるのだが

→増田まんが美術館のリニューアル後、保存作業自体を公開する「観せる収蔵庫」を建設中。具体的には海外のビクトリア&アルバート博物館などを参考にさせていただいた。あわせて有償で来館者が原画に触れられる形での運用も構想している。

保存と活用は両輪の関係と考えており、バランスよく実施していかなければ立ち行かない。原画の整理保存は目に見えない部分だがそれなしで、利活用は無いと今は思っている。つまり保存と公開を切り分けて考える必要がある。保存しつつ作家・出版社の商業活動を阻害しないように協力し、商業利用していないタイミングでは館内で自由に公開するなど。作家・出版社からあらかじめ了承を得たうえで、保存と活用を両立していきたい。

行政において公開する際は、とくにマンガ原画の価値に対する無理解を解消する必要がある。そもそも収蔵の時点で行政・市民に理解を得られなければならない。横手市では、マンガの保存を「シビック・プライド（市民の誇り）」にとらえ、教育・観光資源としても活用していくという共通認識が作れた。そのことに感謝しているし、これからもマンガ原画を活用していくことで市民に還元していきたい。

付録

■改修中の増田まんが美術館

増田まんが美術館の改修は、すでに着工しており、機能(収蔵品の移転、展示室の設置、図書室の移設など)を完成させ 2019 年 4 月にリニューアルオープン予定。

これまで増田まんが美術館は、公民館などを併設した「増田ふれあいプラザ」の一部であったが、リニューアル後は増田まんが美術館単独の施設になり、常設展示室やライブラリ機能などは無料で利用でき、特別企画展示と収蔵庫を有料で公開する予定。

常設展、企画展、「観せる収蔵庫」、ライブラリ、ミュージアムカフェなど多くの機能を持ち、原画を中心として、さまざまな活用をしていく施設になる。

施設改修の様子



■原画整理作業

原画整理作業は改修中の増田まんが美術館と増田市庁舎の増田まんが美術事業室にて行われていた。

増田まんが美術館では原画の初出調査を中心に、増田市庁舎では原画のスキャン作業が行われていた。作業工程については別紙「資料・04」参照のこと。

初出調査の様子



付録

◎原画のスキャンについて

原画のスキャンは専用のスキャナーとパソコンが4台ずつ用意されており、4人まで並行して作業ができる。画像データの画質は1200dpiで、一般的な印刷物が350dpiを目安にしていることを考えると、かなりの高画質でスキャンしている。データの保存は、専用のHDDを多く用意しており、すべてのデータが二重に記録されバックアップされている。

現在年間15,000点のスキャンが可能で、合計45,000点のスキャンが完了している。

スキャン作業の様子



◎原画の保存

上記作業を終えて、原画を話数ごとに封筒にいれ、複数の封筒を箱(アーカイバルボード)に入れて保存している。保存用の間紙(原画の間に挟む紙)、封筒、箱はすべて中性紙素材、とくにノンバッファ紙で作られたものを採用している。これは紙の酸性化を防ぐため。

上記のように、マンガ原画の保存・利活用双方に関しては、現在最も先端を行っているのが横手市増田まんが美術館である。

以上

2017 年 12 月 7 日

出張報告書

所属機関 東洋美術学校
所属部署 保存修復研究室
氏名 小野 慎之介

出張を下記の通り行いましたので報告します。

記

1. 研究種目 平成 29 年度メディア芸術連携促進事業
2. 申請区分名 連携共同事業
3. プロジェクト名 マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発
4. 用務地 秋田県横手市増田町増田字土肥館 173 番地
5. 用務先 横手市役所増田庁舎 2F 会議室および横手市増田まんが美術館
6. 出張日程 平成 29 年 11 月 27 日～11 月 28 日（2 日間）
7. 用務について 以下、2 日間の用務概要

◆1 日目：11 月 27 日 15:30-18:00(2.5h)

場所：横手市役所増田庁舎 2F 会議室

メンバー：横手市まちづくり推進部増田まんが美術館事業室 大石 卓
明治大学 米沢嘉博記念図書館 ヤマダ トモコ
明治大学 米沢嘉博記念図書館・アスペクトコア 鈴木 紀成
東洋美術学校 保存修復研究室 小野 慎之介（アドバイザー）

大石氏より増田まんが美術館設立の経緯や現在行っているアーカイブ作業について説明を受ける。配布資料に「間紙（かんし）」とふりがなが振られていたので、その意図を確かめつつアドバイス等を行った。

<包材の種類と保管方法について>

小野：資料保存の分野ではこれを「間紙（あいし）」と読むのが一般的だが、なぜ別の読みを与えているのか。また具体的にはどのようなものを使っているか。

まんが美術館：日常的にそう読んでおり特に意味はない。ものは中性紙を使っている。

付録

小野：酸性紙問題とも関係してくるが、1 話単位で管理されることの多い原画に間紙を挟み、劣化原因となる物質（酸性物質や粘着物質など）の遷移や相互作用を低減するよう努めることは予防保存の観点からも重要といえる。但し実際は「中性紙」とは曖昧な表現で、酸性紙を中和化したものや、僅かにアルカリを含むアルカリリザーブ紙、ノンバッファ紙なども全てこの範疇にくくられる。資料に直接触れる間紙にはアルカリリザーブを含まないノンバッファ紙を使うことが望ましく、その上でこの 1 話分をアルカリリザーブを含んだ中性紙で包み、外部由来の酸や紙自体が放出する酸性物質の吸着と中和化を図るよう設計されることが望ましいとされている。

小野：間紙を挟む理由として「酸化防止」とあるが、これはどのような意味か？

横手MM：科学的な裏付けのもとで行っているわけではないが、“酸性”紙問題については気にしていて、そのことを指している。

小野：なるほど。まず「酸化」と「酸性化」は別の現象である。酸化とは基本的には酸素との反応で漂白やアルカリ処理によっても助長されると言われている。確かにセルロースの酸化が進むと有機酸が作られ、紙が酸性化することがあるが（つまり中性紙であっても酸性化していく）、ただし酸化と酸性化は別の現象なので混同しない方がよい。もし本当に酸化を押さえようとするのであれば、少なくとも酸素を遮断する必要がある。アメリカの独立宣言書などはアルゴンガスを満たしたガラスケースに密封されている。

<1 日目を終えて>

非常に積極的に原画収集とアーカイブ作業を実施されていたが、「保存」という言葉の意味が直にアーカイブを指している点が気にかかった。独自で方法論を構築している様子であるが、幾つかの誤解については専門家に助言を求めるなどすることで回避できるものと思われる。

付録

◆2日目：11月28日 10:00-12:00(2h)

場所：横手市役所増田庁舎 2F 会議室

メンバー：横手市まちづくり推進部増田まんが美術事業室 大石 卓

一般財団法人 横手市増田まんが美術財団 石田 実奈

横手市まちづくり推進部増田まんが美術事業室 佐藤 優子

明治大学 米沢嘉博記念図書館 ヤマダトモコ

明治大学 米沢嘉博記念図書館・アスペクトコア 鈴木 紀成

東洋美術学校 保存修復研究室 小野 慎之介（アドバイザー）

昨日の調査で気になった「原画保存」＝「アーカイブ」の図式について確認をすると同時に、保存の意識について掘り下げるため、アドバイス等を行った。

＜マンガ原画の“何を”保存するのか＞

小野：「保存」とは何を指して使っているのか？

横手MM：原画の整理とスキャニングによるアーカイブ作業を軸にし、中性資材や保存箱を利用しつつ、温湿度などの環境管理にも気を使っている。

小野：現状ではここに注力しなければならないことは理解できる。ただ一方で、ものの保存（現物保存）を考えるときには素材や劣化の状況に応じた資料ごとの対策が必要になってくる。現在は著作権や版権が残る作品が多いと思われるが、現行法では原作者の死後 50 年までしか保護されず、譲渡や相続によって保護期間が延長されるわけではないので、いずれは所有者と原画だけが残されることになる。そのような状況においても原画を残し続けていく意義を見出すのであれば、大量にある原画に対して優先順位と緊急性を兼ね備えた「原画トリアージ」を構築し、臨む必要があろう。例えば我々は原画用紙の pH を計測したり、IR スペクトルや XRF 分析の結果から原画用紙の組成と劣化傾向についての関係性を調査している。日本では 1983 年に国立国会図書館が大々的に調査を行い酸性紙問題が注目されたが、それ以前に制作された作品については驚くほど酸性化しているものが存在する。pH4 を下回る原画も少なくなく、これはオレンジジュースよりも酸性に傾いていることになる。酸性紙は状況によっては 100 年以内で深刻な劣化を招き、原型をとどめることが難しいものもある。戦後 70 年以上が経過し、日本の文化として世界的にも認知されている無二の原画を現物保存していくためには、このような長期的な視点をもって保存の意味を再度確認していきたい。

小野：同じような質問になるが、原画資料の収蔵年限をどのように捉えているのか？

横手MM：可能な限り原画を残していきたいが、物理的な限界もあり、寄贈して頂いている先生方にも永年保存が難しいことは理解して頂いている。

小野：公費を使い美術館を建設していくわけだから、永年保存を目標に対策を講じて欲しい。

付録

活用と保存のバランスは確かに難しいが、これだけの規模の原画を保存する日本随一の美術館になるので、保存についてもその在り方を示す方法論の構築に積極的に取り組んでほしい。とりわけ保存はお金のかかる部分なので、コレクション全体を概観するような仕組みを導入する必要があるかもしれない。国立公文書館などでも採用されているが、無作為抽出により資料の劣化状態を調査し、別置保管の必要性がある資料の割合や、脱酸処理や修復処置の必要な作品がどの程度存在しているかを把握することで、必要に応じた保存対策と保存修復のための費用を確保していくことが望まれる。これにマンガ原画独自の価値基準を掛け合わせることで、「原画トリアージ」の基本的な考え方ができるのだと思う。

<接着剤の選択と応急処置について>

小野：写植の再貼付などにどのような接着剤を使用しているのか？

横手MM：写植の再貼付は事例として多くないが、以前にでんぷん糊を使用した経験がある。セロハンテープなどは劣化が著しいため可能な限り取り外し、それによってバラバラになった原画については OPP 袋に入れ、散逸しないようにして保管をしている。

小野：ペーパーセメントを安易に使っているケースが見られるが、劣化が早い。正麩糊（小麦デンプン糊）などの使用が候補として考えられる。しかし糊にするための工程や、水分を含む糊の使用は現場での応急処置としては少しハードルが高いような気がしている。新潟市へのヒアリングでも感じたが、接着剤の選択と簡易再貼付法についてのマニュアルは、できるだけ早いうちに作成したいと思う。原画の調査をおこなっているスタッフがセロハンテープの劣化速度を危惧し、自主的に取り外している点は非常に興味深い。クリップやホッチキスについても、金属の腐食がセルロース繊維を劣化させるので、これについても行った方がよいと考えられる。OPP 袋の使用が目立つが、本当にこの素材が適当なのかは今後検証していく必要があると感じている。「分からなければ余計なことはしない」というスタンスは重要である。問題を他館とも共有し、専門家に相談するなどして、解決策を継続的に探していくことがこれからも必要である。

<2 日目午前の調査を終えて>

作業スタッフが自身の判断でセロハンテープを除去し、また余計な処置をしないように自制している態度には感銘を受けた。実際に作品に接し整理作業を行う中で自然発生的に芽生えた保存の意識なのだろうと想像する。保存修復や保存科学などの他分野との交流が少ないようなので、これらの分野とのコミュニケーションの中からマンガ原画の実情（量の問題と価値の不確かさ）に合った方法論を構築していく必要がある。

付録

◆2 日目：15:30-16:30(1h)

場所：横手市増田まんが美術館

メンバー：横手市まちづくり推進部増田まんが美術館事業室 大石卓

明治大学 米沢嘉博記念図書館 ヤマダトモコ

明治大学 米沢嘉博記念図書館・アスペクトコア 鈴木紀成

東洋美術学校 保存修復研究室 小野慎之介（アドバイザー）

工事中の美術館内部へ場所を移しオープンまでのタイムスケジュールや将来的な収蔵庫拡張の可能性などについて説明を受ける。目玉となる「見せる収蔵庫」について確認をすると同時に、アドバイス等を行った。

<収蔵エリアと展示エリアの温湿度管理>

小野：「見せる収蔵庫」では実際に原画に触れられるようにすることを検討している様だが、収蔵エリアと展示エリアでの温湿度変化についてはどのように考えているか？

横手MM：収蔵庫は気温 20 度、相対湿度 55%を目標値として設定している。収蔵空間にお客さんを招き入れるようなイメージでいる。

小野：日本の図書館（国立国会、慶應、早稲田）とニューヨークの図書館（エール大学）との劣化調査の比較によれば、冬場の暖房で乾燥状態になるニューヨークの図書館の方が、各出版年に対する劣化資料の割合が高くなることが分かった。これは乾燥により紙の柔軟性が失われたことによる耐折強度の低下が原因と考えられ、またセルロースは吸放湿を繰り返すことでも柔軟性を失い角質化をする。収蔵庫の中は湿度管理していても作業空間は難しい場合が多く、撮影や調査の最中に資料が急激に乾燥し反りが出てきたりすることもある。原画が収蔵空間を出る際には、出先となる作業空間や展示空間においても同程度の環境管理が望まれる。また繊維の角質化は酸性物質の存在によっても促進されるといわれているので、特に pH の低い資料については別置保管を検討するか、あるいは脱酸処理についても将来的には検討するなどして、資料同士が互いに干渉し合うことがないように注意が必要である。一か所に集めて保管することで、状況が悪化してしまうことは起こり得る事象だと認識すべきである。

<美術館での調査を終えて>

図書館エリアや企画展示スペースも広く、マンガ原画を中心とした専門の美術館として大きな期待がもてる内容である。バックヤードツアーとしてではなく、収蔵スペースやアーカイブ作業を常時見ることが出来る美術館は国内では聞いたことがなく、非常に意欲的な試みといえる。原画と来館者の距離も近くなることが期待されるが、保存と活用の両立についてもこの分野のトップランナーとして継続的に取り組んでいって欲しい。

付録

◆2日目：17:00-18:00(1h)

場所：横手市役所増田庁舎 2F 会議室

メンバー：横手市まちづくり推進部増田まんが美術館事業室 大石卓

一般財団法人 横手市増田まんが美術財団 石田実奈

明治大学 米沢嘉博記念図書館 ヤマダトモコ

明治大学 米沢嘉博記念図書館・アスペクトコア 鈴木紀成

東洋美術学校 保存修復研究室 小野慎之介（アドバイザー）

横手市役所へ戻り、これまでの調査を踏まえて、マンガ原画保存のこれからについてアドバイス等を行った。

横手MM：できるだけ原画を残していきたいとスタッフも皆思っているが、正直どうして良いか分からない部分も多い。現実的にはできる範囲のことをする他なく、レベルの差はあったとしても、どれも保存対策のうちと捉えている。

小野：文化財保存の分野も多く失敗の上に成り立っている。ただし、それらの失敗を議論し見直すことで保存の意識や方法論を熟成させていく必要がある。まずは他分野でも良い取り組みをしていたら積極的に取り入れるなどしたらよいのではないかな。正解はないので、美術館を作り運営をしながら、考えたり見直したりすることは致し方がない。

また今回の調査で感じたのは、程度の差こそあれ作家自身が保存に関与している点や出版社との間にも著作権等の問題があり、制作者が既に存在していないケースの多い文化財保存と大きく異なる点である。しかしいずれはモノだけが残され、その意味についてモノから掘り下げていくしかない時代が訪れる。そのときに日本のマンガ文化として何を残すことができるのかを念頭に、目下の収集やアーカイブ整理作業、活用のための準備を行っていく必要があると思うし、その中心的役割を担っていくのがこの増田まんが美術館になるだろう。

マンガにおける原画の立ち位置は少し微妙であるようだが、文化財保存と重なる部分も多いように感じている。原画は基本的には現物保存が軸だろうし、複製の利用も活用との絡みで一部その必要性はあるが、だからといってデータさえあれば現物がいらなくなるということにはならない。故に扱いが面倒なのだとも思うが、そう遠くない将来に、ある一時代にだけ存在した「マンガを作る」という行為がどのようなものであったかを示す貴重な資料になることは想像に難くない。私たちにできることがあれば、今後も協力していきたい。

以上

■ 5.2.4 全体会議 【横手市増田まんが美術館】

議 事 録

作成日：2017/11/28

作成者：櫻井 壽人

研究会名：マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発事業 全体会議（秋田）

開催日時： 2017 年 11 月 28 日（火曜日） 12 時 00 分～14 時 00 分

場 所： 京都国際マンガミュージアム研究室 1 / 横手市増田まんが美術館
（スカイプ会議）

出 席 者： ■京都国際マンガミュージアム側

京都精華大学 国際マンガ研究センター 伊藤 遊

京都精華大学 国際マンガ研究センター 倉持 佳代子

日本アスペクトコア株式会社 櫻井 壽人

日本アスペクトコア株式会社 田村 真樹子

■横手市増田まんが美術館側

横手市増田まんが美術館 大石 卓

明治大学 米沢嘉博記念図書館 ヤマダ トモコ

明治大学 米沢嘉博記念図書館・アスペクトコア 鈴木 紀成

東洋美術学校 保存修復研修室 小野 慎之介（オブザーバー）

北九州市マンガミュージアム 表 智之

議 題：平成 29 年度メディア芸術連携共同事業「マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発」の課題検討

■課題検討

① 原画活用（展示について）

倉持：現在北九州市 MM にて原画展をされていると思うが、今回の事業にも活用方法で展示活用を挙げている。課題などがあれば教えてほしい。

付録

表：展示はすごくよいものができたが、集客に付いては苦戦。展示をするのが目的ではなく、やはりたくさんの人に見てもらいたい。どのように告知するかが課題。（遠方のファンをどのように呼び込むか・・・）

倉持：京都 MM にも巡回で来る予定なので、各地を回った後の告知に工夫が必要だと感じている。

表：京都 MM には、通常でも集客があるので、十分期待できるはず。それでも、匂を逃さないようにしないといけない。

伊藤：吉田戦車氏の展示が巡回していたが、東京での開催の際に、書店の奥のほうで展示されていたので、どの程度お客に見てもらえたか分からない。展示方法には展示場所も大事だと感じた。同じ場所で別の作家の展示もやっていたが、やはり目だっていなかった。

表：都市部は情報が多すぎるので、広報には目立つ工夫が必要かもしれない。

伊藤：現実的な問題として、展示をするための資金をどうするかも、大きな問題となっている。

表：しかし、あまり展示企画がない作家については、ファンが渴望している傾向がある。需要はある。

② 各種会議日程などの調整

ヤマダ：12 月以降の会議などの日程を決定したい。関係者が集まっているので、12 月の京都原画調査日と、1 月の原画実習会について日程を決定したい。

伊藤：京都は 12 月 19 日、原画実習会は 1 月 27 日に決定する。

小野：実習会ではプレゼン・ワークショップ・ディスカッションなどを予定している。できれば学生なども呼んで行いたい。

伊藤：学生などの参加はぜひ前向きに進めたい。半クローズの対応にはするが、関係者からの招待は可能とする。文化庁様や DNP 様からも見学が来る可能性がありますので、人数として加える。30 人規模になると想定しておきたいので、東洋美術学校にて部屋の予約をお願いしたい。また、最終報告会は 2 月 25 日なので、またあらためて参加確認を行う。

ヤマダ：京都の原画調査では、今までの調査同様、収蔵庫を見学したり、整理の様子を見たりする予定だが、実際の作業している人は必ず同席してほしい。調査項目については事前に準備しているリストに沿って聞いている。今までの調査の中でリストを一部更新したのであらためて送る。東洋美術学校から 2 名、ヤマダ、米津が行く予定。原画そのものの助言が聞ける貴重な場になるので、質問事項を事前にまとめておいてほしい。また状態が悪い原画、保管方法に苦慮している原画があれば準備しておいてほしい。

伊藤：原画保管で実際どのような課題があったか

ヤマダ：アクリル絵の具の上にトレーシングペーパーがくっついており、はがれなくなっている。修復の予算を使い、実習会で修復前と修復後が比較できるようなことができればよい。

付録

③ 整理作業について

大石：現在作業している原画は非常に状態がよく、破損などはあまり見られない。整理作業のほうで課題がある。現在作業している原画についての初出調査に苦慮している。アーカイブ作業は進んでいるが、たとえば、矢口先生の作品については手持ちの資料で調べは終わっており、残るは矢口先生の驚異的な記憶力が頼り。受け入れ台帳は作成しているのでリストはあるので、活用できないか。

ヤマダ：初出調査を連携先でできないか。リストを共有し、抜けている部分を持っている所蔵館からデータをおくってもらうとか。ヒアリングしたところ、カラーとかカットとかの調査が残っている模様。

伊藤：京都 MM であれば週刊少年マガジン（以下マガジン）がほぼそろっている。（月刊少年マガジンは抜けがある可能性あり）調査をその機関だけでなく連携機関で協力して調査するのもよいと思う。

ヤマダ：表紙絵とカットがメインなので先に京都 MM でリストに無いマガジンを撮影し共有すれば、効率的ではないか。

伊藤：京都の作業者に依頼し対応するようにしますので、リストを送ってください。

④ 会議の方向性について

伊藤：12月までの各会議では、モデルを作るための意見交換を重視したい。原画整理の実績のあるみなさんからの意見を、まずは集めたい。①保存、②修復、③利活用のようなわけ方で、パターンに分けて、原画所有者が選択できるような整理を進めたい。

ヤマダ：やりたいことよりも、保存場所、コストなどの要因も大きくかかわってくると思う。

伊藤：松竹梅といった形になるか。収集については、どうやって入ってくるかを考えるべきだと思う。遺族からの寄贈、出版社が対応に困り、所有者不明など。また、断るときはどのようなときか。このようなデータがあれば本になる、これがあれば展示になるなどのパターンが必要。

ヤマダ：活用方法としては舞台化するときにはグッズに活用されることもある。

伊藤：専門家ではなく、一般の図書館や美術館が受け入れやすいのはどういうものかも検討したい。

⑤ 12月の報告会と調査について

伊藤：12月8日に中間報告会后に、原画プロジェクトの会議を予定している。文化庁、DNPも見学に来るので、参加をお願いしたい。

ヤマダ：12月9日10日に北九州市漫画ミュージアムでの調査を予定している。竹宮恵子先生インタビュー時に原画に関する質問をしてもよいかな。

伊藤：その時間としては確保できないかもしれないが、合間で確認してもらえればよいと思う。また、1月に竹宮恵子先生の自宅での原画保管状況を調査しようと予定している。

付録

⑥ シンポジウム

伊藤：2月10日京都国際マンガミュージアムでシンポジウムを開催する。内容については12月10日の会議にて吉村先生に確認したいと思っている。確認点、ゲストで呼びたい人などをまとめておいてほしい。

以上



■ 5.2.1 保存修復研究部会 【調査③】

報 告 書

作成日：2017/1/10

作成者：新美 琢真

研究会名：マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発事業 保存修復研究部会

開催日時： 2017 年 12 月 9 日（土曜日） 14 時 00 分～18 時 00 分

場 所： 北九州市漫画ミュージアム内 会議室

出席者：北九州市 市民文化スポーツ局 漫画ミュージアム 研究員 表 智之
北九州市 市民文化スポーツ局 漫画ミュージアム 学芸員 柴田 沙良
北九州市 市民文化スポーツ局 漫画ミュージアム 学芸員 石井 茜
横手市 まちづくり推進部 増田まんが美術館事業室 副主幹 大石 卓
東洋美術専門学校 保存修復研究室 小野 慎之介（アドバイザー）
明治大学 米沢嘉博記念図書館 ヤマダ トモコ
明治大学 米沢嘉博記念図書館・アスペクトコア 新美 琢真（記録係）

課 題：マンガ原画の収集、整理、保存、修復、公開について

会議内容：マンガ原画に対する北九州市漫画ミュージアム(以下：北九州 MM)の対応
(以下敬称略)

■収集

◎北九州 MM ではマンガ原画と類推する資料はどのくらい収集保存、あるいは寄託などでお預かりしているか

表→総枚数 2 万点。寄託で関谷ひさし先生の原画が 1 万 6 千点、陸奥 A 子先生の原画が 4 千点。それ以外に松本零士先生などから 1、2 点の原画が寄贈されているが、基本は寄託でお預かりしている事が多い。

◎マンガ原画の収集基準

表→基本は北九州市ゆかりの作家。開館に向けての収集のプロセスはあったが、強いてコレクションを作るといふより、作家さんやご遺族の管理が難しい場合に保存のお手伝いをし

付録

ているといったスタンス。関谷ひさし先生については開館前に預かっており、陸奥 A 子先生は開館後に声をかけてもらって寄託を受けている。

大石→「寄託」という言葉は、本来持ち主がお金を払って管理してもらう意味合いである。ただお預かりするだけなら収蔵が正しいとされる。

表→北九州 MM が「寄託」と呼んでいる収蔵資料は、展示に関しては謝礼などは発生せず、ある程度の利用権が付託されているため、預かり料と相殺されていると考えられるのかもしれない。今後、受け入れる際の契約についても考えていかなければいけない。

大石→横手の場合は、矢口高雄先生は寄贈なので市の財産になっている形。他の作家さんは 20 年の賃貸借契約の扱いで月 4000 円くらい、20 年一括払いで 100 万円をお支払している。途中でやめる場合は残余分を返却していただく。このような契約にしているのは「見せる収蔵庫」など大きく活用させていただくため。

表→北九州 MM では展示に関しては報告のみで使わせてもらっている。利用する場合はその都度先生に確認をとり、外部からの利用の申請があった場合は、スキャンしたものを送っている。関谷先生については契約書があるが、陸奥先生は口約束。展示と展示に伴う出版物には利用可能だが、それ以外の営利目的は含まれない。グッズなどについては謝礼という形で支払っている。

◎寄贈をお断りしたことがある場合、お断わりした理由など

表→今のところないが、来た話を他のところに紹介した案件はある。キャパは 3 万 2 千程度だと考えているので、ゆかり作家に絞らざるをえない。

ヤマダ→北九州 MM は開館当初からゆかり作家に絞っているが、それはなぜか？

表→当初は松本零士記念館の予定だったが、松本先生から個人より地元の作家を取り上げた施設にすべきだと言われ、また、作家単体の記念館は永く人を呼べる施設になりにくいという判断もあった。つまり絞ったわけではなく、むしろ広げた結果、ゆかり作家に重点をおく形になった。

◎原画の寄贈・収集の上で困ったこと

表→整頓作業のマンパワーが不足している。作家や遺族の整頓管理が難しいために受け入れたものが多いので、企画展などの通常の業務と両立させるには、人員的にも時間的にも足りていない。収蔵の技術的な面には特に困ったことは無いが、より良い知見をこういった場で

付録

共有できればと考えている。関谷先生の原画整理については外部委託しており、ある程度整理されたものを受け入れた。

ヤマダ→外部の業者による整理によって扱いが難しくなったことはあるか。

柴田→業者も関谷先生の作品に詳しい方のアドバイスを受けながら整理をしていたが、こちら側が判断して絵柄やエピソードが違ふと思われる作品がある。保管していた元の袋なども無いため判断がつかない。

表→カビているものなど、原画の状態がまちまちだったため、業者は中身に即した整理より、状態に即した整理をしていた。作品単位での整理を北九州 MM 側で行っている。

◎整理のイメージについて

表→作品単位に原稿がまとまった形で間紙を挟み、作品単位またはエピソード単位で中性紙の封筒にまとめて入れ、封筒をまとめて、ストレージボックスに収め棚に入れる。棚、箱、封筒に番地をつけることを理想と考えているが、現状、棚の番号などはまだつけることができていない。

ゲラ刷り校正刷りなどの中間生成物、剥がれおちて元の位置が分からないノンブルや写植、トレーシングペーパーや原稿の入っていた封筒など、資料として残すべきなのか悩ましい。また、どういった工程に使われていたのか技術的に不明な「もの」や「こと」が多くあり、古い時代の出版工程に詳しい方の知見を伺いたい。

◎用語ゆれについて

表→用語の特定は初出が判明している段階によって変わってくる。1 ページ丸ごとを一つの作品で構成している物をイラスト、それ以外の埋め草的なものはカットなど最終的な完成系から線引きは可能だが、初出のわからない原画の状態では線引きするのは難しい。初出を確認できればわかるのだが、初出を確認できない場合は、原稿サイズで判断するなどしかない。北九州 MM には用語集などは無く、他の館に合わせることは可能。個別の事例の話をしていると結論が出ないので、模式図などを作ってまとめた方がいいかもしれない。

■マンガ原画の保存・修復について

※この項目は、東洋美術学校・小野慎之介先生による報告書もあわせて参照のこと

◎マンガ原画とは何を指すと思われるか、どこまでを原画として扱うか

表→これには二つの側面があると思う、形としてどこまで一部分的なものか、肉筆だけが原画かどうか。肉筆ではないが作家が完成品として認めた、デジタルで描かれプリントアウト

付録

したものを「デジタル出力原画」と、展示の観点から呼ぶこともある。収蔵する機会は無いが、外向けの言葉として使われることはある。

原画とは手書きで描いた完成品、絵の最終形態。下書きやネームなどは当たらないのかもしれない。

新美→デジタル原画の場合、出力されたものを貰うのか、データを貰いこちらで出力するのか。

表→現状デジタル出力原画を収蔵していないので仮定の話だが、両方のパターンがあるだろう。データは貰う一方で、作家が存命のうちに決定版となる紙刷りはいただいて置きたい。頂いたデータのフォーマットが経年で開けなくなる可能性もあり、紙に出力して置く必要がある。

大石→作成環境が先生によって違うので、将来的に環境を残しておくことが出来るのか問題になる可能性がある。

小野→よく色の話になるが、デジタル原画と呼ばれるものでも、雑誌に掲載されたものが最終形になるのか？

表→単行本などでは色校は出されるが、雑誌は色校が出ないので厳しい。最終的に紙に出力したものを使って突き合わせる形をとるしかない。

ヤマダ→最終形態がデータの先生の作品をどう扱うのか。

表→紙で保存せねばならず、デジタル保存だからと言って収蔵スペースが減るわけではない。原画を収蔵した後の利活用のためにデジタルデータが必要という考え方。

大石→データも複数ミラーリング保存していかなければならず、それを増やすだけでもコストがかかる。

◎写植、テープ、そのほかの扱いをどうしているか

表→剥がれた写植を貼り直してくれと先生に言われるため、ペーパーセメントを用いるが、原画にとって将来的に良いのかどうか。

小野→まだ調べていないのだが、成分を見る限り良いとは言い難い。

付録

石井→当館としては積極的には使わないが、作家側からは必ず張って置いてほしい、剥がれた状態にしないで欲しいとの要望がある場合も。ペーパーセメント以外に何か良いものが無いかの知恵が欲しい。

表→私たちの側としては、これ以上原画を汚損しないことが望ましいが、ペーパーセメントの「簡単に剥がれる」という部分が便利で使用している面もある。

大石→矢口先生の原画でも、70年代の写植は剥がれないが、80年代のものはポロポロ落ちてくる。

小野→トリアージのようなものが必要なかもしれない、素材を調べてそれと劣化との間で緊急性の尺度を設ける。マンガを研究されている方は、作品の重要性など別の尺度もあるので、それと合わせてコレクションを選別し管理していくことが、膨大な資料を管理していくうえで必要なのではないか。

大石→官民が一体となって原画保存に取り組み、それぞれが価値観を見出して行けば全ての原画の保存をするのは可能ではないかと思う。私は押し入れに段ボールで保管するものから、美術館・博物館レベルまでをひっくり回して保存と呼んでいる。どの段階でも序列をつけないメンタリティを育てなくてはいけないと考えている。

ヤマダ→価値決めには、一つだけの例ではなく、たくさんの例から決めるべき。もともとのメディアの特性として大勢の目に触れるものなので。大勢の人の目に触れて価値基準、価値判断をされるべきなのではないか、その価値判断をされるまでをお手伝いしたい。

◎保存方法

表→原画をまとめて入れる封筒、ボックスなどはすべて中性紙を使用。現状は開館時に買い込んでいるため、予算的に厳しいということはない。収蔵庫は温度 22℃湿度 55%で管理している。そこから外れると調整されるようになっている。たまに空調機のトラブルなどで湿度が下がるなどのトラブルがあった。収蔵庫と展示室各所に温湿度計を置いて記録紙もおいでチェックしている。個所としては 6 か所、企画展示室に 3 か所、常設展示室に 2 か所、収蔵庫に 1 か所+収蔵庫には温湿度管理のモニターが付いる。

展示室に関しては加湿器や除湿機はないが、外気の影響を受けやすいため、大雨の後などは除湿機を入れたりして管理をしている。これも 22℃と 55%を基本として、温度は±5 度、湿度は±10%範疇に収まるようにしている。

◎保存の際に参考にした書籍や施設

付録

柴田→事務方の人が文書類を扱うので転用が可能という事で、私が入る前に文学館に事前に取材等をしていた。現在はそういった繋がりには基本的に無い。

◎修復について

表→修復の定義によるが、基本はない。ネームの脱落を直すくらいしか対処したことは無い。自分たちの作業の中で発生した破損はないが、セロテープで止められていた原画が自然損耗、経年劣化の範疇でバラバラになることは多々起きる。これらはセロテープで貼りなおすことはせず、アーカイバルクリアフォルダーに入れてバラバラにならないようにして、展示には基本使わない。直せるなら直したい。シミやカビを取ることも可能なら知りたい。また、原画と原画がホワイトだったり、ペーパーセメントなどがはみ出してくっ付いている事例もある。

■利活用について（展示方法等）

◎展示の時に原画についているトレーシングペーパーなどはどうしているか

表→基本は後ろにめくっている。そうしてしまうことでセリフが無くなってしまう場合はトレーシングペーパーをまくった後、原画を包んだ PP フィルムにセリフを印刷して貼り付けている。トレーシングペーパーが固くてまくれない場合は作家さんに許可を得て切り離している。

◎額装の際の額選び

表→絵が主役なので、絵の中身を選ばない様なベーシックな額を買っている。どの原画とも邪魔にならないぶつからない様な目立たないもの、白や黒、金属地などのデコラティブで無い額を扱っている。展示ごとにどれを選ぶかはフィーリングで選んでいる。会場の造作や展示の順番などによって決めることが多い。

◎UV 問題。紫外線に対する対策を何かしているか

表→照明はすべて UV カットのものを使用、窓などには UV カットフィルムを張り付けている。照度も調整し、カラーインクを使用した原画などだと 50 lx以内に収める。比較的強そうなものは 100～150 lxを使用している。どの程度の明るさにするかは作家さんや開催元なりの話し合いで決めている。

◎著作権処理について

表→現状お預かりしている原画に関しては、著作権のことをシリアスに考える必要のある事例は無い。関谷先生は出版社との契約が切れているのでご遺族の一存で決められる。陸奥先生についても、基本的には先生の一存で、出版社に必ずしも許諾を取らなくても企画を進められるようになっている。

付録



収蔵庫の様子



収蔵庫内温湿度管理制御盤



状態の悪い原画の例



北九州市漫画ミュージアム収蔵庫の様子

北九州市漫画ミュージアムは、公開主体の施設でありつつ、原画収蔵もある程度視野に入れ、原画を扱う必要のある場合は、現実的かつ誠実に取り組んでいる館である。

以上

報 告 書

作成日：2018/1/10

作成者：新美 琢真

研究会名：マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発事業 保存修復研究部会

開催日時： 2017 年 12 月 10 日（日曜日） 13 時 00 分～16 時 00 分

場 所： 北九州市漫画ミュージアム内 企画展示室

出席者：漫画家・京都精華大学 学長 竹宮 恵子

東洋美術専門学校 保存修復研究室 小野 慎之介（アドバイザー）

明治大学 米沢嘉博記念図書館 ヤマダ トモコ

明治大学 米沢嘉博記念図書館・アスペクトコア 新美 琢真（記録係）

課 題：マンガ原画の収集、整理、保存、修復、公開について

聞き取り内容：マンガ原画の保存や修復に関する竹宮恵子先生の取り組み

この聞き取りは北九州市マンガミュージアムで開催された企画展「竹宮恵子 カレイドスコープ・50th Anniversary」会場にて、実際の展示作品を解説する形で行われました。

基本的に竹宮様よりの返答のみで構成した。

※移動しながらの取材で質問は誰からのものだったか煩雑であったため、小野様の専門的な質問項 1 か所以外は省いた。

（以下敬称略）

竹宮→展示されている原画’は実寸です。実物大が原画’（ダッシュ/*）という考え方なので。複製を小さく作成することもあります、それは原画’ではない。

（*）原画’（ダッシュ）とは、コンピュータにマンガ原稿を取り込み、綿密に色調整を重ねた上で印刷した、精巧な複製原画のことです。描線の濃淡や色彩の階調など微妙な細部まで再現し、原画と並べても見分けがつかない程の精度を持っています。 原画ダッシュの研究は、マンガ「風と木の詩」「地球へ…」などの作者で、京都精華大学マンガ学部教授の竹宮恵子を中心とな

付録

り、退色しやすいデリケートなマンガ原稿の保存と公開を両立させるために開発され、現在では、京都精華大学国際マンガ研究センターと共同で研究を進めております。(京都 MM ホームページより)

今回の出展品では、モノクロが原画、カラーが原画’。紙の退色が2色とモノクロで違うのは紙質が違うから。カラーの方はBBケント、原稿用紙の方は模造紙を使っていた。

原画’を印刷するときは元の紙質に近いものを選んだりせず、ごく普通のマット紙に印刷している。特別の紙を使うと表面の質感がかえってじゃまになるので。BBケントだけでなく、ボードなども使っているので、出来るだけ再現できるようにツルつとした紙質のものを使用している。普通の絵を描く場合は油、水彩など特定の画材を使うことが多いが、私の場合は全て混ぜて使用している。ポスターカラーの色もある色だけでは満足できないので、インクを混ぜたり、パステルを混ぜたりしている。普通の絵の具だけでは重量感が出ない。モノクロの場合は使えるものが限られているので、濃い鉛筆やコンテのようなものくらいしか使っていない。

小野→主線は墨汁か。シミを抜くことを考える際に、黒の部分が墨汁かどうかの情報があるとよいのだが。

主線は墨汁。開明墨汁を使っていた、初期のころは特に。

小野→セロテープやペーパーセメントのシミなどに溶剤を使った場合、ベタなどが溶剤に溶けてしまうような画材だと難しい。シミは抜きたいと思われるか。

竹宮→見るに堪えないので抜きたい。原画’でもシミを抜いて作っているものもある。(図)この絵のシミは、模造紙が薄いので、カッターで切ったときに裏に抜けてしまわないようペーパーセメントで裏打ちしたために出来たもの。



(図) シミ



原画管理上ほかに困ることとしては、トーンが縮んでしまうこと。(図) ヒアリングの様子
メーカーによってそういう事が起こる。端のラインのところからズレてきていて、それを貼り直している。縮んだトーンのメーカーはマクソン。
写植が剥がれるのも大変ではある。最初ペーパーセメントで貼っていたが、ある時期から、元から写植の裏に機械的にのりが縞状に付いたものを使うようになった。それが剥がれやすい。編集者にとっては便利なものだけど、原稿を揃えてトンっとやっただけでバラバラ剥

付録

がれ落ちる。

ペーパーセメントが茶色くなってしまうのは、比較的早い時期からわかっていた。一回連載をして単行本になるまでに結構間があったが、その時に原稿を出すと、そういう事態になっているという事で気が付いた。

今貼り直すという状況になった場合は、パソコンでネームを作り直してスティックのりなどで貼り直すと思う。

原画にトレーシングペーパーが張り付いていて、剥がすと原画がやぶれてしまいそうな場合は、セロテープを剥がしてしまうか、カッターで粘着部分だけ残して切ってしまうかなど、ケースバイケース。セロテープなら完全に剥がしてしまい、メンディングテープなどだったら切って対応する。うちではテープに気づいた時点ですべて剥がしている。アピールカッターという薄いものを剥がす工具を使用して剥がして、粘着質が残った場合は、ラバーゴムを使用して消しごむをかけるように剥がしている。

誰かから聞いたということはなく、デッサン用の練りゴムなども使用したりしつつ、アシスタントたちと試行錯誤して今の方法に行き着いた。

カラーの主線はグレーの耐水性インクを薄めて使用している。基本的に色を載せて消えてしまう鉛筆と同等くらいの薄さを想定している。人によっては茶色だったり、ミリペンを使って書く人もいる。このカラーはポスターカラーを使用している場合もある。水彩絵の具だけでなく素材感を出すために様々な材料を選んでいる。

これは（特定の展示品を指し）原画’でもなくて、原画が紛失してしまったためフィルムから複製原画を起こしている。私が塗ったら こうかなという再現をしている。当時はフィルムから製版し印刷にしていたのでフィルムが残っている。

原画の修復については、マンガを描くにあたっては全く良い紙を使うという発想ではなかったなので、薬品などでどうなるのかが心配。

酸性紙など、紙質について意識したのは、国宝の保存などを見てから。そう言う意味で原画’を作りたいと考えるようになった。現状の段階を情報に留めるということ、私の技術が上がったらまたその時点の物を留める。劣化が大きく進んでも以前のデータを使えばより最初に近い形のものを再現できる。最初に描いた原画を現物保存しなくても、原画’で残せばいいとだけ考えているわけではないが、どうしても残せないならそれでもいいという気持ちはある。が、データがいくら正確でも印刷する側が再現できないこともある。大きいポスター画は印刷所でないと出力できないが、印刷所は CMYK が使われているため RGB のデータ

付録

だと色が変わってしまうなど。今は大学の印刷室で RGB データでも印刷再現できるようにしてもらって、そこで行っている。

原画の保存は、一枚ずつのものは一つの作品でまとめるようにして、封筒に入れ、カラーはクリアファイルに入れ保管している。クリアファイルは見る時に人の手に触れないので、汚れないで残ることが多い。

モノトーンに関しても原画’をなるべく作っていききたい。ただ、枚数が多いので展示をしたいなどの依頼があれば出来るだけその時制作し、残すようにしている。その方が心配が無いので。

原画’は長期的保存のためではなく、どちらかと言うと、原画の劣化の心配をすることなく、原画に近いものを見ていただきたいという動機で制作している。一週間を超える原画展示は、色が褪せてしまうのであまりしたくない。原画’なら色々な方に見て頂ける。ただ、出力するにしても技術がいり手間がかかるため、そう簡単にできるものではない。

スキャンデータの解像度は、カラーは 360dpi あれば十分。ただ、線が細い作家さんの白黒のデータは 1200dpi まで上げている。データをあまり大きくするとデータを扱うのが大変になる。原画’は印刷できれば良いという考えで取り込んでいる。

プリンターはエプソンの民生品を使用している。プリンターを変えたりすると、以前の機能がなくなってしまって困ることが多い。原画’の話ではないが、地震で揺れたブレた線などを作るときはコピー中にズラして作ったりしていたが、コピー機の機種が変わると出来なくなったりとか。

新しいマックになって、モニターのカラーが変わってしまって、見ている色と印刷したい色が変わってしまって不満に感じている。刷りだしたものを見ながら、刷り出しを想定しながら調整しているので何とかなっているが、不快に感じている。

竹宮恵子氏は、原画の公開（利活用）と保存とを考える中から「原画’」を考案し展示の形で公開しつつける中、最もマンガ原画について深く考えるに至っている実作者だろう。

以上

出張報告書

所属機関 東洋美術学校
所属部署 保存修復研究室
氏名 小野 慎之介

出張を下記の通り行いましたので報告します。

記

1. 研究種目 平成 29 年度メディア芸術連携促進事業
2. 申請区分名 連携共同事業
3. プロジェクト名 マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発
4. 用務地 北九州市小倉北区浅野 2-14-5 あるある City5-6 階
5. 用務先 北九州市漫画ミュージアム
6. 出張日程 平成 29 年 12 月 9 日～12 月 10 日（2 日間）

7. 用務について 以下、2 日間の用務概要

◆1 日目：12 月 9 日 14:00-18:00 (4h)

場所：北九州市漫画ミュージアム会議室

メンバー：北九州市市民文化スポーツ局漫画ミュージアム 表 智之
北九州市市民文化スポーツ局漫画ミュージアム 柴田 沙良
北九州市市民文化スポーツ局漫画ミュージアム 石井 茜
秋田県横手市増田まんが美術館 大石 卓
明治大学 米沢嘉博記念図書館 ヤマダ トモコ
明治大学 米沢嘉博記念図書館・アスペクトコア 新美 琢真
東洋美術学校 保存修復研究室 小野慎之介（アドバイザー）

作品管理上で起こり得る幾つかの技術的な質問があったので回答をし、また大石氏からは原画保存における保存修復分野の考え方についても改めて質問があったので解説をした。

北九州：作家さんに依頼され外れた写植を再接着するために「ペーパーセメント」は常備しているが、ある程度の接着強度と再剥離性を兼ね備えた接着剤というものは存在するのか。

小野：実験データなどで確認しているわけではないが、ペーパーセメントの変色や脆弱性については好ましくない結果が多数報告されており、やはり避けるべきではないかと考えてい

付録

る。天然ゴムという素材の特質を考えても経年劣化は避けられないので、現場においても使いやすい他の方法を現在検討している。逆にお伺いしたいのは、現場での応急処置を想定した場合に、どのような要件を満たした接着剤が求められているのか？

北九州：私たちはある程度の接着強度は犠牲にしても作品に新たな汚損原因となる素材を付け加えることを避けたいと考えている。しかし作者や管理者側からはそれなりの接着強度を要求される場合が多い。双方での思惑が異なり、この相反する特性を兼ね備えた接着剤を見つけるのが難しい。また再版や刷り直しで写植は貼り直されることも多いので、簡単に外せるということも必要な要件になっている。

小野：作品に新たな素材を付加する場合には経年劣化を考慮し、作品の劣化要因とはならない素材の選択が必要と思われる。更に再剥離製（可逆性）という要求を考え合わせれば、素材や実験に関するデータも豊富に存在する修復材料を使うのが良いのではないかと考えている。例えば「BEVA」というエチレンビニルアセテート共重合体の修復用接着剤が市販されているが、これが薄いシートになり剥離シートに挟まれた状態で製品化された BEVA 371 film というものがある。粘着テープとは違い基材を含まず溶剤等も含まないので、外れた写植を任意の形にトレースしハサミなどで切り出して使用することが可能である。ただ問題は、樹脂シートに接着性能を持たせるために、熱か溶剤を用いて活性化する必要がある。現場で使うには熱が簡易的だと思われるが、写植と原画に挟まれた接着層の部分が 65℃程度に熱せられる必要がある。ドライヤー等では余計な風が伴うし、アイロンでプレスすることは危険が大きい。私が考えているのは、事務用品などで切手に湿りをいれるための海綿スポンジと似た構造で、溶剤を入れたガラス製容器に天然の海綿を浸し、これを利用して接着シートに溶剤を僅かにつけ接着機能を与えるのが良いのではないかと考えている。本事業内で修復事例についても幾つかを取り上げる予定なので、1月の本校での研修会の際には具体的な方法もお見せできると思う。

大石：前回秋田でお話した際に考えさせられたのは、同じ作家でも時代やそのときの状況によって使用している紙などが異なり、それにより保存状態にも差が出ているのではないかと指摘であった。そういったことはこれまで考えたことがなかったが、写植を再添付するための接着剤の選択なども含め、素材と劣化について今後どう考えていくべきなのか？

小野：マンガ原画を扱っている多くの方が感じているようだが、決して時間が経過しているから（古いから）劣化しているわけではなく、比較的最近のものであっても劣化が進行しているものが多く存在している。ある時代に使いやすさという観点から一気に普及し、後になってから保存上の問題を引き起こすというケースである。一時的な使用を想定して生産された製品が耐用年数を超えて使用されていることも問題である。ましてマンガ原画については、このような形で長期的に保存・活用され得る発想もなかったわけだから、利便性やコスト以外の点から素材を選択するという発想はなかったであろう。私たちが協力できる部分はこういった素材や劣化などの物理的側面と環境管理についてであるが、これだけを指標として大

付録

量のマンガ原画を取り扱うことは難しいと感じている。もし「マンガ原画の価値」というもう一つの尺度を組み合わせられることができるのであれば、保存状態と価値のバランスから処置対応の緊急性を「原画トリアージ」という形で保存対策に生かせるのではないかと考えている。例えば何らかの理由で劣化が急速に進行していて、同時に原画としての価値も高いものについては、環境管理の行き届いた美術館等への早急な移管と、問題解決のための介入処置を実施しようということになるのだと思う。しかし劣化が酷くとも価値が見出されない資料については、棄却という選択肢もあるのかもしれない。とにかくマンガ原画は数が多く、失われていく（破棄されていく）スピードも速いようなので、「レスキュー」や「トリアージ」といった緊急性の高い作業指針を持って迅速に残すべき作品の抽出を行っていく必要があるのではないかと。限られた時間と費用とマンパワーの中で膨大な資料を相手にしようというのだから、何を残すかを早急に決める必要がある。一方で残す意味を見出された作品については、最低 100 年という時間単位で保存対策を考えていく必要がある。酸性紙問題がそうであったように、何の手立てもなければ僅か 100 年でさえ保存していくことが困難な素材が、マンガ原画の中には日常的に使用されている。美術館等に行き先の決まった作品についてでさえ見通しは決して明るくないと思われ、捨てられそうになっている作品の押入れ保管から環境管理の行き届いた収蔵庫保管に至るまで、各保存ステージにあった具体的な保護対策を策定していく必要があるのではないかと。

◆1 日目：12 月 9 日 18:00-19:00 (1h)

場所：北九州市漫画ミュージアム収蔵庫

メンバー：北九州市市民文化スポーツ局漫画ミュージアム 表智之

北九州市市民文化スポーツ局漫画ミュージアム 柴田沙良

北九州市市民文化スポーツ局漫画ミュージアム 石井茜

明治大学 米沢嘉博記念図書館 ヤマダトモコ

明治大学 米沢嘉博記念図書館・アスペクトコア 新美琢真

東洋美術学校 保存修復研究室 小野慎之介（アドバイザー）

寄託された作品資料とその保管状況を見せて頂き、その中にあった幾つかの汚損資料の取り扱いについて助言をした。

小野：収蔵保管している作品の中で、管理の難しいものや困っていることなどはないか？

北九州：そもそも所有者の方で管理が難しくなり美術館に寄託されるケースが多いので、整理等も行き届いていない資料がドサッと段ボール箱などに詰められてグロスでやってくる。これらを整理するマンパワーがまずは必要で、更に整理していくと初出のはっきりとしないカットや作家本人の肉筆とは異なるものが含まれていたりして、整理作業が滞りがちになっている。また資料は収蔵庫に入れる前に燻蒸しているので理論的にはカビは死滅しているは

付録

ずであるが確証もなく、また一度カビの生えた資料については汚れや色素なども付着しており対応に困っている。

小野：作家さんがじめじめした場所で保管していたり、冠水してしまったりした資料には、比較的簡単にカビが発生してしまう。しかも頻繁に確認することが少ないと思われる原画資料については、そのような事故が発生していることに気づかないケースも多くあると思われる。気がついたときには手の施しようもないといった事態が予想される。どのような環境に保管されていたかも分からないので、収蔵庫内での二次被害を防ぐためにも燻蒸し確実にカビ胞子を死滅させる必要がある。しかし死滅した胞子であってもそのままにしておくとアレルギーとなり、また新しいカビの生え易い環境となる場合がある。カビの活性度（生きているか死んでいるか）を確認する方法は基本的には培養しかないので、綿棒などで胞子と思われる付着物を原画表面からサンプリングし、専門の検査機関で培養してもらうのが良いのではないかな。一サンプル数千円で請け負ってくれるところもある。これでカビが死滅していることが確認できたら、その次にカビ胞子を飛散させないようなグローブボックスなどの中で、付着した胞子をミュージアムクリーナーなどで穏やかに吸引除去するなどの対策が望まれる。最後にカビの代謝色素についてだが、これは除去が難しく、無理に取り除こうとすると資料にとってはかえって負担となる場合がある。漂白などの可能性がないわけではないが、お勧めはしない。まずは二次被害を防ぐ目的と作業者の労働安全に配慮した汚染資料の別置保管と培養検査、その次のドライクリーニングを検討されてはどうか。

<1 日目を終えて>

国内の原画保存体制が整っていないため、各館が独自の基準によって収集および保存と活用に取り組んでおり、原画が失われていくペースに歯止めがかけられない状況にある。日本のマンガ原画保存全体の目標地点と、それに対する戦略の構築が急がれる。今のままでは自然淘汰に委ねることとなり、取捨選択が可能なうちに積極的に保存対象とすべき対象作品の抽出を行い、優先的に対処していく必要があるのではないかと感じる。しかし多くの作品に著作権や版権が生きている状況があり、作品や作者に対する優劣判定と捉えられる危険性も孕んでいる。また「何年先まで保存するのか？」という問いにも目標値が設定されていないので、仮に「100 年」という短期的な条件を設定し、これに対する具体的な方法論を構築してみることで、取り組むべき課題を明確にする作業も必要と思われる。

◆2 日目：12 月 10 日 13:00-16:00 (3h)

場所：北九州市漫画ミュージアム展示エリア

メンバー：漫画家・京都精華大学長 竹宮恵子

明治大学 米沢嘉博記念図書館 ヤマダトモコ

明治大学 米沢嘉博記念図書館・アスペクトコア 新美琢真

東洋美術学校 保存修復研究室 小野慎之介（アドバイザー）

付録

「原画」（ダッシュ）」の発案者である竹宮恵子氏よりその理念や制作方法の説明を受け、原本となっている肉筆原画に対する修復処置の可能性について助言をした。

小野：セロハンテープの跡やペーパーセメントと思われるしみが目立つ原画も多いが、原画ダッシュが作られれば、肉筆原画の保存状態については特に問題にはならないのか。

竹宮：原画ダッシュは展示を念頭に開発している。自分の原画が長期間手元を離れることは心配で、巡回展などで長時間光に晒されると退色したり損傷したりすることもあるので、基本的にはあまり貸し出しはしたくない。ただ多くの人に見てもらいたいという思いもあるので、そのために限りなく原画に近いものを作ろうと考えた。原画ダッシュはその時点での自分の力量を記録している感覚でもあり、技量が上がれば描き直し、またダッシュを作り直す。原画ダッシュの中では基本的にはあらゆる要素の取捨選択（色の抽出や特定の変色についての修正など）が可能ではある。よって実際の肉筆原画に変色等が存在してもダッシュ上で修正を加えることはできる。ただ、肉筆原画の方でも取り除ける汚損等があるのであれば取り除きたい気持ちはあるが、それにより何かが残留したり劣化原因となったりしないか心配な部分もある。

小野：紙や画材などについては常に同じものを使ってきたのか？

竹宮：油絵の人は油を使うし、アクリルの人はアクリルを使うだろうが、自分はそのときに必要な色やマチエールに合わせて色々な画材を混ぜたり使い分けたりしながら制作してきた。

小野：例えばベタとオモ線で画材を使い分けていたりしているのか？

竹宮：初期のモノクロ作品についてはどちらも基本的には墨汁を使っている。

小野：なるほど。それであれば例えばペーパーセメントやテープ跡などを取り除ける可能性はある。例えばモノクロ原画などに特に多いようだが、画面の比較的目立つ位置にある糊染みなどについては有機溶剤を利用し、サクシオンテーブルを利用し吸引除去できる可能性がある。ただしこれを使用できる条件として、墨汁などの水溶性媒材で描かれている必要がある。耐水性インクというのは疎水性の合成樹脂が媒材として使用されており、特性の違うインクが複雑に使い分けられている箇所などについては、クリーニングに使用する有機溶剤に溶け出す可能性もあるため危険度が高く場合によっては難しい。

小野：例えば写植などを再貼付する際には何を接着剤として選択するのか？

竹宮：ペーパーセメントはかなり早い時期にその変色の可能性を認識していたので、以降使用することはなかった。しかしそれに代わるものがなんであるのかは難しい。例えばスティック糊など、多少水分があつて紙に膨潤するようなものでも、ペーパーセメントよりはましだろうと思っている。

小野：接着剤の選択については要望が多く聞かれるのでいろいろと試している。基本的には修復用の接着剤を使うのが良いと思うが、それを現場で使えるような施工方法に落とし

付録

込む必要があり、使いやすさを含めた検証がまだ必要である。

＜2 日目を終えて＞

マンガ原画保存の一つの軸になり得る「原画」を利用した複製保存のあり方であったが、現状の制作方法は竹宮恵子氏による目視観察の評価がその信頼性の担保となっている。客観性と再現性が担保された制作を継続的に行っていく必要があり、より汎用的システムに改良していくことも必要と思われる。しかしこのような精巧な複製原画を作成しておくことは、特に色調に関する劣化速度を定量的に把握する助けともなり、今後十分に取り組む価値のある研究領域であると感じている。

以上

■ 5.2.2 マンガ家インタビュー部会 【インタビュー調査①】

報 告 書

作成日：2017/12/16

作成者：カーロヴィチュ・ダルマ、倉持佳代子

研究会名：インタビュー部会「ささやななえこ先生&佐川俊彦先生へのマンガ原画保管と活用に関するヒアリング」

開催日時： 2017 年 12 月 5 日（火曜日） 18 時 00 分～21 時 30 分

場 所： ドルフ 京都府京都市左京区岩倉東五田町 4

出席者：ささや ななえこ（ささやななえ）

佐川 俊彦

京都精華大学国際研究センター 伊藤 遊

京都精華大学国際研究センター 倉持 佳代子

京都精華大学国際研究センター ユー・スギョン

日高 利泰

カーロヴィチュ・ダルマ

議 題：マンガ原画の保管と活用について

ささやななえこ氏は 1970 年にデビューし、同世代の竹宮恵子氏、萩尾望都氏らとともに少女マンガに足跡を残した作家の一人である。また、ささや氏の夫であり、マンガ雑誌『JUNE』などの編集を務めた佐川俊彦氏も、少女マンガが大きく革新した時代の立役者だ。

今回はそんなお二人を対象に、ささや氏自身のマンガ原稿の扱いについてお聞きするとともに、他の作家の状況なども踏まえ、今後についてのご意見をお聞きすることができた。ヒアリングは下記の質問に沿い、実施された。

（1）原画はどのような方法で保管されていますでしょうか？

ささや氏の原画はレンタル倉庫で保存されている。基本的に編集者から返却された状態（封筒などに入っている状態）のまま置いてあるので、作品としてはまとまって保管されているはず。しかし、他の荷物なども多く、特定のタイトルの原画をすぐに出納できる状態ではない。

(2) 原画を保管するにあたって苦労していることや困っていることはなんですか？

保存スペースが一番の問題である。重たくかさばり、スペースをとる。湿気に弱い
ため、通気性の悪い建物だと劣化してしまう。また、地震などの災害による消失
も危惧するところだ。

ささや氏の原画保管にあたる問題だけでなく、佐川氏によくある事例もうかがった。

- 原画に執着がなく、捨ててしまう作家もいる。
- 作家が亡くなった際、遺族が整理できず、捨ててしまう可能性がある。
- 編集者のミスで返却の際に他の先生の原画が混ざって返却されることもあるが、
作家が返却された原稿を一つ一つ確認をすることはほとんどない。特に連載中
の作家はその時間をとることが難しい。
- 返却された原稿は封を開けない状態でそのままになっていることが多い。とあ
る作家は玄関にそうした原稿の封筒が山積みになっていた。
- 後々に原画の誤配に気づいても、担当編集の窓口や作家の所在が不明になって
いるケースも多々ある。
- 原画が古本屋など市場に出回ることも多々あり。個人コレクターが収集してい
るケースもある。
- コレクターが亡くなり、遺族によって原画が捨てられる可能性がある

(3) 原画の整理の方法は？データベースやリストは作成されていますでしょうか？

原画は特に整理していない。画像データも作品リストなども特に作成していない。作成し
てくれたら助かる。

(4) 保管されている原画の枚数はどれくらいあるのでしょうか？

ささや氏の原画はほぼすべてが返却されている。また、ネームや刷りだしなどもとってあ
る。

ささや氏だけでなく、佐川氏の編集時代の資料もほとんど捨てずにとってあり、多数の作
家の刷りだしやネームのコピーなども保管してある。

(5) 所蔵している原画の活用について過去の例など教えていただけますか？あるいは今
後考えていることがあれば教えてください。

過去の活用については、本の出版、復刻版の発行、展覧会の出展。

これからの活用の可能性：

1. 展覧会：

付録

- ただし、デビュー作は作家にとっては出すのが恥ずかしいところがある。
デビュー作など初期作をフューチャーするより、ピークの頃の作品に注目してほしい。
- 原画の作品解説、原画の価値づけを展示することは重要だと考えている。
- 作品を面白いエピソードとともに展示する展開はどうか。
 - 例えば、ささや先生の場合、例えば、萩尾望都、竹宮恵子、山田ミネコなどの有名な作家が手伝ったページを展示する
 - 展覧会と同時に作品の復刻版があった方が良い。作品を読み直す機会にしてほしい
- 原画を比較のためネームや下書きと一緒に展示する

2. 販売：(6) を参考

(6) 原画を販売するなどの展開についてご意見をお聞かせください。

ささや氏自身は原画を販売する、というのはあまり考えたことがなかったとのこと。

原画を販売するという事について佐川氏の考え

- 原画で儲けることに抵抗のある作家も多い。
- 原画の販売の利点としては、ファンなら原画を大事に保管してくれるので、売ることによって結果的に原画の保存にもつながるのでは。
- 原画の販売のリスクとしては、売られた原画の行方をウォッチし続けるのが難しいこと。転売されて、所蔵先を見失う可能性が高い
- 販売して売れるのは人気作家の人気作品に限られている。
- 販売のための原画を用意する必要がある。展示などで活用が期待される代表作、代表シーン以外を売る、などの考えもある。
- 作品の価値は作家やファン、研究者によって価値観がまったく異なるが、作家の意見は最優先してほしい。
- 値段を決めるのが難しいだろう。
- 作品丸ごと売るよりは、扉一枚など飾れるための絵を売ったほうがよいのでは。
- バラバラに売ることによって所蔵の追跡は困難になる不可能もあるが、基本的にはバラバラで売るものは追跡不可能と考えるべき。
- 後で展示したい作品を売らない方がよい。
- 販売する際は額装して売ったほうがよい。
- ネームから映像化された時の DVD など、一つの作品にあたる関連資料をまとめたボックスを作って売ってはどうか。

(7) 原画の扱い（輸送や保険など）についての希望はありますか？

原画は美術品とは違うため、保険などに関して同じ扱いされると、活用しにくくなり、新しい問題が登場するのではないか。値段が付けたら財産として見られるようになり、相続税が求められる。原画の評価額など価値を鑑定するのは難しい。一律でマンガの原画の価値を決められないし、売れている作品とそうでない作品でも違う。原画を運搬するのに、美術品輸送よりはライトで、一般郵送よりは丁寧なマンガ専用の便があったら便利だと思う。

(8) 国が原画アーカイブ施設を作るとしたら、どんなことを望みますか？

マンガ、アニメ、ゲームなどを一緒に保管や紹介できる施設が望ましい。国会図書館のような公共施設は原画を無料で公開しなければならないため、別のタイプの施設が好ましい。

また、原画を一つの場所に集中するのが危険。災害で全部失う恐れがあるので、複数の場所に分散してほしい。

(質問事項にはあまり関与しないが重要だと思われた証言)

◆ささや先生制作背景

1. 画材は？

- 丸ペン、G ペンを使用。カラーは主にカラーインクなど。

2. 作風を意識的、例えば掲載雑誌のよって変化されましたか？

- 絵柄の変化などスタイルは変わったが、意識的に変化したものではない

3. そのほか

- 背景などはアシスタントが描いていたが、ささや先生の具体的な指示のもと描かれていた。
- マンガの描き方は石ノ森章太郎先生や手塚治虫先生の作品を見て学んだ

◆（同人誌など）有名な作品のキャラクターを他の作家が使って描いたマンガ原画の保管についてどうすべきだと思うか？

オリジナル作家が保管した方が良いのでは。その作家の展覧会や記念館ができたら関連作品として紹介したら良い。

以上

■ 5.2.3 中間報告会

報 告 書

作成日：2017/12/8

作成者：櫻井・田村

京都精華大学

「平成 29 年度メディア芸術連携促進事業 連携共同事業」

中間報告会

開催日時： 2017 年 12 月 8 日（金曜日） 18 時 00 分～20 時 50 分

場 所： TKP スター貸会議室

出席者：【プロジェクトメンバー】

吉村 和真 京都精華大学/プロジェクト推進オブザーバー
伊藤 遊 京都精華大学国際マンガ研究センター/メインコーディネータ
倉持 佳代子 京都精華大学国際マンガ研究センター/プロジェクト運営補助
大石 卓 横手市増田まんが美術館
ヤマダ トモコ 明治大学米沢嘉博記念図書館

【文化庁】

伊野 哲也 文化庁文化部芸術文化課支援推進室 室長補佐
伊藤 由美 文化庁文化部芸術文化課支援推進室メディア芸術交流係 係長
吉田 敦則 文化庁文化部芸術文化課支援推進室メディア芸術交流係 研究補佐員
戸田 康太 文化庁文化部芸術文化課 芸術文化振興アドバイザー

【大日本印刷】

末吉 覚 大日本印刷株式会社 ABセンター マーケティング本部
アーカイブ事業推進ユニット 部長
鈴木 守 大日本印刷株式会社 ABセンター マーケティング本部
アーカイブ事業推進ユニット 課長
岩川 浩之 大日本印刷株式会社 ABセンター マーケティング本部
アーカイブ事業推進ユニット
池田 敬二 大日本印刷株式会社 ABセンター マーケティング本部
クールジャパン推進室
佐原 一江 日本アспектコア株式会社 文教支援ソリューション営業部
文教支援営業グループ

【事務】

櫻井 壽人 京都精華大学
田村 真樹子 京都精華大学

付録

議 題：

交換

- 中間報告会（メディア芸術コンソーシアム JV 事務局主催）内容共有・意見
- アーカイブタイプモデルの検討
- 各施設の課題検討
- 活動状況報告
 - ・原画ダッシュについて 倉持佳代子
 - ・原画作業状況報告 大石卓
 - ・原画保管調査報告 ヤマダトモコ
- 「保存修復研修部会」研修会・シンポジウムの内容検討
 - ・研修会（2018 年 1 月 27 日、東洋美術学校）
 - ・シンポジウム（2018 年 2 月 10 日、京都国際マンガミュージアム）

会議内容（発言者は敬称略）

◆各連携者の紹介

伊藤）この事業は各連携施設と情報交換をしながら進めている。プロジェクトメンバーの役割は以下の通り。

伊藤遊/メインコーディネータ

吉村和真/プロジェクト推進オブザーバー

企画委員でもあるため事務局長的なことは伊藤が担当

大石卓/横手市増田まんが美術館（以降：横手 MM）、現場のリーダー
横手 MM は 90 年代から原画収集に取り組んでいるため幅広い原画がある
大石が入ってから 11 年、作家との信頼を深めさらに原画を増やしている
矢口高雄氏をはじめ地元出身作家のアーカイブに力を入れている

ヤマダトモコ/明治大学米沢嘉博記念図書館（以降：明大）

倉持佳代子/京都国際漫画ミュージアム（以降：京都 MM）、展示を担当
イベントを企画やワークショップも担当
京都 MM も 10 年を超え、マンガを扱う施設として古株になった

表智之/北九州市漫画ミュージアム（以降：北九州 MM）、専門研究員 ※同日は所用のため
欠席

元は京都 MM で伊藤、倉持と同僚

北九州 MM ができた 2012 年、京都 MM を退職、北九州 MM に就職、以降「九州の要」作
りを担っている

付録

明大が関わっている熊本倉庫とのつながりも北九州 MM が橋渡しとなり縁を深めた

去年まで精華大は書籍アーカイブに関する事業を原画アーカイブに関する事業との両輪として取り組んでいたが、書籍アーカイブについては今年から明大が発展的に引き継いでいただいている

◆挨拶と事業への期待

吉村) この事業では原画の保存を通じて連携していく

京都 MM では単行本と雑誌を一次資料として収集してきて、持ちきれない量を分担していく中でネットワークができた

- ・なぜ原画なのか、また、扱いづらいとされてきた原画を扱うふたつの理由

1. 海外からの注目が高い

浮世絵の再来にならないように文化庁事業を通じて原画アーカイブをすすめる必要がある

2. 原画は表に出にくい

作家さんの意識としても価値の高いものではないとされていた。業界の慣習としてもどう扱うかに切り込めてなかった

- ・原画の展示

原画だけを扱うのはマンガの美術館としての趣旨と若干違う。また、単行本だけでは集客力・説得力に欠ける。お互いを合わせることで生まれる新しい価値付けに研究的な切込みを入れる必要がある

- ・明大に移行した書籍アーカイブに関する事業と原画プロジェクト

明大に移行した書籍アーカイブに関する事業と原画プロジェクトは表裏として動いてきた。一体化していくためには、アーカイブだけでなく利活用を考える必要がある。今年度は予算も増え幹が太くなったのでこれまでの課題を実践に移す時期

- ・連携各館の活動について

原画の扱いのノウハウ、経験、触れている量は、ここに集まっている連携各館は突出している。とりわけ横手 MM のノウハウは増田メソッドとしてまとめたくらい価値が高い原画は今後「そこにしかない」という価値に変わっていく

横手 MM の財団の在り方が各自治体の参考になり増えて行けば、全国で原画保存をサポートしていける

付録

- ・郷土のマンガ家

郷土のマンガ家やその地域で書かれたマンガは、今後全国に増えるであろうマンガミュージアムのコンテンツになりやすい。原画をどこに収蔵するのかという点でも連携館からは展望が見える

- ・京都精華大学の教員が保有している原画について

京都 MM に入ってくる、京都精華大学自身が所蔵している原画をどうしたらいいかという相談をモデル化するために大学の先生へのインタビューを始めた

- ・メディア連携促進事業の五ヶ年計画の3年目

この事業の中間報告としてこれまでの成果をつきあわせ、方向性を明確にするためにモデル化しようという試み

○ 事業への期待

「ここがやらなければどこがやるのか」と危機感を募らせている(原画の海外流出の危機)原画を使った大型展やグッズ制作等の二次三次展開は苦しくなる出版に代わる新事業となっていく可能性がある。原画の価値付けは、適正な距離感をもち、かつ文化的な視点で考えているところが先導していかないと、それぞれの事情で価格が暴落した高騰したりしてしまう。タイミングを逃すとマンガ文化の事業全体に影響もありうる。ノウハウがある組織としての強みと公共資金を投入した事業として責任をもった接し方が大切。文化庁事業として「メディア芸術」領域のアーカイブや人材育成に関わるのは何のためか常に問われるため、もう一度その目的を見直し、幹を太くした一事業として原画に関わるプロジェクトをどうすすめていくかを議論する

◆ 中間報告会の報告・内容共有

伊藤) 過去二年とどこが変わったかを伝えた

〈収集〉〈整理・保存〉〈利活用〉の三段階に分けた実践と調査をすすめて、最終的にはその三段階をモデル化していく

- ・小野耕世氏から『海外から原画を借りたいという話が本格化していくのではないか』という質問があり、伊藤が以下のように回答した

「海外からの依頼はすでに始まっている。そういう要請に応えるため原画ダッシュが役立つ。原画ダッシュは竹宮恵子氏が中心となり取り組んできた複製原画プロジェクト。プリントした複製原画を海外に貸し出すことで、原画所有者が破損・汚損の心配から解放され、原画を見に来た人にも一見してコピーと分かる複製原画ではなく、ほぼ原画そのものの複製原画を提供することで満足してもらえる。利活用のひとつとしてモデル化

する予定」

・清水保雅氏から『マンガ史の中で重要な作品を書いていた方々が世代的に亡くなっていく中、数千万点の原画を集めるのはお金の面も含め現実的に可能なのか』という質問に対し、大石が以下のように回答した

「一か所に集めるのではなく、地方で関連作家の作品を集めることでオールジャパン形式をとれる。横手 MM は現実化できているが、公立の施設で予算を組むには相応の理由が必要であり、地元の作家（郷土の作家）であることは大きな理由になる」

・「保存修復研修部会」研修会について

伊藤）東洋美術学校で半クローズドの研究発表会にしたい。保存修復研修部会による、原画調査の報告、実際に原画の修復を見学するようなワークショップを予定している

ヤマダ）保存修復のプロである東洋美術学校・小野慎之介氏と各施設をまわっている中で見えてきたこと、共有すべきこと等を発表。東洋美術学校の他の教員も参加予定であり、東洋美術学校より学生に見せたいと要望があった。半オープンなら可能ではないかと考えている。30 人程度の規模の研修会となる予定

吉村）初期計画とはずれてはいないか

伊藤）次の原画管理者を創る人材育成にもつながるため計画とはずれない。今後補修や保全是欠かせないテーマとなる。今年新しく加え、精力的に活動した研究テーマのまとめとして行う

・京都 MM の原画に対する考え方

吉村）京都 MM としては美術品売買のように原画購入に能動的に関わるつもりではない。原画を持っていて困っている人を助けるという受動的なところから始まっている。一種の「駆け込み寺」であることを目指す

・2 月 10 日（土）のシンポジウムについて

吉村）タイプ別モデルを作らなくてはならない。原画収蔵が抱えている可能性や難しさを念頭に置き、極端な例も含めた様々なパターンを並べる必要がある。原画を提供する側も利用する側も個別のケースで全て違う。学生のための無償提供から生活困窮でお金に換えたいケースなど、多種多様な要望にどう対応していくかを考えたい。パターンのグラデーションの中で適正な原画の収集保存とは何かを議論する

・マンガ原画のオークション市場の構築について

付録

吉村) 2月10日(土)のシンポジウムで、ワークショップ的にマンガ原画オークションを行い、そこでどういう問題が起きるかシミュレーションしてはどうか。そこではいわゆるアートの場合では発生しない問題が起きるのではないか。例えば原画を買いたい人が来た時に売ってよいのか、もっと多くの人に売る機会を提供したほうが良いのか、こちらが良い話だと思っても本人の意向も考えないといけない。本人はいらなくても価値がつけば税金がかかるかもしれない。相対的に他の原画の価値もあがるかもしれない。そういう選択肢を作家に示せるようにしたい。

一番高く売って欲しいという話ならオークションだが、オークションは行うところの信頼により集まる人も変わり価値も変わる。そういう時各館に何ができるか、慎重に課題を考えておかないといけない。ケースによっては各館での責任で対応できるのか

ヤマダ) 対応する際の規準が欲しい。購入してのお預かりはできないと告げると価値がないのかと傷つく人もいる。預かることにどれくらいお金がかかるか、置いておくだけでもコストはかかる。〈整理・保存〉コスト、依頼があれば取り出すための人件費、保存のレベル、修復が必要か、など示すことができれば選択肢が増える。本人で保存する方法を提供することでも大事かもしれないし、結果的に、現実的な今後かかるコストが分かると個人での負担を避けて迷いなく預けること選ぶ道があることも必要。

・原画の利活用のパターンとしての「原画ダッシュ」制作について

吉村) 原画ダッシュの仕組みが認知されたら、自分の持っている原画を提供してくれる人が増えるかもしれない

倉持) 原画ダッシュ、京都精華大学が15年取り組んでいるが、いろんなケースの作家さんがいる

原画ダッシュでも販売するかしないかはテーマになっている。値段をつけられたくない人もいる。評価額が市場のお金と一致しない時もある。今は一律金額でやっている。

・「マンガ家インタビュー部会」の活動について

インタビュー部会を立ち上げ、原画の保存や利活用の意見を聞いている。マンガ史的に重要な作家でも一人で記念館が立つレベルではない場合どうするか。作品にレベルをつけることは重要だが、値段で差をつけられたくない心情もあり、作家に説明する際に、そのあたりの配慮は必要(人間関係の形成が不可欠)。モデル開発のヒントにもなる

・横手 MM のお話

吉村) 横手 MM のように財団を作っているケースは初めてで、大石を信頼して預けてくれる作家が何人もいる。財団に行きつくまでと出来てからの課題も含めたお話を聞かせてほしい。

付録

大石) 先ほどヤマダが言っていた、原画を預かって動かすコストがいくらかについての把握を担当しているので、ある程度まとめて示すことができると思う。原画をほしい方がいても遠方の場合、交通費をどのように節約するかを毎回考えないといけない

・原画保存に関して

100 人マンガ家がいれば考え方が 100 違う

価値ないという人、血と汗の結晶という人、それぞれの意見を尊重することが大事で、「原画は本当に大事なので理解してほしい」とアプローチせず、先生の考えに寄り添っていくことを心がけている。マンガ家の考えと折り合いのつく収蔵の仕方をすすめている

・公的事業としてのマンガアーカイブ

大石) 公営施設のため市民還元について常に問われる。郷土出身作家の作品を地元で大事に保管しているというのを共通認識にしていきたい。保存にコストがかかることは作家さんも理解してくれており、市民還元のため、無償でチラシなどにイラストを使わせてもらえるなど、目に見える形で街づくりに活かしている。

・原画の利活用について

倉持) 利活用で重要なこと。作家本人の作品評価は偏っているので、大きな個展を開くレベルでなくても少女マンガという枠組みで重要な方、集めてから位置づけや意味づけすることも重要

・人材の大切さ

吉村) 接する人でマンガ家や出版社などの対応はかなり変わる。うまくいっている自治体もあれば自治体に預けるのは嫌だという人もいる。信頼ある学芸員がいるところとなると限られており、本人のポジション、組織の性格によっても預ける側のイメージは左右される。違った形態を持つ連携機関が集まれば様々な提案ができる。得意分野が違う研究員同士のつながりも価値がある。人材の持つ能力の重要性を実感する。正直に言うと、直接本音を聞き出すことが難しい作家さんもいる

倉持) 原画ダッシュでも交渉に一番時間がかかる、最初は非常に警戒され、説得に 1 年以上必要となるときもある

吉村) 原画ダッシュに関していえば、竹宮氏がやっているという価値、横手 MM でいえば、大石がやっているという価値

長い目でアーカイブを考えると制度設計も必要

その折り合いを上手く考えていくのが重要

・会議参加者からの質問

付録

<質問 1> 原画に価値をつけるのが難しい中で、原画ダッシュの複製原画を販売する際の値段はどういう基準でつけたか

倉持) 今回は原画所有者の竹宮氏が設定した。大量生産ではなくオーダーを受けて作るため通常の複製原画よりは高額で一律 10 万円で半分を作家に還元している。サイズが同じものは一律にしている。サイズが大きいものは販売用でなくアーカイブ目的が多い。単行本が出ない作家さんは困窮している場合があり販売が助けになるため、今年から積極的に取り組み始めた。

吉村) 今年初めて海外で原画ダッシュの個展をやった際、海外の人が買いたいと声があった。

倉持) これまでは送料込みにしていたので輸送費や税金の問題がある

今はあまり儲かるシステムではない。続けるためには少し利益も含めた値段設定に見直す必要がある

<質問 2> 漫画史で重要だが商業的に大ヒットではない作品の価値をあげることに取り組んでいるか

吉村) それを目的にした活動はしていないが結果として展示が作用している。展示に必要な費用、保険など参考価格になる。展示で大きな反響があれば、必然的に価値はあがっていく

<質問 3> 作家とコレクター、売りたい人デジタル化したい人等を投資信託みたいにビジネスマッチングできるのでは

吉村) 前提にはしないがそういう目線はある。ビジネス発信ではないが寄り添い方の問題として避けられないところではある

伊藤) 色んな価値規準が原画に付与しているが、経済的価値に文化的価値など他の部分が引きずられてしまう。ひとつの価値観に巻き込まれないようにしたい

倉持) 原画ダッシュでも混同されてビジネスは嫌だという方も多い。販売のことは後から提示するようにして、保存や文化的な活用の話しからすることが多い。売りたい人もいれば、販売は拒否する人もいる

吉村) ビジネスが悪いと言いたい訳ではない。オークションをシミュレーションすることで、原画をほしいと申し出た方に、いくらで購入できるのかを聞かれた時、初めて原画の価値を考える機会になる。漫画はまだ守るべき文化財というより流通している商品であり、絵画にまつわるビジネスモデルに価値を見つけようとしている。限られた先生とのやり取りで得た知識と海外の価値観で揺らいできた社会的感覚とどう向き合うか、そのために色んな実験をやってみる場にシンポジウムがなればよい

伊藤) 一般的に価値が浸透した時に経済的価値観だけになる可能性があるので注意が必要

吉村) ファンが単に保存して持つ、展示・出版に利用できる価値を持つ、商品化する…。利活用によって価値が変わっていくとなれば、商品としてより文化事業貢献度が重要だと啓発もできる

付録

・出版社との関係について

吉村) 文化施設が集まっているが、原画に価値が生まれ市場に近づくと出版社との向き合い方は検討しないといけない。例えば、先生がすでにいない場合の著作権の考え方などだ。出版社はこの10年間くらいで昔よりは協力的になった印象がある

ヤマダ) 出版社は展示ではなく基本、本の販売で生活している。展示を頼むのは連載などを抱えている作家の仕事を増やすだけの存在となる。最近やっと少しムードが良くなった、それは商売的な利活用の道が開いた結果だろう。デジタル化で原画がない先生も出てきた中、原画保存にはさらに意味がでてきたと思う。今一生懸命残そうと思わなければ何十年後にはなくなってしまう

大石) 出版社は保存に関してはノウハウがなく支援してほしいという姿勢に変わってきた商業的なところは出版社、保存の役割を美術館と、役割分担をお願いしている。出版社が保存しないとほとんどの作家さんは自分では手に負えない。扱える数も予算も決まっているが順番待ちになっている

<質問4> 取り上げる作家の優先順はどう決めているのか

大石) 地元の方や企画展で縁のあった方など、明確な基準は設けていないが、市にとって意義があるか、市民に還元できるかが大事。体制の整備は後でもいいので駆け込み寺として救ってあげられる拠点が各地に欲しい

・保存について

ヤマダ) 公的な場所で大切に保管されるものから、自宅に置いておくだけのレベルも含めて、置く場所をまず確保したい。そこから考えられたらいいのだが、将来どう扱うとしても、まずは整理しなければ残らない。再評価され、重要とわかったときすでにないのでは残念すぎる。遺族やファンの家に置いておくレベルでも誰かが持っていてくれないかと思う

<質問5> 学芸員的なスキルがなくても保存はできるのか

ヤマダ) スキルのあるなしではなく、なくても預かる場所がなく、かつ残したい方がいる場合は、個人で残すことになる。個人宅に置いておくことにしても、次の世代に移り捨てる選択がなされる前に価値がつけば、生活の足しになり残しておこうとなるかもしれない。ただそのためには、繰り返しになるが整理管理し、出版社などが希望したときに取り出し貸し戻す程度に整備する必要がある

吉村) 原画の物量には限りがある。「駆け込み寺」として窓口は多い方がいい。窓口を經由して信頼のある施設にまわればよく、相談窓口だけでも全国に作りたい。

・著作権について

付録

倉持) 原画を預かる側が今後絶対やったほうがいいことは、作家が亡くなり著作権継承者がわからなくなる例が実際にある。存命中に明示してもらわないと、駆け込み寺的に預かって、自由に扱えないと預かること自体が難しくなる。原画ダッシュは著作権は作者に帰属するため小さな展示でも都度連絡している。利活用を考えるなら著作権ごと扱えたほうがよい。情報が整備されていると助かるが、現実的にそのようなケースは少なく、その手間で断念することもある。受け入れ先の情報が集約されているのは望ましいが、問題はこういった受け入れ先があるかが未整理の状況

吉村) 展示という行為が道を広げる

伊野) 建築でも同じ話がある。建築資料がどんどん海外流出していたのを食い止めるために現代建築資料館ができた。建築資料の受入れや著作権の話が参考になるかもしれない

<質問 6> 原画の価値を誰が作るか

現代美術は画商や美術館が原画を高く買って価値を高める努力をしていた。価値付けの部分も美術館側がしていく必要があるのではないか

ヤマダ) あまり価値付しすぎても税金のことなどで作家や遺族に迷惑がかかるかも

吉村) 京都 MM はもともと捨てられるくらいなら集めよう、から始まっている。美術館をやろうとしつつ反対のことをしている難しさがある。

ヤマダ) 捨てられるものを公立館で置くのかという難しさ。こちらが価値を決められずにいるうちに海外の人が価値を決めていく。海外の人が価値を決めるままにしておいていいのかと揺れているのが今のメンバーの現状だ。

大石) 行政も国も、価値のないもののために大事な税金を使えない

末吉) 何十年後に価値が出たときに海外流出してもう日本にないかもしれない。紙文化がなくなっている中で今残っている紙の価値はある

吉村) とりあえず相談できる窓口をたくさん作るために、すでにある施設を活かして行けたらいい。想定してないことがまだあるので実験のためにシンポジウムを使いたい

伊藤) それなら本当に売ってみてはどうか? 真剣な人が集まるのでは。海外のアーカイブはコレクター個人だったりする

吉村) 個人においてもらうのは管理が大変。向こうからきたものをどう受けるか。こっちから取りに行くのではない

吉村) 公的なところに文化的な価値を示せたらゴミじゃないという話をできる

戸田) 価値が無いものでも国の管理なら自然に価値が出るのではないか。国の施設が持ったという価値が発生する

吉村) 国立で展示でもデパート展示でも、どっちがいいではなく、両方あることを視野に入れて基準を出して行く

伊藤) 多様性は大事だが経済的価値にひきずられないか心配

吉村) それだけじゃないと見せるために文化活動が意味を持つ

付録

(吉村、伊藤、倉持 退席)

～休憩～

・横手 MM 作業状況の報告

大石) 横手 MM ではアーカイブする原画を決めて台帳を作成し中性紙をはさみ、中性紙封筒に入れ、さらに単行本一冊分ずつ箱に入れる。35,000 点の原画をアーカイブし始めて三年目。特定に時間のかかるものを後に回してきたため、今年度は単行本にする過程で抜かれたトビラ絵など初出調査が難しいものが中心である。雑誌の収集をしてこなかったのが特定できない部分を京都 MM と協力してすすめている。能条純一先生、小島剛夕先生のアーカイブもメニューに加えた。順調で期間内に終われそう。公民館の一部だった漫画美術館を建物全部に改修する工事休暇中。収蔵場所は図書館の閉架書庫、市役所に財団事務所と事務室間借り中。場所代はかかってない

<質問 7>マンガ関連の図書館や美術館は減っているのか

ブームが去り老朽化で潰すか建て直すかを議論している最中。美術館の新しい活用方法として収蔵庫を利用できるかも

大石) 押入れでダンボールでも保管として認めて行く。そういう考え方の人材を育成していきたい。官・民も保存レベルも問わずみんなで原画を守る仕組みを作りたい

末吉) 原画の国内枚数は推測できるのか

大石・ヤマダ) 出版物の数を元に出した数で 5,800 万枚といわれているが、増え続けている

末吉) それを全部守ると仮定してどれくらいの場所が必要か

大石) 見せる収蔵庫で 30 万点、閉架書庫で 40 万点、新しくできる美術館で 70 万点保存できる。

鈴木) 理論上は 100 館あればすべての原画を収蔵できる

大石) 現在工事中の横手 MM では事前予約で手にとって見てもらえるオペレーションを予定しており、ガラス張りでアーカイブ風景も見学できる設計となっている。収蔵と利活用を施設そのものが備えている。アーカイブデータを書籍化するという商業的なことはその次の段階。木の根の部分が保存と収蔵、枝葉が利活用。根が丈夫でないといけないという運営方針

ヤマダ) 日本の美術館運営で外国作品をもって巡回するのは、根っこを育てる部分を省略しているようなもの。横手 MM は観光にも結びつく健康的な取り組み。老朽化などで閉館する予定の美術館に置ければいいが、そこに人がいて設備が動いていなければ劣化が進んでしまう。それなら遺族やファンが持つほうが長持ちするかもしれない

末吉) ネットワーク化できれば民間のファンがもつことも可能になるのではないかと。企業が

付録

管理するという可能性もあるかもしれない

ヤマダ) 企業管理だと企業が弱ったときにどうなるのかが心配。その時また次のどこかが現れれば良いが、原画を儲かる存在と考えるよりは、あるだけでうれしい何かだと気付いてもらうことが大事かも。マンガは、一点物のアートとちがって、大勢の人が支えてきたもの。原画の価値も、整理し提示したのちに、大勢の人が決めるものであってほしい。確かに税金を価値のないものには使えないかもしれないが、価値を決めてから集めるのではもう遅い。今が残るかどうかの瀬戸際では

大石) 企業がお金のことを考えるのは当然のことで同時に議論していくべきこと

末吉) メリットが示せれば関わりたいところも多くなる。色んな角度で議論するのが大切

大石) ここが決める覚悟はあるが意見を出し合って決めたい

ヤマダ) 公立の美術館も以前は集客が最優先ではなかった。行列ができるとそれこそ税金から追加で人を雇うお金がかかるため、並びすぎないように最初から展示を考えるのも力量と教わった

池田) 図書館はかつて貸し出し数を競っており、美術館も数字を意識する時代になってきた

ヤマダ) マンガ原画の価値は大勢で決めたいと思う一方で、良い展示の基準は人数だけではないとも思う。展示を企画する側としてはもどかしい。大石さんと先日お話ししたとき、原画は「シビック・プライド（市民の誇り）」になるとおっしゃった。マンガ原画は今きちんと保存と管理を考えれば、それこそ、結果的に国の誇りとなり財産となるのでは

以上

議 事 録

作成日：2017/12/10

作成者：伊藤 遊

京都精華大学

平成 29 年度メディア芸術連携促進事業 連携共同事業

「マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発」

プロジェクト全体会議／「モデル開発研究部会」研究会

開催日時： 2017 年 12 月 10 日（日曜日） 18 時 00 分～21 時 00 分

場 所： 北九州市漫画ミュージアム会議室

出 席 者：【プロジェクトメンバー】

吉村 和真 京都精華大学/プロジェクト推進オブザーバー

倉持 佳代子 京都精華大学国際マンガ研究センター/プロジェクト運

営補助

大石 卓 横手市増田まんが美術館

ヤマダ トモコ 明治大学 米沢嘉博記念図書館

表 智之 北九州市漫画ミュージアム

伊藤 遊 京都精華大学国際マンガ研究センター/メインコーディネータ（司

会進行）

【オブザーバー】

小野 慎之介 東洋美術学校（途中退席）

新美 琢真 明治大学 米沢嘉博記念図書館・アスペクトコア

議 題：

【全体会議】

●1/27「保存修復研究部会」研修会について

●2/10 シンポジウムについて

【「モデル開発研究部会」研究会】

●タイプ別モデル図について

【全体会議】

◆1/27「保存修復研究部会」研修会について

○開催内容のアイデアとして以下のようなものが挙げられた。

- ・「保存修復研究部会」による本年度の原画収蔵施設での調査結果の報告
- ・東洋美術学校による紙資料の保存修復の知見の発表
- ・実際の修復の作業の見学（あるいは参加者自身によるワークショップ）。米沢嘉博記念図書館が預かっている三原順氏の原画のうち、実際に補修が必要なページを対象に、①はがれたネームを再度張り付ける②バラバラに切り刻まれた原画を一体化させる、といった修復作業を行う

⇒ 上記のアイデアを基に、小野氏が研修会の構成案を提案することとする

○会場となる東洋美術学校の教員や学生も参加できる、半クローズドな研修会とする

◆2/10 シンポジウムについて

○シンポジウムまでに原画アーカイブのタイプ別モデル図の ver. 1 を作成し、それを元に、ディスカッションすることとする

○吉村) シンポジウムに、グラフィカルな形で議論を開いてもらう「グラフィック・ファシリテーター」に参加してもらってはどうか [提案]

⇒ 検討することとする

◆連携機関同士の協力による原画の初出データ調査について

○横手市増田まんが美術館が所蔵している原画資料のうち、

【「モデル開発研究部会」研究会】

◆タイプ別モデル図について

○これまでの研究会や調査、プロジェクトメンバーの知見等を総合し、原画アーカイブのためのタイプ別モデル図を作成、ver. 1 を 2/10 シンポジウムでブラッシュアップし、ver. 2（最終版）を最終報告書に掲載することとする。

付録

○モデル図は、

- 1) アーカイブの段階を①収集②整理・保存③利活用の3段階に分けた上で
- 2) それぞれに3～4のパターンを想定し
- 3) ①～③のパターンの組み合わせによっていくつかの「モデル」が可視できるものとする。

○各段階のパターンとしては、

- ・「松・竹・梅」（アーカイブのための経費の多少）と、
- ・様々なタイプ

が考えられるだろう。

○「様々なタイプ」が想定されるのは「利活用」の段階で、例えば、

- ・原画展への出展
- ・販売物とする（原画マーケットの構築）
- ・「原画ダッシュ」の作成

など。

◆「問診票」について

○吉村）上記モデル図を使った「タイプ別」の“診断”とは別に、様々な質問を並記した「問診票」を作成してはどうか〔提案〕

⇒ 今後の課題とする

○誰のためのモデル図、「問診票」かを意識した形でモデル化を進めることとする。

想定される対象は、以下の通り。

- ・マンガ関連文化施設、一般の博物館・美術館など文化施設
- ・個人（作家、作家の遺族、ファンなど）
- ・業者（原画そのものを売りたいギャラリスト、原画を使った商品を作って売りたいメーカーなど）

以上

■ 5.2.2 マンガ家インタビュー部会 【インタビュー調査②】

報 告 書

作成日：2017/12/23

作成者：倉持 佳代子

研究会名：インタビュー部会「原画および原画ダッシュの活用事例の調査」

開催日時： 2017 年 12 月 10 日（日曜日） 14 時 00 分～17 時 00 分

場 所： 北九州市漫画ミュージアム

出 席 者：竹宮 恵子

大内田 英子（トランクライザープロダクト）

京都精華大学国際研究センター 吉村 和真

京都精華大学国際研究センター 伊藤 遊

京都精華大学国際研究センター 倉持 佳代子

京都精華大学国際研究センター ユー・スギョン（アドバイザー）

横手市増田まんが美術館 美術館チーフ 大石 卓

議 題： 竹宮恵子展での原画および原画ダッシュの活用方法の調査

北九州市漫画ミュージアムで開催していた「竹宮恵子 カレイドスコープ —50th Anniversary—」展の調査を実施した。本展では、原画ダッシュが出展物となっており、原画ダッシュおよび原画を展示することについて竹宮氏に話を聞くことができた。以下、特筆事項のみ箇条書きする。

付録

- カラー原画はすべて原画ダッシュで展示。原画は一週間の展示で色が退色するため。
- モノクロは原画を出展。セロハンテープなどがすべて取り除かれていたが、それは竹宮氏の事務所ですべて取り除いたという。この繊細な作業にあたっては主にアピールカッターとラバーゴムを使用した。
- 原画ダッシュでは蛍光色や黒のツヤなどの再現は難しい。周りの色とのバランス調整で近づけるようにしている。
- 初期作の複製画コラージュがあり、サイズは通常の下稿サイズよりだいぶ小さなものであった。原画ダッシュのデータを使用して作成し、こうした別のものも作成が可能。
- 紛失した原画を再現した複製画もあり。こちらは出版社が所持していたポジフィルムを使用し、竹宮氏の記憶の下、色調整を行い、作成したものだという。
- 出展作品の選定はトランキライザープロダクトの大内田氏が主に担当した。
- 13：00～16：00 は「保存修復研究部会」も実施され、竹宮恵子氏が出席されているが、竹宮恵子氏のスケジュール的な都合により、同時に聞き取り調査に対応していただいたため。

以上

■ 5.2.1 保存修復研究部会 【調査④】

報 告 書

作成日：2017/1/11

作成者：米津 雅代

研究会名：マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発事業 保存修復研究部会

開催日時： 2017 年 12 月 19 日（火曜日） 11 時 30 分～16 時 30 分

場 所： 京都国際マンガミュージアム 会議室

出 席 者： 京都精華大学国際マンガ研究センター 伊藤 遊

京都国際マンガミュージアム 倉持 佳代子

京都国際マンガミュージアム 市川 圭

佐和 那々緒

東洋美術専門学校 保存修復研究室 小野 慎之介（アドバイザー）

東洋美術専門学校 保存修復研究室 松田 泰典（スーパーアドバイザー）

明治大学 米沢嘉博記念図書館 ヤマダ トモコ

明治大学 米沢嘉博記念図書館 アスペクトコア 米津 雅代

課 題：マンガ原画の収集、整理、保存、修復、公開について

内容：①原画に対する京都国際マンガミュージアムの対応

②書庫、収蔵庫の見学

③原画’（ダッシュ）の色合わせ見学

（以下、発話者敬称略）

付録

①ヒアリングおよびディスカッション

■収集

◎京都国際マンガミュージアム（以下、京都 MM）は、原画とそれに類する資料は現在何枚くらい保有しているか？

伊藤→最初に預かったのはかけこみ寺として大友朗先生。

市川→※原画整理担当者

ストーリーマンガ作品 A 約 11,000 枚

杉浦幸雄先生 約 12,000 枚

中島菊雄先生 約 500 枚

大友朗先生 約 3,000 枚

中井観邦先生 128 枚

谷ゆき子先生 約 70 枚

◎マンガ原画を収集保存、あるいは預かって収蔵しているか

伊藤→積極的に収集していない。

京都 MM は、原画よりも本や資料を収集していく方針で設立された（収蔵数は雑誌と単行本で約 30 万冊）。

元々、保管場所や設備がないので受け入れた原画も貴重資料（虫食いや紙質の悪い古い資料）の収蔵庫に無理矢理入れている状態。原画¹（ダッシュ）¹もそこに保管しているが、もうキャパシティがない状況。

こちらが積極的に集めたというよりは、著作権者が原画の扱いに困り、相談を受けた時に受け入れている。原画を捨てなければならない、という切羽詰まった状況をうかがい、急遽受け入れた、「かけこみ寺」的な理由が多い。

◎貴施設におけるマンガ原画収蔵の基準について。

伊藤→設立時に収蔵を想定していなかったので、特に基準はまだない。

雑誌や本の寄贈と同様に覚書のようなものは準備している。例えば、当館より条件の良い施設にゆくゆくは移管する可能性があるなど、一般的な寄贈の条件を覚書にて伝えている。

◎過去、寄贈の申し出の有無。

伊藤→今までに 10 件ほどあった。最近では大阪の某先生。他、福岡の作家さんは、北九州市マンガミュージアムに紹介したこともある。マンガ原画だけでなく絵本作家の原画やイラ

¹ 原画¹（ダッシュ）とは

「コンピュータにマンガ原稿を取り込み、綿密に色調整を重ねた上で印刷した、精巧な複製原画のことです。描線の濃淡や色彩の階調など微妙な細部まで再現し、原画と並べても見分けがつかない程の精度を持っています。原画ダッシュの研究は、マンガ「風と木の詩」「地球へ…」などの作者で、京都精華大学マンガ学部教授の竹宮恵子を中心となり、退色しやすいデリケートなマンガ原稿の保存と公開を両立させるために開発され、現在では、京都精華大学国際マンガ研究センターと共同で研究を進めております」（京都 MM ホームページより）

付録

ストの持ち込み相談もあった。

◎寄贈申し出を受け入れられなかった場合。その理由など。

伊藤→基本的には受け入れを断っている。買い取りの依頼もあった。コレクターが持っているものは著作権の問題もあり難しい。

◎収集したことがある場合。収集する際に困ったこと。

伊藤→収蔵庫があふれているので場所の確保。

寄贈や寄託を受け入れる条件で価値付けをこちらでしなければならない時がある。

「著作権者が捨てようかと判断したぎりぎりの状態の原画」しか受けいれないので原則的には保険をかけない状態で預かる。例外で条件に保険加入が必要だったとき。価格を決めると資産になってしまうので税金の問題が発生する可能性もある。

倉持→引き取りに伺った際、ダンボールが腐っていた時。現場で崩れてしまいバラバラになる。事前にダンボールを用意する必要があると思った。

他の作家の原画が混ざっていた場合があった、その場合作家の調査に時間が取られる。貰ったのか出版社が間違っていて返してきたと思われるが調査しても分からない場合が多い。

古いものは、雑誌が揃わないので初出調査に難航する。

原画を受入れる際、どこまで貰うかも悩ましい。杉浦先生の場合、スクラップブックももらうか迷ったが、初出調査に役立つのではということでそれもいただいた。それゆえ、原画よりそうした資料が多かった。杉浦氏が使っていた机は貰うことを諦めたが、素描、ネーム、道具まで手を伸ばすべきかどうか悩んだ。最終的に合計約 30 箱引き取った。

◎収集してよかったこと、得られたこと。

倉持→谷ゆきこ先生のケース。「バレエマンガ展」の展示で紹介したことから、現存する数少ない原画の寄贈を受けた。（現存する谷ゆきこ先生の原画は、花村えい子先生宛てに出版社が誤配したものであった。）谷ゆき子の原画を紹介するミニ展示なども行い、原画からの復刻ではなかったが、復刻版が出版された機運を作る一端になれた。

伊藤→小寺鳩浦の資料を伊丹市立美術館、大阪府立中央図書館国際児童文学館などで寄贈分担を行い、屏風や手書き日記は美術館。本は京都 MM と児文館、他にも机や道具、地図などを分担した。絵手紙交換会が流行っていた時代の資料なので面白い資料だった。写真や手紙は歴史検証資料として大切。

原画を集めることで書籍資料の資料価値が上がる。原画と書籍を他館と共同で別々に集めることも考えている。

■整理

◎整理のイメージについて。

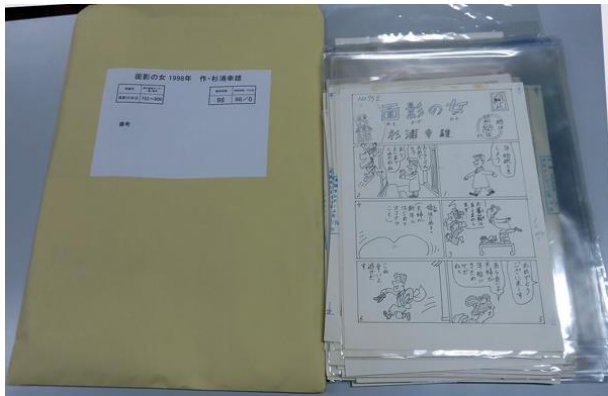
伊藤→物により違う。

市川→最初から整理されていた原画の場合は単行本ごとに順番通り整理されて入ってきたので、足りないものを補完するくらいで済んだ。(約 20 箱分)

ある程度まとまっていたが順番がバラバラだった場合。連載が 1 話 4 頁と細かかったが、たまたま京都 MM に掲載誌が揃っており、やらない予定だったが 1 話ごと封筒に分け撮影してから文化庁のメディア芸術データベース（文化庁 DB）に入力した例もある。

◎マンガ原画をどう整理しているか、具体的にどのような工夫をしているか。

市川→写真（スキャン）データと封筒の表書きには巻数を入れ、文化庁 DB と照合できるようにしている。原画は 1 枚ごとに OPP 袋に入れてはいない、封筒も中性紙ではない。現状、写植が落ちているもの、ベタベタしているものだけは OPP 袋に入れている、間紙も入っていない。杉浦先生の原画の場合細かいものは調べないで、年ごとか 1 話ごとかの単位で整理。伊藤→どこまで整理をライトに出来るかを考えている。



◎カード（台帳）などの具体的な工夫について。

市川→台帳や作品カードなどは作っていない、文化庁 DB に入力したものが整理用の記録として残っている。

付録



原画整理をしている様子

◎使用用語について（別紙「用語ゆれ」参照）

佐和→予告カットなどの言葉は使っていない。まだ整理が進んでいないこともある。

ヤマダ→「総扉」は秋田も当館も使っているが

伊藤→今のところ一番整理が進んでいる米沢嘉博記念図書館で決め、皆に共有するというの
でよいのではないかな。

付録

◎カラーの表記問題

ヤマダ→他館の話などを聞くにつけ、結局原画は、モノクロですら指定の赤や水色が入っていたりしてカラーといえはカラーなので、マンガ的にはどんなページ用に描かれたのかがわかれば基本よい。なのでカラー・2色・モノクロの3つに分けるので便宜上はよいのではないかな。

市川→杉浦先生の場合は色指定にしているものもあった。

■保存

◎原画とは何を指すか。貴施設における基準について。

伊藤→ネームは原画だが、それをコピーしたものは原画ではないと考える。

佐和→杉浦先生の絵のなかに個人的に描いたものがある。それは「未発表原画」なのか。

◎原画の付属物について。

本文原画と分離しているタイトルロゴ、トレーシングペーパー、原画の入っていた封筒など、どのように扱っているか。あるいはどのように扱うとよいか。

伊藤→基本的には届いたものは全て残しておきたい。剥がれた写植も封筒もカバーしたトレーシングペーパーも残しておきたい。それがあることにより完成しているのではないかな。

◎保存の際参考にした施設、書籍、アドバイスなどあれば。

伊藤→建物の作り方に関しては、前事務局長の上田さんがある程度整えたのでは。原画を集める想定はしていない、和綴じの本はあるかと思っていた。マンガはおそらく文学館や公文書館を参考にすれば良いのでは？

■修復

◎これまで修復作業が生じたことがあるかどうか。

伊藤→絵は無い、ばらけた本を司書が和紙で修復している。原画と共にあった資料が傷んでいた時は、のりで貼ったことはある。開架のものは普通の図書館のようにしっかりと治している。

◎複製を作成する際の基準、京都 MM では原画'（ダッシュ）。マンガ原画を複製する場合は、何に色味を合わせるのがよいか。経年変化した原画か、初出の際の印刷物か。

倉持→原画' は、その時点のものに色味を合わせている。

◎以下、質問項目にないマンガ原画の保存・修復全体を考えるやりとり

付録

小野・松田→マンガの原画の全体を今考える理由は。

伊藤→ここ数年のうちに、大物作家が原画の先行きを考える機会が増えていくと思われる。そこで今、保存方法を考え伝えたい。マンガに関しては雑誌の管理は知見が積み重なってきているが、「原画」はまだ未知数である。

扱いがわからないうちに廃棄されたり、海外に流出したりなどで、原画が失われる前に、今、着手するべきではないかと考える。

また、保存についてだけでなく、いろんな意味でマンガ原画を扱える人を増やさなければいけないと実感している。

小野→原画を集めることのスタンスがそれぞれ違うので、どのレベルで残すかのコンセンサスが出来ていない。原画を集める発想自体がここ数年のうちに出来たこと。紙などの保存・修復に必要なのは科学。100年残すなら科学者達に協力してもらわねばならない。脱酸コストなど、これから10年、100年を目指すのかも含め実際保存するには段階（グラデーション）を提示し考えていかねばならないだろう。1人の作家さんの中で、どの原画が大切なのかを考えられるかなどが重要。

伊藤→保存修復作業に、使っていた素材や道具の話が重要ならば、実はアシスタントの話を聞くのが重要なのでは。表現の方法などの話に関しても。また、保存に関しては大物作家さんに関してはプロダクションから話を聞くのが重要かも。

京都 MM の客層はライトなファンが多く原画を鑑賞することを楽しんでいる人は少ないかも。

小野→原画を残さなければいけない理由はあるか。

ヤマダ→長くマンガ展示に関わってきて、展示を見に来る人が喜ぶのは、作家が実際に自分の手で描いたものである原画の展示が喜ばれる。原画、作家が実際に描いている映像など、その流れで実際の作品が読めるという形になっていると観客の満足度が高いという実感を得てきている。

小野→印刷物としてのマンガしか見ていないときは、それを保存するということの意義が見えなかった。だが、マンガ原画の保存について考えたいという学生があらわれ、マンガ原画に触れるようになってはじめて、そのマチュールのよさなどを感じ、保存すべき原画なのだと感じた。

松田→このままでは、マンガ原画は100年先には残らないのではないかと危惧する。うち

付録

の学校で扱わせていただいたある先生のマンガ原画（60 年代頃から 80 年代までの原画）の pH は、オレンジジュースと同じかそれ以上だった。10 円玉を置くとピカピカに変化するレベル。中性紙の発想は 80 年代からだ、おそらく中性紙を使ってマンガを描いている作家はいないのでは。OPP 袋もその内ガスが出るのでは。

ヤマダ→50 年を超すマンガ原画を扱ってきたが、経年劣化による黄ばみ、セロテープ跡のシミなどあるといっても、すぐにどうにかなりそうな感じはしなかった。それはつまり、あるとき急速に劣化が始まるということか。

松田→マンガ原画はある時突然自己崩壊し、ボロボロになると予想する。保存は化学。本はもっと早くダメになるのではない。データにしてもメディアがダメになる。可能であれば現物を保存するに越したことはない。現状、脱酸すると資料は約 3 倍持つようになると予測されている。

参考：プリザベーションテクノロジージャパン

<http://preservationtechnologies.jp/overview-jp.html>

小野→図書館では復刻版を出すよりは、現物を残すほうがコスト面を含め将来的にはよいと、脱酸処理をし、雑誌の保存等を他館と共同で行いはじめているところもある。脱酸スプレー等、脱酸処理をするためのものもすでにある。スプレーはアルカリ成分を付加するので、粉っぽくなるが。

マンガ原画を扱う側一同→ 一瞬絶句

ヤマダ→…であればコスト的にも全てのものを保存することは出来ないだろう。後世まで残す原画と、複製を作るものとはある時点で確かに判断しなければいけないということか。

伊藤→作品の完成形は発表された時のものつまり雑誌や単行本に印刷されたものなので、マンガは一点物の絵画などより雑誌や単行本のプライオリティは高い。が、複数存在する可能性が高い雑誌より、原画の保存を考えることのほうが急を要する様に思う。「マンガ原画」の保存を考えることを通して、マンガ文化の価値を理解してもらいたい。

松田→「マンガ原画保存 100 年計画」といった事業を立ち上げたらどうか。

全体の総意→ともあれ、マンガ原画が失われる前に、今、その保存管理について考えるだけでなく、何か行動を起こすべきではないか。それにはまず、多方面との情報の共有が必要で

あろう。

■公開（利活用） ※伊藤氏所要のため退席。公開については倉持氏の回答

◎原画展示の際、トレーシングペーパーなど付属物はどう扱っているか。

倉持→トレーシングペーパーは裏に回している。

◎額装の際、どんな額を選んでいるか。

倉持→館に所蔵している額を基本使用。展示のコンセプトやスペースに合ったマットや額にしている。特殊なサイズの時は作る。基本「白」「シルバー」「黒」。他の展示で使っているものとも調整しつつ考える。

原画'（ダッシュ）の額は竹宮先生が選んでいる。マットは茶系、額は銅（ブロンズ）系。サイズは大衣（50.9cm×39.4cm）、三々（60.6cm×45.5cm）。保存の際はマット装したものを中性紙で包み、借用日、返却日、担当者が記入できる「使用リスト」をつけて保管している。原画'（ダッシュ）は出入りが激しいので「使用リスト」でダブルブッキングも防げる。他館に貸出する時は、額装した状態で渡すほうが喜ばれることが多い。

◎UV 問題について。紫外線に対する対策を何かしているか。照明の設定など。

倉持→会場の照明はLEDにしている、ハロゲンライトは止めた。原画整理の部屋は蛍光灯。

カラーの原画は80ルクスを超えてしまう場所はあるが100ルクスは絶対超えないようにしている。状態が悪いものや劣化しているものは暗いと言われるが浮世絵並みに50ルクスに設定している。モノクロは100ルクスくらいまで、長期展示の場合は様子を見ながら下げたりもする。

展示会場の温湿度調整は湿度50%前後、室温20℃くらい。急激に上がったり下がったりしないように配慮している。以前は各会場の室温時計の確認を目視でしていたが、今は遠隔で確認できるシステムになった。急激な変化があれば連絡があり会場の空調を調整。そのシステムを使っていない会場は巡回のスタッフが確認している。

◎他館よりの質問

・新潟市より

自治体としては、公費を使用し保管して収集するからには、公開をどのようにするのか、市民還元への道筋はできるのか、という問いかけが必ず出てくる。この問題どう道筋を立てるのが課題である。

そのため、原画を預かったときその後の活用はどうなるのかが問題になる。原画を預かって著作権は作家（著作権者）にあるので勝手に使用することはできない。それらは条件設定次第だと思うが、現在実際に原画を預かって活用している他館ではどのような条件設定をして原画を預かっているのか。展示だけならばよいのか、展示以外にも無償の広報やPRにも

付録

使っているのか、どこまでメリットがあるのか、説明ができる事例があったら今後もう一段話を進める参考になるのだが。

また、1つの作品にたくさんの人が絡んでいる場合、研究・活用しようとしても権利関係が複雑に入り組んでとても難しいが、そういったものを整理することをどう考えるか。どのように行っているのか。

倉持→著作権に関しては著作権者が亡くなった後について考えが及んでおらず、誰に譲るのが必要な例がそろそろ出てきている。今後は最初からそこを視野に入れて書類を作成していく必要があるだろう。原画’でも同じ問題を抱えはじめている。

大勢の作家さんに原画’に参加していただくことで、ジャンルや集合体で人が呼べる展示やパッケージを作ることができる。集めることが出来たものをどう系統づけるかが大事。それが館の目玉の資料になるのではないかな。

原画’過去の展覧会：<http://imrc.jp/project/past.html>

②書庫、収蔵庫の見学

◎書庫



以前は来館者も観れるようにしていたが、エレベーターがついていないこと、収蔵品の量が増え見学の通路を確保できないことなどで中止した。

◎収蔵庫

収蔵庫では桐箆笥に貴重資料、原画’、展示するための原画を一時的に預かっている。そのスペースの約三分の一に受け入れた原画を収納している。

収蔵庫は温湿度の管理、入室者のチェックを行っている。

付録



桐箆笥では貴重資料の保管をしている

江戸期の錦絵



原画ダッシュの保管



展示で使用する原画や資料などの一時保管

付録

③竹宮恵子氏による原画ダッシュの色合わせ（色校正）見学



いつも同じ机、照明の環境下で色味や濃度を比べチェックする。3回ほど繰り返し原画に合わせていく。カラーよりモノクロのほうが難しい。

その時点の色味を複製制作する、写植が落ちたものもそのまま、ホワイもテープのシミもオリジナルのまま複製する。

年間約 60 枚、裏側に作家の著作シールを貼っている、大々的には販売していない。

マンガ関連施設を代表する施設が京都国際マンガミュージアム。マンガに関するあらゆる課題がもちこまれる館であり、それはマンガ原画の収集保存に関しても例外ではない。本来資料中心の収蔵を目的としているが、近年マンガ原画の保存と利活用について考察していくことにも必要性を感じ、積極的に取り組んでいる。

付録

京都精華国際マンガセンター

原画' (ダッシュ) プロジェクト : <http://imrc.jp/project/>



1



2

©原画に貼り付いていたテープを剥がす作業 (竹宮恵子氏実演)。

1 「アピールカッター」 でテープを少しずつ剥がす。

2 「ラバークリーナー」 を切ったもので残ったベタつきを擦り取る。

参考) アピールカッター (テープはがしカッター)

ラバークリーナー <http://www.fukuoka-ind.com/products/cleaner/cleaner.html>

以上

2018 年 1 月 18 日

出張報告書

所属機関 東洋美術学校
所属部署 保存修復研究室
氏名 松田 泰典
小野 慎之介

出張を下記の通り行いましたので報告します。

記

1. 研究種目 平成 29 年度メディア芸術連携促進事業
2. 申請区分名 連携共同事業
3. プロジェクト名 マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発
4. 用務地 京都市中京区烏丸通御池上ル
5. 用務先 京都国際マンガミュージアム
6. 出張日程 平成 29 年 12 月 19 日（1 日間）
7. 用務について 以下用務概要

◆12 月 19 日 11:30-16:30 (4h：途中 1 時間は原画ダッシュの色校視察)

場所：京都国際マンガミュージアム内研究室

メンバー：京都精華大学国際マンガ研究センター 研究員 RA 伊藤 遊

京都国際マンガミュージアム プロジェクト研究員 倉持 佳代子

明治大学 米沢嘉博記念図書館 ヤマダ トモコ

明治大学 米沢嘉博記念図書館 米津 雅代（書記）

東洋美術学校 保存修復研究室 松田 泰典（アドバイザー）

東洋美術学校 保存修復研究室 小野 慎之介（アドバイザー）

京都マンガミュージアム設立の経緯について説明を受けた後、現在主導されている原画保存事業に対するスタンスについてお伺いをした。その中で、マンガ雑誌や原画の保存について我々の基本的な考え方を説明した。

東美：マンガ原画保存に従事されている方々から話をお聞きし、幾つかの課題を解決しなけ

ればならないことは理解できた。ただ一つ我々のスタンスと大きく異なっていると感じたのは、マンガ原画の保存年限についてである。永年保存の考えを持ち出さなくとも、100 年先でさえも楽観視できないと我々は考えている。もしかすると皆さんの中には、デジタルデータに変換すれば、保存に関わる多くの問題が解決できるという考えがあるのかもしれない。ではなぜマンガ原画が保存の対象とされる位置にまでに上ってきたかといえ、それがもつ物質的価値をファンが無意識的に感じ取っているからで、印刷物やデジタルデータでその代用が効くのであれば、そもそも原画展にこれだけ多くの人が足を運ぶ状況は説明できないはずである。故にオリジナルの現物保存が行えて初めて、デジタルデータの有用性や複製を用いた活用のあり方について議論する環境が生まれると考えている。

また 100 年という時間を一区切りと考える理由だが、それは書籍や紙資料の保存の歴史の中で大きな問題となった「酸性紙問題」があるからである。19 世紀に木材パルプを導入した大規模製紙技術が確立し、更にそこに内添サイズ剤としてのロジンサイジングの技術が合わさることで、短期間のうちに紙が劣化する状況が決定的なものとなった。これは碎木パルプに含まれるリグニンやロジンサイズを繊維に繋ぎとめるために加えられていた硫酸アルミニウムが主な原因であったが、これらの使用された紙資料は 100 年も経たない 20 世紀初頭には甚大な被害を受けることになった。日本では 1983 年に国立国会図書館が所蔵資料の劣化調査を実施したが、やはり 19 世紀後半より刊行された図書の劣化が著しいことが分かった。ここで問題となったのは、資料の劣化に関わる要因が保存環境によるものだけではなく、それを構成している素材の影響が大きいということである。刊行されてからの経過時間が問題なのではなく、どのような物質から作られているのかが保存に大きく関わっている。数十年前に作られたものが、数百年前に作られたものよりも容易に劣化する現象が実際に起こったのである。

京都 MM：100 年先も難しいとのことであるが、なぜそのような確信があるのか？

東美：それは既に人類が経験した歴史だからというのが一つある。これに対して、包材の中性紙化や保存環境の整備だけで対応することは難しいと思われる。マンガ原画をみると、特に 1980 年代以前の作品についてはほぼ 100%酸性紙が使用されており、更にこの酸性劣化を助長するようなトレーシングペーパーの類（硫酸紙と思われる半透明紙）や天然ゴムと天然樹脂からなるセロハンテープ、同様に天然ゴム系の接着剤、また金属の腐食の原因ともなる塩化カルシウムを含む墨汁などが至る所に使用されており、長期保存を意識した制作がされていないからである。更に、このようなマンガ原画を 100 年先にまで受け継いでいこうとするのであれば、今から何をしなければならないのか考えていく必要があるが、そのような保存の意識は残念ながら熟成されておらず、この点にも強い危機感を感じている。

付録

京都 MM：我々の中でも保存に対する意識には差があるが、大量にあるマンガを美術品と同等に扱おうとするのは難しいと思われる。具体的にはどのような保存のためのアプローチが考えられるのか。

東美：どの程度の規模で実施するかという問題があるが、一つのアプローチとして、例えば脱酸性化処理については検討する必要が出てくるのではないか。これは紙中に存在し繊維を劣化させる酸性物質にアルカリ成分を導入し中和化する方法で、更に余剰なアルカリリザーブを残すことで、外部環境からや繊維の劣化により作り出される酸性物質からの将来的な攻撃に備えようとするものである。大量脱酸化処理技術は大きく分けて気相法と液相法があるが、国内では日本ファイリングが DAE 法（乾式アンモニア・酸化エチレン法）による気相処理を、プリザーベーション・テクノロジーズがブックキーパー法による液相処理を行っている。気相法は前処理の必要はないが、変色の問題と残存する匂いの問題があるとされ、また専用のチャンバーで行う必要があるため少々大掛かりである。ブックキーパー法は酸化マグネシウムの微粒子をパーフルオロヘプタンに分散させた特許技術だが、ここに資料を浸漬させて上下左右にゆすりながら紙中にアルカリリザーブを浸透させる。そのため大量に処理するには補修などの前処理を必要とするが、スプレー缶タイプのものも市販されており、多少割高にはなるが、少量の資料に対して現場での処置も可能である。

京都 MM：それを今回の原画 PJ の中で実施することができるのであれば、その効果を確認してみたい。

東美：スプレー缶タイプのものを保有しているのでデモンストレーションを行うことはできるが、その効果については時間が経ってみないと分からないものでもある。視覚的には、酸性紙の pH が 7 以上に上昇するはずなので、これによりアルカリリザーブが紙中に残存していることを確認して頂けると思う。

また本校で実施する研修会でも少しお話させていただくが、作品の状態に合わせた適切な保存対策を実施していく必要がある。例えば中性紙の保存箱がそうであったように、今ここで挙げた脱酸性化処理なども、これさえすれば全て解決だと方法論が独り歩きするのは危険である。作品には様々な素材が使われているが、例えば紙一つとっても、一人の作家で、あるいは 1 話単位でも、様々な紙が使われている。作家はより使いやすい画材を常に見ているが、それは描き味としてだけでなく、素材としても異なるものである。世の中には本当に多くの種類の紙がこれまで製造されてきたが、その成分も実に様々である。当然そこには保存に不向きなものもあり、それが保存箱や脱酸処理で解決できる問題なのかは、よく調べる必要がある。往々にして万能な解決策というものはないものである。

以上

■ 5.2.1 保存修復研究部会 【研修会】

報 告 書

作成日：2018 年 1 月 29 日

作成者：櫻井 壽人

会議名：「保存修復研究部会」研修会

開催日時： 2018 年 1 月 27 日（土曜日） 10 時 45 分～18 時 45 分

場 所： 東洋美術学校 D 棟学生ホール

出 席 者：

小野 慎之介 東洋美術学校 保存修復研究室 室長代理

松田 泰典 東洋美術学校 保存修復科・教育研究スーパーバイザー

伊藤 遊 京都精華大学国際マンガ研究センター/メインコーディネータ

倉持 佳代子 京都国際マンガミュージアム/プロジェクト運営補助

大石 卓 横手市増田まんが美術館

ヤマダ トモコ 明治大学 米沢嘉博記念図書館

表 智之 北九州市漫画ミュージアム

吉田 敦則 文化庁文化部芸術文化課支援推進室メディア芸術交流係 研究補佐員

末吉 覚 大日本印刷株式会社 ABセンター マーケティング本部
アーカイブ事業推進ユニット 部長

鈴木 守 大日本印刷株式会社 ABセンター マーケティング本部
アーカイブ事業推進ユニット 課長

岩川 浩之 大日本印刷株式会社 ABセンター マーケティング本部
アーカイブ事業推進ユニット

ユー・スギョン 京都精華大学国際マンガ研究センター 研究員

渡邊 朝子 京都国際マンガミュージアム 司書

付録

市川 圭	京都国際マンガミュージアム・日本アспектコア株式会社
佐和 那々緒	京都国際マンガミュージアム・日本アспектコア株式会社
米津 雅代	明治大学米沢嘉博記念図書館・日本アспектコア株式会社
新美 琢真	明治大学米沢嘉博記念図書館・日本アспектコア株式会社
鈴木 紀成	明治大学米沢嘉博記念図書館・日本アспектコア株式会社
松川 ひとみ	一般財団法人横手市増田まんが美術財団 職員
中込 大介	東洋美術学校 副校長
小林 雅志	東洋美術学校 企画広報部 副部長
赤坂 雅華	東洋美術学校 企画広報部
水落 貴志	東洋美術学校 内部職員
牧野 あやこ	東洋美術学校 外来講師

櫻井 壽人 京都精華大学 事務・日本アспектコア株式会社

議 題：テーマ《人と人の目以外で見る、マンガ原画の素材と保存状態》

会議内容：

10：45 研修会開始

- ・ 冒頭挨拶 中込大介 東洋美術学校 副校長
- ・ 司会・研修会運営 小野慎之介 東洋美術学校 保存修復研究室 室長代理
松田泰典 東洋美術学校 保存修復科・教育研究スーパーバイザー
- ・ 事業全体説明 伊藤遊 京都精華大学国際マンガ研究センター/メインコーディネータ
- ・ 参加者自己紹介

○ 10:55～12:05「保存修復研究部会」活動報告

発表者：ヤマダトモコ 明治大学 米沢嘉博記念図書館

今年度は「マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発」として活動をしております。各連携機関のメンバーの中では原画 PJ という呼び方で活動を行っており、今年は実質 3 年目の活動を行っています。

この部会は、収集保存の今後の方向性を検討するため原画の保有機関を取材し、また、専門科のある東洋美術学校の知見もお借りして、原画の保存について多面的に研究したいという目的で部会を立ち上げました。連携機関への調査だけでなく、連携機関ではないがマンガの機関を市内に 2 つ持っている新潟市の関係者の方や、実作者への取材をするため京都精華大学学長であり漫画家であり、原画ダッシュという活動から原画の活用を検討されている竹宮恵子氏への調査を行いました。

それでは、「保存修復研究部会」の部会長として、今年度の活動の経過報告をさせていた

付録

できます。

資料①②③にて報告内容をご確認ください

・ 質疑応答

質問 1

鈴木：保存から利活用へつなげるという活動は企業としても非常に興味があるのですが、商業的なことを考えると、気になるのはコスト面です。どうすれば調べることができますか。

ヤマダ：自治体であれば問い合わせると、必ず答えてくれると思います。

伊藤：昨年度までの事業でコストをアーカイブの方法に分けて検討した報告書が残っていますので、参考になると思います。

鈴木：保険料や著作権もコストとして上乗せされると思うが、そのあたりはどうでしょうか。

伊藤：保険をかけたいがどうすれば？という相談はよく受けるが、評価額を決めるのが難しい。

鈴木：保険会社に調査してみたが、あくまでも原材料費として評価するという回答であったが、それでは本質的に保護になっていない。

伊藤：作者の方に聞くと考えたこともないという回答が多い。出版者に聞くと原稿料の何倍という評価をするみたいだが、原稿料を知らない我々には見当がつかないので、目安を提示するくらいしかできない。

ヤマダ：画一的に数値化していいかどうかは、今後の大きな課題。

質問 2

伊藤：横手市増田まんが美術館の大石さんにお聞きしたいが環境資源としての活用は 2000 年代以降の動きからイメージできるが、教育資源にするという点で意見をいただきたい

大石：ダイレクトに原画そのものを使うのではないが、マンガを利用した良い例があります。

横手市の 1 月 1 日の市報をスマートフォンの画像でお見せしますが、郷土の複数のマンガ家さんに協力いただき、表紙の絵と紙面の挿絵を提供いただいた。実際に形になると、権利関係が気になるころだとは思いますが、その権利関係の処理もマンガ家さん自身にお願いしている。

ヤマダ：人気殺到と聞いています。

大石：住民の方から市報が届かないという嬉しい苦情もありましたが、見える形で貢献できた良い例だと思う。そのほかにも、市の施設の説明資料にマンガを使うことで、分かりにくいことを分かりやすく説明することができる。最初はこちらからやりたいことを提案することが多かったが、今ではマンガ家さんからの提案で色々な活動をしようと議論しています。また、市報で住民の方にアピールできただけでなく、市の職員が自分の市を振り返る良い機会にもなっており、関係無いと思っていた課がマンガを使えないか真剣に考えるようになった。

付録

た。

伊藤：マンガを活用するという言葉はいろいろなところで聞くことができるが、成功している例を見ると、複数の課が連携しているところであり、うまくいかないところは、一つの課だけでやろうとしているところだと思う。

※プロジェクターに横手市の HP より市報の画像を投影。

松田：非常に興味深い。市民の方の反応はいかがでしたか。

大石：マンガが老若男女問わず認知され、受け入れられていると思っていないので、苦情苦言は必ずあると思っていましたし、実際にお聞きすることもありました。一方、SNS 上では「横手市に住んでいて良かった」というありがたい反応を見ることができた。市報だと気づかず、子供宛の郵便だと思って渡したら、子供から「これは市報だよ」というような話も聞くことができた。なににせよ、大きなきっかけ作りになったことに意味があると思います。

松田：ふるさと納税などの返礼に利用できるのではないかな。

大石：原画・マンガという切り口でアピールできるのではないかなという動きは実際にあります。また、認知され始めたことで、原画・マンガを商業として活用するにはどうすればよいかなという相談を受けることも増えました。商業的になると橋渡しの役割になるが、そのように市を活用してもらえるとありがたい。特に今は目に見える形にすると伝達が非常に早いので、即効性があると思います。

— 昼食 —

○ 13:20～14:30 マンガ原画のコンディションチェック WS

講師：小野 慎之介 東洋美術学校 保存修復研究室 室長代理

劣化度評価方法・評価基準（資料④）を使用してワークショップの説明をいたします。2名1組になっていただき、お配りする原画を各評価項目に沿って点数を付けてください。（資料⑤）今回は人の目で判断するワークショップを行います。

劣化度を評価したいと思います。破れがあるかないか、どこにあるか等を「点数」で評価します。10枚以上を目標に点数をつけましょう。

その結果、原画ごとに保存状態が特徴付けられることになります。後で、各評価の検討を行い項目毎のばらつきを見ていきたいと思います。

各項目説明

脆化：紙質がどうかを評価します。触ってみてどうかを評価します。

変色：簡単なサンプルをつけていますのでそれを参考に評価をしてください。

汚損：作者がつけたものを汚れとするかどうか、難しい点ですが、原稿のあるべき姿を阻害している要素がどの程度あるかを評価します。

破損：物理的な損傷を評価します。

テープ：あるなしをまず確認。どこにあるか、ほかに影響を与えるかを考えます。

付録

特殊技法：マンガ原画特有の技法のことをまとめて評価します。

インク焼け：インクがほかのページに与えた影響を評価します。

滲み：あるかないか。水に浸っていないかどうかを評価します。

ホワイト変色：問題ありか無しで評価します。

※「ブリード現象」とは、ホワイトの下にある文字や線が染み出てくる現象を言います。

最近ではブリード現象を抑えたようなホワイトも市販され始めています。

ホワイト劣化：あるか無いか。損傷があるか無いかで評価します。

トーン：あるか無いか。ある場合は劣化していないかどうかで評価します。

写植接着：接着剤の状況の評価します。

写植変色：写植そのものの変色や銀鏡化して読みにくいものがどの程度あるかを評価します。

添付紙片：トレーシングペーパーや添付紙片があるか無いかを評価します。

折り目：あるか無いかを評価します。

※ 約 40 分かけて原画の評価を実施。

最後に、pH で言うと 2～3 となった、かなり劣化した図書を見てもらってワークショップを終わりたいと思います。

○ 14:40～15:45 原画保存のための基礎知識

講師：松田泰典 東洋美術学校 保存修復科・教育研究スーパーバイザー（資料⑥）

あらためまして松田と申します。「マンガ原画の保存科学」ということで講義を行いたいと思います。講義ではありますが、質問がありましたら、自由に申し出てください。

私は保存科学が専門で約 40 年研究をしまいいりました。簡単に略歴をお知らせします。最初は企業で研究を行っておりまして、その後、大学に移り 15～16 年勤め、エジプトの世界一大きな博物館の技術支援を 7 年しておりました。昨年度から、東洋美術学校で勤めております。

正直申しますと、マンガというのは今まで扱ったことがありませんでした。マンガは身近なものであり懐かしいものです。原画については、最近関心が高まり、海外からの関心も高いと聞いており、原画の展示会などが各地で行われていることも知っています。現在、原画をどう残しているかという大きな課題を突きつけられていると言っていると思います。研究を始めて、自分なりに理解していること、大事だと思っていることを共有させていただければと思います。

明治大学で昨年シンポジウムがありましたが、「保存」という言葉に興味を感じて参加しました。しかし、「保存」という意味に違いがあると感じました。これはよくあることで、保存といっても英語ではいろいろな意味があります。Conservation や Restoration、

Preservation などが、よく使われています。原画を保管されている機関の皆様にとっては、保存はアーカイブという意味合いが強いと思います。我々は原画の材質や構造に着目し、どのような原因で脆化したのか、どのような環境で今まで保管されていたか、今後どのように維持していくべきかを、科学的に解明することを目的としています。

先ほどお伝えしましたエジプトの博物館には触れることができない物があります。ツタンカーメンが奥様からもらったといわれる花束があります。これは触れないほど粉々になっておりますが、50 年前までは触ることができたと聞いています。痛み方の度合いは様々で今は大丈夫でも、この先は分かりません。どのように修復していくか、傷みを食い止めることができないかを考えます。それが、保存科学ということです。また、今ある材料が今後どのように傷むかを考えます。光を当ててみたり、温度を変えてみたりということもします。とにかく、今の状態を維持するためにはどうすればよいかを予防保存ということで考えています。

メディア芸術作品といわれるものにマンガ原画やセル画を挙げていますが、ほかにもたくさんあると思います。それぞれにどう貢献できるかを考えたいと思います。

まず、所有者や保管者がいます。出版社も大きな役割を担っていることも認識しています。それぞれの立場で、原画がどのように劣化していくのか、100 年後まで保存できるのかなどを、検討しなければなりません。そして、どう予防していくかも一緒に考えます。そうはいつても、保存科学の分野は、まだ発展途上であり、新しい技術が次から次に入ってきており、日々進化しております。

昨年度、佐藤さんという学生がマンガ原画の調査を行いました。その成果に基づいてチェックシートを作りました。ヤマダさんにも大変お世話になり、花村えい子先生の原画を題材として研究を行いました。まず、関係機関や関係者にインタビューさせていただきました。その後、花村えい子先生の原画に卒業研究として取り組みました。我々も少しは知識がありましたが、原画については画材の販売者や作家、出版社に聞いたりもしました。その中で、劣化の指標があることがわかりました。

原画材料について色々お話したいことはありますが、今日は特に「紙」について説明したいと思います。紙については、物理的な変化、化学的な変化、後天的な変化が存在していることが分かります。その保存環境についても、影響があることがわかりました。花村えい子先生の原画はクローゼットの棚を改造して整理されておりました。お恥ずかしい話ですが、マンガの原画を本学の生徒がテーマにするとは考えておらず、研究したいと聞いたときは正直戸惑いました。ただ、保存修復業界でまだ取り組んだ人はいません。日本で初めてだと思います。ここでこのように研修をやっているのも日本で初めてだと感じ、得がたい経験をしていると思っています。

まず、紙がどのように作られているかを考えます。材料の話、劣化の話、調査法の話、対策の話をしたと思います。

まずは、材料科学と劣化の話をしします。紙は紀元前 150 年前にできたという説が定説に

付録

なりつつあります。その前はパピルスだったり石だったり色々ありますが、紙は繊維をばらばらにして漉く作業を行います。材料も色々有ります。日本が楮（こうぞ）、雁皮（がんび）を使ったのは賢明だったと思います。この画像は正倉院文書ですが、1200 年以上もこの状態で存在してきたことをきちんと理解すべきだと思います。西洋で紙が作られたのは、日本よりだいぶ後の時代だと聞いています。木綿や麻のぼろを使って作っており、パルプ材については、その後に開発されました。

紙を書写用に使えるようにするためには、滲みを止める必要があります。和紙ではドーサ（ミョウバンと膠）、洋紙ではロジンを紙の中に定着させる方法をとりました。原料を煮熟、叩解して抄紙し整形し商品化という流れとなります。

原料に関しては、木が使われていますが、必要な強度によって木を使い分けています。主成分はセルロース、ヘミセルロース、リグニンであり、化学パルプではリグニンを薬品で除去しますのでその割合は低くなりますが、機械パルプではリグニンがそのままの含有量で残っています。マクロ、ミクロで書くとこのような図で表されます。セルロースはグルコースをチェーン状で並べたもので、長い鎖が上下に並んでおり、その間を接着剤のようなもので維持しています。多糖類に該当します。重合度は約 2,000 以上になります。リグニンが入っていると、新聞紙のように光が当たると茶色に変色します。

次に煮熟になります。まず木をやわらかくするため、アルカリの溶液で圧力をかけて煮ます。紙にするには、繊維を完全にばらばらにするため、叩いてほぐす作業をします。フィブリルと呼ばれる状態にします。和紙を漉いたことのある人がいると思いますが、網状のものに繊維を乗せて作ります。その後プレスして平らにし、乾かします。その後、磨きをかけてにじみ止めをほどこします。抄紙機は色々あると思いますが、私が見たものはかなり大きな機械でした。そのあと艶出しなどが行われ製品となります。

そこで注目したいのは添加物です。にじみを防ぐため、以前は、サイズ剤の定番はロジンと硫酸バンド（硫酸アルミニウム）でした。コスト面も考えて広がったようですが、かならず酸性紙になります。紙の寿命の問題が認識され、現在は中性紙になるように中性サイズ剤がよく使われています。酸性化の主原因は硫酸アルミニウムです。膠を入れることで必然的に混入されます。その結果、空気中の水分と反応して硫酸を生じ、紙を酸性化させます。酸加水分解といいます。

大学学部のころですが、実験で希硫酸を使ったことがあります。希硫酸がたまに飛び散って白衣（木綿製）に付くことがあります。最初は気づきませんが時間が経つと小さい穴が開きます。この穴はどんどん広がります。先生に聞くと、希硫酸が付いたところの水が蒸発すると、硫酸がどんどん濃くなり穴が大きくなったようです。スピードは違いますが、紙にも同じ現象が起きているのです。

バローという研究者が本の酸性度の調査を行い報告した内容では、エール大学の図書館では 1890 年代の蔵書の 89%が劣化したと報告しました。また、朝日新聞に図書の深刻さが掲載され、図書館の人たちを中心に注目されました。1985 年に国立国会図書館が調査した

付録

ところによると pH4.5 以下の図書が全体の 97%に達するという結果でした。右のグラフを見ていただくと、戦前・戦後の図書が劣化しているということが分かりますが、質の悪い紙が出回らざるを得なかったときの図書が劣化しているといえます。

国会図書館は pH6.5 未満を酸性紙とし、pH 6.5 以上のアルカリ領域にある紙を中性紙と呼んでいます。バローは質の良い紙を使うことを訴えました。1970 年代以降の多くの紙が中性紙で作られており全体の 80%前後が使われています。また中性紙といっても色々な種類があり用途によって使い分けられています。

しかし、中性紙であっても外的な要因で劣化は進みます。光、害虫、エアロゾル、温度の変化などがあります。有害物質で挙げますと、古いトレーシングペーパーなどはある時期を過ぎるとパリパリになります。今は品質の良いトレーシングペーパーもあるようです。また、封筒との接触、セロハンテープなどもあります。

セルロースの劣化としては酸加水分解（酸性化）と酸化が重要です。化学的説明になって恐縮ですが、酸化と酸性化の 2 つあることを意識して欲しい。酸性化はサイズ剤によって起きますが、酸化にも注目しなければなりません。本来、紙は水分を持っています。またその周りに光があり酸素がある。この 3 つがあると有機物は必ず酸化し劣化します。

続いて調査法です。実際にどんなことを調査するかを説明します。9 項目で調査します。1 つの方法で全てが分かることはありません。坪量、密度、強度、色・白色度・蛍光、化学成分、酸性度、不作為の混入物、重合度、どれくらい結晶化しているか等々が評価の指標となります。強度については何度も折り曲げたり、引き裂いたりを物理的に行い計測します。次に色を計るには CIELab などの評価方法で計測します。ハイパースペクトルという技術で画像を計測することもあります。次に化学結合の観点からフーリエ変換赤外分光分析という計測器もありセルロース、ヘミセルロース、リグニンなどの物質を対象にどのくらいあるのか、どのような変化をするのかを調べることができます。蛍光 X 線分析では含まれている元素を調べることができます。紙の場合はサイジング剤やアルカリ保持剤、不作為に入ったもの（鉄など）を非破壊で調べることができます。pH 測定では簡易な方法や機械で調べるものなど色々あります。平均重合度はどれくらいつながっているかを調べることができます。引張強さが 60%に低下すると平均重合度は 40~50%に低下するといわれています。結晶化度は、高いところと低いところ（アモルファス）が部分的に存在しているので、どこが高くどこが低いのかを X 線回析分析で測定できます。強度については強制劣化試験で強制的に劣化させることで調べることができます。

最後は、今まで話してきた紙の性質から、どのように劣化をくい止めるかを考えたいと思います。保存科学では、劣化の要因を突き止められれば、劣化を止める、劣化を遅らせることができます。サイズ剤による酸性化や酸化の問題などが分かってきました。酸素や水分、オゾン、オゾンはあまり知られていませんがオゾンは生活環境にたくさんあります。オゾンは酸化力が非常に強いです。酸性雨をご存知だと思いますが紙の中でも酸性雨と似た環境になります。カビ、害虫、封筒などの接触物も原因になります。

どうすればよいか。1つは中性紙製の封筒や中性紙ボードによる保存箱を使います。保存用の中性紙は現在、特種東海製紙しか作っていません。今後もずっと製造してほしいと思います。このような箱に入れておけば、様々な要因から紙を守ることができます。また、RPシステムという脱酸素剤を使う方法があります。酸化防止剤です。ガスバリア袋と組み合わせることで、袋の中の酸素を0%に近くして酸素と触れないようにします。特に傷みが酷いものには使っても良いのではないのでしょうか。水分は50%で維持してくれるので劣化することを防ぐことができます。脱酸性化処理として酸性をアルカリ性に処理する方法です。しかし、強度は回復できませんので、ご注意ください。また、強化処理というものも開発されつつあります。その中で今注目されているのが、セルロースナノファイバーです。まだまだ開発途中ですが、今後出てくるかもしれません。

まとめですが、一度預かった資料は、何があろうと保護しなければならない責務があります。しかし、どのように行うかは、技術や、アイデア、ストラテジー、コンセプトなどを色々検討事項はあります。現場で常々考えてらっしゃると思いますが、ぜひとも知識を結集して取り組みたいと思っています。そこで初めて、なしえるものだと思います。

参考文献を載せておりますので、興味があればお声掛けください。

○ 15:55～17:15 集計結果についての考察

マンガ原画の機器分析と多変量解析によるグループ化

講師：小野 慎之介 東洋美術学校 保存修復研究室 室長代理

マンガ原画のコンディションチェック WS で皆さんに点数をつけてもらったシートをまとめました。人によって評価は変わると思います。完全にそろえることはできませんが、その中でも人の目で見えることを大事にしたいと思っています。

色々な評価指標はあると思いますが、今回はアベレージと標準偏差をみて検討したいと思います。ばらつきを見ることで、指標自体の課題が見えてきます。標準偏差が大きい項目に注目します。標準偏差が比較的大きいものを取り上げると、4の原画に0.8というものがあります。接着剤が該当しています。0の人もいれば2の人もいます。剥がれについては評価が分かれると思います。また、後で考えると……という評価もあると思います。このようなことを繰り返すことで、指標や評価基準を見直し、ばらつきが大きい評価者へのヒアリングを行うことで、評価者の傾向を把握することもできます。また、1名で評価するのではなく、2名もしくは3名で評価するようにします。

結果として、チェックシートを使うことで、点数という指標で、その原画を特徴付けることができます。また、脆化が進んでいるグループ、劣化が酷いグループなど、同じ傾向をもった原画をグループとして見ることができます。このグループは製作年代や使用画材の似ている作品によって構成されていることが多いようです。

結論として、人の目だけでは分からない部分も多くありますが、人間の目で五感をフル活用して原画に向き合うことで感じた保存状態に対する「危険度」のようなものには、何らか

付録

の意味があると考えています。

ここからは、パワーポイントで説明を行いたいと思います。(資料⑦)

それでは、実際に WS で評価した原画をもう一度見て終わりたいと思います。

それでは、実際に **WS** で評価した原画をもう一度見て終わりたいと思います。

○ 17:15～18:00 応急的修復処置のためのデモンストレーション

講師：小野慎之介 東洋美術学校 保存修復研究室 室長代理

牧野あやこ 東洋美術学校 外来講師

それではメルクの pH ストリップという用紙を使用して紙の酸性度を測ります。これは色移りをしないので原画にはよいと思います。使う場合は水につけて使用します。水を使わないほうが良いのは確かですが、紙の水分では足りないので、水を使わないといけません。ブリザベーション・テクノロジー・ジャパンが発売している脱酸スプレーで脱酸性化処理を行います。これは無臭で速乾性です。そしてインクや接着剤、製本素材を劣化させません。特許技術なので他では売っていません。処理前と処理後で pH の変化を見ます。お断りしておきますが、効果が目に見えてわかるわけではありません。その効果が分かるのは数十年後・・・かもしれません。

処理前は pH3 くらいですが、処理後は pH7 の数値を示しています。しかし、アルカリバッファとして分散されている酸化マグネシウムの微粒子により、特に黒いインク部分などが白く曇ったように見える場合もあるので、気になるようであれば表面の粉をクロスで拭くなどするとよい。微粒子は数ヶ月で定着し、気にならなくなる。

続いて、脱酸素パックをやってみます。三菱ガス化学株式会社の RP システムを使います。RP システムは、A タイプだと水分も 0%に除去されるので金属などの保存には向いていますが、セルロース繊維など 60%程度の湿度が必要とされるような素材には、K タイプを使用します原画は紙ですので、その保存には K タイプを使用します。容量によって使う数は変わってきます。この処置をすると、高い脱酸素効果を得ることができます。3.11 の際に水に浸かった図書などに対し、一時的に劣化の進行を防ぐために使われたこともあります。また、その中の酸素が本当になくなった (0.1%以下) かを測るために酸素インジゲーターを入れます。色がピンクに変わると酸素が 0.1%以下になっていることを表します。

通常の袋では酸素を透過しますので、専用のガスバリア袋 (エスカルフィルム) を使います。(中が見えなくてもよければアルミの袋でも良い) その後、熱で圧着するか、専用の器具で空気が入らないようにします。

○ 18:00～18:45 フリーディスカッション

伊藤：最後はフリーディスカッションをしたいと思います。

松田：今日の研修で処置まで練習できましたが、どういう条件だったら使えるのか、使えな

付録

いのかを今後明確にしていく必要があります。まだ、応用の段階までは進んでいないというのが実情。本を対象にした研究が進められてきていますが、原画となると色々な材料が付属しているため、さらに進んだ研究が必要。簡単ではありません。

表：原画を濡らさないような大きな機械は存在しないのでしょうか。

小野：機械は存在します。また、実際には先ほどの脱酸スプレーでは水や有機溶剤を使用しているわけではないので濡れてはいません。そこがすごいところです。

表：各館で機械を持つことはできないので、国の機関として保有して、色々な機関が持ち込むようにできればよいと思います。

牧野：絵画の場合、裏面から処理をすることもあります。専門ではないので、詳しいところまでは説明ができないのですが、資料の性質に合わせて処理方法を変えることはできると思います。

ヤマダ：裏面で効果があるなら原画には利用できるかもしれません。

小野：スプレーは前処理が必要ないので便利ですが、それなりに高価なものです。他にも DAE 法（乾式アンモニア・酸化エチレン法）などの気相処理でも前処理の必要が無いものの、変色し、匂いが一部残るなどの報告もあり、それぞれの方法でメリットとデメリットがあります。優先順位をつける必要があります。

松田：原画の価値づけによって対応を変える必要がありますが、それは技術者側では分かりません。

伊藤：今後、是非科学的な難しい部分を担当してもらいたいのですが、こちら側は何ができますか。

小野：どう助けたいのかを判断してください。助け方はいくつかありますが、所有者が望まないことはできません。

表：劣化には様々な要因があることがわかりましたが、そのなかでも酸加水分解が一番良くないことはわかりました。マンガ家さんの手元に保存されているものに対し、どのように提案してあげることができますか。

小野：酸そのものが紙に内在している要因は処置をしないと対応が難しいです。外的な要因については個人でも要因に近づけさせないことはできるかもしれません。

松田：劣化については原画それぞれスピードが違います。急速に進むのであれば、早く処理しなければならないが、時間的に余裕が有るものであれば、後に回すという判断も必要かもしれません。その仕分けをしないといけません。

ヤマダ：科学的なことを考えると、実験が必要だと思います。その実験に参加してくれるマンガ家さんを探すという活動は我々にはできるかもしれない。また、深刻な状態のものは早く救い出してあげないといけません。

伊藤：最高の品質で保存をしてくださいと依頼すれば、できるのかもしれませんが、しかし、その代わりに 100 年間見ることができないのであれば、選択できません。利活用を見据えたレベルを設定しないといけません。どういう目的で保管するのかを考え、共有することが

付録

必要です。

ヤマダ：長く活動している先生の原画を年代別で検査できれば、分かることがあるかもしれません。年代ごとに対応を明確にできたら適切な対応方法が広がると思います。

表：無酸素パックにして状態が変わりません、となっても、パック越しに原画を見たくありません。額の中でも嫌なときもある。原画はパックで保存し、原画ダッシュを活用するというモデルは良いかもしれません。

松田：短期間だけ開けて、また無酸素パック戻すという方法もあります。

伊藤：我々の中では原画の大切さを共有できていますが、科学者と共有できているわけではありません。共有する努力が必要です。

ヤマダ：原画の価値を知ってもらうには、見てもらわないといけません。100年後も残したいといえる原画を見てもらう必要があります。

表：書き損じ原稿や買って使わなかった原稿用紙などが残っていませんか。

大石：検査の対象は、たくさん提供できます。貸本時代からの資料があります。時代の長さや、マンガ家さんによって使っている原画も違いますが、幅広いものを提供できます。

表：欲を言えば同人誌の原画も集めたいですね。

伊藤：科学者の目線で、どういうタイプの検査対象がほしいかを言ってもらい、我々は理想を説明し、一緒に考えていけたらいいのではないのでしょうか。やりたいことがいっぱいあると思うので、是非言ってください。

小野：基本的に非破壊で行い、赤外線という光だけを使って評価をしました。正直言うと、もし壊すことができれば、今のデータが更なる裏づけを持って提示できます。例えば切ることができれば、切ったときのデータをとることができます。

松田：今あるデータはかなりの精度だと思っはいますが、裏付けする破壊試験の結果があれば、さらに信頼性が増します。

小野：その結果が、本当の意味での非破壊検査につながると思います。ヨーロッパでは図書のデータで破壊検査の結果も踏まえてモデルを作っています。

松田：アラブ圏の本でも検査を実施していて日本でもやらないかと打診はきています。ロンドン大学の先生が中心となっはじめたと聞いているが、企業も入ってきています。未来の劣化も分かるような夢の機械が実現に向けて作られています。

大石：是非ご相談いただければ、提供できるようにいたします。

倉持：どのくらいの数があればよいですか。色々なマンガ家さんに会う機会あるので、そのときに聞くことができます。

小野：多ければ多いほうが良い。また、年代や素材の幅が広いほうがモデル作りのためには良いです。

伊藤：捨てられるより先に集めるというインフラ作りを考えていますが、100年というスパンまでは検討できていません。今を何とかしたいという状況です。

小野：先ほどお見せした保存計画のマトリックスを念頭に、今とこれから、両方考え、それ

付録

それぞれの活動がどの部分へのアプローチなのかを意識しないといけません。

ヤマダ：佐藤さんから相談を受けたときに、逆に、今保管している原画をどうすればよいのかという疑問が生まれました。駆け込み寺的に集めることを最初の目的としてきたが、集めたはいいが、劣化してしまったのでは意味がない。この気づきを共有したかったので、部会の立ち上げを提案しました。

伊藤：一旦、今日で保存修復研究部会の活動は締めという形となります。この活動をこれからも継続したいと考えておりますので、引き続きよろしくお願いいたします。

○ 一同：ありがとうございました。

資料一覧：

資料① マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発事業 原画保存研究部会 報告

マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発事業 原画保存研究部会 報告

2018年1月27日（木） 於：東洋美術学校

発表者および記録：ヤマダトモコ（本部会部会長 明治大学 米沢嘉博記念図書館）

部会の目的：原画PJ連携各館のこれまでの収集・保存の方向性を、実際の現場を訪問し現地で取材。保存修復の専門分野（東洋美術学校保存修復研究室）の知見を交えつつ、改めて確認。さらに、マンガ関連の展示イベントの開催に積極的な新潟市（関連施設として、新潟市マンガ・アニメ情報館、新潟市マンガの家を有する）、および、マンガ原画の保存と公開（利活用）に「原画」の制作と公開という方法で取り組んでこられた実作者として、竹宮恵子氏に取材する。今後のマンガ原画の保存に向けて様々なディスカッションを行い、その考察を深め広げることを目的とする。

研究会開催場所および日時

1. 新潟市文化スポーツ部 文化制作課 2017年10月19日（木）
2. 横手市まちづくり推進部増田まんが美術事業室 2017年11月27日（月）～8日（火）
3. 北九州市漫画ミュージアム 2017年12月9日（土）～10日（日）
4. 京都国際マンガミュージアム 2017年12月19日（火）
5. 竹宮恵子氏 12月10日（日）北九州市MM開催の「竹宮恵子カレイドスコープ—50th Anniversary—」展会場、および12月19日（火）京都国際MMにて行われた「原画」色校正作業内にて行われた。

付録

取材に際しては、竹宮氏への取材をのぞき、収集整理・保存修復・公開（利活用）の観点で一定の質問項目を設け（参考資料あり）、基本的にはその項目への返答を軸に、時に項目にとらわれない自由なディスカッションを行った。

本取材に際して提出された「報告書」は、当日のやり取りをメインにした全体の「報告書」と、アドバイザーとして同行してくださった東洋美術学校の小野慎之介氏（京都のみ同校の松田泰典氏が参加してくださった）による、研究会当日に出た疑問等に後日補足し答える部分も含む「出張報告書」とに分かれている。

各部会の際の質問項目に関しては、原画の寄贈を受けているか、収蔵しているか、収蔵庫や展示室の温実度は、何に入れて保存しているか、そもそも何を原画と考えるか等、それぞれの館で共通しているところも、共有を望んでいるところもあった。そうした部分は、本最終報告書の巻末に添付されている本部会の報告書にて確認していただきたい

1. 新潟市文化スポーツ部 文化制作課 2017年10月19日（木）

・実施内容

質疑とディスカッション

（付、新潟市マンガ・アニメ情報館、および同施設を収容しているビル万代シテイ BP2 内のショップ見学 ※部会とは別途行われたので報告書にはないが、今回付随的に簡単に紹介）

・原画所蔵数等

原画の所蔵はない（新作で描いていただいたものが数枚程度あるが）

・ポイント

ーマンガ原画収蔵の実現に向けての案として、公文書館構想（公文書館を作るにあたってその一角にマンガ原画収蔵するという案）があるが、計画をなかなか具体的に進めることができない状態

ー「自治体における原画の保存および利活用について」の重要な問題提起あり

自治体としては原画を預かったときその後の活用はどうなるのが問題になる。原画を預かっても著作権は作家（著作権者）にあるので勝手に使用することはできない。それらは条件設定次第だと思うが、現在実際に原画を預かって活用している他館ではどのような条件設定をして原画を預かっているのか。展示だけならばよいのか、展示以外にも無償の広報や PR にも使っているのか、どこまでメリットがあるのか、説明ができる事例があったら今後もう一段話を進める参考になるのだが

付録

- ・マンガ原画に対する施設の立ち位置

マンガ原画の保存利活用を考えるうえで、これから大いに期待できる自治体が新潟市

2. 秋田県の横手市まちづくり推進部増田まんが美術事業室 2017 年 11 月 27 日（月）～ 28 日（火）

- ・実施内容

質疑とディスカッション

マンガ原画収蔵施設へのリニューアルが進行中の増田まんが美術館見学

- ・原画所蔵数等

現在約 10 万点確保。原画のリニューアル後は 70 万点保存する場所を確保している。目標として「マンガ原画の駆け込み寺」としてすべて受け入れられるのが理想だが難しい。将来的に実現したいと考えている。

- ・ポイント

ーマンガの保存を「シビック・プライド（市民の誇り）」にするという考えの提示

※新潟よりの自治体における原画の保存および利活用についての質問に対する答えとして

増田まんが美術館のリニューアル後、保存作業自体を公開する「観せる収蔵庫」を建設中。具体的には海外のビクトリア&アルバート博物館などを参考にさせていただいた。あわせて有償で来館者が原画に触れられる形での運用も構想している。

保存と活用は両輪の関係と考えており、バランスよく実施していかなければ立ち行かない。原画の整理保存は目に見えない部分だがそれなしで、利活用は無いと今は思っている。

行政において公開する際は、とくにマンガ原画の価値に対する無理解を解消する必要がある。そもそも収蔵の時点で行政・市民に理解を得られなければならない。横手市では、マンガの保存を「シビック・プライド（市民の誇り）」にとらえ、教育・観光資源としても活用していくという共通認識が作れた。そのことに感謝しているし、これからもマンガ原画を活用していくことで市民に還元していきたい。

- ・マンガ原画に対する施設の立ち位置

マンガ原画の保存・利活用双方に関しては、現在最も先端を行っているのが横手市増田まんが美術館

3. 北九州市漫画ミュージアム 2017 年 12 月 9 日（土）～10 日（日）

- ・実施内容

質疑とディスカッション

付録

北九州市漫画ミュージアム収蔵庫見学

「竹宮恵子カレイドスコープ—50th Anniversary—」展を鑑賞。実際の作品を前に、作家本人に原画に関する取材を実地

・原画所蔵数等

寄贈とお預かりしている分含め、約 2 万点。関谷ひさし 1 万 6 千点、陸奥 A 子 4 千点。収蔵庫全体のキャパシティは 3 万 2 千点程度と考えている。

・ポイント

ー原画とは何か（デジタル時代の原画を考えさせられる意見）

肉筆だけが原画かどうか。肉筆ではないが作家が完成品として認めた、デジタル描かれプリントアウトしたものを「デジタル出力原画」と、展示の観点から呼ぶこともある。当館ではまだ収蔵する機会はないが収蔵する際は、データを貰う一方で、作家が存命のうちに決定版となる紙刷りはいただいて置きたい。頂いたデータのフォーマットが経年で開けなくなる可能性もあり、紙に出力して置く必要があるのではないか。つまり紙で保存せねばならず、デジタル保存だからと言って収蔵スペースが減るわけではない。原画を収蔵した後の利活用のためにデジタルデータが必要と考える。

ー「用語ゆれ」問題の整理

明大 米沢図の原画より、原画を整理し説明する際の用語の使用についての不安を提示される。つまり、初出時の目次に「口絵」とあったり単行本の最初につく扉絵を「総扉」と当館では呼んでいるが、それはどの程度広く共有されるものなのか、など。

これに対して、そうした用語の使用は、初出の判明の段階によるのではないか。1 ページ丸ごとを一つの作品で構成している物をイラスト、それ以外の埋め草的なものはカットなど最終的な完成系から線引きは可能だが、原画の状態で線引きすることはできないのではないか。初出を確認できない場合は、原稿サイズなどで判断するしかない。

北九州 MM には用語集などは無く、他の館に合わせることは可能。個別の事例の話をしていると結論が出ないので、模式図などを作ってまとめた方がいいかもしれない。

※これに関しては、京都 MM よりも、先に作業を進めている明大 米トで先に進めていき、提案してもらえるとありがたいという意見あり。

ーマンガ原画トリアージという考え方

アドバイザーより、トリアージ²のようなものが必要なかもしれない、素材を調べてそれ

² トリアージとは、大事故・災害などで同時に多数の患者が出た時に、手当ての緊急度に従って優先順をつけること。

付録

と劣化との間で緊急性の尺度を設ける。マンガを研究されている方は、作品の重要性など別の尺度もあるので、それと合わせてコレクションを選別し管理していくことが、膨大な資料を管理していくうえで必要なのではないかという。

・マンガ原画に対する施設の立ち位置

北九州市漫画ミュージアムは、公開主体の施設でありつつ、原画收藏もある程度視野に入れている館。原画を扱う必要のある場合は、現実的かつ誠実に取り組んでいる。

※以下の京都と竹宮恵子氏への取材に関しては、報告会当日は時間の都合で駆け足での紹介になってしまった。以下が準備していた原稿である。

◎京都

・実施内容

質疑とディスカッション

京都国際マンガミュージアム収蔵庫見学

竹宮恵子監修の「原画」色校正&テープ剥がし実演見学

・原画所蔵数等

約 26,700 点。原画の收藏は積極的には行っていない。もともと雑誌単行本などを中心に收藏する方針。約 30 万冊の收藏あり。すでに収蔵庫はあふれている状態。

・ポイント

ー今、マンガ原画について考える理由の共有

ここ数年のうちに、大物作家が原画の先行きを考える機会がさらに増えていくと思われる。なので今、保存方法を考え伝えたい。マンガに関しては雑誌の管理は知見がそれなりに積み重なってきているのだが、「原画」はまだ未知数。扱いがわからないうちに廃棄されたり、海外に流出したりなどで、原画が失われる前に、今、着手するべきではないかと考える。また、保存についてだけでなく、展示、公開などの利活用を考えるうえでも、マンガ原画を扱える人を増やさなければいけないと実感している。

ー「保存・修復に必要なのは科学」という考え方の提示

アドバイザーより 原画を集めることのスタンスがそれぞれ違うので、どのレベルで残すか、残さねばならないかといったことのコンセンサスが出来ていないのでは。紙などの保存・修復に必要なのは科学。例えば 100 年残すなら科学者達に協力してもらわねばならない。脱酸コストなど、これから 10 年、100 年を目指すのかも含め実際保存するには段階（グラデーション）を提示し考えていかねばならないだろう。1 人の作家の中で、どの原画が大切な

付録

のかを考えられるかなどが重要。

ー原画を大切なものとする理由の提示

長くマンガ展示に関わってきて、展示を観に来る人が喜ぶのは、作家が実際に自分の手で生み出したものであると実感している。作家が実際に描いている映像など、その流れ中、特に原画が喜ばれるという実感を得てきているから。実際の作品が読めるという形になっているとさらに観客の満足度が高い。

アドバイザー（小野氏）より 印刷物としてのマンガをしか見ていなかったときは、それを保存するということにピンとこなかった。だが、マンガ原画の保存について考えたいという学生があらわれ、マンガ原画に触れるようになってはじめて、そのマチエールのよさなどを感じ、保存すべき「原画」なのだと実感できた。

ー「マンガ原画保存 100 年計画」の提案

アドバイザー（松田氏）より このままでは、マンガ原画は 100 年先には残らないのではないかと危惧する。うちの学校で扱わせていただいたある先生のマンガ原画（60 年代頃から 80 年代までの原画）の pH は、オレンジジュースと同じくらいだった。10 円玉を置いておいたらピカピカになるレベル。中性紙の発想は 80 年代からだが、おそらく中性紙を使ってマンガを描いている作家はいないのでは。OPP 袋もその内ガスが出るのでは。

マンガ原画はある時突然自己崩壊し、ボロボロになるのではないかと予想する。データにしてもメディアがダメになる。可能であれば現物を保存するに越したことはない。現状、脱酸すると資料は約 3 倍持つようになると予測されている。

作品の完成形は発表された時のもの、つまり雑誌や単行本に印刷されたものなので、マンガに関しては一点物の絵画などより雑誌や単行本のプライオリティは高いと考える。が、複数存在する可能性が高い雑誌より、原画の保存を考えることのほうが急を要する様にも思う。「マンガ原画」の保存を考えることを通して、マンガ文化の価値を理解してもらいたい。

アドバイザー（松田氏）より 「マンガ原画保存 100 年計画」といった事業を立ち上げたらどうか。

・マンガ原画に対する立ち位置

マンガ関連施設を代表する施設が京都国際マンガミュージアム。マンガに関するあらゆる課題がもちこまれる館であり、それはマンガ原画の収拾保存に関しても例外ではない。本来資料中心の収蔵を目的としているが、近年マンガ原画の保存と利活用について考察していくことにも必要性を感じ、積極的に取り組んでいる。

付録

◎竹宮恵子氏

・実施内容

竹宮恵子カレイドスコープ 50th アニバーサリー展を鑑賞。実際の作品を前に、作家本人に原画に関する取材を実地 北九州市 MM 2017 年 12 月 10 日

竹宮恵子監修の「原画」色校正&テープ剥がし実演見学 京都MM2017 年 12 月 19 日
保存と公開を両立する方法としての「原画」

・原画所蔵数等

自作のマンガ原画（1 万 5 千点とか…？すべて自宅に保管？カッコ内記録者による推測）

・ポイント

ー「原画」について

原画'は長期的保存のためではなく、どちらかと言うと、原画の劣化の心配をすることなく、原画に近いものを見ていただきたいという動機で制作している。一週間を超える原画展示は、色が褪せてしまうのであまりしたくない。原画'なら色々な方に見て頂ける。

展示されている原画'は実寸。実物大が原画'（ダッシュ）という考え方。複製を小さく作成することもあるが、それは原画'ではない。

最初に描いた原画を現物保存しなくても、原画'で残せばいいとだけ考えているわけではないが、どうしても残せないならそれでもいいという気持ちはある。ただ、データがいくら正確でも印刷する側が再現できないこともあるので難しい。

ー原画劣化の実例

この絵のシミは、模造紙が薄いので、カッターで切ったときに裏に抜けてしまわないようペーパーセメントで裏打ちしたために出来たもの。

ペーパーセメントが茶色くなってしまうのは、比較的早い時期からわかっていた。一回連載をして単行本になるまでに結構間があったが、その時に原稿を出すと、そういう事態になっているという事で気が付いた。

今貼り直すという状況になった場合は、パソコンでネームを作り直してスティックのりなどで貼り直すと思う。見るに堪えないので抜きたい。原画'でもシミを抜いて作っているものもある。

ー修復作業の実践

原画にトレーシングペーパーが張り付いていて、剥がすと原画がやぶれてしまいそうな場合は、セロテープを剥がしてしまうか、カッターで粘着部分だけ残して切ってしまうかなど、ケースバイケース。セロテープなら完全に剥がしてしまい、メンディングテープなどだった

付録

ら切って対応する。うちではテープに気づいた時点ですべて剥がしている。アピールカッターという薄いものを剥がす工具を使用して剥がして、粘着質が残った場合は、ラバーゴムを使用して消しゴムをかけるように剥がしている。

誰かから聞いたということではなく、デッサン用の練りゴムなども使用したりしつつ、アシスタントたちと試行錯誤して今の方法に行き着いた。

→京都 MM での取材時に、ここでの説明を実演していただく機会を設けていただいた。

・マンガ原画に対する立ち位置

竹宮恵子氏は、原画の公開（利活用）と保存とを考える中から「原画」を考案し展示の形で公開しつつける中、最もマンガ原画について深く考えるに至っている実作者だろう。

◎東京都の明治大学 米沢嘉博記念図書館

・実施内容

紹介各館および竹宮恵子氏に対する全取材の実地。

・原画所蔵数等

マンガ原画約 500 点（鈴木光明原画中心）

「月詠」アニメ原画（有馬啓太郎氏より寄贈）約 50 箱分（箱サイズ、B4・高さ 20cm ほど）。

図書館。書籍資料の収蔵には多少目配りはあるが、原画収蔵庫に類する場所はない。

今回取材させていただいたどの館より設備的に不十分。

・マンガ原画に対する立ち位置

マンガなどサブカルチャー全般を扱う施設の関東における京都 MM 的施設の前身として位置づけられた館。色々な意味で期待されている施設であり、マンガ原画への取り組みは、現在も、続く施設がもし出来たとしても、考察と実践が必要だろう。

まとめ

2 種類の報告書全体を、時系列に通し読みして感じたのは、公的な施設で仕事に従事しつつ、マンガにかなりシンパシーを持つスタッフたちの、できれば原画（といわずマンガに関する資料をすべて）を何とかして残したい、という思いと、保存（と修復）を考えるのであれば何らかの線引きが必要と考える保存科学の専門家たちとの気持ちが交錯し、いよいよ問題意識をかなり共有できた、というあたりで研究会の最終回である今日を迎えるという、なかなか熱い展開であるということがわかった。

今回の調査と各報告書全体を通して、マンガは多くの人々によって親しまれ選ばれてきたメディア。横手市増田まんが美術館の考え方が全国に広まり浸透すれば、マンガ原画は民主主義国家としての日本の誇りとなりえるのではないかと感じた。

付録

ただ「原画は大切なもの」という前提が、連携各館にとっては自明すぎるかも。その尊さを説明する言葉や、証明するための何かが、もう少し必要かもしれない、とも感じた。

資料② 原画保存研究部会 報告（パワーポイント）

マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発事業

保存修復研究部会 報告

2018年1月27日（木）
於：東洋美術学校

新潟市 2017年10月19日（木）



新潟市マンガ・アニメ情報館



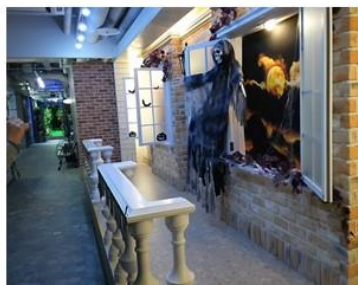
新潟市マンガの家



ガタケットショップ
(上段3枚)



ガタケットコスプレパーク
(GCP) (下段3枚)



横手市まちづくり推進部 増田まんが美術事業室 2017年11月27日(月)-28日(火)



横手市増田ま
んが美術館
(改装中)



初出調査の様子

スキャン作業の様子



北九州市漫画ミュージアム 2017年12月9日(土)-10日(日)



収蔵庫内温湿度管理制御盤



状態の悪い原画の例



北九州市漫画ミュージアム収蔵庫の様子



ペーパーセメントで状態が悪くなった
原画の例



竹宮恵子 カレイドスコープ
-50th Anniversary- 展会場

著者・竹宮恵子氏への
ヒアリングの様子



カラーは原画 中心に展示

京都国際マンガミュージアム 2017年12月19日(火)



原画整理の様子

書庫の様子



収蔵庫の様子



原画ダッシュの保管



展示で使用する原画や資料などの一時保管場所

竹宮恵子氏による原画ダッシュの色合わせ(色校正)見学



いつも同じ机、照明の環境下で色味や濃度を比べチェックする。3回ほど繰り返し原画に合わせていく。カラーよりモノクロのほうが難しい。その時点の色味を複製制作する、写植が落ちたものもそのまま、ホワイトもテープのシミもオリジナルのまま複製する。



原画に貼り付いていたテープを剥がす作業
(竹宮恵子氏実演)

付録

資料③ 質問項目

保存修復研究部会 質問項目

作成：明治大学 米沢嘉博記念図書館 ヤマダトモコ

◎収集

- ・貴施設ではマンガ原画をどんな基準で収集していらっしゃるのでしょうか。
- ・これまで寄贈の申し出があったことはありますか。
- ・寄贈を受け入れたことがある場合。受け入れの基準はありますか。
- ・寄贈をお断りしたことがある場合。お断わりした理由など。
- ・収集したことがある場合。収集するうえで何か困ったことはありますか。
- ・収集してよかった、と思ったことはありますか。

◎整理

- ・整理のイメージについて。
- ・マンガ原画は、どのように整理しているかを具体的に教えてください。
(可能であれば、後程整理されている状態を見せていただければ)
- ・作品カード(台帳)などを拝見させてください。
- ・使用用語について(明大 米トより)

◎保存

- ・マンガ原画とは何を指すと思われますか(どこまでが原画でしょうか)。
- ・原画の付属物について。
別にあるタイトルロゴページ、トレシングペーパー、原画の入っていた封筒(何らかの記録があったりするもの)など、どのように扱っていますか。あるいはどのように扱うとよいと思われますか
- ・写植、テープ、そのほかの扱いをどうしていますか。
- ・原画以外の中間生成物をどのように考えますか。
(キャラクター設定用紙、ネーム、アイディアノートやスケッチ等)
- ・保存方法をどう考えるか。あるいは具体的にどうしているか。
保存箱、温湿度管理等について。
- ・保存の際ヒントにした施設、書籍、どなたかからのアドバイスなどはありましたか。

◎修復

- ・これまで修復作業が生じたことがありますか。
- ・もしあったとしたら、それはどんな時でしたか。
- ・具体的にはどのようにして解決しましたか。

付録

- ・カラー原画の保存について

- ・複製を作成する際の基準。マンガはもともと印刷されて発表されるものです。また長期保存を考えて描かれることの少ないものです。複製する場合は、何に色味を合わせるのがよいでしょうか。原画でしょうか。雑誌等に発表されたときでしょうか。印刷の際、何を基準にして色をあわせていらっしゃるでしょうか。

経年劣化したものの複製を作成する場合をどう考えられますか。

◎公開

- ・原画についているトレーシングペーパーなどはどうしていますか。

- ・額装の際、どんな額を選ぶかはどうやって決めていますか。あるいは、今よく使っている額はどのようにしてそれに決めましたか。

- ・UV 問題。紫外線に対する対策を何かしていますか。

◎他館よりの質問

- ・新潟市より（自治体におけるマンガ原画の保存と利活用について）

自治体としては、公費を使用し保管して収集するからには、公開をどのようにするのか、市民還元への道筋はできるのか、という問いかけが必ず出てくる。この問題どう道筋を立てるのが課題である。

そのため、原画を預かったときその後の活用はどうなるのかが問題になる。原画を預かって著作権は作家（著作権者）にあるので勝手に使用することはできない。それらは条件設定次第だと思うが、現在実際に原画を預かって活用している他館ではどのような条件設定をして原画を預かっているのか。展示だけならばよいのか、展示以外にも無償の広報や PR にも使っているのか、どこまでメリットがあるのか、説明ができる事例があったら今後もう一段話を進める参考になるのだが。

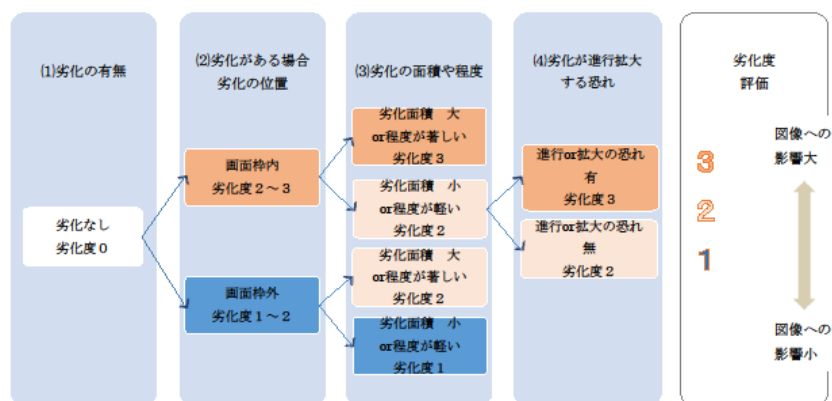
また、1つの作品にたくさんの人が絡んでいる場合、研究・活用しようとしても権利関係が複雑に入り組んでとても難しいが、そういったものを整理することをどう考えるか。どのように行っているのか。

付録

資料④ 劣化度評価方法・評価基準

劣化度評価方法・評価基準

- ・作者が描いた画像に影響がある劣化か、劣化が進行あるいは拡大する危険性があるか（保存対策を検討すべきか）という点に着目して評価する。
- ・編集工程に関係すると思われる折れやトレーシングペーパーの破れ等、作者が描いたものではないと思われる部分の劣化は重視しない。
- ・原画の本来性や保存の意義、劣化調査全体の意義を考え、あまり細かいことにはこだわらずに評価できるよう心がける。
- ・評価基準の優先順位のイメージは下図の通り。

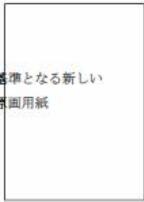


	調査項目	点数のつけ方
支持体	p H	作品表面に精製水 5μL を滴下後、p H メータを使い計測 計測の仕方は別紙参照
	脆化	紙がしなやかで丈夫な状態かどうか、紙の強度や柔軟性の低下があるか 端を軽くしならせるなどして手触りで判断する
	変色	紙全体に変色（酸化、紫外線劣化）があるかどうか
	汚損	紙自体の変色やテープ痕以外の汚損 塵埃、泥、カビなどの付着、固形の付着物や染みなど※付着物が人為的であるか否かについては評価しない
	破損	紙の破れ、亀裂、穴など、紙の物理的な損傷、変形、波打ち、折れ
	テープ	セロハンテープの劣化、変色、粘着力低下、粘着物質の溶解や転移
	特殊技法	切り継ぎや貼り付け、トレーシングペーパーなど、取り扱いに注意を要する特殊技法の有無
		点数のつけ方 問題ない強度、柔軟性 0 画像に影響のない程度、範囲で脆化が見られる 1 脆化や脆化による破損が進行する恐れがある 2 既に保持することが難しいほど脆化している 3 未使用の原画用紙を基準 0 とし、別紙「評価基準 参考イメージ」に印刷された各劣化度の色調を参考に評価する 汚損なし、目視で確認できない 0 画像に影響のない程度、範囲で汚損が見られる 1 画像にかかっているが軽微な汚損 2 画像に影響のある汚損、他の資料にも拡大する恐れがある汚損 3 破損なし、目視で確認できない 0 画像に影響のない程度、範囲で破損が見られる 1 画像にかかっているが軽微な破損 2 他の資料にも影響が拡大する恐れがあるものや著しい破損は 3 テープなし、目視で確認できない 0 画像に影響のない程度、範囲でテープの使用が見られる 1 画像にかかっているが軽微なテープの使用や跡 2 他の資料にも影響が拡大する恐れがあるものや著しいテープ痕 3 特殊技法がなければ 0 画像枠外のみ特殊技法がある 1 他の資料への影響や進行の恐れはないが画像枠内に特殊技法がある 2 特に取り扱いに注意を要する部分がある 3

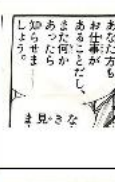
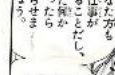
付録

インク	インク焼け	前後のページからインク焼けなどの影響があるか	インク焼けなし 0、軽微なもの 1 範囲や程度の著しいもの 2 表面（図像）にまで影響がある場合 3
	滲み	インクの滲みがあるか、染料インクの特徴があるか技法上の意図があるかどうかに関わらずインクの滲みがあるか	なければ 0 あれば 1 他図像に影響があるが、これ以上滲む心配のないもの 2 ページに影響があり対策が必要な場合など著しい滲み 3
ホワイ ト（修 正液）	変色	白以外の色が観察できるか、ブリード現象の有無 2段階で評価する	ホワイに問題がない 0 ブリード現象や劣化と思われる白以外の色調が観察できる 1
	劣化	ひび割れ、剥落などがあるか	なければ0、図像に影響のない軽微なもの 1 図像に影響があるが、これ以上の劣化の心配のないもの 2 図像に影響がある著しいもの 3
スクリ ーント ーン	トーン	スクリーントーンの有無と、変色や浮き上がり等の劣化の確認	スクリーントーンの使用がなければ 0 スクリーントーンが使用されている 1 変色や劣化が少しでも確認できる 2 他の資料に影響がある、進行の恐れのある劣化 3
写 植 （写真 植字）	接着剤	接着剤の劣化、変色、剥落など写植の接着剤のみ評価。完全に貼り付けてあったものではなく、元々外れやすい可能性も考えられるので、多少の浮きだけであれば問題なしとする	問題ない場合 0 接着剤の劣化や変色があるが図像に影響はない 1 図像に影響がある劣化や変色 2 他ページに影響を及ぼす恐れのある劣化や変色 3
	変色	写植の文字や印刷紙の変色、褪色があるかどうか、銀鏡化しているか、見読性があるか	問題ない場合 0 変色や褪色が見られる場合 1 文字の見読性には問題がないが変色が著しい 視認できない、見読性に問題がある場合 3
編集工 程上の 加工	添付紙片	編集者の指示等が書かれたトレーシングペーパーや添付紙片があるかどうか	なければ0、あれば1の2段階評価
	折り目	編集工程の中でつけられたと思われる機械的な折り目の有無	なければ0、あれば1の2段階評価

評価基準 参考イメージ

	劣化度0	劣化度1	劣化度2	劣化度3
③ 変 色	基準となる新しい 原画用紙 			
④ 汚 損	 汚損が見られ ない 目視では確認 できない程度	 図像に影響が ない程度の軽微な 汚損	 図像に影響が少 ないが、面積が 大きいまたは著 しい汚損	 図像に影響があ る汚損または、 支持体の半分以上に 広がる汚損

付録

⑩ テ ー プ の 劣 化	 テープ痕が一切見られない	 画像に影響はないテープ痕	 画像に影響があるが軽微な劣化または影響はないが著しい劣化	 画像に影響のあるテープ痕 他ページに影響を及ぼす恐れあり
⑪ 接 着 剤	 劣化も剥落も見られない 軽微な浮き、剥がれ	 一部に軽微な劣化が見られる 画像に影響はない	 著しい劣化が見られる 取り扱いに注意を要する 画像に影響はない	 著しい劣化が見られる 画像や他ページに影響がある 剥落、欠失がある
⑫ 変 色	 変色や銀化は見られない	 文字の見読性には問題ない 一部または軽微	 文字の見読性には問題ない 全体的または著しい	 文字の見読性が損なわれている 劣化が進行し判読できなくなる恐れがある

資料⑤ チェックシート①

[illegible]

付録

チェックシート②

漫画原画調査票			
	◇基本情報		
	識別番号: _____		
	作者: 花村えい子		
	作品名: _____		
	副題等: _____ 第 _____ 話		
	掲載雑誌: _____ 号		
	掲載年: _____		
	出版社: _____		
	形態: ☐ 漫画原稿 ☐ 一枚もの ☐ その他		
	頁数: 10 ページ		
所蔵場所: _____			
調査日: _____ ~ _____			
調査者: _____			
☐ B4 ☐ A4 ☐ その他 寸法: _____ mm × _____ mm ☐ 裁断 ☐ P ☐ 貼り付け		厚さ	☐ 特殊:P ☐ 切り縫ぎ ☐ P
☐ ケント紙 ☐ 画用紙 ☐ その他 ☐ 鉛筆(黒) ☐ 鉛筆(青) ☐ あり ☐ なし ホワイト: ☐ あり ☐ なし ☐ あり ☐ なし		形状寸法:	形状寸法:
☐ あり ☐ なし ☐ P目		画材	特殊技法
☐ あり ☐ なし ☐ P目			

付録

チェックシート③

劣化度評価方法・評価基準

	無(0点)	弱(1点)	中(2点)	強(3点)
pHストリップ(メルク社)を使って1~2分間計測	カラーチャートに従って数値を読み取り0.5単位で記入する			
紙がしなやかで丈夫な状態かどうか、手触りで判断、紙力の低下	脆化なし・目視では確認できない	少しでも脆くなっている	脆化している・部分的に目立つ劣化がある	半分以上脆化
塵、泥、カビなど汚れの付着、図形の付着物や染みなど	汚損なし・目視では確認できない	汚損あり(面積20%以下)	汚損あり(面積20~50%)	半分以上汚損
紙の破れ、亀裂、穴など、紙の物理的な劣化	破損なし・破損がない、目視では確認できない	破損あり(面積20%以下)	破損あり(面積20~50%)	半分以上破損
セロハンテープの劣化、変色、粘着力低下、粘着物質の溶解	劣化なし・目視では確認できない	一つでもテープが劣化している	著しいテープの劣化がある	テープが数か所あり、全体的に著しい変色
貼り付けてあるトレーシングペーパー、切り端のコマなどの汚損、破損、脆化	劣化なし・目視では確認できない	少しでも劣化がみられる	部分的に著しい劣化(面積20~50%)	半分以上劣化

	無(0点)	弱(1点)	中(2点)	強(3点)
前後のページからインク滲みなどの影響があるか	裏移りなし、目視では確認できない	一部に裏移りあり(図像の20%以下)	著しい裏移りがある(図像の20~50%)	半分以上裏移りあり、図像に影響がある
インクの滲みがあるか、染料インクの特徴があるか	滲みなし、目視では確認できない	軽度の滲み(図像の20%以下)	著しい滲みがある(図像の20~50%)	半分以上滲みあり

	無(0点)	弱(1点)	中(2点)	強(3点)
白以外の色が観察できるか、ブリード現象の有無	変色なし、目視では確認できない	変色あり(ホワイトの20%以下)	部分的に著しい変色がある(ホワイトの20~50%)	半分以上変色が著しく、図像に影響がある
ひび割れ、剥落などがあるか	劣化なし、目視では確認できない	劣化、ひびあり(ホワイトの20%以下)	部分的に著しい劣化がある(ホワイトの20~50%)	半分以上劣化が著しい

	無(0点)	弱(1点)	中(2点)	強(3点)
接着剤の劣化、変色、剥落など	劣化なし、目視では確認できない	劣化や変色あり(写植の20%以下)	劣化や変色あり(写植の20~50%)	半分以上変色、劣化、剥落している
銀鍍化しているか	劣化なし、目視では確認できない	銀鍍化あり(写植の20%以下)	銀鍍化あり(写植の20~50%)	半分以上に著しい銀鍍化
銀鍍化しているか	劣化なし、目視では確認できない	銀鍍化あり(写植の20%以下)	銀鍍化あり(写植の20~50%)	半分以上に著しい銀鍍化

マンガ原画の保存科学(2018年1月27日)

2

松田 泰典

(まつだ やすのり) 1955年5月11日北海道小樽市生

- 東京農工大学農学部卒業 (1979)
- 東京藝術大学大学院芸術学専攻 (保存科学) 修了 (1981)、研究生 (1981-1983)
- ミナモト真珠研究所研究員 (1983-1990)
- 東北芸術工科大学芸術学部・大学院芸術文化専攻助教授 (1993-1999)、同教授 (1999-2009)
- 同・文化財保存修復研究センター長 (2001-2009) 兼任
- 北海道・東北保存科学研究会設立 (1999)、代表 (1999-2008)
- 山形文化遺産防災ネットワーグ設立 (2008)
- 文化財保存修復学会・理事 (2004-2010)
- 日本文化財科学会・会誌編集委員長 (2008-2010)・編集委員 (2010-現在)
- 国際協力機構専門家 (タレント博物館保存修復センター・デラニカル・チャー・アトバイザー) (2009-2016)
- 東京文化財研究所文化遺産国際協力センター 客員研究員 (2010-2016)

(現在)

- 東洋美術学校保存修復科教育研究スーパードバイザー (2016-現在)、真珠科学研究所顧問 (2012-現在)

専門分野：

文化遺産保存科学、保存修復教育、真珠保存学

所属学会：

国際博物館会議保存委員会 (ICOM-CC)、文化財保存修復学会、日本文化財科学会、北海道・東北保存科学研究会

マンガ原画の保存科学

東洋美術学校保存修復科
教育研究スーパードバイザー

松田 泰典

マンガ原画の保存科学(2018年1月27日)

4

目次

1. はじめに
2. マンガ原画の調査
3. 原画の支持体「紙」の科学
～紙の製造と劣化現象～
4. 劣化の科学的評価法と保存対策
5. おわりに



マンガ原画の保存科学(2018年1月27日)

3

日本の財政・技術支援で建設中の大エジプト博物館は世界一の規模です



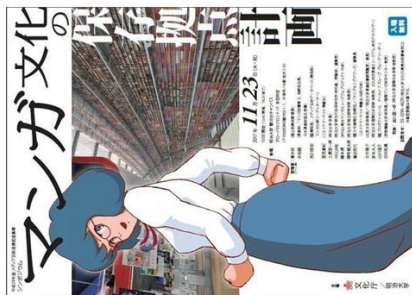
Gizaの大ピラミッド群を遠望



1. はじめに

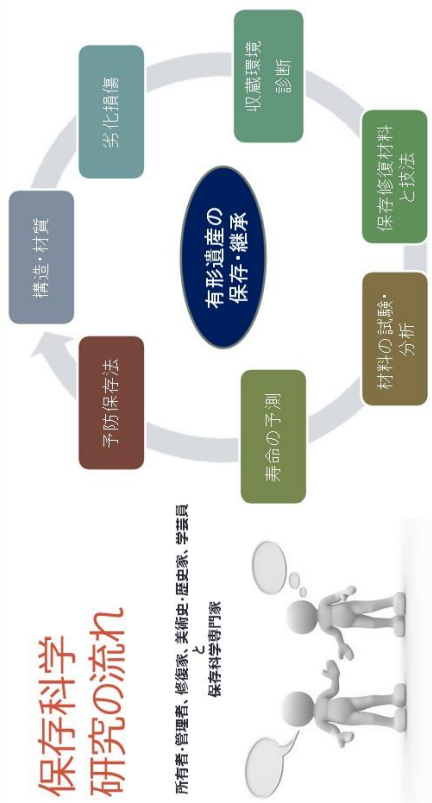
マンガ原画の“保存”とは、「収集・保管」あるいは「アーカイブ」の意？

- ・ 保存修復 Conservation
- ・ 修理技術 Restoration
- ・ 保管 Preservation あるいは
予防保存 Preventive conservation
- ・ **保存科学 Conservation science**
- ・ 複製制作 Duplication/Copy



保存科学 研究の流れ

所有者・管理者、修復家、美術史・歴史家、学芸員
と
保存科学専門家



保存科学が対象とする有形遺産

- ・ 美術品 (絵画・彫刻…)
- ・ 工芸品 (木工・金工・漆芸・陶磁・染織・刀剣・装飾…)
- ・ 古文書・書跡・典籍・図書など
- ・ 考古資料 (発掘された木製品・金属製品・土器・石器…)
- ・ 民俗資料 (衣食住・産業・生業・交通・運輸・信仰・芸能…)
- ・ 記念物 (史跡・遺跡・古墳・石碑…)
- ・ 近代化遺産 (産業・交通・土木などに関係する工場、建造物…)

保存科学が対象とする有形遺産

- ・美術品（絵画・彫刻・・・）
- ・工芸品（木工・金工・漆芸・陶磁・染織・刀剣・装飾・・・）
- ・古文書・書跡・典籍・図書など
- ・考古資料（発掘された木製品・金属製品・土器・石器・・・）
- ・民俗資料（衣食住・産業・生業・交通・運輸・信仰・芸能・・・）
- ・記念物（史跡・遺跡・古墳・石碑・・・）
- ・近代化遺産（産業・交通・土木などに関係する工場、建造物・・・）
- ・**メディア芸術資料（マンガ原画・セル画・・・）**

メディア芸術資料の保存科学とは？

- 所有者・管理者、学芸員、作家、出版社など関係者との協力の下
- ・**メディア芸術資料**の構造や材質などの情報を科学的に明らかにし
- ・劣化・損傷の現状や原因を科学的に明らかにし
- ・収蔵（保存）環境を調査するとともに改善方法を提案し
- ・保存修復のための材料や技法を科学的に調査研究し
- ・材料の劣化促進試験、強度試験などを調査研究し
- ・時には、**原画やセル画の寿命**（例えば100年後の姿）を予測し
- ・遺産のさらなる劣化を防止する手段（予防保存法）を開発し
- もって**メディア芸術資料の保護・継承に寄与する**

2. マンガ原画の調査

（昨年度卒業生・佐藤杏樹の研究成果）

原画の聴き取り・観察調査

原画の描かれた時代背景、原画のもつさまざまな情報（制作年代、支持体・画材・技法、印刷や展示情報、劣化状態等）を聴き取りと観察により調査する

原画の支持体・画材・技法・劣化状態の調査

- ・画家のペレットのように、漫画家にも独特の画材や描画技法があり、これらを把握することが保存法開発へ繋がる
- ・印刷や展示などの履歴、保管環境にも注意を払い、劣化状態を理解する必要がある



花村えい子氏原画

マンガ原画の保存科学 (2018年1月27日)

13

支持体(紙)の劣化	裏面の劣化	スクリーンマンの劣化
- 変色・脆化・酸性化 - 破れ・波打ち - 擦れ・焼け - 折れ・カビ - シミ・フォクシング	- インクのシミ - ホワイトのシミ - 写植などの糊シミ - その他のシミ	- 浮き上がり - 剥落 - 変色(切り口・縁) - 変色(面)
粘着テープの劣化	ホワイトの劣化	写植の劣化
- テープの変色 - テープ痕・うつり	- シミ・剥落 - 脆弱化	- 台紙の銀鏡化 - 剥落 - 粘着成分の変色

マンガ原画の保存科学 (2018年1月27日)

14

支持体(紙)の劣化

内的あるいは外的要因による劣化

- 変色(シミ)
- 脆化(酸化や酸性化)
- カビ・フォクシング(ホシ)
- 折れ
- 波打ち
- 破れや擦れ
- 焼け

観察結果

カビ・フォクシング

酸化や酸性化?

余白部分の特徴的な折れ

マンガ原画の保存科学 (2018年1月27日)

15

原画の保管状況の調査

- ストーリー原画はマンシヨン(民家)の「クローゼットを改造した棚」に収納されている
- 原画は1話ごとに茶封筒に収められ整理・保管されている

ストーリー原画保管状況

マンガ原画の保存科学 (2018年1月27日)

16

3. 原画の支持体「紙」の科学

～紙の製造と劣化現象～

「紙」に描かれたマンガ原画の保存科学

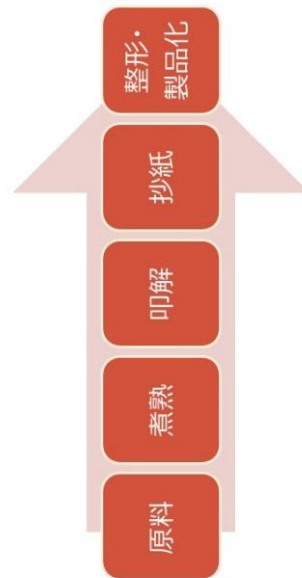


紙とは何か？

- 紙とは、植物などの繊維を絡ませながら薄く平らに成形したもの。「植物繊維その他の繊維を膠着させて製造したもの」と定義される。紀元前150年頃には中国で発明されたとされる。日本には6世紀頃、西洋へは12世紀に伝わった。
- 繊維原料としては、古くは麻類（大麻、苧麻など）、樺、竹、稲藁などが中国で使われ、日本では樺、雁皮が主流となった。西洋では木綿や亜麻のぼろを使って紙が製造されていた。
- 19世紀に木材のパルプ化が発明され、現代の工業生産による紙は碎木パルプや化学パルプが大半を占めている。
- 書写や印刷のしみを止めるため、和紙では**澱水**（ドーナ：膠とミョウバン）が使用され、洋紙では**ロジン**（松脂）と**ミョウバン**（後に硫酸バンド）による**内部サイジング法**が開発された。



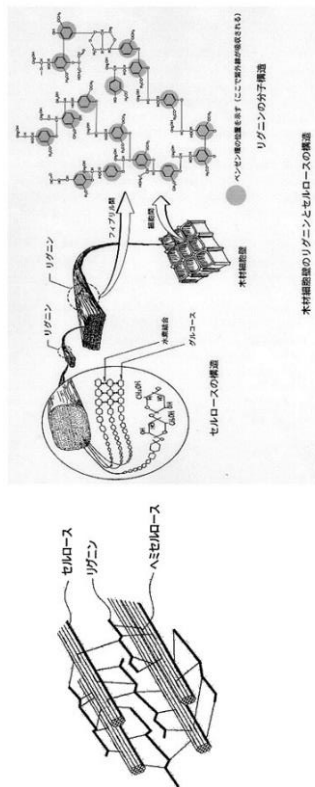
洋紙の原料と製造方法



原料

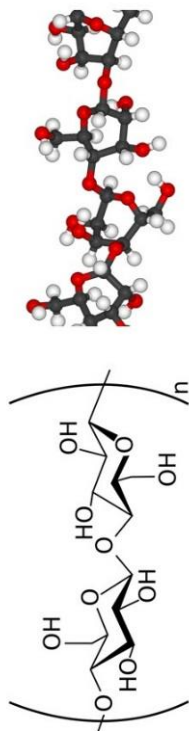
- 1840年代に木材パルプの製造方法が確立して以来、紙の原料として木材が使われるようになった。日本では強度が求められる新聞紙、紙袋、封筒、飲料用紙パックなどでは針葉樹が使われることが多い。一方、現在の印刷・情報用紙の多くは、広葉樹が主原料になっている。
- 木材パルプの主成分は植物繊維細胞であり、主要な**化学成分**は、**セルロース**で、ほかに**ヘミセルロース**、**リグニン**に細分される。セルロースが骨格を、ヘミセルロースが接統を、リグニンが空隙の充填を担う。
- 化学パルプではリグニンを除去するが、機械パルプでは**リグニン含有量**が高い。
- セルロースは、水素結合によって結びつく性質がある。紙を構成する繊維がくつき合うのは、主にこうした水素結合のためである。

紙の微細構造



セルロース (繊維素)

セルロースは多数のβ-グルコース分子がグリコシド結合により直鎖状に重合した天然高分子である

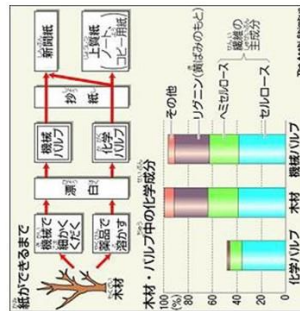


セルロース (cellulose) とは、グルコースを単糖とし分子式 $(C_6H_{10}O_5)_n$ で表される炭水化物 (多糖類) で、重合度 n は2000以上にもなる。植物細胞の細胞壁および植物繊維の主成分で、天然の植物質の1/3を占め、地球上で最も多く存在する炭水化物である。

リグニンによる変色 (黄ばみ)

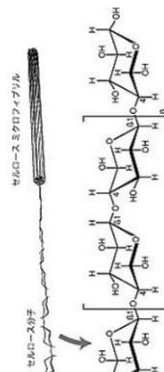


リグニンが原因の変色は、周囲の温度や光 (紫外線) の影響が大きく左右する。



煮熱 (蒸解) および叩解

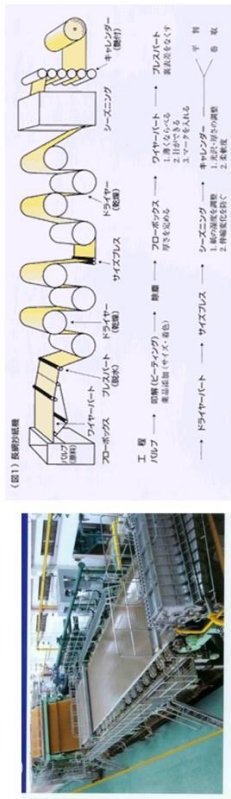
- 原料となる植物を、アルカリ性の溶液で「煮熱」(長時間高温・高圧で煮る)して、軟らかくする。こうして取り出した植物繊維は、パルプに相当する。
- 植物から繊維を取り出して紙を漉くには、パルプを叩き、繊維が切断・水和・膨潤・絡み合うようにする作業が必要である。こうした作業を「叩解」という。



パルプを叩解すると、繊維はまず内部ファイブリル化し、次に外部ファイブリル化する。これにより繊維組織は緩み、ごく短い繊維の束 (ファイリル) を取り出すことができる。

抄紙

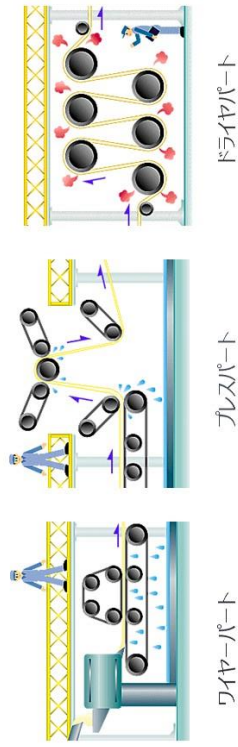
抄紙機（紙を連続的に抄く大型装置：長さ数十メートルに及ぶ）では、ワイヤーパート、プレスパート、ドライヤーパートを経た後、コーターにおける塗工、カレンダーング（ローラーで圧力を加えて仕上げる）を経て、リールに巻き取られて完成する。



抄紙機



抄紙工程



その後、コーター（塗工）、カレンダー（艶出し）、ワインダー（巻き取り）、カッター（切断整形）の各工程を経て製品となる

紙に添加される薬品（サイズ剤、填料、塗料、染料など）

- 各化学薬品は、原料の調製工程でパルプに混合されたり、塗工工程で紙の表面に塗工されたりする。
- サイズ剤**：水性インクなどのじみを防ぐ。かつてはロジンと硫酸バンド（硫酸アルミニウム）が広く使われており、その紙は酸性紙という。酸性紙は寿命が50年から100年で、図書館での蔵書の保管などで寿命が短ざることが大きな社会問題になった。**中性紙**は、硫酸バンドの代わりに、中性サイズ剤を用いており、寿命は酸性紙の4倍から6倍といわれている。
- 填料**：繊維間の隙間を埋め、不透明度・白色度・平滑度・インク吸収性を向上させる。従来からカオリンなどのクレー（白色粘土）やタルクが使われているほか、**中性紙**では硫酸カルシウム（アルカリ性保持剤）が使われる。填料は、印刷用紙などには5%から20%程度、辞書などでは25%程度が含まれる。

酸性紙問題 Slow Fires



紙が酸性化する主な原因は
硫酸アルミニウムです。

- 洋紙の製造には、「サイジング」というインキのにじみを防ぐための工程がある。にじみ止めにはサイズ剤として「ロジン（松ヤニ）」という物質が使われ、それを定着させるためには「硫酸アルミニウム $Al_2(SO_4)_3$ （硫酸バンド）」が用いられてきた。
- 硫酸アルミニウムは、紙に含まれる水分と反応して硫酸を生成し、紙を内部から崩壊させる。これを酸加水分解といい、酸が水解果となってセルロースの重合度を低下させる。硫酸には強い脱水作用があり、水分の放出によって繊維の角質化を引き起こし、紙は堅く脆くなっていく。

ロジン・サイジングによる紙の酸性化



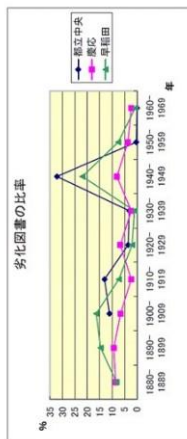
- 陰イオンを持つ酸化ロジンエマルションを、同じく陰イオンを持つ紙の繊維のヒドロキシ基に定着させるためには、硫酸アルミニウムを添加して、錯体のロジン酸アルミニウムを形成させる必要がある。
- しかし、硫酸アルミニウムの持つ硫酸イオンは空気中の水分と反応して紙の中で硫酸*を生じ、紙を酸性にする。この硫酸は紙の繊維であるセルロースを徐々に加水分解する作用を持ち、経年変化で次第に紙を劣化させる。

*最初は希硫酸であっても、水分の蒸発により硫酸は徐々に濃くなっていき、最後は濃硫酸と同程度となり、繊維を劣化させる。この点は揮発性の塩酸や酢酸と大きく異なる。

書籍の劣化現象

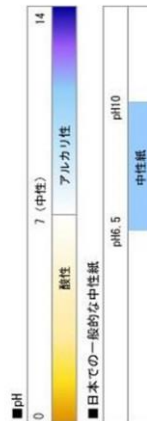
ウィリアム・パローは1957年に本の酸性度・劣化度の調査をおこない、19世紀後半に出版された本が酸による劣化が深刻な状態にあることを報告した。19世紀中葉以降の洋紙に酸性紙が使われ、エール大学図書館では1890年代の蔵書の89%が劣化していたとの報告がある。この問題は、日本でも1982年から注目され、1985年に国立国会図書館で実施された調査によれば、pH4未満の図書が全体の54%、pH4.5以下では97%に達するとのことである。

戦前・戦後の出版物に著しい劣化図書が多く見られ（右図）、これはリグニン含有量、原料パルプの問題、抄紙時のpH低下などの原因が考えられる。



中性紙

日本には、酸性紙・中性紙の明確な定義はないが、国立国会図書館によるとpH6.5未満の紙を「酸性紙」と称する。また、pH6.5～10のアルカリ領域のものも含めて「中性紙」と呼ぶ。



パローは保存性の良い紙の必要性を訴え、指針を策定した。中性サイズ剤を用い、良質の化学パルプを原料とし、填料（アルカリ保持剤）として炭酸カルシウムを加える。中性紙は、酸性紙による劣化が問題化してきた1970年代頃から登場した。今日では、上質紙の多くは中性紙である。1992年の測定以降、民間出版物の中性紙使用率は80%前後の安定傾向を示している。しかし一口に中性紙といっても製造方法や内容はさまざまである。

1) 中性サイズ紙

中性または弱アルカリ性領域で紙繊維に定着・効果を発揮するサイズ剤を使用したもの。

・弱アルカリ紙

原料として炭酸カルシウムのようなアルカリ物質が使われているもの。pHは7以上。

・非アルカリ紙

中性サイズ紙、pHは6～6.5の弱酸性。(製造に使われる水の多くは炭酸ガスを含み弱酸性になっているため)

2) 無サイズ紙

吸い取り紙や紙のようにサイジングの必要がない用途の紙。pHは一般的に5～7。

3) 酸性サイズ中和紙

原料の調成工程で硫酸アルミニウムを使用し、同時に炭酸カルシウムなどのアルカリ物質で中和した紙。



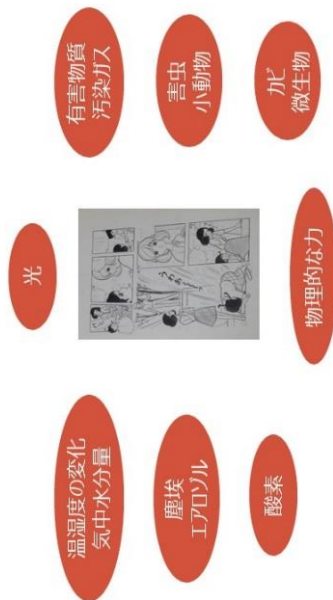
有害物質との接触・移行



古いレーシングペーパーとの接触

粘着テープ痕の遺存

外的環境因子による劣化現象

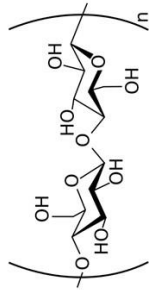


セルロースの劣化現象

- 紙の製造過程、使用状況、外的環境などによりセルロースは劣化する。
- セルロースの構造変化は、分子量低下（重合度低下）、分子間架橋の変化、着色構造の生成などにつながる。
- そして、結果的に強度低下、変色、角質化（脆化）などの劣化現象として現れる。
- なかでも、**酸加水分解**はセルロースの劣化にとって重要で、これによって分子量が低下する。ヘミセルロースやリグニンなどの非セルロース成分には大きな影響を与えないが、セルロース成分中の結晶領域は酸加水分解の速度を低下させる。
- 酸加水分解によって生成したグルコースはヒドロキシメチルフルフラールなどを経て酢酸やギ酸を生じる。

セルロースの酸化劣化

- セルロース分子はOH基をたくさんもっており酸化に敏感である。
- 酸化によりカルボキシル基 (-COOH) やアルデヒド基 (-CHO)を生じ、前者からはH⁺が遊離することでも有機酸となり、後者はさらに酸化されカルボニル基となる。
- これらは、最終的にはセルロース分子内にカルボキシル基を生じ(牛酸や酢酸となり)環境中で時間をかけて酸性化する。こうして酸加水分解が進む。



HCOOH やCH₃COOHなどの酸を生じる＝酸性化する

4. 劣化の科学的評価法と保存対策

「紙」に描かれたマンガ原画の保存科学



紙の物理的・化学的性質

- 坪量：単位面積当たりの質量 (g/cm²)
- 厚さ (mm) / 密度 (g/cm³)
- 強度：引張強さ、引裂強さ、耐折強さ、ゼロスパン引張強さ
- 色、白色度、蛍光
- 化学成分 (原料 (繊維)、填料・添加物、混入物)
- 酸性度 (pH)
- 平均重合度 (DP)
- 結晶化度
- 屈折率

強度試験

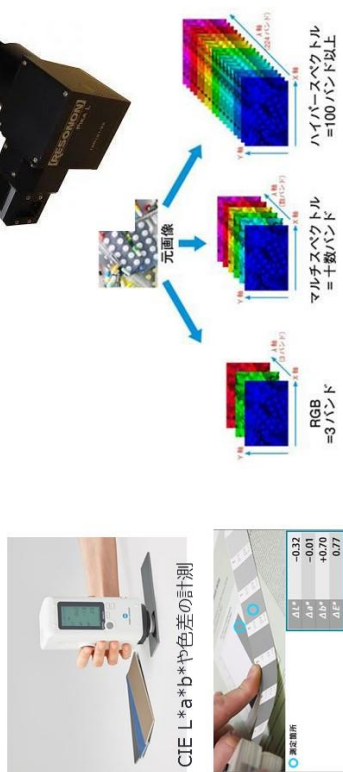


引張強さ試験機

引裂強さ試験機

耐折強さ試験機

反射色・蛍光の測定と画像化

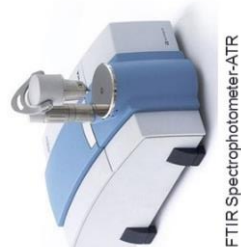
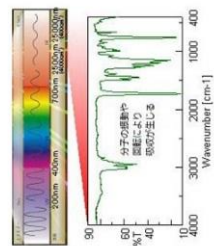


CIE L*a*b*や色差の計測



フーリエ変換赤外分光分析 (FT-IR)

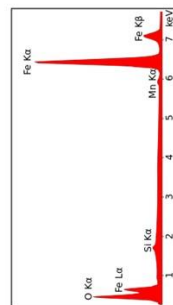
- ある種の化学結合が特定の波数における赤外線を吸収することを利用し、吸収スペクトルを測定することで、物質の特定や劣化学動の検出をおこなう方法である。紙だと、セルロース、ヘミセルロース、リグニンなどの物質が対象となる。添加物の炭酸カルシウムなども計測される。



FTIR Spectrophotometer-ATR

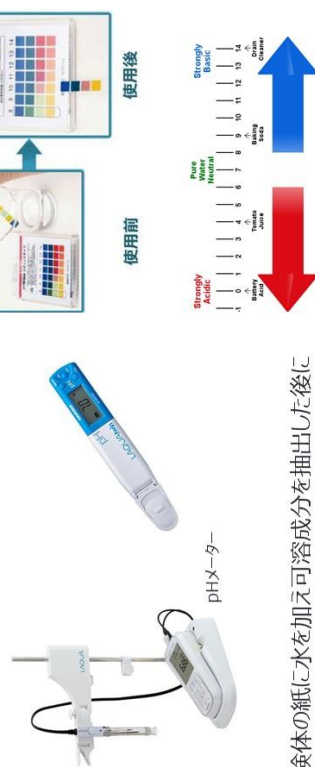
蛍光X線分析 (XRF)

- 紙に含まれる無機成分の定性・定量分析をおこなう方法。無機成分としては、サイジング剤、填料、アルカリ保持剤など目的的に加えられた材料、あるいは製造時に不作為に混入した成分などがあり、これらを分析する。



Portable-XRF analyzer

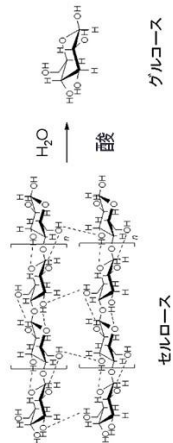
酸性度 (pH) 測定



被検体の紙に水を加え可溶成分を抽出した後、液のpHを測定する。pH7以下であると酸性である。

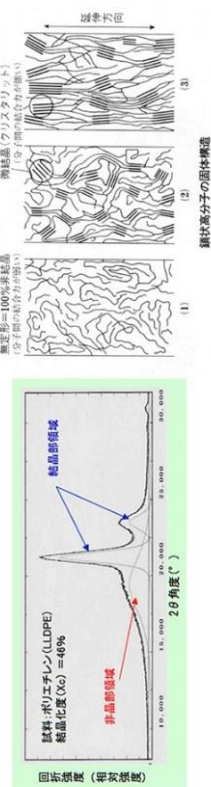
平均重合度

- 平均重合度とは、紙の主要構成物質であるセルロース分子のつながり数の平均値である。劣化するとセルロース分子は切断されて短くなり、同時に引張強さも低下する。引張強さが60%に低下するとき、平均重合度は40～45%に低下する、といわれる。



結晶化度

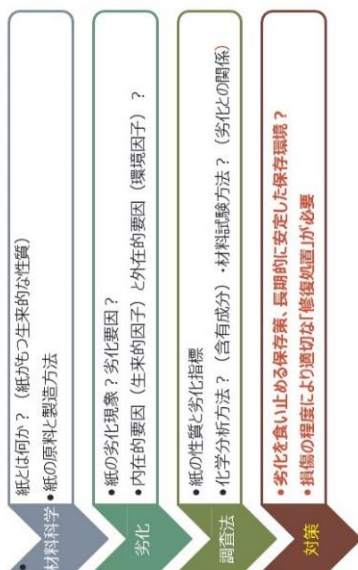
- セルロースは結晶性の高い部分と非結晶性（アモルファス）な部分が混在しているといわれている。結晶性の高さを結晶化度といい、劣化程度の指標とされている。
- 結晶化度は、X線回折分析（XRD）により測定することができる。



強制劣化試験：過酷な環境での材料試験



「紙」に描かれたマンガ原画の保存科学



原画の長期保存：劣化の要因を取り除くこと

- ・ サイズ剤による酸性化
- ・ 酸素や水分・光などによる酸化（ゆるやかに酸性化へ）
- ・ 汚染大気（SOx、NOx、オゾンなど）による変質（硫酸、硝酸へ）
- ・ 照明（光）による変褪色
- ・ 利用（取り扱い）による汚損や擦れ・破れなど物理的損傷
- ・ 粘着テープ、ホワイト、トレーシングペーパー、茶封筒など付着物・接触物による紙への影響
- ・ カビや害虫による汚損や食害
- ・ 埃塵やエアロゾル粒子（火山、砂嵐、海風、森林・草地火災、花粉、化石燃料の燃焼など）の付着による化学変化

中性紙製の封筒・保存箱による長期保存

特種東海製紙の抄造による中性紙封筒やアーカイバル・ボード製の保存箱への収納、間紙の利用：

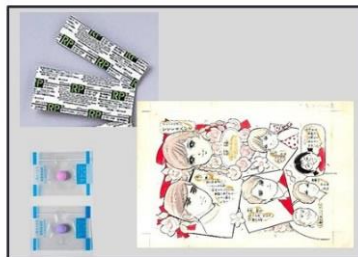
- ・ 偏酸性を排除した保存環境の提供
- ・ 温度湿度の変化の緩和
- ・ 有害汚染ガスの遮断
- ・ カビ・害虫からの防御



酸素や有害ガスを遮断し適切な湿度環境を与える

RPシステム（Kタイプ：三菱ガス化学）

- ・ 高精度ガスバリア袋とRP-K剤の併用で無酸素・約50%RHの環境を長期間維持できる。
- ・ **酸化防止**：酸化による劣化や変退色を防ぐ効果がある。短期間に確認できる効果としては、紙の黄ばみ防止や顔料や染料の酸化による退色防止などがある。
- ・ **殺虫・防カビ**：室温条件で約3週間無酸素保存をすれば、害虫は卵、幼虫、蛹、成虫の全てのステージで死滅することが知られている。防カビ効果も大きい。



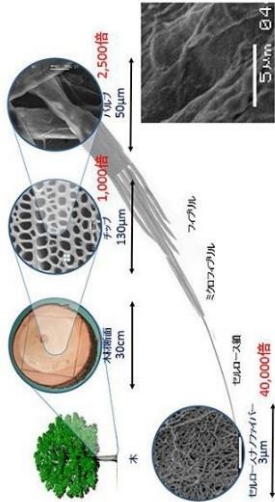
脱酸性化処理

- ・ 酸性紙の劣化を抑制するためには環境の改善だけでは困難なことが多く、紙の酸性性を中和して寿命を延ばすことが必要である。劣化を阻止する方法として、酸性化した紙（書物など）を大量に脱酸性化する処理法がある。
- ・ 脱酸性化処理の目的は、酸を中和するためアルカリ物質を紙に定着させることにある。ただ、これにより劣化の進んだ紙の強度を回復することは困難である。
- ・ したがって、今後劣化の進行が予測される紙に対して、経年劣化の予防的処置として用いるのが効果的である。
- ・ 処理技術は、液相処理、気相処理（ジエチル亜鉛法、ドライ・アンモニア・酸化エチレン法など）に大別され、液相法は水溶液タイプと非水溶液タイプ（Wei To法、サブレー法、ブックキーパー法）がある。

紙の強度の回復（大量強化処置）

- ・ 強化剤を用いた処置
 1. ウィーン法（メチルセルロース添加）
 2. BCP法（にじみ止め、脱酸性化、強化を一挙に実施）
- ・ 物理的要因による強化
 1. フリース法（リーフキヤスティング）
 2. ペーパースペースブリット法

セルロースナノファイバー含浸（強化処置）



5. おわりに

保存科学の役割：資料の限りなき延命

Theoretically, the museum's obligation to preserve its collection is infinite. Indeed, it is expressed in the foundation documents of many museum as, "to preserve in perpetuity". Thus, if conservation is the technology of preservation, the conservator's duty must be to ensure the preservation of the collection for as long as possible.

"The Nature of Conservation – A Race Against Time" by Phillip Ward,
The Getty Conservation Institute (1986)

参考文献・URL

- ・鈴木英治著：「紙の劣化と資料保存」、日本図書館協会 (1993)
- ・園田直子編：「紙と本の保存科学」、岩田書店 (2009)
- ・京都造形芸大編：「文化財のための保存科学入門」、角川書店 (2002)
- ・稲葉政満著：「図書館・文書館における環境管理」、日本図書館協会 (2001)
- ・エドワード・アドコック編・木部徹監訳：「IFLA図書館資料の予防的保存対策の原則」、日本図書館協会 (2003)
- ・磯貝明編：「セルロースの科学」、朝倉書店 (2003)
- ・佐藤杏樹：「漫画原画の長期保存を目的としたコンディショニングシートの開発」、東洋美術学校保存修復科平成28年度卒業研究 (2017)
- ・資料保存器材HP：<http://www.hozon.co.jp/>
- ・TTトレーディング (特種東海製紙・販売会社) HP：<http://www.tokushu-papertrade.jp/>

今日、「マンガ原画の保存科学」への途を
一歩踏み出しました

ご清聴ありがとうございました

資料⑦ 人と人の目以外で見る、マンガ原画の素材と保存状態

はじめに

人と人の目以外で見る、マンガ原画の素材と保存状態

機器分析と多変量解析によるグループ化



東洋美術学校 保存修復研究室
小野 慎之介

はじめに

この先“100年間”にわたり、マンガ原画を「現物保存」していくためには？

(保存修復／保存科学の分野から協力できることは何か？)

- マンガ原画の保存状態（劣化状態）を客観的に判断するためには？
- マンガ原画に使用されている素材と保存状態に因果関係はあるのか？
- マンガ原画の保存状態を可視化し、それぞれに合った保存対策を実行していくためには？

➡

<現状に即したタイプ別の保存対策>

はじめに

例えば・・・

保存状態から

マンガ原画の置かれた環境からの尺度

	保存環境S	保存環境A	保存環境B	保存環境C	保存環境D
問題なし	S0	A0	B0	C0	D0
要経過観察	S1	A1	B1	C1	D1
危険度+	S2	A2	B2	C2	D2
危険度++	S3	A3	B3	C3	D3
危険度+++	S4	A4	B4	C4	D4

保存状態から

保存環境？

保存環境が改善されないと対応が難しい。「どこに」あるのかで、その後の運命が大きく左右される。どれだけの作品を「ノアの箱舟」に乗せることができるだろうか・・・

目次

1. 蛍光X線分析(XRF) による原稿用紙の元素分析
2. フーリエ変換赤外分光分析(FT-IR) による原稿用紙の保存状態評価
3. ハイパースペクトラルイメージング(HSI)による分光反射率評価
4. 官能試験による保存状態評価
5. 機器分析と官能試験の相関性 - “脆化”とは何か？
6. 今後の課題 - 保存状態に即したタイプ別保存対策

1. 蛍光X線分析(XRF) による原稿用紙の元素分析

1. 蛍光X線分析(XRF)による原稿用紙の元素分析

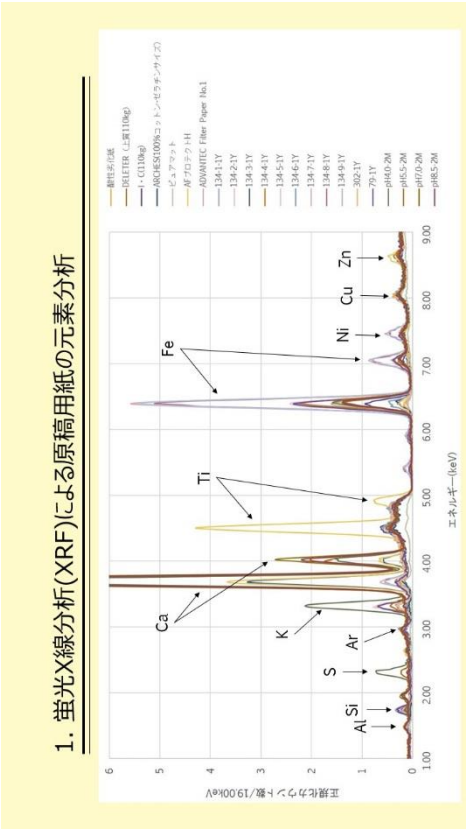
紙の主成分は？

- セルロース
- ヘミセルロース
- リグニン

その他に、紙に含まれているものは？

- 填料（タルク、カオリン、炭酸カルシウム、二酸化チタン など）
- サイズ材（ロジン・硫酸アルミニウム、アルキルゲンダイマー など）
- その他（顔料・染料、紙力増強剤、防腐剤 など）

＜客観的情報を得るための機器分析＞



1. 蛍光X線分析(XRF)による原稿用紙の元素分析

この分析結果をどのようにすれば**視覚化 (数値化)** できるのか？

(数千にも及ぶ変数と、膨大なサンプルを人は瞬時に判断することができない!!)

＞その紙は平均的か、それとも他と大きく違っているのか？

＞その違いは何か？

＞その違いは、保存状態に悪影響を与える（可能性がある）のか？

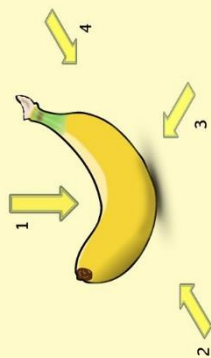
＜多変量解析による探索的データの解釈＞

1. 蛍光X線分析(XRF)による原稿用紙の元素分析

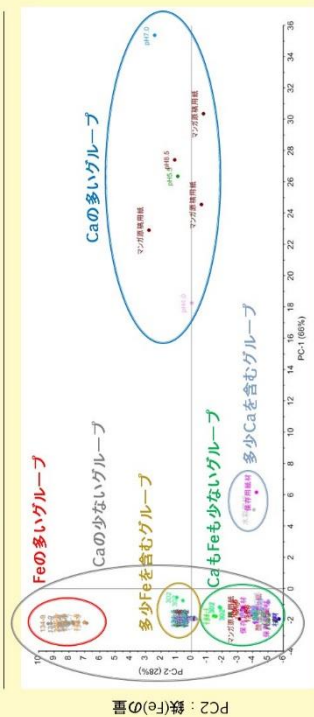
ここで質問です。下のようなバナナが一本ありました。

このバナナを紙の上に描いて、形の特徴をよく説明したいと思います。

この場合、どの方向からバナナを描いたら良いでしょうか？



1. 蛍光X線分析(XRF)による原稿用紙の元素分析

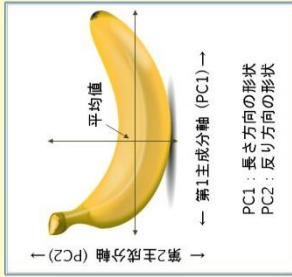


PC1 : カルシウム(Ca)の量

1. 蛍光X線分析(XRF)による原稿用紙の元素分析

主成分分析(PCA)によるデータの可視化

- 膨大な数の変数を、変化を説明するのに重要な幾つかの合成変数 (ローディング) にまとめることができる。
- 新しい変数から見たときの各サンプルの平均値からの距離 (主成分スコア) をプロットし、特徴の違いを視覚化できる。
- プロットされた位置が近いということは、似た特徴を持っている。
- プロットされた位置が遠いということは、違う特徴を持っている。
- 合成変数がプロットされた位置に与えた影響を調べることで、各サンプルの特長の要因を知ることができる。



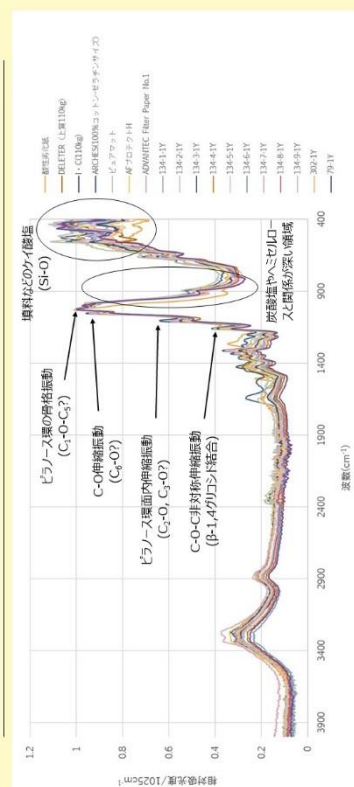
1. 蛍光X線分析(XRF)による原稿用紙の元素分析

XRFにPCAを適用して分かったこと

1. CaとFe量の割合は、紙を特徴づける主な要因となっている。
2. 現在市販されているマンガ原稿用紙にはCaが多く含まれている。
3. 現在市販されている一部の保存用紙材にはCaが含まれている。
4. 1980年代以前の紙にはCaが少なくSiが含まれている→酸性抄紙。
5. 一部の原画にはFeが多く含まれている→填料由来？
6. パルプやコットンペーパー、濾紙などにはCaもFeも殆ど含まれていない。

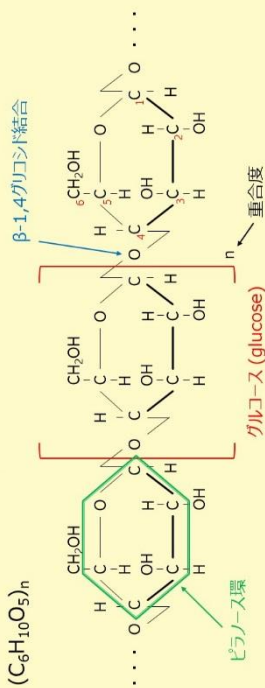
2. フーリエ変換赤外分光分析(FT-IR) による原稿用紙の保存状態評価

2. フーリエ変換赤外分光分析(FT-IR)による原稿用紙の保存状態評価

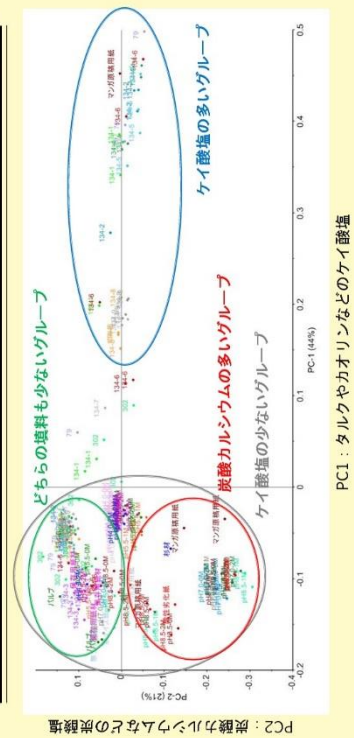


セルロース (cellulose)

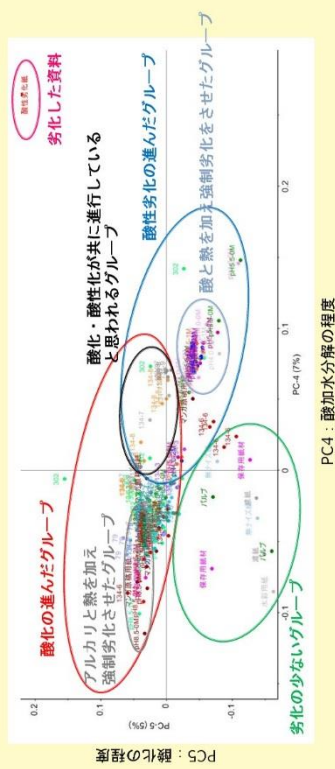
$(\text{C}_6\text{H}_{10}\text{O}_5)_n$



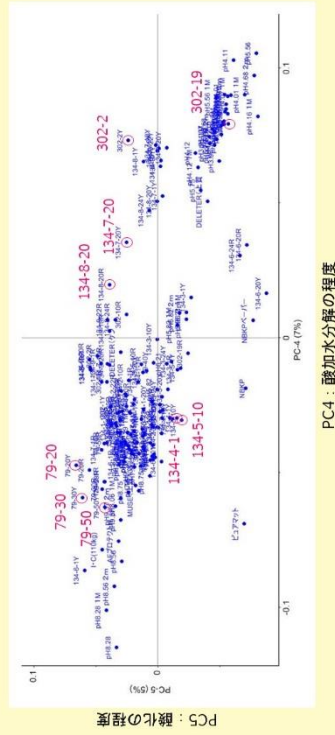
2. フーリエ変換赤外分光分析(FT-IR)による原稿用紙の保存状態評価



2. フーリエ変換赤外分光分析(FT-IR)による原稿用紙の保存状態評価



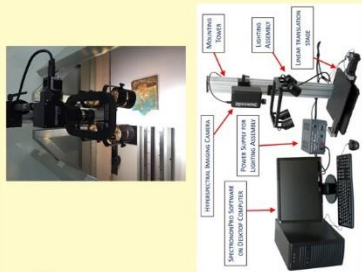
2. フーリエ変換赤外分光分析(FT-IR)による原稿用紙の保存状態評価



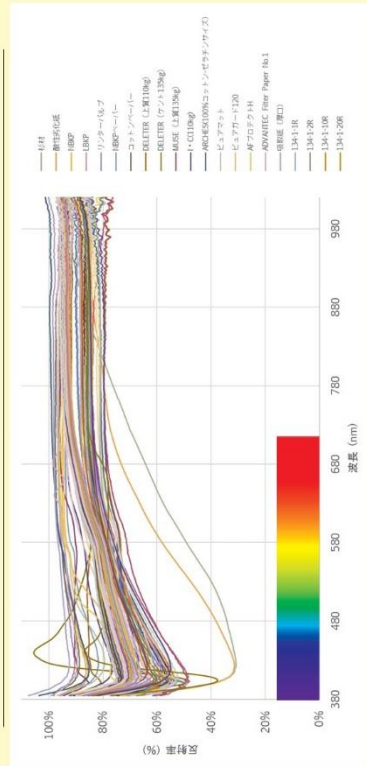
3. ハイパースペクトラルイメージング(HSI)による分光反射率評価

3. ハイパースペクトラルイメージング(HSI)による分光反射率評価

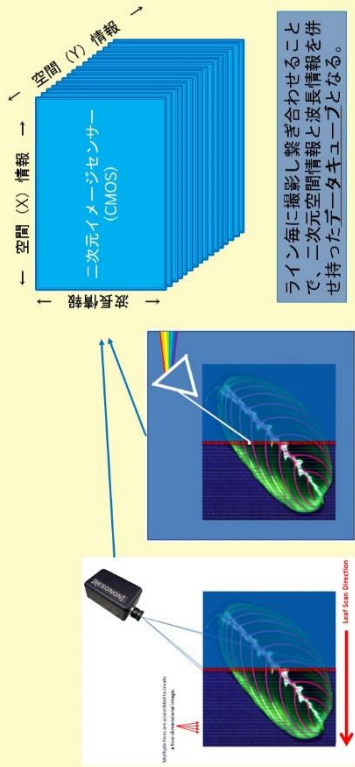
- 使用機材 : RESONON Pika-L (400-1000nm)
- 波長分解能[nm] : 2.1
- 波長チャンネル数 : 281
- 空間チャンネル数 : 900
- 空間分解能 : 0.15mm/pixel
- ピット数 : 12
- 分光反射イメージング用光源 : ハロゲンランプ
- 分光蛍光イメージング用光源 : 12波長線形LED光源



3. ハイパースペクトラルイメージング(HSI)による分光反射率評価

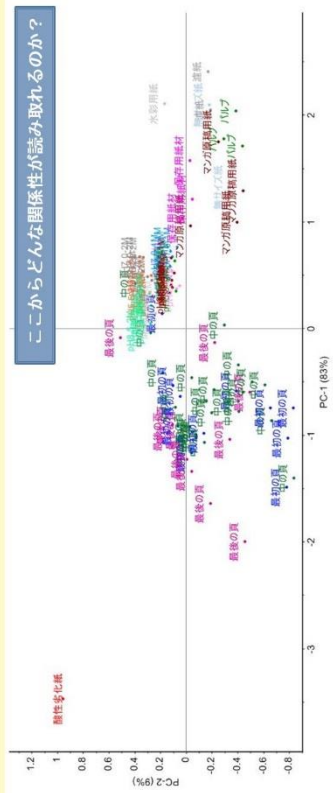


3. ハイパースペクトラルイメージング(HSI)による分光反射率評価

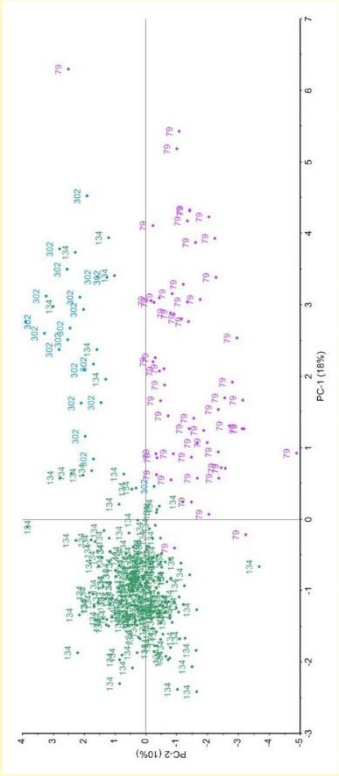


ライン毎に撮影し繋ぎ合わせること
で、二次元空間情報と波長情報を併
せ持つデータキューブとなる。

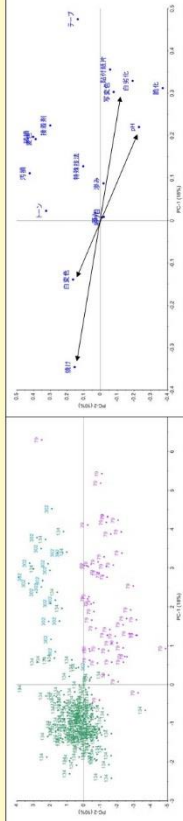
3. ハイパースペクトラルイメージング(HSI)による分光反射率評価



4. 官能試験による保存状態評価



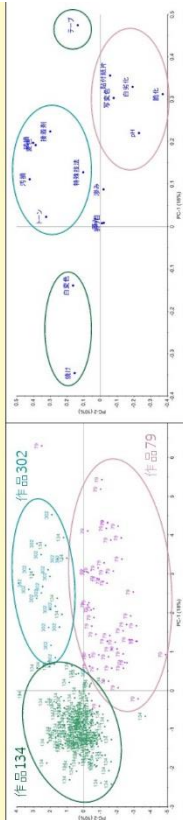
4. 官能試験による保存状態評価



1. プットされているスコアに強い影響を与えた調査項目（変数）を、ローディングプロット（上右図）から見つけることができる。
2. 調査項目についても、位置関係が近いものは相関関係が強い。
3. 原点を中心に逆側に位置している調査項目とは、負の相関がある。例えば、pHが低いとその逆側に位置するホワイトの変化が助長されるなどの傾向が読み取れる。

4. 官能試験による保存状態評価

4. 官能試験による保存状態評価



1. 作品79(1966年)は、pHが比較的高く、ホワイトや写植の劣化が多い。また酸化の得点が高くなっており、紙がもろくなっていると感じた調査者が多かった。
2. 作品134(1969年)は、原画裏面に次のページが写り込む「インクやけ」が顕著な作品で、ホワイトの変色も見られた。またデータの劣化が少なく読み取れる。
3. 作品302(1981年)は、用紙の全体的な変色や破損、汚損、写植の接着剤による汚れなどが顕著であった。トーンの使用も多い。

5.機器分析と官能試験の相関性 — “脆化”とは何か？

5. 機器分析と官能試験の相関性 — “脆化”とは何か？

- 調査項目「脆化」は、原面の「厚み」と「破損」に負の相関がある。
- 鉄 (Fe) の量と相関がある。また波長 380~1020nm における反射率とは穏やかな負の相関がある。
- 脆化の傾向を示すFT-IR分析での第5主成分 (PC5) とも相関がある。

考察：「脆化」とは紙が薄く脆い印象を与える状態であり、しかし破れなどの物理的損傷とは異なるものと認識されている。また、鉄(Fe)を含む紙の分光反射率の形状には特徴があり、測定波長範囲における総反射率も低くなる傾向にある。またこれらの紙は脆化が助長される傾向にあるようだが、これをとまで「脆化」として捉えられているかは明らかではない。

6.今後の課題 — 保存状態に即したタイプ別保存対策

6. 今後の課題 — 保存状態に即したタイプ別保存対策

酸加水分解が進行中の原画に対しては？

- 酸加水分解により重合度が700程度を切ると、急激に紙の強度やしなやかさが失われ、物理的損傷が引き起こされるといわれている。今回調査した作品の多くはpH4前後のものが多く、時間の経過と共に加水分解反応が進行していくことが予想される。重合度を回復させることはできないが、分解反応の原因となっている酸を中和化する**脱酸性化処理（気相法や液相法）**により進行を遅らせる対策が必要と考えられる。

酸化反応が進行中の原画に対しては？

- 酸化反応については今回の調査を通じ、特にFe成分と関連した劣化進行の可能性が示唆された。インクや顔料などに含まれる鉄や銅のイオンがセルロースを酸化させる要因となっている事例が、これまでも多数報告されている。キレート剤によるイオン封鎖効果などが期待されているが、未だ十分な解決策となっていない。酸化の原因となる光や酸素を遮断しつつ温度管理も行う**RPシステム**などを用い、劣化の進行を遅らせる対策が有効と考えられる。

それでは、ワークショップを行いたいと思います！

1. pH計測

2. FT-IR計測

3. XRF計測

4. 計測データを原画モデルに投影し劣化度を評価

4 シンポジウム「マンガ〈原画〉のアーカイブに向けて」要約・全文

日時：平成 30 年 2 月 10 日（土） 13 時 00 分～16 時 00 分

場所：京都国際マンガミュージアム 1 階 多目的映像ホール

要約

あいさつ・趣旨説明

事業オブザーバーの吉村和真が、あいさつを兼ね事業実施に至る背景と目的を述べた。クールジャパンと呼ばれ、日本文化としての重要度を増すマンガ、アニメ、ゲームであるが、これらメディア芸術をアーカイブすることへの社会的合意はいまだ確立されているとはいえない。マンガの場合、雑誌や単行本は「商品」でもあるため、その原稿＝〈原画〉は通常の美術品と違い、流通する存在とは考えられてこなかった。昨今はデジタル原稿が増え、原画という概念自体も揺らいでいる。国内外でマンガ展示への要請が増える一方で、戦後マンガ文化を支えてきた作家の高齢化や出版不況により、マンガ原画は散逸の危機に直面している。そうした状況を踏まえ、今こそ原画アーカイブの理念を可視化し、社会に発信していくべきではないかと訴えた。

第 1 部 活動報告

横手市増田まんが美術館の活動

大石卓が『「原画の保存と活用」への取り組み』と題して報告。同館はマンガ原画の収蔵と展示で 20 年以上の実績を持つ。選定基準を満たした作家の全作品もしくは主要作品の原画を収蔵することで、保存・管理にかかる作家の負担軽減に貢献できているだろうという。2015 年に郷土出身作家と市の共同出資で財団法人を設立。2017 年の市報 1 月号では、秋田県出身のマンガ家と市長の新春対談、リニューアル中の美術館、保管されている原画やアーカイブの取り組みが紹介され、(同事業で画像データアーカイブされた作品の一部を使った)マンガ雑誌風の表紙と共に「マンガのまち横手 新たな挑戦」を印象付けた。市民にも好評で、「誇らしく思いました」という感想を紹介し、原画アーカイブが「シビックプライド」になり得る可能性について提案された。

明治大学 米沢嘉博記念図書館の活動

ヤマダトモコが、一般家庭で保管される可能性を想定した原画の簡易な整理と利活用の手順を報告した。同館はマンガをはじめとするサブカルチャーの専門図書館。2015 年開催の「三原順 復活祭」展を機に三原順氏の原画を預かり整理してきた。2017 年、三原氏の代表作が舞台化された際には、グッズを製作する出版社に原画を貸し出した。グッズが売り切れ続出と聞き、原画の整理が利活用を容易にすることを実感したという。

本年度、プロジェクト内で立ち上がった「保存修復研究部会」（部会長はヤマダ）では、

緊急避難的保存と長期的保存は併せて考える必要があると痛感したとのこと。

今後の展望として、関係者・関係施設のさらなる情報共有によるよりよい整理法の模索、原画アーカイブの充実を挙げ、夢は三原氏の故郷北海道で原画展を開催することだと語った。

北九州市漫画ミュージアムの活動

表智之が、陸奥 A 子氏から寄託された原画を整理中、偶然 2 館での展示と出版が実現した事例を紹介し、原画が整理され活用できる状態にあれば、リバイバル・チャンス逃さずすむ、と主張。2 館の図録と公式ガイドブックをはじめ、同じ年に出版された傑作選も、1 年以上たって別の出版社から発売された陸奥氏の作品を含む少女マンガの単行本も、原画の風合いを前面に出したものだだったという。表は、原画が持つ経年変化を含めた風合いを鑑賞する視線が日本で芽生えつつあるのではないかと分析。マンガの新しい楽しみ方として、1 話分の原画を全部並べて読ませる展示や、電子書籍化が進む中、逆に原画の風合いを残したプレミアム感のある紙ベースの本がスタンダードになる可能性もあると指摘した。

京都国際マンガミュージアムの活動について

倉持佳代子が、竹宮恵子氏と京都精華大学が 2001 年から共同研究している、精巧な複製原画「原画」（ダッシュ）を紹介した。目視による色確認を重ね、傷や汚れもそのまま、サイズも原寸で再現された「原画」は、第一義的に原画の現状のアーカイブを目的とする。原画は作家に返却され、「原画」は同館で所蔵。館内展示のほか、他館や海外への貸し出しに活用している。貸出料から得た収益は、その半分以上が作家に還元されるという。今年 2018 年には、新たに、「原画」そのものと、「原画」のデータを用いて制作したポストカードの販売も始まった。さらなる利活用にも応用できるのではないかという。

「原画マーケット」の可能性と課題

最後に、司会も務めたイトウユウが、原画の利活用を考える上での重要な視点として、原画の販売事例を報告し、その可能性と課題について報告した。自分亡き後の家族への配慮や、データがあれば原画は不要との考え方から、作家が原画を手放す事例として、「寺沢大介画業 30+1 周年記念原画展」（2016 年）においてマンガ原画が 1 ページ単位で販売されたことが紹介された。海外、特に欧米ではマンガ原画も美術品と見なされ、マーケットも収集家も存在する。日本のマンガ原画の購入先の照会が京都国際マンガミュージアムに来ることもあるという。日本では原画の売買に対する作家やファンの反発が予想されるが、アメリカでは個人コレクションが最終的に美術館に寄贈されることも少なくなく、マーケット全体で原画を収集しアーカイブするという発想もあっていいのではないか。ただし健全な市場にするために、「美術」「アート」の価値観とは異なる、日本のマンガに合った価値付けは必要だろうと述べた。

第2部 タイプ別モデル図発表

モデル図説明

吉村は、モデル図を作成する目的として、本事業で過去2カ年度、マンガ原画アーカイブを実践してきた4館の活動を俯瞰するだけでなく、原画の保存や活用で困っている人たちが、どこに相談に行けばいいのかが一目瞭然になることを挙げた。各館のこれまでの取り組み、今後の方向性をマッピングし、全体の見取り図となり得るモデルの構築を目指しているという。原画アーカイブが今置かれている複雑な状況を視覚化するため、レイヤー構造で設計したとのこと。

イトウは、本プロジェクトでいう「アーカイブ」が、〈収集〉、〈整理・保存〉、〈利活用〉の3段階を合わせたものであることを断った上で、提示するモデル図では、2つの座標軸を使った4象限マトリクスを採用し、「縦軸＝デジタル↔オリジナル」「横軸＝公開↔販売」で作成したと説明。3つのレイヤー「緑色＝収集」「黄色＝整理・保存」「水色＝利活用」を組み替えながら使うことで、(1) 原画をすでに所蔵（収集）しているが、整理・保存や活用イメージを持たない個人と、(2) 利活用の明確なイメージを持っているが原画を収集し、整理・保存したらいいかわからない文化施設等両者にとって有効な図の作成を目指したと説明した。

モデル図ブラッシュアップ討論から

- ・ 公開、販売にかかわらず、原画の情報を整理しておくことは必要。情報を付与することで経済的な価値も上がる。欧米のように原画が売買対象になれば、整理も進むかもしれない。
- ・ アーカイブする人、アーカイブしたものを活用する人を増やしたい。そのためにはアーカイブによるメリット、デメリットも可視化したい。モデル図の形式にこだわる必要はないのではないか。
- ・ このジャンルならあの館、と分かるレイヤーもあると活用しやすい。館ごとにジャンルの「持ち分け」をしてもいいのではないか。
- ・ 原画を販売して手元になくなっても、「原画」のようにデジタル化がされていれば、その公開はできる。「公開」と「販売」は両立することもあるのではないか。

これらの意見に対してイトウは、相対的な位置関係を知るためにマトリクスを使用したけど、どのような形でもいいので引き続き意見を寄せてほしいと要望。最後に吉村が来年度の協力を求めて閉会した。

付録

全文

○イトウ 皆さん、お集まりいただき、ありがとうございます。このイベントは、「平成 29 年度 文化庁メディア芸術連携促進事業」の中の「マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発」というマンガに関するアーカイブの事業の一つの企画として、今年度の一つの区切りというか、こういうことをやってきましたというまとめとして開催されるシンポジウムです。

シンポジウムのタイトルが「マンガ〈原画〉のアーカイブに向けて」というタイトルになっております。ここで言うアーカイブというのは、〈収集〉というレベルと、〈整理・保存〉というレベル、集めたものを〈利活用〉するという、一連の流れのことですが、この事業では、それぞれのレベルにおいて、どういうことが必要で、人件費や時間などこういったコストがかかるかといったことを、各館で実践してきました。

このアーカイブの実験は、昨年度、一昨年度から続いていたのですが、3 年目ということで、今年は 4 館が行ってきたことを、それぞれの館の特徴が見られるようなモデル図というかたちでいったんまとめて発表してみようということになりました。

今日は、そういったことなので、各館の活動報告、特に今年度に行ってきた、マンガ原画のアーカイブに関する活動を発表していただくことになります。

本日の登壇者を簡単に紹介します。横手市の増田まんが美術館から来ていただいた大石さんです。そのお隣が、明治大学の米沢嘉博記念図書館のヤマダさんです。その向こうにいらっしゃるのが、北九州漫画ミュージアムの表さんです。チラシに名前は書いていないのですが、今日はマンガ原画のアーカイブということで、ちょうど今、このマンガミュージアムでも展覧会をやっている「原画ダッシュ」という、アーカイブの利活用についての面白い事例を 10 年近くにわたって取り仕切っている、京都国際マンガミュージアムの倉持さんにも急遽ご登壇いただくことにしました。よろしくお願いします。

そして、お隣にいるのが京都精華大学の吉村さんです。僕は、一応、この事業のリーダーというかたちになっています、京都精華大学国際マンガ研究センターのイトウです。よろしくお願いします。

まず、このマンガ原画のアーカイブをするという事業も含めて、マンガという文化資源をアーカイブすることそのものについて、吉村さんに、あいさつも兼ねてお話をいただきたいと思います。

付録

開会あいさつ・趣旨説明

京都精華大学

吉村和真 氏

皆さん、あらためまして、こんにちは。寒波が続く中に底冷えのする京都まで足をお運びいただきまして、どうもありがとうございます。この、ある意味でニッチなテーマに集まっていたということ、寒い中でも皆さんの気持ちは熱いんだと思いながら、この後、シンポジウムを開いていきたいと思います。

私の方から、いまイトウさんの方からお話がありました、この事業に至るまでの背景と、それが抱える全体的な目標みたいなものを少し説明しながら、あいさつに代えたいと思います。10分ほど時間をいただきます。

その前に、お手元に1枚、メディア芸術連携促進事業の報告会のチラシが入っていると思いますので、ちょっとそちらもご覧ください。前の方にそのポスターも出ておりますが、これが2月25日に予定されております。

そこで報告する団体は、本学の他、デジタルコミック協議会とか、明治大学さん、アニメ特撮アーカイブ機構さんなどの名前が並んでおります。また、研究プロジェクトということで、これを請け負う事務局の方で主体的に取り組んでいるテーマなども書かれております。

いったいこれが何かと言いますと、メディア芸術祭というものが長く行われて、社会的にも名前が知られてきたと思いますが、このメディア芸術というのは、ある意味、もう皆さんもご存じのとおりだと思いますが、マンガ、アニメ、ゲームに、特撮、メディアアートの領域を含んで、名付けしながら、こうしたものの振興に文化庁が取り組んでいこうということに進んでいるわけです。

それぞれの領域をどうやってうまくつないでいくのかということが、皆さん方の経験上からも、容易にこの領域に求められることが分かると思います。マンガ、アニメ、ゲームと、分かりやすくこの辺を取り上げるならば、私はマンガしか読まないとか、アニメだけ見て育ってきたとか、ゲーム以外に関心がないとか、そういうことはあり得ないわけです。

その辺りの領域が複合的に絡み合いながら、もっと言えば、不可分な経験として私たちの内にある中で、こうした領域をどのように文化資源として価値化していくかという問題が、この事業の根本に横たわっています。

そういう意味でも、これを連携していくというのは、理念としてはまっとうなのですが、その手法や、そこに関わる人材においては、かなりの制度的・経験的な差というものが存在します。

マンガを原作とするアニメがあるからといって、その製作者たちが常に顔を向き合せて話しているわけでもありませんし、それを資料として集めていこうとするときには、当然ながら、静止画、動画、あるいはデジタルや、その量の問題も含め、もっと言えば、ゲームな

どについては、何を資料として扱えばいいのかという、その対象の確定に至るまで、さまざまな手法が存在してしまっていて、それぞれにプロジェクトを進行しているという状態です。

ですので、その理念に向けて、こういった連携がなし得るのかということを考えていくために、メディア芸術連携促進事業というものが設けられています。これが今年で3カ年目になります。こういったものは、およそ5カ年計画の中で行われるということで考えた場合、ちょうど中間のまとめというものが求められる年度になっているわけです。

その中のマンガ領域のプロジェクトの一環として、この「マンガ原画アーカイブのタイプ別モデル開発」という名前を冠したプロジェクトを、京都精華大学が主体となりまして、ここにいる皆さん方と一緒に進めてきているわけです。

このアーカイブそのものは、名前もすでに社会認知されていて、アーキビストのような専門の職業というものも見えてきてはいますけど、アーカイブを目的にするのか手段にするのかという大きな問題もありますし、とりわけこの領域におけるアーカイブというのは、そもそもどういう目的でやるのかということが、社会的な合意をまだ確立しているとは言い難いのが現状です。

このメディア芸術連携促進事業の前身になる、この領域のコンソーシアムを構築しようという事業もありましたが、それが走りだす直前にあった、いわゆる国営マンガ喫茶騒動のようなものを考えた場合に、市民の血税などを投じてマンガやアニメやゲームをどうしてアーカイブする必要があるんだということに、どう答えていくかというのは、そこから背負われた宿命のような理論武装があるわけです。

これはこれで別建てしながら全体を進行していき、そうした報告会を通じて、皆さん方にその意義を提言していくという場を設けていますが、今日は、その個別の問題として、マンガの原画について考えるということになるわけです。この原画は、二重の意味で、さらにそこからひねりが必要になってきます。

一つは、マンガの刊本、つまり雑誌や単行本というのは、商品として世に流通していますので、その市場価格というのは、そこに設定されているとおりです。ところが、これも容易に想像できますように、マンガの原画というのは決してそうではありません。むしろアートにおけるマンガとは立ち位置が真逆と言っても構わないと思います。

つまり世に流通しているものではなくて、本来は世に出るべきではないと思っている方もいらっしゃるでしょうし、そういうものが残らないということが、昨今のデジタル技術の発達からすれば、もう今後、原画というものは、概念としても存在としてもなくなってしまうかもしれないという意味において、その特殊性を持っています。これがねじりの第一です。

もう一つは、とはいえ、こうしたマンガミュージアムのような場が全国に広く点在しつつある中に、今日、お越しの施設の方々もいらっしゃるわけですが、その社会的な機運というのは、マンガやアニメをクールジャパンというようなくりのもとで、これをきちんと支えていこうという動きは強くなっていると思われますし、先ほど原画ダッシュの展示というお

付録

話をしましたが、この10年で美術館における原画を含むマンガ展示の数というのは目に見えて増えているわけです。

そうしたものが求められる場というのは、広がってはいるんだけど、それをアーカイブしていく意義であるとか、その手法、さらにそうしたものを身に付けた人材の広がりというのが追い付いていないという、第二のねじれがそこに存在しています。

こういった問題を、もう耳にたこができるほどお話ししているわけで、それを何度も聞いた方もいらっしゃるかもしれませんが、これを根気強く発信していく中で、少しずつ全体のメディア芸術におけるアーカイブの理解や、あるいは活用のイメージというものが育っていくんだろうと思われます。

私たちは、その原画のアーカイブについて、その合意の啓発というものはもちろんやっていくわけですが、一方、具体的にそれに取り組んできた経験値の高い、あえて精鋭たちと言わせてもらいますが、その人たちがここに集まっていると自負しております。

問題提起にとどまることなく、具体的にどんなふうにそのアーカイブがなされているのか。その中で具体的な問題がどう見えてくるのかということを、本日は可視化できると思います。現状の問題共有から先に進むような成果というものを、ここで共有したいというのが今日の趣旨になっております。

また、このタイプ別モデル開発というのを、あえてこの3年目に設定したのは、それぞれの動きについては、私たちは、それを把握しながら連携に向けて動いてきましたが、それを一望したとき、実は、マンガ原画のアーカイブと利活用というものが一筋縄ではいかないということが、理念的に、もっと可視化されるかたちで社会発信できるのではないかということを、この3年目の目標にしてきました。

それがなぜ必要なのかというと、これも容易に想像できますが、マンガの原画が散逸される危険性というのは、どんどん高まっているわけです。戦後マンガの成長というのは、裏を返せば、それを支えてこられた方々の高齢化。また、出版界全体の構造不況というものを考えれば、これまで原画を保管していた出版社、あるいはそれに準ずるさまざまな場所が、その荷物を持て余している現状というのも分かるわけです。

ですので、理念的に、精度を高めていくために待つというよりは、いま動かねばならないような緊急性の高いプロジェクトだということも、併せてここでお伝えしたいと思います。

お話をまとめますが、緊急性と具体性を伴うようなものとして、今日、この後、個別の報告がなされた後に、全体の見取り図になるような、つまりこの領域を考えるための地図をお示ししたいと考えています。ただ、その地図は、まだまだ設計図を描き始めた段階ですので、そこにはさまざまな改良の余地があります。

それについて、先ほど熱い意志を持ってこられた皆さんと言いましたが、ここにいらっしゃる方々は、それぞれに、もうその問題にタッチされている方も少なくないと思いますので、それぞれのお立場から、私たちが示す地図に自分たちのさまざまな思いを乗せていただいて、さらに有用で立体的な地図をつくっていく機会にもしたいと考えています。

付録

まずはこの後、それぞれの施設の活動について具体的にお話を聞いていただき、そこからそれぞれの想像力を膨らませ、それをそれこそ連携促進するかたちで組み上げるための作業に入りたいと思います。

今日、この後、4時までの3時間になりますが、お時間を一緒に共有して、熱い時間で過ごしていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。私の方からは、あいさつは以上と致します。

(開会あいさつ・趣旨説明 終了)

第1部

○イトウ ありがとうございます。

そうしましたら、早速、第1部ということで、各館、横手市増田まんが美術館と、明治大学の米沢嘉博記念図書館と、北九州市漫画ミュージアム、それから京都国際マンガミュージアムの、先ほども言いました、収集、整理・保存、利活用という、その三つを合わせた意味でのマンガ原画アーカイブの実践ということ、それぞれ20分ずつご報告をいただきたいと思っています。

そうしましたら、順番で大石さんからお願いしたいと思っています。よろしくお願いします。

報告1

『原画の保存と活用』への取り組み

横手市増田まんが美術館

大石卓 氏

あらためまして、皆さん、こんにちは。秋田のまんが美術館から来ました、大石卓と申します。いまお話がありましたように、20分お時間をいただきましたので、僕の方からは、横手市が取り組んでおります『原画の保存と活用』への取り組みについてご説明させていただきます。

いま皆さんがご覧になっている建物ですが、これがまんが美術館が入っている、横手市増田ふれあいプラザという公民館になります。この公民館の中には大きなコンベンションホールがあったり、調理実習室や貸部屋があったり、図書館も入っていました。

そういった地域の複合施設の中に、マンガ原画を展示する美術館が1995年、いまから23年前ですが、横手市に合併になります前の、増田町の町制施行100周年の記念事業として建てられました。

そこから10年後、横手市と市町村合併しまして、横手市増田ふれあいプラザという建物になりながら、20年以上を経過した施設の改修と、マンガを核としたまちづくりにしてい

付録

こうという新しい横手市の取り組みを反映しまして、現在、まんが美術館という単体の施設に生まれ変わるための改修工事をしている状況です。昨年の4月から工事が始まりまして、来年の2019年4月に新しく単体の美術館としてオープンするという予定です。

この美術館の中に入っております、スロープ状になっているところにマンガ原画を展示していたところが常設展示室となります。スロープギャラリーを上りながら、その壁面に日本を代表するマンガ家さんの原画を展示するという施設でした。

どうしてまんが美術館という建物ができたかという、増田町出身で『釣りキチ三平』の作者であります、矢口高雄先生から大変協力をいただいたのですが、当時、矢口高雄記念館というものを建てようという構想もありました。

ただ、矢口高雄先生の方から、「個人の記念館は要らないと、これからのマンガ界を担う若手、子どもたちが、本物の原画、いわゆる一流の作家の原画を見て、新しいマンガ家を目指すのが一番の勉強になるから」と、そういうコンセプトの提示をいただきまして、国内有数のマンガ家の原画を展示する美術館を建設しました。倉敷にある大原美術館さんのコンセプトを参考にしながら、本物の原画を展示する美術館をとということで、まんが美術館はオープンしました。

休館前までですが、ここに107名ほどのマンガ家さんの名前が連なっていますが、手塚治虫先生をはじめ、石ノ森章太郎先生など、日本を代表するさまざまな先生の原画収蔵と展示を23年間続けながら、美術館を運営してきました。

この美術館を新しく単体の施設にするということで、中にありました図書館、それから貸部屋、公民館の機能などを平成29年の2月までに他の公共施設へ移管を完了させ、4月から工事に入っているという状況です。工事休館中ですがソフト事業は他の場所に作業場所を移し継続しながら、平成31年、2019年4月のオープンを目指しているという状況です。

後に詳しく触れますが、新しい美術館は、決してマンガのテーマパークを目指すものではなくて、原画の保存を中心に据えた美術館に生まれ変わりたいということで、その保存・集積した原画を見せる収蔵庫、こちらをメインにしていきたいという計画でいます。

収蔵した原画を見ていただくのももちろんですが、そのアーカイブの様子も見ていただく、更には直接原画に触れられるようなオペレーションも考えながら、運営していきたいという気持ちです。

常設展示なども、先ほど写真で見ていただいたイメージから、少しマイナーチェンジを図りまして、見せ方も変えていきたいということです。それから単館になりますので、こういったマンガカフェですとか、ミュージアムショップなども加えながら、新しい美術館を構築していきたいという考え方です。

新しい美術館の運営ビジョンですが、美術館を中心に据えながら、マンガ家や出版社、読者、地域の皆さんと一緒に成長しながら、文化、産業、読者、地域や未来につなげていきたいという、その役割を美術館が担っていきたいという将来像を描いています。

付録

美術館の運営のイメージですが、原画の保存、それから集積、アーカイブというものを、なぜ市が公費をかけてやっていくのかというところの考え方を具現化したものが、この大樹のイメージになります。

まず木は、根の部分、それから幹の部分、枝葉の部分が、しっかりバランスが取れて成長していくという中で、横手市としては原画を中心に据えまして、地中の見えない部分の役割、それから幹や枝葉の部分の役割というものを、しっかりやっていこうということです。

原画の収蔵やアーカイブ、人材育成、マンガ家との信頼関係の構築、出版社との交流といったものは、見えない土の中の不採算部門です。採算を取りにくい部分、これを担う団体がしっかり取り組むことによって、その幹や枝葉の部分である町並みとの連携や、観光、食、人材育成、ファンとの交流がしっかりと育っていくというイメージで、まんが美術館の運営をしていこうという考え方です。

この調和の比率ですが、地下が2、地上が1でバランスが取れているということで、目に見えない部分の取り組みを、市、それを担う団体がしっかり取り組むことによって、幹や枝がすくすくと健康的に育っていくということをイメージしています。

この幹や枝の部分は、それぞれの団体や市民、市で会社を営んでいる人や商工業者など、さまざまに関わる市民や団体の人たちが担っていく部分です。そして土の中の部分は市がしっかりと予算と時間をかけて担っていく部分というイメージで、美術館の事業を展開していきたいと考えています。

この事業をどう運営していくかという中で、市が直接にこれを担っていくという部分については、予算はもちろんですが、人的な限界、広がり限界も当然見えてきていました。ということで、横手市では、郷土出身の先生方と、横手市が共同で出資した法人「一般財団法人横手市増田まんが美術財団」を2015年2月に設立しました。

この法人が新しく生まれ変わる美術館の指定管理業者として運営を担っていく方向性です。

市と共に手を取り合いながら運営を担っていくということで、財団を設立しておりますが、設立して3年、順調に人材育成も進めながら、原画の保存と集積にも取り組んでいるという状況です。

横手市がどのような基準で作家を選定し原画を集積しているかという基準を示したものが、いまご覧いただいているものになります。まず郷土出身の作家さん、それから郷土とのつながりのある作家さんの原画を守っていこうという考え方。

それから先ほど一覧で見ていただきました、常設展示で収蔵している作家さんの原画の保存。または企画展を開催してお付き合いができた作家さんの原画の保存。関係性のある編集者さんが特別に推薦してくださった、作家さんの原画さんの収蔵。または作家側から収蔵依頼、または打診をしていただいた方の原画収蔵。

または秋田や横手にゆかりのある作品を執筆された作家さんなどの基準を設けまして、大規模収蔵という、いわゆる作家さんが生涯で描いた原画の収蔵を進めるという考え方です。

付録

その収蔵した原画が、どのようなイメージで保存され、それが活用されていくかという原画との関わりについて書いたものが、こちらになります。まず作家さんが原画を収蔵していただくということで、左側の部分は、美術館の方としての関わりの部分です。

作家さんは、原画を収蔵するということで期待される効果としては、保存・管理の負担が軽減できるということ、それから公的施設の保管による安心感が生まれるという部分が大きくあると思います。

そして原画を預けられたまんが美術館としては、実務の部分では、温湿度管理が行き届いた施設での適正保管を可能にし、アーカイブによる恒久的な保存に取り組めるということで、作家さんにとってもメリットがあるという部分です。

美術館の意識としては、作家さんから原画を預けられることによって、責任感が醸成されるということ、そしてお預けいただいた作家さんとの強い結び付きが構築できるということに意義があると言えます。

そして収蔵するという事実と左側の実務をしっかり遂行することにより、この原画保存の取り組み、アーカイブなどの社会的な意識と地位の向上を図っていききたいということで、これらを総合してマンガ文化の保存、継承、発展に貢献していききたいというのが、美術館の原画収蔵に対する考え方です。

右側の部分ですが、実際に原画の関わりがどうなっているかを書いている部分です。こちらの方は、主に出版社さんに説明するときに活用している資料ですが、当然、原画というのは、作家さんが描いたところで原画が生まれるということです。

それを出版社さんが出版物に掲載して発行するというので、だいたい単行本が出て2刷するまで出版社さんに保管され、その後、作家さんに返るというのが一般的と言われています。

4番の保存・管理が作家さんに来るという部分で、それぞれ作家さんごとにいろんな問題が発生しているというのは、冒頭に吉村先生がお話しされたように、マンガ原画の危機的な状況が生まれているということでもあります。その原画を役割分担として、まんが美術館はお預かりをさせてほしいということです。

当然、商業的な関わりは、いままでどおり作家さんと出版社さんが何ら変わりなく続けていくわけですが、私どもは、文化貢献的な関わりということで、その役割を担わせていただきたいというスタンスで、あくまでも物質的な原画の収蔵をさせてほしいということでのアプローチを作家さんと出版社さんに続けているというかたちです。

収蔵が実現した後、その後も当然、作家さんや出版社さんが原画を活用する、動かすということがあるわけですが、その部分もしっかり美術館がその受け渡しの役割もしっかり担っていきますという考え方のもとで、原画を収蔵させていただいています。

現在、どれくらいの数の原画がうちの美術館に収蔵されているかと言いますと、こちらになります。矢口高雄先生からは、生涯で描かれました約4万5000点の原画を横手市に寄贈

付録

していただきました。その矢口先生から寄贈していただいた原画を中心に据えまして、大規模収蔵の原画保存に向かうことになったわけです。

その後、能條純一先生、東村アキコ先生、小島剛夕先生という、様々なジャンルの先生方の原画を収蔵しております。

東村アキコ先生も、第一線で活躍されている先生なのですが、美術館の原画保存と取り組みのお話をしましたところ、私の原画を使って、その取り組みで、いろんな実践をしてみてくださいということで、原画保存と活用の取り組みに賛同していただいた先生です。

それから小島剛夕先生につきましても、開館以来、さまざまなお付き合いのある先生ということで原画をお預かりさせていただきました。スタートとしては、多ジャンルの作家さんの収蔵をしてみようということで、こういったラインアップで原画の集積をしてきております。

秋田県の先生方は、とても理解があり、市が公費をかけて原画を集めていくのだとすれば、いろんな先生に声を掛けてみてくださいというお気持ちをいただき、様々なジャンルの先生方にアプローチしているという背景があります。

そのような中、今年の3月までには、高橋よしひろ先生の4万5000点の原画の収蔵も決まっております。今年度末では、約15万点の原画が美術館に預けられるという計画です。

その収蔵した原画をどのようにアーカイブ作業しているかというのが、こちらになります。細かくて見えにくいと思いますので、口頭で説明しますが、原画1枚1枚をデジタル保存したり、その原画の状態を1枚1枚、台帳というものに入力していきます。

例えば原画のサイズですとか、どんな画材を使って描かれているかですとか、そういったものをしっかり書いていきながら、原画の間に中性紙素材でできた紙を封入しまして、1話ごとに中性紙素材でできた封筒に入れ、さらには単行本1巻ごとに中性紙素材でできたアーカイバルボックスという箱に入れながら管理をしているということを、繰り返し続けています。

そうしたデータも複数、ミラーリング保存し、スキャンしたデータも保存しながら、原画のデジタル化と適正保存という、アーカイブ作業を収蔵した原画に順次取り組んでいるというかたちになります。

ここまで収蔵とアーカイブということで、美術館が取り組んできている状況を説明しましたが、原画の活用の一例として、話題になりました横手市の市報の表紙がこちらになります。

この市報を出す市側としては、果たして市民に受け入れられるだろうかと、いろんな心配があったのですが、おおむね好評ということで、皆さんに快く迎えられたと感じています。

財団法人の出資者である先生と横手市長の対談の様子ですとか、大規模収蔵している東村アキコさんのインタビューの様子や新しい美術館の紹介、アーカイブはこんな作業をしていますということなどを、コンパクトにまとめて市報にしました。

その次の号となります、2月1日号に前号まで来たお便りが寄せられるコーナーがありますが、とてもうれしいお便りが寄せられていました。

付録

まず1月1日号を見て、「マンガのまち横手」という取り組みの内容を知ることができたという意見。もっと全国に横手の取り組みを広げてほしいという意見。

それから高橋よしひろ先生と同級生だったという人が、これを見て、こんなに立派になっていたんだと驚いたという意見。それから新春対談を楽しく読ませていただいたということで、リニューアルオープン後には新しい美術館を訪れてみたいですよという意見。

そしてとても心に響いた意見としましては、「なんだかとても誇らしく思いました」というものです。

とても心に響いたというのは、実は行政が原画保存に取り組んでいくという一番の心の置きどころを、原画の保存がシビックプライド「市民の誇り」になるということで、この原画保存の事業を進めてきた背景があるからです。

日本を代表する、もしくは地元から生まれた貴重な原画が地元の美術館で保存されている、しっかり守られているというのが、シビックプライドになるということで事業を進めているからです。

一つの活用の事例として市報を見ていただいたのですが、「とても誇らしい気持ちになった」という市民の気持ちを、ここで知ることができたということは、今後、ますますこの事業に、自信を持って取り組んでいきたいと感じた出来事でありました。

ということで、時間を若干オーバーしましたが、駆け足で横手市増田まんが美術館の原画の保存と活用への取り組みについてご説明させていただきました。ご静聴、ありがとうございました。

(報告1終了)

○イトウ 大石さん、ありがとうございます。

次に明治大学の米沢嘉博記念図書館という東京にあるマンガ文化施設なのですが、そのスタッフであるヤマダトモコさんに、活動の報告をいただきたいと思います。

報告2

明治大学 米沢嘉博記念図書館

ヤマダトモコ 氏

1. 館の概要（パワポ）

明治大学 米沢嘉博記念図書館のヤマダトモコです。よろしくお願いいたします。
当館は明治大学が母体のマンガとサブカルチャーの専門図書館です。早稲田にある現代マンガ図書館とあわせ「明治大学マンガ図書館」と称する場合があります。米沢嘉博さんはコミックマーケットの立ち上げメンバーの一人であり2代目代表で、準備会代表を、1980年から2006年の亡くなるまで続けた方です。

付録

当館で収集しているマンガ史資料は約 14 万冊、整理がすすんでいる資料は約 10 万冊。同人誌を扱っているのが特徴である図書館施設です。

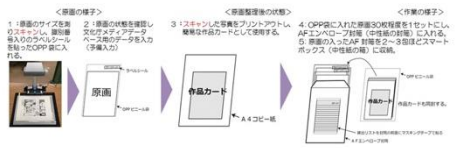
1 階にせまいながらも無料の展示室があり、寄贈資料に、マンガ原画とアニメ原画も少しあります。鈴木光明先生のマンガ原画 500 点、「月詠（つくよみ）」のアニメ原画を、B4 サイズ高さ 20 センチほどの箱 50 箱分などです。

当館は現代マンガ図書館とともに、マンガをはじめとするサブカルチャー全般を扱う、より大きな施設へ移行するための先行施設として位置づけられています。マンガ原画への取り組みは、展示で原画を扱うことの多い施設として、考察と実践が必要だと思っています。自分の前職がマンガ原画を所蔵するミュージアムであり、マンガ展とマンガ原画を多く扱ってきており、マンガ原画に対する関心が高く、このマンガ原画 PJ に参加させていただいたという経緯があります。

2. 〈収集〉＋〈整理・保存〉＋〈利活用〉の状況

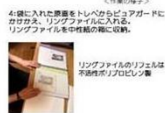


マンガ本編原画(主にモノクロ原画) 整理作業の流れ



マンガイラスト・カット原画(主にカラー原画) 整理作業の流れ

- ・手順3までは本編原画の流れと同じ。
- ・カラー原画はサイズがまちまちなので、B4サイズまではリングファイルに収容。それより大きなものは、本編原画同様中性紙の箱に収納。今回は、新聞サイズ(B3)の箱までを準備した。



IDがふられOPP袋に入ったモノクロ用本編原画(左)と作品カード(右)



当館での本編原画と、イラスト・カット原画の整理との最も大きな違いは、参考にする底本の有無。

イラスト・カットは底本がないので、データとひもづいたアーカイブを構築するには一からの初出調査が必要。そのため、本編原画の整理作業より、アーカイブとして整えるには時間がかかる。



信用できるデータベースの有無、参考にする底本の有無、作家の専門家がチームをサポートしてくれるかどうか、原画整理の力。

中性紙の封筒(左)と、同様に中性紙の箱(スマートボックス/右) イラスト・カット原画用に用意した、不活性ポリプロピレン製リングファイル用リフィル(A4 30穴、B4 36穴/左) リングリフィル用の簡紙(中性紙/右)



マンガ原画の利活用例

- ・原画展
- ・出版(マンガ作品、画集など)
- ・グッズ制作
- ・教育普及目的 etc...



マンガ原画の利活用成果としてのグッズ 劇団スタジオリブ(はみだしっ子)舞台化に際してグッズ用に、出版社へ原画を貸出した。

他に、東洋美術学校の保存修復科の授業内で原画を提示した。マンガ原画の実態を把握しマンガ原画の保存に興味を持ってもらうため

今後の展開・展望(目標)

- ・マンガ原画のよりよい整理法の模索 美術館・公文書館・文書館・図書館的整理法の共通点や差異を比較してみたい
- ・長期的の保存と緊急時の保存のための実験調査を行う マンガ原画の廻り込み的「保存」と紙資料としてのマンガ原画の科学的「保存」の今後 →東洋美術学校さんと横手市増田まんが美術館さんがやってくたさるのではないかと期待
- ・本事業の積み重ねの現場での実践。マンガ原画アーカイブのさらなる充実を図る 具体的には、北海道にあるとわかっている三原順先生の原画調査等

2-1-1

〈収集〉に関しては、現状は図書館施設で収蔵場所なども想定しておらず、基本マンガ原画の収集は積極的には行っていません。ただ、ご縁があり、マンガ原画とアニメ原画を多少収蔵しています。

本事業では、『花とゆめ』『Lala』などで活躍し、「はみだしっ子」「Sons」などの代表作をもつ、1995年に42才で亡くなられた、三原順先生の原画整理を中心に整理してきました。今年で本PJ参加3年目。三原順先生の原画はご寄贈という形ではなく、お預かりして整理しています。

整理に関しては、現状原画の収蔵を想定していない施設であるため、整理後一般家庭に原画が戻ることも想定して作業を進めてきました。昨年度までは本文原稿原画の整理。本年度は、イラスト・カットなど主にカラー用原画を中心に整理しました。その中で、ネーム、スケッチブック、幼少時の絵などもある程度整理し、三原順先生の原画に関しては約6335点、ほぼすべての整理がすみました(※)。

※内訳：2015(H27)年2441点(本編原画メイン)

2016(H28)年3343点(本編原画メイン)

2017(H29)年476点(イラスト・カット原画メイン)＋原画相当資料75点

付録

ネーム、プロット等原画相当資料含む。ノートは1冊1点とした。こちらの資料に関しては1500点以上のスキャン資料を撮った。ここで点数を「約」としているのは、このように数え方で点数が大きく変わるためです。

2-1-2 マンガ原画整理の手順

当館での本文原画と、イラスト・カット原画の整理での最も大きな違いは、底本の有無です。イラスト・カットは、初出調査が必要なため、本文原画の整理作業より、アーカイブとして整えるには時間がかかります。

三原作品の場合は、本編原画には白泉社刊行の三原順のマンガ作品がほぼ全部収録された整理の底本となる出版物（20冊の文庫）があったため、それを元に整理することができました。ですが、イラスト・カットは、初出調査が必要でした。

ただ、作家を研究する専門家が整理作業メンバーにおり、かつ先の展示によって初出調査がある程度進められていたことにより作業が効率よく捗りました。ですが、それでも再調査などもあり、本編原画の整理よりは、イラスト・カット原画のほうが、アーカイブとして整えるには時間がかかりました。

信用できるデータベースの有無、作家の専門家がチームをサポートしてくださるかどうか、マンガ原画をデータの伴うアーカイブとして整理するためのカギでしょう。

2-2

原画の保存に関しては、当館に関しては現状保留のかたちとなります。原画の保存を想定していない施設だからです。将来的には必要になってくると考えて準備しなければと思っています。

2-3

〈利活用〉に関しては、2015年の原画展開催以降、三原順先生の原画は利活用され続けています。書籍化・展示・舞台化の際に、印刷、原画展示、グッズ化などのためマンガ原画が必要とされることがわかっています。

例えば今年度は三原先生の代表作「はみだしっ子」が劇団スタジオライブによって昨年舞台化され、その際原画を貸し出すことによって、劇場用グッズが充実しました。

細かくは省略しますが、本事業での整理作業が、利活用のしやすさに大いに貢献するという実感できたので、本事業の最終報告書用にレポートとして提出してあります。参考にしてください。

3. 所感・今後の展開・展望

3年間の原画整理、今年度の保存修復研修部会を通して、できるかどうかかわからないがやってみたいこと、当館や私が出来なくても、みなさんにやってみたいいただきたいことをここにお伝えしておきます。

◎マンガ原画のよりよい整理法の模索

これを実践するために、美術館・公文書館・文学館・図書館的整理法の共通点や差異を比較してみたいです。家庭での簡易な整理をめざしたわりには、当館が一点一点の記録とカー

付録

ドを作るなど、一番細かな原画整理の方法を模索していたのではないかと思います。それは自分の出自が、美術館だったからではないかとこの事業を通して気づきました。整理方法が各館様々だったからです。塊から整理しその途中からでも利用できる工夫、その上で細分化していくという視点が必要と思いました。

◎長期的な保存と緊急時の保存のための実験調査

マンガ原画の駆け込み寺的「保存」と紙資料としてのマンガ原画の科学的「保存」の今後を知りたいです。今年度行わせていただいた、マンガ原画の保存修復研修部会での調査を通して、原画の駆け込み寺的なことと、遠い未来にマンガ原画という宝物を届けることは結局一緒に考えなければいけないということがわかってきました。こちらは今後、東洋美術学校さんと横手市増田まんが美術館さんがやってくさるのではないかと期待しています。

◎本事業の積み重ねの現場での実践。マンガ原画アーカイブのさらなる充実

具体的には、北海道にあるとわかっている三原順先生の原画調査等がしたいです。さらに数年後には、この積み重ねの成果として三原順先生大原画展を三原先生の故郷、北海道の美術館で行いたいです。

(報告2終了)

○イトウ ありがとうございます。お話の中に登場してきた最終報告書というのは、この事業のアウトプットの一つとしていずれウェブ上で公開されます。ちなみに、昨年度、一昨年度の最終報告書も見られるようになっていますので、アクセスしていただけたらなと思います。

そうしましたら、次に、北九州市漫画ミュージアムの表智之さんに、お話をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

報告3

北九州市漫画ミュージアム

表智之 氏

福岡県北九州市からまいりました、表でございます。よろしくお願いします。

このプロジェクトの連携館の中では、当館の事業は原画保存に関しては、規模が小さい方になります。収蔵原画はだいたい2万点ぐらいで、関谷ひさし先生の原画が約1万6000点と、陸奥A子先生が約4000点です。

利活用の事例もそんなに多くはないので、少ない事例の中から、原画保存がどういう意味があるのかについて、利活用の側面に絞りながら話をしたいと思います。つまり、原画が収蔵施設にあること、作家さんの手元ではなくて、公的施設である程度整理されてあることで何が変わるんだろうかということです。

付録

象徴的に言えばそれは、原画がそれ自体を鑑賞するものになることです。通常、原画というのは、出版のための版下をつくるための材料として見なされているので、そのままの形で普通は見ないものです。人の目に触れるのはあくまで、完成した出版物であるわけです。

しかし、公的施設に収蔵することで、原画それ自体を鑑賞する機会というのは確実に増えます。原画それ自体を鑑賞することでしか得られない感動というものがあるって、そういう機会が増えることで、私たちのマンガの受容の仕方、「マンガ生活」がもっと豊かになるのではないかと。そういったお話を今日はしたいと思います。

当館で原画を収蔵しております陸奥A子先生は、1970年代から80年代にかけて『りぼん』を舞台に「おとめチックブーム」を作り出した作家の一人です。歴史や神話に材をとったスケールの大きなラブロマンスではなくて、ごく普通の等身大の少女の、日常におけるちょっとした「ときめき」を細やかに描いて、女性のみならず男性をも、ドキドキさせたりほっこりさせたりして、新しい少女マンガの流れをつくった方です。北九州市在住でいらっしまして、「北九州市ゆかり作家」として、お付き合いをさせていただいております。

2014年の4月ごろ、陸奥先生からご連絡があり、原画を預かってほしいと。詳しくうかがいますと、これまで原画を保管していたご実家を処分されるので、引き取ってもらえないかということでした。

先生のお手元での保管方法は、ごく一般的なスタイルですが、出版社から返ってきた封筒入りの原稿を、段ボール箱にまとめて入れたものが何箱かあるというものでした。出版社よりは製版所の封筒が多かったと記憶します。単行本出版時の状態ですから、エピソードごと、作品ごとに分かれたものが、順不同で段ボール箱に入っているという状態です。

保管方法として大きな問題があるわけではないのですが、長期的な保存の観点からは、封筒が酸性紙なので原画の酸性化が止められないのが気になる所です。また、実際に整理してみると、ずっと以前に展示か何かに貸し出されたようなのですが、全ページが揃っていない作品やエピソードもいくつかありました。そういった欠落もリスト化して可視化しないといけない。その2点を除けば、状態としては悪くないものでした。黴の発生もありませんでした。ただ、セロテープやトーンの糊で、原画と原画が癒着しているケースが少しありました。そういった状態の確認も含めて、お預かりした原画を、私を含めて3名の学芸員で手分けして仕分け整理したわけです。

まずは、全体像を明らかにすることを優先しましたので、スキャンや撮影は行わず、機械的にどんどん元の封筒を開けて確認し、内容をメモして、作品やエピソードごとに中性紙の封筒に入れ、中性紙の箱に入れる。そしてエクセルでリストをまとめました。最初ご連絡があったのが2014年4月ごろで、作業が完了したのが2015年1月ですから、10カ月近くかかっていますね。

実は、この作業中に、大きな動きがありました。一つは『描く！』マンガ展という、2015年から、この京都国際マンガミュージアムも含めて全国各地を巡回した展覧会への出展調整です。この展覧会の企画チームに当館の学芸員3名が当初から関わっておりまして、

付録

どの作家さんを取り上げて、どういう展示をしようかという企画調整の中で、陸奥A子先生にもご出展いただくというお話に企画チームの中でなりました。

それと相前後して、どちらが先だったかは記憶が定かではないんですが、東京にあります弥生美術館から、陸奥A子先生の展覧会をするので原画を貸してほしいとの打診がありました。もちろん、先生ご本人にはすでにご連絡をされて、承諾を得られ、ついでには原画は漫画ミュージアムにあるから、そちらに連絡してください、という流れです。

図らずも二つの展覧会のお話が、お預かりした原画の整理中に舞い込んでくるという事態となりまして、とにかくまずは整理を済ませなくてはと、急いだ部分もございます。

まず『描く！』マンガ展」は、2015年8月から9月に大分県立美術館 OPAM で開催されたのを皮切りに、当館や、高崎、豊橋、川崎、京都と全国を回りまして、なかなか話題を呼びました。図録も発行されまして、当館から貸し出した原画を、OPAM さんの方で写真撮影をされて収録されていますが、原画の風合いと言いますか、テープ染みや写植の剥がれなど、経年劣化に属するような部分も映っています。通常のマンガ出版物、雑誌や単行本として印刷される際には消去されるような、原画の生の状態がそのまま記録されています。

この、経年劣化も含めて作品の生の現状を記録するのは、美術展示の図録としては当たり前のことですが、マンガの受容の仕方としてはやや特殊で、マンガ展の展覧会図録の中には雑誌や単行本と同じように修正した図版を掲載するケースも時々あります。

続いて、弥生美術館の展覧会は、2015年の10月から12月に開催されまして、弥生美術館さんがお持ちの雑誌付録をふんだんに出展されています。展示も、弥生さんが企画制作されたオリジナルグッズも大変好評で、グッズは品切れも出て大変だったと聞いております。翌春に当館でも巡回開館させていただきまして、2カ所での開催を実現致しました。

弥生美術館の展覧会に連動して2015年9月には、図録を兼ねたビジュアルブックと「ベストセクション」と題した分厚いマンガ作品集が刊行されました。いずれも好評だったようで、12月にはさらにベストセクション第2弾として、70年代編と80年代編の、これも分厚いものが2冊、刊行されております。

それぞれ奥付には、「特別協力」として、集英社『りぼん』編集部と、当館・北九州市漫画ミュージアムがクレジットされております。『りぼん』さんと並んでのクレジットを大変光栄に思いますが、私どもが何を協力しているかということ、原画の貸し出しや、場合によってはスキャンデータの提供を行って、出版をお手伝いした形です。

元の、先生ご自身のお手元にあった状態だと、展示にせよ出版にせよ、スムーズな出し入れはなかなか大変で、先生に相当な負担をかけてしまいます。原画というのは束になると重いですから、原画を詰めた段ボールの上げ下ろしを女性の作家さんがされるのはそれだけでも結構な負担です。そういったご苦勞を先生にお掛けせずに、展示や出版のために原画なりデータなりがスムーズに提供できたという意味で、美術館さんにも出版社さんにも、そして先生にも大変お喜びいただき、お預かりして整理してよかったなと思います。

付録

さて、原画が寄託されて、それをミュージアムが整理して、そのことで展示が実現して、出版もされたという、非常に理想的なコースに見えます。ただ、これまでの説明でお分かりますと思いますが、すべてほぼ、偶然で成り立っています。全然仕組んだものでもなんでもないんです。

陸奥先生に限らず「北九州市ゆかり作家」の皆さんには、必要であれば原画をお預かりしますよということは、2012年の開館前から先生方にお声がけしておりましたから、原画寄託のお申し出が来ること自体は想定通りではあるのですが、陸奥先生が実際に預けようと2014年にお決めたのは、あくまでも先生の偶発的なご事情です。別にこの年を目指して交渉していたわけではない。

そして、展覧会が2015年に実現しておりますが、画業何十周年とか、そういった記念の年では特にございません。弥生美術館さんの経緯でいえば、担当学芸員の方が、陸奥展をやりたいとずっと思っていたらして、この年に遂に実現した、という形です。

一方の『描く！』マンガ展」に関しても、当館の学芸員が企画チームに参加した時点では陸奥先生のお名前はまだ挙がっておらず、チームに参加して色々検討していく中でお名前が出てきたんですね。

そして出版も、第二弾まで実現したのは、弥生美術館での展覧会が大好評だったからこそだと想像しています。要するに、いろんな人の思いがたまたまうまく合致し合流した、その意味での「偶然」すべて成り立っています。先生から原画寄託の打診を受けた段階では、こういった展開はまったく考えていませんでした。

もう一つ重要なファクターとして、作品の初出の版元、具体的に言うと集英社『りぼん』編集部さんのご厚意がございました。マンガの場合、作家と出版社の契約によって作品の出版権や、それに関連して展覧会開催などの権利を作家だけでなく出版社が持たれていることが多く、特に、雑誌連載中の作品はほとんどがそういった扱いになります。今回の陸奥先生の出展作品の場合は、初出がずいぶん前の話なので、契約のあり方は少し異なるかも知れませんが、今回のケースをどう扱われるか、『りぼん』編集部の判断次第では、企画の進め方がずいぶん違ったものになったかも知れません。

今回のケースでの『りぼん』編集部さんのスタンスは「陸奥先生のためになることでもありますから、先生と直接やり取りして、よしなにお進めください」という大変好意的なもので、したがって私どもとしては、報告や共有はもちろんさせていただいていますが、全体的にお任せいただいて進めさせていただきました。

そういった、様々な方のご好意が組み合わさって実現した偶発的なケースですから、簡単に一般化できるものではないんですけれど、逆から考えると、こういう「好意」や「偶然」を逃さないために何をなすべきなのか、ということでもあります。雑誌連載からは少し遠のいた、いわば最前線から一歩ひかれている作家さんの作品に、あらためて光が当たるチャンスというのは、何がきっかけで起こるか分かりません。

付録

というのは、日本においてマンガというのは、社会の隅々まで浸透していて、いろんなものに結び付いているので、一見無関係に見える出来事や、著名人の何気ない一言など、思いもよらないきっかけから、特定のマンガ家やマンガ作品が注目を集めることがしばしば起きている。SNS などが発達した現在では特にそうです。

そういうチャンスに即応できる状態に原画があるかどうか。作家さんのお手元にある原画というのはほとんどの場合、出版社や製版所から返ってきた封筒を段ボールに詰めて積み上げている状態で、リストや台帳があるケースはおそらく少ないです。そういう状況で、その作家さんのある作品が偶然話題になった時に、特定の作品の特定の原画を取り出して展示に貸し出したり、出版のためにスキャンデータを提供したりは、決して簡単ではありません。不可能とまでは言いませんが、かなりご負担を作家さんにかけてしまう。ましてや、作家さん本人でなくご遺族ならなおさらです。

もちろん、作家さんにせよご遺族にせよ、きっちりと整理されてシステムティックに利活用されているケースも少なくありません。しかし全体の中では、あくまで少数派に属するとみて間違いないでしょう。

そういったことを考えると、たとえば私どもがやったような、ごくごく初歩的な仕分けとリスト化であっても、それをするとしないとで条件はかなり違う。その作家なり作品なりにあらためて光が当たったチャンスを逃さずに済むかどうかにおいては、かなり重要なポイントになってくるんじゃないかなと感じています。

いま申し上げたことは、作家の視点から見るか、読者の視点から見るかで見え方がだいぶ異なるわけですが、ここでは、収蔵施設において収蔵を実現し維持するという視点からのお話を補足しておきます。当館は自治体が直営する施設ですので、運営上、自治体の意向に規定される部分が多いわけですが、行政関係者というのはとにかく、「誰でも知っている国民的作家」だけに偏った関心を持ちがちであります。まことにお恥ずかしい話ですが。

確かに、日本のマンガの世界というのは「売れる」ことに大変厳しいというか、誰よりも作家さんご自身がそういった観点で自分を厳しく見つめていらっしゃる世界です。その厳しさには常々敬服しておりますが、しかし、原画収蔵にあたっては、それとは異なる視点が重要です。日本のマンガがもし、世界に誇れる文化であるとすれば、その最大の特徴は「多様性」にこそあると私どもは捉えております。売上や知名度の差はありつつも、大勢のマンガ家が、老若男女さまざまな読者に向けて、多種多様なマンガを日々描いている、その日本マンガの「多様性」それ自体を後世に伝えなくてはならない、ということです。

まして原画は、一枚一枚に作家さんの情熱がしみ込んだ大切なものです。一切の序列をつけず、すべてを恒久的に保存する、とまで言い切ってしまうと、理想論が過ぎるのかも知れませんが、率直な思いとしてはそうなります。

一方、施設を運営する自治体としては、原画を恒久的に収蔵するという事業に、利活用の面からの明確な意義づけを求めることになる。そうした時に、いま述べたような理由付けでは

付録

話がうまくかみ合わないことがままあります。この原画を収蔵して、実際にどういった利活用が見込まれるのかを明らかにせよ、と。

今回紹介したケースは、そういった場合に重要な事例になると私は捉えています。具体的な利活用の道があらかじめあるから収蔵するんじゃない、逆に、収蔵することで、利活用の道が開けるんだ、と。原画をお預かりして、たとえ簡易でも整理していることで、ちょっとした偶然や、この作家や作品を愛しているどこかの誰かの思いが、大変面白く意義深い利活用の道を開いてくれるんだ、そのための準備を収蔵施設はするんだ、ということですね。

ここまでは2015年の話でした。少し時間が飛びまして、2017年4月に、宝島社さんから『おとめちっく・メモリーズ』という本が出ました。こちらにも当館は全面的に協力しております。かなりスキャンデータを提供しております。2015年だけの一過性のことでなく、その後も、利活用の機会がある、ということですね。

この本で特に重要なのは、「ジェントル・グッドバイ」という、単行本に収録されていない短編がございまして、原画はうちにあるんですが、そのスキャンデータを一式提供することで掲載が実現しました。抜粋でなく、1編まるまる収録されています。

投影画像だと伝わらないので、ぜひ実物をご覧いただきたいのですが、サイズや紙質、製版・印刷精度の違いから、通常の単行本で見ると、非常にビビッドでいい感じになっております。原画の持っている生々しさとか、ペンのタッチの伸びやかな生気が、ストレートに伝わってくる感じといたしますか。1200dpiと高めの精度でスキャンしたデータが活着しているんじゃないかなと思います。

もう一つのポイントは、この『おとめちっく・メモリーズ』にカラーで収録された原画には、テープ染みや写植剥がれなどの、原画の風合いというか、経年劣化の部分もそのまま掲載されていることです。私としては、ここに新しい動きというか、原画展とは直接関係ないような出版物においても、原画の風合いを活かし、経年変化を含めた生々しい存在感を鑑賞するような受容層が形成されつつあるのではないかとみております。

例えば原画のせりふの部分、吹き出しの中に貼られたネームというか写植が剥がれて、糊の染みだけが残った状態で、当館にてスキャンしたデータを出版社さんにお送りしているわけですが、それを『おとめちっく・メモリーズ』ではそのまま掲載している。以前であればこういう部分は、読者にも編集者にも、そして作家にも、あまり喜ばれなかった掲載の仕方だと思います。あるいはテープ染み。製版撮影の際に原画の四隅を折り曲げて、製版台にテープで留めたその跡が、染みになって残っているんですね。

2015年に刊行された出版物のカラーページでも、セリフの写植が原画から全部剥がれていて、作家が吹き出しの中に手書きで書いたセリフが見える状態になっている。糊の染みはあまり見栄えのするものではありませんが、その代わり、作家の手書き文字が読めて、陸奥先生の手書き文字はとても可愛い、これ自体が作品のようなものですから、これはこれで意味があると思います。

付録

またこちらは、初出時には別冊付録で収録されていた作品で、最初の何ページからは2色カラー掲載だったものですから、原画も赤と黒の2色原稿なんです。単行本ではモノクロになってしまうものを、カラー口絵として一部掲載したもので、これもこの形で掲載しないと見られないものですね。

通常、作品が単行本になる際には消し去られてしまう痕跡というか、原画の風合いとでもいうべきもの。それは、経年劣化に起因する部分も多く、通常のマンガ受容の視点から見ればノイズとされるものですが、消し去らずにそれも含めて鑑賞しよう、というスタンスが、こういった出版物からはうかがえます。

2015年の一連の出版物は、弥生美術館での展覧会に連動したものですから、美術展示図録の視点でもって、原画の風合いにこだわるのは自然ではあるんですけど、2017年の『おとめ・チックメモリーズ』でも、それを前面に出していらっしゃるのは、どう理解すべきなのか。原画利活用の今後に関わる、結構重要なポイントかも知れません。

当館では昨年夏に、北九州市ゆかり作家である北条司先生の『シティーハンター』の展覧会を開催させていただきました。その際、『シティーハンター』の多くのエピソードの中から、ファン投票を募集して2つ、ベストエピソードを選出しまして、その2話分に関してはまるまる1話分の原画をずらりと並べて展示するというのをやりました。

別にそんなに目新しいことではなくて、過去にも色々な展覧会で同じ手法は使われておりますが、自分の館で実際にやってみて、来館者の反応をみていると、これが予想以上にいい展示になりまして、皆さんに非常に喜んでいただきました。原画を1枚の絵として眺めるのではなくて、一定のまとまりで読む、マンガを原画で読む、という行為が、こんなにもエモーショナルなものなのかと、再認識したわけです。

一方で、復刊ドットコムさんが、望月三起也先生の『ワイルド7』を昨年来、「生原稿バージョン」という言い方で、原画の原寸ではないんですが雑誌掲載時の原寸であるB5サイズに、生原稿の風合いを残しながら出版して単行本化するという試みをされています。

なんと1冊6000円ぐらいするという、なかなか贅沢な本なんですけれども、最初の1冊で終わるかと思いきや、すでに4巻刊行され、さらに3巻が準備中ということで、好評を得ているのだと思います。原画を、生原稿の風合いを消し去ってしまうのではなく、また、1枚の絵として眺めるのではなく、原画の生々しさを残したまま、マンガとして「読む」。そういう特殊なマンガ受容のあり方に、ある種のプレミア感も含めて、関心を持つ読者や出版社が増えてきているのではないかと、そういう感じがいたします。

もともと私どもは、マンガの原画を「展覧会」という場で利活用させていただくのが本来の仕事ですから、皆さんにマンガの原画を見ていただく機会としては展覧会を中心に考えがちです。それはそれでももちろん重要なんですけど、一方で、出版物として原画を原画のまま、その風合いを含めて楽しんでいただく道が開けつつあるのではないかと。

現在の出版界の状況を見ますと、雑誌でも本でも紙を大量に消費して一気に印刷し流通させ、しばらく経つとそれが在庫として戻ってきて、また新しい本や雑誌を大量に刷って…と

付録

いう出版産業のあり方は、すでに曲がり角を曲がり切っているように思えます。本でも雑誌でも電子出版を基本として、必要なものだけオンデマンドで紙で印刷する、そんな時代はおそらく徐々に近づいていますし、そこまでではなくとも、紙の出版物が今後ますます、大量生産・大量消費ではなく、ある種のプレミア感のある贅沢品になっていくことは間違いないでしょう。だったらいっそ、発想を大胆に切り替えて、原画の風合いを残した高精度印刷の大判本、一冊 6000 円のマンガ単行本がスタンダードになったっていいんじゃないか、そんな気も個人的にはするのです。

まあ一気にスタンダードになることはないにせよ、そういったプレミアム版の単行本を出したい、という時に、従来の版下データによらず原画から版を起し直したい、という時に、私どものような収蔵施設が少しでも、原画の整理やデジタルデータ化の面でお手伝いできれば、そういったマンガの新たな楽しみ方、より豊かな「マンガ生活」を膨らませる上でお役に立てるんじゃないのかなと、そういった希望を込めたお話でございました。ご清聴ありがとうございます。

(報告 3 終了)

○イトウ 表さん、ありがとうございます。

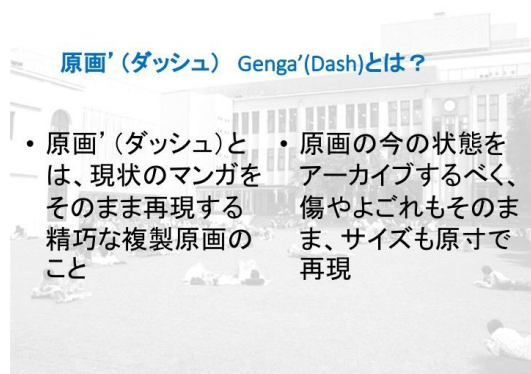
続きまして、京都国際マンガミュージアムの事例を紹介したいと思うんですけども、最初にお話ししましたように、ここでは、原画ダッシュという利活用の実践に関して倉持佳代子さんにご紹介いただこうと思います。よろしくお願いします。

報告 4

「原画' (ダッシュ)」(以下「原画ダッシュ」と記載)

京都精華大学 国際マンガ研究センター／京都国際マンガミュージアム

倉持佳代子 氏



付録

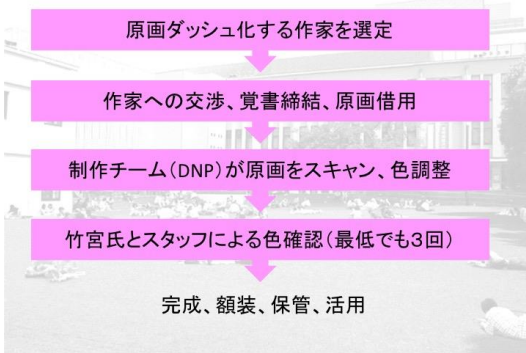
「原画」ダッシュ」が生まれた経緯 ピンクの小冊子3～5Pより



「原画」ダッシュ」体制



原画ダッシュの制作の手順



パソコン上で色調整中の原画ダッシュ



色調整のソフトは主にフォトショップを使用。
紙は特に特殊な紙ではなく、マット紙を使用。
特別な印刷機や紙が必要というわけではない。



原画ダッシュは印刷機のパフォーマンスに特徴があるわけではなく、目視による細かなチェックがクオリティを保つ肝となっている。特に竹宮氏自ら一枚一枚、色確認を行っていることが大きい。



上記のほかにも、「ちばてつや」、「花村えい子」、「ながやす巧」、「平田弘史」、「村上もとか」、「西谷祥子」、「おおやちき」、「波津彬子」がいる。
制作中の作家を含めると、合計24名が参加し、およそ800点の原画ダッシュが国際マンガ研究センターに所蔵されている。竹宮恵子氏、水野英子氏、佐藤史生氏の原画ダッシュは作家自身が制作し、京都国際マンガミュージアムに寄贈してもらったものを所蔵、活用している。

再現の難しいところ

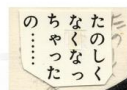


色ムラの再現



鉛筆の線

その他、古くなった紙の黄ばみ など



写植の浮き具合



スクリーントーン

再現できないもの

- ・蛍光色
- ・墨汁のテカリ

↓
全体のバランス
の中で近い色に
仕上げていく。例
えば、隣合った色
や紙色とのバラン
スなど。

(事前調査の例)

原画ダッシュ制作予定のささやなえこ氏の作品全リスト

作品名	巻数	枚数	備考
1. 1巻	1	10	
2. 2巻	2	10	
3. 3巻	3	10	
4. 4巻	4	10	
5. 5巻	5	10	
6. 6巻	6	10	
7. 7巻	7	10	
8. 8巻	8	10	
9. 9巻	9	10	
10. 10巻	10	10	
11. 11巻	11	10	
12. 12巻	12	10	
13. 13巻	13	10	
14. 14巻	14	10	
15. 15巻	15	10	
16. 16巻	16	10	
17. 17巻	17	10	
18. 18巻	18	10	
19. 19巻	19	10	
20. 20巻	20	10	
21. 21巻	21	10	
22. 22巻	22	10	
23. 23巻	23	10	
24. 24巻	24	10	
25. 25巻	25	10	
26. 26巻	26	10	
27. 27巻	27	10	
28. 28巻	28	10	
29. 29巻	29	10	
30. 30巻	30	10	
31. 31巻	31	10	
32. 32巻	32	10	
33. 33巻	33	10	
34. 34巻	34	10	
35. 35巻	35	10	
36. 36巻	36	10	
37. 37巻	37	10	
38. 38巻	38	10	
39. 39巻	39	10	
40. 40巻	40	10	
41. 41巻	41	10	
42. 42巻	42	10	
43. 43巻	43	10	
44. 44巻	44	10	
45. 45巻	45	10	
46. 46巻	46	10	
47. 47巻	47	10	
48. 48巻	48	10	
49. 49巻	49	10	
50. 50巻	50	10	
51. 51巻	51	10	
52. 52巻	52	10	
53. 53巻	53	10	
54. 54巻	54	10	
55. 55巻	55	10	
56. 56巻	56	10	
57. 57巻	57	10	
58. 58巻	58	10	
59. 59巻	59	10	
60. 60巻	60	10	
61. 61巻	61	10	
62. 62巻	62	10	
63. 63巻	63	10	
64. 64巻	64	10	
65. 65巻	65	10	
66. 66巻	66	10	
67. 67巻	67	10	
68. 68巻	68	10	
69. 69巻	69	10	
70. 70巻	70	10	
71. 71巻	71	10	
72. 72巻	72	10	
73. 73巻	73	10	
74. 74巻	74	10	
75. 75巻	75	10	
76. 76巻	76	10	
77. 77巻	77	10	
78. 78巻	78	10	
79. 79巻	79	10	
80. 80巻	80	10	
81. 81巻	81	10	
82. 82巻	82	10	
83. 83巻	83	10	
84. 84巻	84	10	
85. 85巻	85	10	
86. 86巻	86	10	
87. 87巻	87	10	
88. 88巻	88	10	
89. 89巻	89	10	
90. 90巻	90	10	
91. 91巻	91	10	
92. 92巻	92	10	
93. 93巻	93	10	
94. 94巻	94	10	
95. 95巻	95	10	
96. 96巻	96	10	
97. 97巻	97	10	
98. 98巻	98	10	
99. 99巻	99	10	
100. 100巻	100	10	

こうした資料を
作って、選定の
参考にする。

付録

原画ダッシュ化候補の絵をまとめた資料(例:西谷祥子氏)

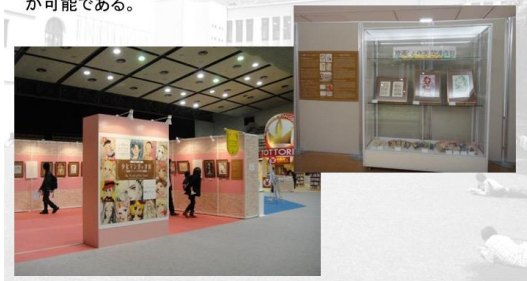


国際マンガ研究センターが作家と原画ダッシュ制作&活用にあたって取り交わしている条件(覚書にも記載)

- ・ 初期から最近のものまで、一人30点前後の原画を借りて、制作している。借用の際は保険をかける。
- ・ 作家へは原画借用にあたる借用料を支払う。
- ・ 原画ダッシュが完成したら、原画は作家へ返却、原画ダッシュを国際マンガ研究センターが所蔵する。
- ・ 原画ダッシュは館内の展示だけでなく、他館や海外への貸出に活用させてもらう。
- ・ 原画ダッシュの貸出にあたり、貸出料として収益を得た場合は、その半分を作家に還元する。

「原画(ダッシュ)」の活用

原画に比べて輸送、展示スペースの環境、展示方法に制約が少ないため、温湿度管理された美術館などでの展示でなくても対応が可能である。



海外での展示会の要望が年1〜3回のペースであり、それに応じている。

2015年には、イギリス国内3ヶ所を巡回する少女マンガの展示会を開催。他にもシンガポール、オーストラリア、フランス、ハンガリー、北米各所、ドイツ、ギリシャ、デンマークなども。



- ・ 輸送によるリスクを回避できる
- ・ レクチャーやワークショップも同時に開催することで、日本マンガを改めて多くの人に紹介する機会になっている。

・ 作家を招いたトークショーなども開催し、制作背景を記録する機会もなるべく作るようにしている。

2017年度の原画ダッシュ成果

- ・ 西谷祥子氏17点の原画ダッシュ制作
- ・ 西谷祥子氏17点の原画初出調査(1点のみ不明)
- ・ 西谷祥子氏17点の展示(「幻想と日常の間」展)
- ・ 制作候補のささやなえこ氏とささや氏の夫であり元編集者の佐川俊彦氏へインタビュー(原画保存・活用にあたるヒアリング)
- ・ ささやなえこ氏の作品リスト、候補画選定
- ・ ささやなえこ氏の原画借用と整理



- ・ 原画ダッシュを受注制作販売
- ・ 原画ダッシュデータを使ったポストカード販売(2/22〜)

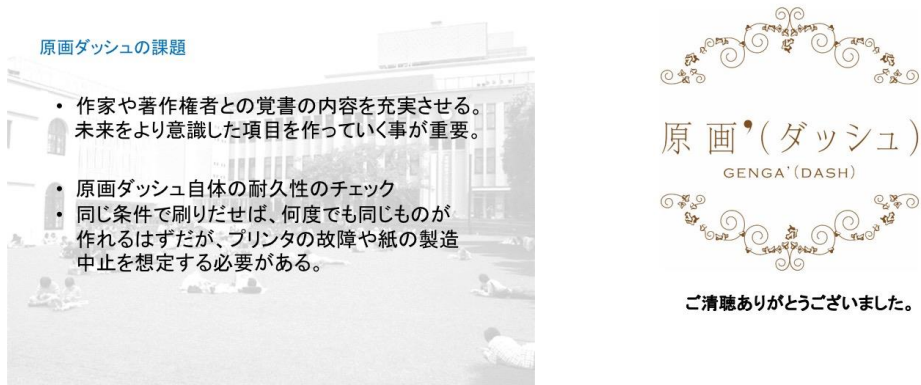
原画の代わりに複製原画を使って活用する

原画ダッシュのような複製原画を作るには「監修者」の力は重要である。

- ・ クオリティを誰が管理するか
- ・ ブランドをどう作るか

すべての原画に対し、原画ダッシュのような複製原画を作ることは難しい。

- ・ 原画ダッシュのように厳選して行うのがよい
- ・ 厳選するなら、誰がどんな視点で選ぶのが重要
- ・ マンガ家、研究者、編集者など知見のある人の視点がますます大切になってくる



「原画ダッシュ」は、この原画アーカイブ事業から生まれたプロジェクトではなく、約15年前から京都精華大学が行っているものです。「原画ダッシュ」の長年のノウハウが原画の利活用にも応用できるのではないかと、今年度からこの原画アーカイブ事業と合流し、取り組んでいます。今日は配布資料に原画ダッシュについてのパンフレットと図録がありますので、そちらも合わせてお読みください。

「原画ダッシュ」は「原画」ではありません。原画ダッシュとは何か？「現状のマンガをそのまま再現する、精巧な複製原画」のことです。「現状の原画の状態をアーカイブすべく、傷や汚れもそのまま、サイズも原寸で再現」しています。

原画ダッシュが生まれた経緯は、マンガの原画が劣化しやすく展示に向かないということに気づいた竹宮先生が、自身の個展のために複製原画を作り、偶然、原画とうりふたつのものが刷れたことから始まりました。竹宮先生はこれを単なる偶然にしたくないと思い、さらには他のマンガ家の作品のものも作ることでアーカイブにもなると考えたため、2001年から京都精華大学と一緒に共同研究することになりました。そして、まずは黎明期の少女マンガを支えた先生のコレクションを増やしていこうということで進めてきました。

原画ダッシュの体制は竹宮先生と京都精華大学国際マンガ研究センターの共同研究という二つの柱のもと成り立っていますが、原画ダッシュの制作は現在、外注しています。2007年度までは京都精華大学やマンガミュージアムの内製で行ってきましたが、2008年度から大日本印刷株式会社（DNP）にノウハウを伝え制作を委託しています。

原画ダッシュの制作の手順は、

(1) 原画ダッシュ化する作家を竹宮先生と一緒に決める。

竹宮先生より先輩の少女マンガ家を基本として選定していますが、後輩でもすでにお亡くなりになっている方、あるいは海外巡回に向けて必要と判断した場合に、制作したこともあります。少女マンガだけでなく、青年マンガの作家を実験的に手掛けたこともありました。

(2) 国際マンガ研究センターのスタッフから作家へ交渉。覚書の締結、原画借用。

付録

場合によっては竹宮先生から先にお手紙を書いていただくこともあります。条件についての覚書を締結し、原画借用というような形で進めています。原画はだいたい作家につき30点前後をお借りしています。

(3) 借りた原画を制作チームに渡し、原画をスキャンして、色調整してもらいます。

(4) 仕上がったものを竹宮先生と私たちで色確認をし、修正を繰り返します。

この行程は最低でも3回は行います。

(5) 完成、納品、額装、展示などで利活用。

勘違いされやすいのですが、原画ダッシュは特別な印刷方法や画像処理ソフトは使っていません。家庭用のプリンターでも作れますし、色調整に使っているのはフォトショップです。紙も特殊な紙ではなく、ちょっとざらっとした感触のマット紙を使っています。つまり、原画ダッシュとは機械の性能に左右されるものではないということです。

では、何がクオリティを保っているのか。それは目視による細かな「色確認」です。竹宮先生が1枚1枚、すべて色確認をして、「この肌の色に黄がかっているので、黄を取って下さい」とか「この髪の毛の色、コントラストが強いので少し下げて下さい」など、ぱっと見ただけでは分からないような差を微調整しているからです。つまり方法としてはかなりアナログな作業になります。

もちろんDNPの高性能なスキャナや印刷機もクオリティを上げていますし、制作してくれている方の技術も10年やってくれている分上がっているので、クオリティに大きく影響していますが、この色確認の仕方はずっと同じ方法です。根気強さが必要です。

原画ダッシュの作家は、現在制作中の方も含めると24人が参加しています。点数にすると、およそ800点の所蔵があります。先ほど、特別な機械を使ったりしないと言いましたが、竹宮先生と水野英子先生、佐藤史生先生の3名は、ご自身で制作したものを寄贈していただきました。制作や色確認のノウハウを竹宮先生が作家に伝えて制作したものです。

再現の難しいところなどは、パンフレットとかにも書いてありますので細かくは割愛しますが、再現できない色は「蛍光色」「墨汁のてかり」です。これらは全体のバランスで近い色に仕上げています。隣り合った色、紙色との兼ね合いなどで調整しています。

そうした再現に時間はかかりますが、実は原画ダッシュの制作行程で一番時間がかかるのは、交渉や作品の事前調査です。プロジェクターにうつしているのは、今後制作予定の作家・ささやなえこ先生の作品全リストで、これを作る作業も時間がかかります。リストがあると作者全体の仕事の流れをつかめますし、どの作品あるいはどのシーンを選んで原画ダッシュ化するか決めやすくなります。こうしたリストをもとに原画ダッシュ化したい候補の絵をまとめ、作家や所蔵先に原画の出納をお願いします。しかし・・・希望通りの絵が出てくる可能性は残念ながらほぼないです。理由は、原画の整理というものが作家や遺族ではなかなか難しいということが大きいです。どこにあるか、家の中でもわからなくなっていることが多いのです。

次に国際マンガ研究センターが作家と実際に取り交わしている条件を説明します。

付録

原画ダッシュ化する作品は、その作家の初期から最近の作品まで、カラーとモノクロもバランスよく、30点前後を選び原画を借ります。借用の際は保険をかけます。作家へは原画借用に当たる対価として「原画借用料」をお支払いします。

原画ダッシュが完成したら、原画は作家に返却、原画ダッシュを国際マンガ研究センターに所蔵させます。それを館内の展示や、他館あるいは海外施設への貸出に活用させてもらいます。もし、「貸出料」として国際マンガ研究センターに利益があった場合は、その半分を作家さんに還元する、というお約束をしています。

では実際にどんな活用例があるか？スライドの写真は2012年の『とっとりまんが博』の中で開催された原画ダッシュ展ですね。右上は2014年に大東市立公民館のエントランスでミニ展示が行われたときの写真です。温湿度管理が厳密になされていない美術館でないスペースでも、原画ダッシュなら制約が少ないので展示することが可能です。

海外での展覧会の要望も年に1回から3回のペースであります。現在もドイツのアウグストゥス城で原画ダッシュを使った展示が開催されています。海外での展示だと、原画を展示するには輸送のリスクが大きいです。原画ダッシュでしたら、輸送方法も原画よりは簡易にできます。これらの原画ダッシュ展では、必ずといっていいほど、レクチャーやワークショップを同時に企画提供しています。展示と一緒にすることで、日本のマンガ文化をあらゆる視点で紹介できたのではと思っています。また、図録の巻末に文字起こしが収録されていますが、原画ダッシュ制作をしたらお披露目展示と合わせて作家による座談会が開催しています。それは作家のオーラルヒストリーも兼ねることにもなっています。

そのほか活用の例としては、現在、京都国際マンガミュージアムで原画ダッシュ展『幻想と日常の間』展を開催していますが、そこで展示している一部の原画ダッシュの販売をオクケーにし、会場でも宣伝しています。量産するために作ったものではないので、販売価格は1点10万円ですから、沢山売れるものでないかもしれませんが、そうしたことも積極的にやっていけたらと思っています。さらには、原画ダッシュデータを使ったポストカードの販売も2月22日より開始します。

最後、原画ダッシュの活動を原画の利活用に応用していく上でのまとめ、課題をお話します。冒頭に申し上げたように、原画は劣化しやすく展示などの利活用には向きません。原画の保存と利活用は別に考え、利活用にあたっては、原画ダッシュのような精巧な複製画を作るのが良いのではないかと考えます。

原画ダッシュの制作方法は特殊な印刷技術が肝ではありません。パソコンの知識がある人だったら、誰でも複製原画の制作は可能であり、ある程度のクオリティのものは現在では誰でも作れるでしょう。ただ、クオリティを上げていく作業は、色確認を担当する監修者の拘り、経験が左右していきます。そして、そこにどんな監修者を置くかということがその複製原画の価値にもつながります。原画ダッシュだったら、まずは「竹宮恵子」が監修しているということが大きなブランドになっています。あるいは「京都精華大学」「京都国際マンガミュージアム」が監修している、という点も一つのブランドになり得るでしょう。

付録

利活用しやすい複製画を制作するにしても、作家の全ての作品を作るというのは費用的にも時間的にも困難なのではないかと思います。原画ダッシュのように厳選して絵を選んで制作する方法がベターだと思います。原画ダッシュがしているように、30 点前後という数字は、ちょうどよいのではないかと考えます。その「選ぶ」という点でも、誰が選ぶか、の目は重要です。選者にはマンガ家や研究者、編集者など、その作家や作品に詳しい人の目が必要になりますが、そういった人材をどう確保するか、あるいは育てて雇用を確保するかはますます重要な課題になってくるかと思います。

ここから先は原画ダッシュの課題にもなりますが、活用しやすい資料にするために、短期的なものでなく、長期的なスパンで著作権についてを作家や著作権者と話しておく必要があります。実際に起こったケースを言いますと、原画ダッシュに参加している作家が亡くなり、その後、著作権継承者がしばらく追えず、活用がストップしたことがあります。先の未来を意識し、私達がいなくなった後、もっと先の人達も活用しやすいように覚書の項目を検討することが大切です。

原画ダッシュ自体の耐久性も試していく必要があります。いまのところ続けて半年展示しても、色の劣化などは見られませんが、実際どこまで大丈夫なのか、といった部分は具体的には試していません。原画ダッシュが劣化しても複製原画ですので、同じ条件で刷り出せば何度でも同じものを作り直すことはできますが、その時に使った印刷機が壊れてしまうこともあるでしょうし、使っていた紙が製造中止になる可能性もあります。その点もどうするのかというところを十分検証していかなきゃいけないと思っています。

(報告 4 終了)

○イトウ ありがとうございます。ぜひまた展示も、改めて観ていただけたらと思います。

これで一応、4 館の活動、今回の文化庁事業の活動も含めてお話をいただきました。最後に、付け加えじゃないんですけども、僕の方から、原画の利活用ということで、実はいま登壇していただいている 4 館のどこも本格的にはやっていないんですけども、「原画を販売する」、「売る」という可能性と、その課題についてお話をしておきたいと思います。

というのも、第 2 部で、マンガ原画アーカイブの利活用の一つとして、販売ということの一つの大きな議論点としておりますので。そのつなぎということで。

いま僕が持っているのは、『ミスター味っ子』で知られる寺沢大介さんのマンガの原画です。——回してしまおうかな。ぜひ手に取って見ていただけたらと思うんですけども。

これは 2014 年に東京の「チーパズギャラリー」という、マンガの原画展をしばしばやってらっしゃるギャラリーで開催された、「寺沢大介画業 30+1 周年記念原画展」という展覧会で僕自身が購入したものなんですね。いわゆるマンガ原画展だったんですけども、会場で『ミスター味っ子』も含めたマンガ作品の原画＝原稿を 1 枚 1,000 円で買えるということが話題になった展覧会でした。

付録

段ボールに原画がどさっと入っていて、レコード屋さんでやるみたいに見ていきながら、好きなページを1枚から買うことができました。

聞いたところによると、毎日、午前中に、新しい原画がどさっと届いて、そこに加えたり入れ替えたりしていたようです。

熱心なファンは午前中の早い時間に来られて、カラー原画だとか、いわゆる「決めゴマ」と呼ばれている、キャラクターがバンと載っているようなページのものをどんどん抜いていくとか、買っていかれるということが行われたそうです。

僕は午後に行ったんですけども、幸い、なかなかいいなと思うページなんかが残っていましたが、場合によってはキャラクターなんか載っているわけではない、作家さんたちの言葉で言えば「捨てゴマ」と呼ばれるコマが載っているようなページなんかも残っているというのが午後の現状だったようです。

日本のマンガは、しばしば言われるように、ページ単位だとか、あるいは見開き単位だとか、あるいは1話全体といった、さまざまなレベルの中で、コマ割りだとかキャラクターの配置だとか大きさなんかで、いわゆるメリハリのある流れのようなものをつくり出しています。「捨てゴマ」のような、箸休め的なコマやページがあることで、流れにメリハリができる。それが日本のマンガの表現的な特徴になっているわけです。

そういった一連のシークエンスを分断する形で、1ページ1ページバラバラに売られることによって、「捨てゴマ」の入っているページだけが作家さんの手元に残る、という状況がここで出来上がっていくわけですね。

これまで、原画を売るといふことの可能性について、いろいろなマンガ家さんや出版社の方にお会いする中で、お考えを聞いてきたんですけども、多くの方が口をそろえて言うのは、特に連載作品のような作品の原画を販売するのであれば、せめて1話単位で売らないと、こういう状況が起こってしまう、という危惧のようなことでした。寺沢さんの場合には、正に、そういうことが起こっていたということを目の当たりにしたわけです。

そもそも寺沢先生がなぜ原画、原稿の販売をすることになったのかということなんですけれども、会場でインタビュー映像が流れていて、そこで、答えをご自身がおっしゃっていました。

一つは、原稿というのはいまやデータとして保存されているので、「将来的にこれ（原画）が役に立つことはまああまりないだろう」という前提をお持ちだということです。その上で、自分が亡くなった後に、「オレでも捨てにくいものを、うちの奥さんが、遺したものを捨てるというのは相当気持ちの負担があるだろう。」とおっしゃっていました。一時は「成仏」ということで焼却も考えたようですが、「ほしい人がいてくれて、大事にしてくれるんだしたら、その方がいいな」と思い直し、「原画を売る展覧会」にいきついたようです。

ここで登場する、「データとして保存されているから、原稿は手元にある必要がない」という発想は、マンガ家の、マンガ原画に対するかなり一般的な感覚のひとつだと思います。

また、自分亡き後の、特に遺族に配慮するという感情も、原画問題においては、重要です。実際、京都国際マンガミュージアムにもしばしば、原画のご寄贈のお話がありますが、その多くは、ご遺族が、その価値をご理解できず、どうしたらいいかわからない、という状況でのお申し出がほとんどです。資産としての原画の相続、という現実的な問題も含め、この事例には、考えなくてはならないことがたくさん含まれているように思います。

もう一つの事例をご紹介しますけれども、これは、日本ではなくて、海外の話です。ギャラリーでマンガ原画を販売するという事例は、この寺沢大介展を含め、日本でも最近いくつかの事例がありまして、近年、僕自身が足を運んだものだけでも、例えば伊藤潤二さんだとか、古屋兎丸さんの展示を観ました。しかしながら、日本ではまだギャラリーで原画を売るといことは、まだレアケースだと言えます。

一方海外では、特に欧米において、マンガの原画というのは、いわゆるファインアートと同じように売買の対象となっています。マーケットとコレクターも伝統的に存在していて、マンガのミュージアム、文化施設というのも、そういったマーケットを通してマンガ原画を購入している場合が多々あります。

そもそも欧米のマンガ関連施設というのは、ここ京都国際マンガミュージアムのように、図書資料の収集・公開というより、一般の美術館のように、マンガの原画をコレクションして展示しているという施設がほとんどです。

2014年のことでしたが、京都マンガミュージアムの問い合わせメールとして、イタリアのオークションハウスから、イタリアで発見された2枚の日本のエロティックコミックスの原画があるから、その詳細を知りたいというお問い合わせをいただきました。

それで画像を送ってくださいと言って、送ってもらったのを見たら、横山まさみちさん作品でした。2ページだけだったので、タイトルとかが載っていたわけではなかったんですけども、「オットセイ」がバンと載っていたのですぐに分かったという感じなんですけど、日本の原画が欧米のマーケットで流通しているという現実を目の当たりにしたということがありました。

最近も——本当に最近、数週間くらい前だったと思うんですけども、日本のマンガ原画をどうやったら手に入れますかという、フランスからのお問い合わせをちょうどいしましたが、こういった海外からの質問というのは、マンガミュージアムに頻繁に届きます。

この事例からは、日本の原画が海外流出しているということが衝撃だけではなくて、「マーケット全体をアーカイブの場として見なす」という、そういうアーカイブのやり方の可能性についても考えることができるんじゃないかと、僕自身は考えています。

このイタリアのオークションハウスがしていたように、マンガ史の中に位置づけるということで作品に価値を与えた上で、しかるべきところ——個人であつたり施設だつたりしたところに販売するというのは、ある意味健全なんじゃないか、という考え方もできるかもしれないですね。

アメリカの美術コレクターの場合、最終的に、個人で集めたコレクションを美術館に寄贈したりとか、その寄付で美術館をつくってもらって公共化するといったこともしていますが、そういうサイクルというか環境ができて、どこにどの原画があって、誰が持っているかということさえ分かっているならば、マーケット全体でコレクションをしてアーカイブすることができるんじゃないか、という発想ですね。

しかし、マーケットをつくるということは、値段というものを付けるということです。値段を付けるということは作品の価値を付けるということだと思えるのですが、そのことに対して日本のマンガ家さんとか、ファンの反発や違和感が発生することは容易に予測できます。あるマンガ編集者に、表さんと原画販売の可能性についてお聞きするというインタビューをしたことがあるんですけども、マンガ原画を売ることに対する、その人のお言葉を借りれば、ある種の「後ろめたさ」みたいなものをぬぐい取るというのは、ある程度の努力が必要だろうというふうには思います。

またマンガの価値というのは、欧米のオークションハウスがしているような、いわゆる「芸術」「アート」の評価基準とも異なる、という点にも注意する必要があります。欧米の場合、アートとしての絵画の評価基準の延長線上にマンガの原画というものを置いているので、特に摩擦のないまま、マンガのマーケットというのでできていると思うんですね。つまり、近代的な評価基準において、「作者」という個人を設定して、その個人の表現物が「作品」となるという発想の中で、マンガというものが集められて、優劣がつけられているわけです。

しかしながら、表さんのお話でも出ていましたけれども、日本のマンガのアーカイブ、ひいては日本のマンガ文化全体を考える上では、個人として名前が残っている作家や有名な作品が偉いとか、そういう話だけではなくて、名前もなく、誰のものかも分からないある時代のワン・オブ・ゼムでしかない作品でも、だからこそ重要だという発想が、ぼくにはあります。それは、京都国際マンガミュージアムをつくったときの、ある種の思想でもありました。

こういった、欧米の発想、価値付けとは違う価値基準が、日本のマンガアーカイブにおいては必要だという発想と、実際海の向こうから「マンガの原画を買いたい」という要請がどんどん来ている現状とを、どうやってすりあわせ、日本の中で健全なマーケットのようなものをつくることができるのか、あるいはできないのか、みたいな話も、ぜひ皆さんとできたらいいかな、と思っております。

第2部

○イトウ ここからは、フロアの皆さんも、出演者の気持ちでお話に加わっていただけたらと思います。

第2部ということで、先ほどお話ししました、お手元にあるこのプリント、3枚のページで綴じてあるこのプリントを基にお話ししたいと思いますので、そちらをご用意ください。

じゃあまずは吉村さんの方からお話をもらえたらと思います。お願いします。

付録

○吉村 はい。冒頭にあいさつをして久しぶりにしゃべりますけれども、そのときに今日集まられた皆さんの気持ちは熱いと言いましたけれども、寒いですね、ここ。

○イトウ そう。寒くないですか。大丈夫ですか。

○吉村 クロストークで少し暖房をしたいと思いますけれども。

いまイトウさんの方から言われたプリントの1番最後のページをちょっとめくってください。これがいったいなんなのかは、あとでイトウさんの方から、もう少し設計の意図を説明しますが、やはり冒頭に言いましたように、それぞれの館の動きを全体で俯瞰しながら、いまどういう状態が起きているのか。各館ではどういう取り組みを中心にやろうとしているのかというのをマッピングしていくための図面だと思ってください。

座標軸があります。そこに京都MMとか、横手MMとか、明大米沢、北九州市MMという四つがありますけれども、その色が濃いところは実際に、それまでの取り組みが、今後の方向性を向こうとしているのが少し薄めの、なんて辺りを、また後で説明は入れますけれども、それぞれにやっぱり位置が違うわけですね。

先ほどの4者4様のお話を聞いても分かりますように、例えば横手MMの方であれば、もう取り組みは22年強という長い蓄積の中で培われた人間関係、作家との信頼関係というのがベースにありつつ、それを広げていこうとされている。

しかも公立のシビックプライドという言葉にも象徴されるような、地元の皆さんとの向き合い方の中でその活用というものが目指されている。さらにリニューアルという状況を迎える。

一方で明大のヤマダさんの方からお話があったのは、むしろいろいろなケーススタディーをしながらも、公共性というよりはプライベートなアーカイブを広げていきながら、それをどうやってつないでいくのかという、そのための取り組みという話もありました。

さらに表さんの方からは、それがどう活用されるのかというのが一つの偶発的な事例の中からも、しかしそのマンガ生活というか、マンガとの向き合い方そのものを原画のアーカイブによって、あるいは利活用によって、シーンを変えていけるんじゃないかという話が、その北九州市MMの取り組みと今うまく結び付けられて説明されたわけです。

本館の原画ダッシュのお話というのは、やはり蓄積のある事例ではありますが、それぞれの特殊性みたいなものも見えてきたと思いますし、特に最後の方に新しい課題、マンガ家および研究者の視点の重要性みたいなことも出てきました。

一方イトウの方の話からは、売るというある種ショッキングに見えながらも、しかしそのショックというのは私たちの既存の価値観の中で生まれているものではないか。その既存というのは、これまでのアート、美術館という常識の枠組みの中から起きているものだとすれば、マンガのアーカイブ、マンガのミュージアムにおける資料収集、活用というものがどうあるべきかという話にいまなっているわけですね。

実はその個別の発表に質問の時間も設けようかと思いましたがけれども、ちょっとそこはいったん第2部に全部集中させるかたちで、次のように進めていきます。

付録

そうした取り組みがすでに行われているものを、これからマッピングするに当たって、一筋縄ではいかない指標というものが存在していますので、これを私とイトウさんの方で、事前にいろいろな話をします。

実はこのレイヤー構造の設計をやってくれた担当者の方も、今日フロアに来てくださっていますけれども、その複雑なものをどうやって可視化するかという中で、いまからこの三つのレイヤーから原画アーカイブのいま置かれている状況を考えたいということで、この図の説明に入ります。

その上で、最終的に先ほど見せたそれぞれのアイコンが配置されているわけですが、皆さん方がそれぞれ関わっている、タッチされているであろう事例みたいなものを、ここにさらに足し込んで、このレイヤーを、さらに構造を、厚みを持たせていく。またはそれぞれのマッピングに役立ててもらうための協議の時間を、このシンポジウムの目的としたいと思いますので、イトウの方が言いましたように、皆さん方も出演者のお一人の意識を持つぐらいのかたちで、限られた時間ですけれども、お話をしたいと思います。

それですみません、ここは僕もダブル司会でいくんですけれども、先に言っておきます。4時に終わりませんので、4時15分を目指して頑張りたいと思いますので、よろしくお付き合いください。

じゃあイトウさんの方から、まずはこの図の説明をお願いします。

○イトウ 最初に少しお話ししましたが、このプロジェクトでは、アーカイブということ、三つの段階、つまり、〈収集〉ということと、〈整理・保存〉という段階、そしてそれを〈利活用〉するという段階を一連の流れとして考えています。それぞれの段階において、それぞれどういったことが必要かということ、この数年間ずっと実験してきたわけですが、

その3段階を、このモデル図では、緑のページと、黄色のページと、水色のページで表現しています。

いろいろ僕らがやってきたことを、4館の活動を合わせて協議し、先ほど吉村さんが言ったように、全体を一つのモデル図として可視化するためにはどうしたらいいかということで、一つの4象限、マトリクスにしてみるのがいいんじゃないかという話になりました。

○吉村 ちょっと一つだけ。なんでこれをつくるかというのはすごく簡単な話で、原画をどうしたらいいか困っている人がどこに駆け込んだらいいかという話です。それが一目でわかるようになるというのが、大きな目的です。

○イトウ その話も後でしますけれども……話を戻します。そのマトリクスをつくる上でいったん、ここに書いてあるように、「デジタル」／「オリジナル」という軸と、「公開」／「販売」というx軸とy軸をつくりました。

あとで、この軸でいいのかとか、z軸があった方がいいんじゃないのかとか、もっとたくさん複雑に軸をつくっていった方がいいんじゃないのかとか、そういうご意見もぜひいただきたいと思うんですけれども、今回は取りあえずデジタル／オリジナル、そして販売／公開と

付録

いう軸をつくった上で、収集と整理・保存、利活用という段階をそれぞれ図式化してみました。

それがこの3枚の図なんですけれども、もう一つ、最初の白いページが2枚、裏表でついていると思うんですけれども、これはどういうことかといいますと、先ほどの吉村さんのお話にも「原画をどうしたらいいか困っている人」ということばが出てきましたけれども、誰がどのような順番でアーカイブということを考えるか、ということを示す図です。

ひとりは、原画を持っているけれども、どう保存したり活用していったらいいのかイメージを持ってない、分からないという個人ですね。作家さんご自身だとか、あるいはもっとわけが分からなくなっているご遺族の方というのを、今回のプロジェクトの原画アーカイブを参照していただきたいと思っている人たち、一群と想定しています。そうした個人の所蔵者に、原画の〈整理・保存〉をどうやってもらったらいいか、という話を、ヤマダさんがしてくださいました。

もうひとり、僕たちが想定しているのは、逆に、原画をどう活用したい、というイメージが先行していたり、所蔵するためのスペースをすでに持っている、といった一群が実は存在するんですね。公共的な美術館だとか、出版社さんだとかをイメージしています。先ほどと、実は真逆なパターンですけれども、そういった施設や団体、出版社のような企業が、実際に存在していることを知っています。

そういう、ある種真逆の二つのグループにとっても、この図というのは、ある程度有効かなというのをお示ししているのが、この2枚の白い図です。

原画を持っているけど、どうやって活用したらいいか分からない、という方は、「①原画が「収集される」」という緑の図がレイヤーの一番上にある、「原画を持っているが活用イメージがない場合」という図を見ていただきたい。まず、この一番上のマトリクスで、その原画がどういう状態にあるのか——デジタルのデータも取っているのか、取っていないのかといったことを確認してもらう。マトリクス図内の円や楕円は、一種のトンネルというか、穴みたいなものとイメージしてください。そうすると、例えば、デジタル化されたデータを持っている人は、この穴を通して、その真下に降りていくことができるわけです。穴の開いた向こう側しか見えない、と言い換えてもいい。そうしてこの穴を通して「②原画が「保存される」」のレイヤーに降りていくと、まあ、当たり前ですが、あなたには「デジタル管理」が必要ですよ、と書いてある。さらに降りて、「③原画が「活用される」」のレイヤーに行くと、複製出版や、原画ダッシュのようなかたちの〈利活用〉ができますよ、ということがわかる、そういう図です。水色のページ＝「③原画が「活用される」」を参照してもらえば、原画ダッシュという試みをすでに行っている京都国際マンガミュージアムという施設がある、じゃあ、そこに相談に行ってみよう、ということになるわけですね。原画を持っているけど活用イメージがない——たぶん、そういう方が現状ではほとんどだと思うんですけれども——そういった人たちが、この3枚の図を活用するときに、どの順番で見ていったらいいかという

付録

のを示したのが、このパターン1＝「原画を持っているが活用イメージがない場合」という図です。

パターン2は、ある程度、原画の活用イメージが明確な場合です。その場合、逆に、この水色のレイヤー＝「③原画が「活用される」」を一番上に置いて、例えば、原画展をやりたいという場合、この穴を通して下に降りていくことで、どういう〈整理・保存〉状態が必要なのか、どういう〈収集〉状況であるべきなのか、といったことを“逆算する”というイメージです。

○吉村 なので、こちらの不備なのですけれども、この緑と黄色と青のやつは、この黄色が裏に刷ってあるので分からないですね。これが3枚、別々に重なるようになっていけばよかったですね。黄色いやつの原画ダッシュをつくるみたいに。

○イトウ 隣の人と協力して。

○吉村 はめてもらうと分かりやすいですね。

○イトウ そういう、ある種の概念図でして。これがもちろん、完璧だとはまったく思っていない。むしろ、先ほど言ったみたいに、このx軸y軸は本当にこれでいいのかとか、x軸y軸だけでなくz軸だとかもっと別の軸が必要ではないか、3次元どころか4次元、5次元と、さらに複雑化していった方がいいんじゃないか、というご意見も、もちろんあると思いますので。そういったところを具体的にお話をいただけたらいいと思います。

皆さんにご意見をいただきやすいかなと思うのは、〈利活用〉のイメージですね。ここが豊かになればなるほど、逆算して、どういう〈整理・保存〉が必要だとか、どういう〈収集〉の仕方をするべきかとか、そういうことがイメージできると思いますので。

マンガに関心のない人に向けても、なんで原画を集めないといけないかということのアピールしやすくなると思いますし、そういった、どういう利活用が他に考えられる、みたいなことも含めて、ご意見をいただけたらいいかなと思います。

○吉村 ということで、あれですね。まず、ここにマッピングされた4つの施設の当事者たちに、この図に対するご意見を聞いてみましょうか。

○イトウ そうですね。これでいいのかとかね。

○吉村 ご自身たちがやっていることと、この見取り図のトーンが合っているかを聞きたいということでは。順に、大石さんの方から、ぜひ、コメントをいただければ。

○大石 事前に、この資料をメールでいただいたときに、こういう考え方があるんだなということで、すごく気付かされたというか、参考になったという気持ちで見させていただきました。

体系的な収蔵とアーカイブというものを先行してやらせていただいているという立場からいくと、原画の活用という部分では、リニューアルオープンする増田まんが美術館は様々な可能性を持っているのではないかと思います。

原画そのものを活用するということはもちろん、アーカイブしたデータの活用の幅は、ものすごく多くあるのではないかと思います。

付録

ただ、まんが美術館は原画の保存、アーカイブに主軸を置いて、それを市民還元も含めて活用していくという部分で、商業的な活用というものは、役割分担として美術館が担うというよりも、それを活用して市民の方、町でお店をしている方とか、企業がそれを担っていく橋渡し、いわば中継役や紹介役というものをしていきたいという考え方が主にあります。

美術館がこれをしていくというところは、可能性としては、もちろん否定もしませんし、やっていかなければいけないという意識もありますけれども、まず公的な保存にしっかり取り組みながら、副次的な部分で、こういった活用というものをしっかり考えていきたい。それから、サポートしていきたいとは思っているところです。

○イトウ つまり、水色の部分でいったら、右側の販売という側でなくて、ある種公開みたいな、公共的なものとして見せていくという、こちらの左側に注力していくというイメージですね。

○大石 そうですね。ただ、先ほど紹介させていただいた財団法人というのは、一法人でありますので、当然、商業的な行為、美術館の中でもミュージアムショップの運営もしていかなければいけないので、右側の方に関わっていくものも当然、出てくるとは思います。

○吉村 一つ確認なのですが、そういう市がやるとかではなく、財団をあえてつくったというのは、最初からそれを視野に入れていたという理解でいいですか。

○大石 そうですね。もちろん、そういった部分も活用という部分で幅が持てないと。行政はどうしても、直接、商業的な行為はできないので。そういった広がりも当然、必要だということですね。

○吉村 この財団形式というのは、個人的にはものすごく重要な先行事例だと思っていました。これによって商売というか、それも視野に入るのですが。何より持続性というのが、かなり重要です。

いわゆる行政の場合だと、大石さんは実はそうなのですが、担当者が変わるということが、ほとんどそれまでの蓄積を変えてしまう。これまで築いてきた人間関係自体を、もう1回、つくり直さないといけないなんていうこともあり得るのを、どう回避するのかは、実は秋田のすごく長い課題だったと思うのです。

この財団形式、なおかつ、市との共同出資で、地元の作家さんが中心になっているという、このケース自体は、かなり、いまはレアですけど、僕は今後、有望なモデルだと思うので、それ自体もうまく可視化していきたいですね。ありがとうございます。だから、すごく期待をしております。

○大石 ありがとうございます。

○吉村 順にコメントをもらいたいのですが、ヤマダさん、どうですか

○ヤマダ 図の把握に、ちょっと頭がまだ思い付いていないのですが (笑)。大石さんの話は夢があるし、かつ、地に足のついた話で、いつ聞いても楽しくなります。

私は、今回は個人の手元に戻るということを想定して整理を考えたと申し上げましたが。それは、いまの職場環境が現状、収集と保存とに関しては、考えることができない館だから

です。ただ、前職が漫画部門のあるミュージアムだったこともあり、マンガ原画は大事なものであるということが自明で、マンガの原画を販売するというのは考えたこともなかったし、できれば、先生たちにも、あまり販売してほしくないなと思ってきました。けれど、それが売れて、生身の生きている先生たちが生き残っていけるのなら、それだって考えなければいけないとも考えるときに、販売についても考えないといけないでしょう。

ただ、販売に乗せるにしろ、公共施設で保存公開するにしろ、いったい何がどれだけ、どこに、どういうふうにあるかの情報が整理されなければ、それはごみでしかなく、意味がないのだということを、実感させられる体験が、私の経験の積み重ねの中にあります。

先ほど、イトウさんがおっしゃったことで、売買することを選ぶと、そのために整理が進むという可能性はあるだろうなと感じました。古書や、海外でのマンガ原画の売買の例がそうであるように。

もし、売買される場合は、情報が残っていてほしいなと思います。買われた方がそれをどのように扱おうといいのだけれど。例えば、すごく精巧なデジタルデータが残っていくとか。誰々さんのところに、これがあるとか。少なくとも、もう、表には出てこなくても、こういうものが存在したというデータが積み重なっていく道筋が何か考えられるといいですね。

それはひょっとしたら、公共機関で協力できることかもしれないということを、ぼんやり考えました。

○イトウ そうですね。マーケットで「商品」として流通する場合でも、もちろん、メタ情報は付与されていないといけないというのがあって。アーカイブは、モノをどう管理しておくかというのと、そのモノのメタデータをどうデータベース化していくか、という2つの作業を同時に行う必要があって、このプロジェクトでも、メタデータの重要なひとつの要素として、初出情報というのをすごく一生懸命調査しているわけです。

マーケットにおいても、そういう情報が付随していた方が、経済的な価値はもちろん上がるわけです。美術マーケットにおいても、一般的には、研究が厚ければ厚いほど、基本的には、その作品というのは、経済的な価値も上がる。

実は、経済的な価値を上げるために一生懸命研究するというか、情報を収集しているという部分もあるかもしれない。そういった意味でも、マーケットというのには、ある種の健全性が認められるのかな、と思います。

○ヤマダ そうかもしれないですね。

○吉村 僕もちょっとコメントを入れると、結局、情報付けというか、メタデータが集積されればされるほど価値は上がるんです。というか、そこにそういう行為をすれば、必然的にそうなるわけです。

ただ、それが、いまの話からすると、経済的価値に向かうのか文化的価値に向かうのかとかは、結局、この利活用のモデルで可視化されたところで、ある程度、道筋をつけておかないと。それをつけておけば、「そんなつもりはなかったのに」が、ある程度防げるのではないかとあります。

付録

もう一つは、結局、こうしたところにそもそも、アーカイブをお願いしようとするのは、むしろ経済的には、そんなに恵まれていない方々が多いということなんです。ここは事実として。

つまり、プロダクションなんかを持っている先生方は、そこでちゃんとやっていらっしゃるので。むしろ、そういうことがない、あるいは、そういうことを考えたこともない中で、ご遺族なんかがどうしたらいいかということが、結構、発生するだろうという話なのですが。

このときに、最後はイトウ君が言っていましたけれども、結局、何をもってアーカイブした状態を私たちが把握するかなんです。おそらく、近代的な意味でのミュージアムが独占するような、1枚しかない原画というものが前提とされているアートの市場ではなくて。

たぶんこれは表さんの話にも関わるのですけれども、マンガというのはアートではなくて、ファンカルチャーなんですね。だから、ファンカルチャーのアーカイブというのは、そうした価値付けにおいてどういう選択があり得るのかという話は、たぶん私たちが根本的に迫られている問題だと思います。

なので、これでかっちり決める、それから動けないというよりは、そのための方向性を、僕らがある程度、視野に動いていかないと。僕ら自身が文化的価値のためにやっていたとしても、いつの間にか経済的価値に巻き込まれて、信頼を失ってしまうみたいなことが起こり得るので。そういうことを避ける意味でも、こうしたマップは必要なのかなとは思いますが。

ということで、表さんにもつないでいきたいのですが、コメントはいかがでしょう。
○表 先ほどからの話をうかがいながら、ずっと考えていたのは、今日、壇上に上がっている施設だけでなく、この図の上にもっとプレーヤーを増やせないかということなんですね。

それは必ずしもマンガの専門施設でなくてもよくて、例えば自治体の美術館とか歴史資料館とかが、その土地に関わりのある作家や作品とかに関して、少しでもいいから受け入れてほしい。受け入れに当たって、どんな技術や設備が必要で、どういう作業を行ったらマンガの原画は収蔵できるのか。

それは、博物館や美術館の通常感覚からすると、かなり簡易なものになるかも知れない。実はそんなに厳重でなくてもいいから、要点を抑えた最低限のマニュアルを整備することで、プレーヤーを増やしていきたいというのが、このプロジェクトの大本の目的なんだと理解しています。

ですので、やはりこの図でも、特に③の図ですけれども、見れば見るほど、どうやったらここにプレーヤーを増やしていけるのだろうかというところが、やはりすごく気になる。

いまは、壇上に上がっている館が図の上に置かれていますけれども、他のどこかの施設が原画の収蔵を作家さんかどなたかから持ちかけられたとして、そこはマンガ専門でも何でもなし、普通の市立の美術館や博物館だったとして。

自分たちは、この原画を受け入れて何をどこまですればいいんだろうか、ということが重要になると同時に、そうすることでどんな負担やリスクがあるんだろうか、あるいは逆に、

どんなメリットが、それはマーケットと言い換えてもいいのかもしれませんが、あるんだろうかということが分かるような図を、どうしたら描けるんだろうと、さっきから悩んでいました。

まとめると、ここにメリットなり、マーケットなりの可視化を、やはり付け加えたいなという気はします。この利活用によって、どういうところに、どんな影響や恩恵があるのか。影響といったのは、先ほどから出ている、文化的価値と経済的価値の重なりと違いがある中で、原画の収蔵におけるある種の所作がその重なりと違いの力学に結果的に一石を投じてしまうという、結構センシティブな部分を念頭において影響という言うわけですが、そういった辺りを、どうやって描いていけばいいのかと。

たとえば、z 軸を付け加えるという比喩が先ほどありましたが、この4象限の形式にこだわる必要もおそらくはなくて。作家の視点、施設の視点、あるいは、ファンの視点で、原画というものを、どういうふうに残して、どう利活用していれば、どんなことができるのかというのが見えるような図をつくりたいわけですから、一つにまとめる必要も必ずしもないかも知れなくて。すみません、この図の大本の意味からどんどんずれていっているかも知れませんが。

○吉村 この図の目的は、もともとあったタイプ別のものを可視化するという話なのですが、けれども。たぶん、いまの表さんの話に戻すと、イトウさんの方から説明があった、原画は持っているけれど、どうしたらいいか分からない側のベクトルで見てもらう必要が出てくるのと。

表さんの話を聞くと、もうちょっとありていに、その先に何があるのという話が要るよということですね。

○表 そうですね。

○吉村 たぶんそれは、結果的にプレーヤーを増やすということにつながるんですけど。この場合のプレーヤーは、表さんに質問なんですけど、こういう施設ではなくて、個人を結構、想定されています。

○表 個人所蔵というのもケースバイケースで。先ほどから出ているような、西洋の美術市場が行うオークションに近いやり方で、原画を売っていらっしゃるプレーヤーも、すでにいくつかあるわけです。例えば東京の「スパンアートギャラリー」とか「リベストギャラリー創」とか、ポップカルチャー系の作家個展をよくやられる画廊では、複製原画も売っていらっしゃいますが、原画も結構販売されている。ただし、ちゃんと購入者の連絡先を登録して管理していらっしゃるので、作家がいざ展覧会などに使いたい、という場合は、連絡をとって個人所蔵者から借りて展示することができる。私も実は1点、買って持っていますし、江口寿史先生の展覧会をさせていただいたときは、リベストギャラリーさんが管理されている名簿をもとに連絡を取って、個人所蔵者から作品をお借りして展示もしている。買う側としても借りる側としても経験がありますが、しっかりしたシステムでした。

だから、個人所蔵も含めたアーカイブ化というのも、試みの端緒はすでに存在するのです。ちょっと不遜な言い方ですが、アーキビストの視点から、このプレーヤー、この場合は画廊さんだったり、あるいは個人のコレクターさんでもいいんですが、この方だったら任せられる、という判断のもとに、図の上で可視化していった方がいいのかも知れない。

また図③の右上の象限、「デジタルデータを使つての販売」に関しても、先ほどの僕の話では復刊ドットコムさんの例を出しましたが、原画のデジタルデータならではの活用をしてくれる出版社やグッズ業者といった企業さんをプレーヤーとして加えていくのもいいと思います。

原画の利活用の様々な方法を、どこまでが「適正」とみなすかという問題もあるかもしれませんが、ともあれ、現状ありうる可能性をすべて可視化するという意味では、一定の条件下で個人の所蔵家がプレーヤーとして加わるのはあってもいいと思います。

○吉村 そのままいきますけれども、倉持さんの方に。コメントをお願いします。

○倉持 この図を見て正直なところ理解するまでに時間がかかりましたが、イトウさんの説明を聞いてよくわかりました。要は心理テストみたいな感じで、質問がいくつかあり、それに答えていくと、最終的に「あなたは横手タイプ」とか「MMタイプ」とか最終的な受け入れ先のパターンが見えてくるものだと理解すればいいですね。

三つ目のレイヤーを見て思ったことをコメントします。最終的な受け入れ先のことを表さんが「プレーヤー」という表現をされていたので、私もそのような言い方をしますが、プレーヤーを増やしていく必要があるなというのと。そしてもう一つは受け入れ先の基準をどう持ち分けていくかも決めていく必要があると思いました。

何が言いたいかというと、原画ダッシュの展示要請はその良い例になります。原画ダッシュは年間通じて様々なところから展示オファーがありますが、そのほとんどが特定の作品や個人ではなく、「少女マンガの黎明期」というくくりに対しオファーが来ています。つまり、単体だと活用しにくいけど、集合すると活用しやすい、ということがあるのだろうなと。集合すると全体のマンガの歴史なども語りやすいですし、展示にしやすいです。

原画も同じことが言えるのではないかと思います。例えばですが、MMでは少女マンガの原画を集めます、北九州では少年マンガの原画を集めます、あるいは「80年代を中心に扱います」など、各館で収蔵する持ちわけをゆくゆくは決める必要があるかもしれないと。もちろん、横手と北九州だったら地元の作家というくくりが最初にあると思いますが。ジャンル、年代の持ち分けみたいなこと決められたら、もう一つレイヤーができて、寄贈したい側にとって分かりやすいだろうなと思いました。

実際、東京にある弥生美術館は、「叙情画」という大きな軸があるので、叙情画に関連した作家、影響関係の作家の原画の寄贈のお話もきているのではないのでしょうか？寄贈する側も「あの美術館はこの分野強いから、自分の原画はあそこがいいだろう」ということが分かっている、と決めやすいし、迷いがないですね。これは原画だけでなく、図書資料にも

同じことがいけませんが、場所が限られている分、それぞれが何を強みに原画を持つかは全体で考えて持ちかけてもよいのではないかと思います。

○イトウ いまの皆さんのお話を、別の視点から言うと、僕も先ほどのマーケットの話をして、最後にある種、そのままではいけないみたいな話をしたのですけれども。

アーカイブをするにあたって、ある価値観だけが優位に立つみたいなかたちでマンガのアーカイブの構造が固定化されてしまうと嫌だなというか。それは、豊かじゃないかと、やはり、思っています。

経済的な価値観で優劣をつけるという場があっても、僕はいいと思っていますし。でも、だからといって、それが圧倒的な優位になってしまって、経済的に価値のないマンガ原画というものは無視されるような世界になっていってはいけないと思っています。かといって、研究的な価値付けだけが全てだというよう、強硬に言うつもりもないわけです。

だから、その価値観の価値付け、価値軸というか、その価値軸の違いが、たぶん活用のされ方のバリエーションにつながっていくように見えたらいいのかなと思いました。

経済的な価値の上下でという軸で見ると、こういう活用の仕方があります。研究的な価値がある、なしてみたいなところでいったら、こういう活用のされ方とか場があります。そこにひも付いた施設があります、個人がいますみたいな、そういうかたちがある種、一覧というか、総覧できるような。理想を言えば、それぞれの価値軸が平等に見えるみたいな、そういう世界が一番美しいかなと思いました。

○吉村 僕もいろいろ思うところがあるのですけど。大石さん、ちょっと質問なのですけれども。秋田の特徴は、開館時に多くの作家の先生からの決めどころの原画も持っているというのがあるのですけれども、一方で、今日のお話にあったように、作家のかんりの、ほとんどのと言っているのかな、作品を、作家ごとに収集されていくように見えるのですけれども。

例えば、この作品だけみたいなことが来たときには、それは受け入れ可能なのですか。

○大石 実は、行政で直接、館を運営していて。手法は指定管理というふうに変わっていきますけれども。広い意味での収蔵スタイルというのを持つというのに、すごく時間がかかるというか。

つまりは、オールマイティーに、どんなものでも預かっていきますよという部分で、保存するという部分では公費がかかっていく。公費がかかる保存には、ある程度の基準とか、ルールづくりが必要だというのが現状です。

つまり、駆け込み寺的に原画を受け入れたら、すごく理想なのなのですが、その幅というものは、現状、やはり、収蔵計画とか、それから、アーカイブにかけていく予算ですとか。そういったものとしっかり連動させなければいけないので。

実は、作品だけ、もしくは、デビュー当時、何年かは、アナログで原画を描いていたのだけど、もう、10年くらい前からデジタルで描いていると。その初期作品を預かってくれなにかということで、お話が来たりというケースはあります。

ただ、それを美術館オフィシャルとして、お預かりしますというところには、まだ、現状、至っていないというのが、やはり、市が預かるということでのルールづくりの中から。要は、そういうのはイレギュラーという状況で、いま、なかなか取り組めていないというか、お預かりできていないという現実も実はあるという状況です。

○吉村 東村さんなんかが象徴であるように、その地元にゆかりのない方でもつながっていくというすごさを、実感できると同時に、表さん、陸奥さんの件もそうなのですが、やはり、ゆかり作家を集めるというのは、公共の、市民のお金を使ってやるというときに一番分かりやすいといえば分かりやすいですね。

ということを逆に考えていけば、全都道府県にマンガミュージアムが一つずつできれば、差し当たっていいんじゃないかというようなお話だって、あったりするわけですけど。

その上での難しさがどの辺にあるかを、もうちょっと聞きたいです。各県につくるのが難しいとかでなくて。ゆかり作家を集めていく上で、便利なだけでなく、難しさがあるとすれば、どういうところに、体験的にあるかを少し聞かせてほしいです。

例えば、もうちょっと分かりやすくいうと、オリンピックだって金メダルを取ったら、すぐに出身地とか、通っていた高校だとか、大学に行ったところだとか、みんな顕彰するじゃないですか。わあっと。引き合いになったりするわけで。

そんな、生まれだけでいけるものなのか。舞台を描いたのが北九州だったとか、活躍したのがどうだったとか。いろいろあるかもしれませんが、例えばそういうので少し具体例を教えてほしいです。

○表 研究者の視点からの悩みになりますが、「シビックプライド」という観点からの収蔵というのは、確かに理由付けとしてシンプルで、運営上はそれでいいのですが、では、そうして集めた結果のコレクションから、いったいどういう意味が立ち上がってくるんだろうか。そのコレクションが浮かび上がらせるのはどんな「意味」なんだろうかということに、やはり、発想がいくのですね。

つまり、北九州出身のマンガ家さんの作品を集めたことによって、ある種の「北九州らしさ」とか、「マンガ史における北九州の位置」とかいうものが、そこから見えてくるのかどうかというのが、どうしても気になってしまう。

○吉村 その意味というのは、やはり、そのエリア、そのローカルの意味という意味ですかね。

○表 そうですね、地域性をどう、日本なり世界なりといったマクロに向けて発信できるのかというか。北九州作家ならではの特征はあるんだろうかとか。裏を返すと要するに、単なる「お国自慢」はしたくないわけです。

「うちの市から、こんな有名な人が出たんだ」と喜ぶ価値観は、別に悪いわけではないんだけど、そういう物差しだけで作家や作品を見てほしくない。マンガに向き合う物差しは、できるだけ多様であって欲しいわけです。単に有名な人だから、ヒットしてアニメになった作品だから、それがうちの市から出たから誇らしい、というだけじゃない方がいい。

付録

北九州市出身のマンガ家さんの作品を集めることで、地域の特性とか、地域の魅力みたいなものが、そこから自ずから立ち上がってくるように収蔵も利活用もしたいと思うのだけでも、なかなかそう簡単にはいかないというか。

特に北九州市の場合、55年前に5つの市が合併して出来たこともあって、各区がそれぞれの個性を重んじていて、「北九州市」という一つの個性に収斂していかないのです。また、市の歴史にも結構な起伏があるので、作家さんの年代によって街の空気はかなり違うし、なかなか絞れない。ですので、全体を無理やりまとめるのではなくて、テーマとは時代とかを複数設定して、いろんな視点から切り取って、北九州市ゆかりのマンガから見る北九州の魅力とか特性を、ギャラリートークや市民講座で折に触れて話すようにしています。

あとは、当館では「北九州市ゆかり」という言い方をしていますが、市でお生まれだったり、大学時代にいらっしゃったり、嫁いで来られたりと、色々なケースがあります。お父さまのお仕事の関係で転々とされている方も多いですし、梶原一騎先生の場合は、小学校時代に東京で悪さをして、小倉の叔母の所へ一時期預けられたので、ごく短い期間しかいらっしゃらなかったらしいという、そんなケースもあります。

そういった、複数の「ゆかり」をお持ちの方について、例えば、「梶原一騎記念館」を仮につくるとして、それはご本人がおっしゃる「出身地」である所の熊本県高森町なのか、ご居宅がある東京都練馬区大泉なのか、まあ、うちは短い期間なのでさすがにないと思いますが、なかなか難しい問題だと思います。

突き詰めれば、ご存命であればご本人、物故されていればご遺族の考え方というか、どこに一番思い入れを持たれているかが重要なので、そこを無視してあまり出しゃばることはしたくないなあという思いがあります。自治体同士の利害やメンツで競争とか衝突になるような動き方はするべきではないだろうと。どこに思い入れを持てくださるかというのは、作家さんご本人しか分からないことなので。

○吉村 いまの立ち位置は、すごく慎重な発言でよく分かる一方で、分かりやすさでいうと、それが求められますよね。

○表 そうですね、行政の文脈では特に。

○吉村 現実、実は、あえて名前は出しませんが、ここから、たぶん続くだろうマンガミュージアム的な施設がぼん、ぼん、ぼんと、いま、構想されているのですね。やはり、全部同じロジックで。

まずは、地元作家の顕彰から。そして、それが文化的価値といえ、広い意味ではそうですけれども、おそらく観光資源としてね、用い方みたいなところにつながっていかうとする動きが、もう、結構あるので、だとすると、先ほどのプレーヤーが増えていくというのは、結構、ある程度、そういう容易に想像ができますね。

○表 そうですね。だから、そうなるとやはり、プロパーの美術館や博物館のように「モノ（＝現物・実物）ありき」にこだわり過ぎるのはよくないだろうと。原画なり、物故者の場合で言えば遺品なり、そういった1点ものばかりに過剰に依拠すると、どうしても取り合い

になるので。逆に、そうですね、記念館が9か所もある富永一朗先生はちょっと極端だと思いますけれど…。

○吉村 あれはもう、あの先生しかない方式ですよ（笑）。

○表 もう、「富永一朗記念館連絡協議会」なんて組織まであるようなレベルなので、富永先生はほんとすごいなと思うのですが。そこまでいなくても、別に作家記念館が複数あったっていいと思うんです。今日の集まりは原画の保存に特化して話をしているわけですが、記念館のコンセプトとしては、原画は選択肢の一つであって、もっといろんなスタイルがあっていい。例えば、その作家さんとそのお仕事を育んだ、作家性を象徴する自然や街並みがある場所であれば、風景自体が作家性を伝える展示物だ、とみなしたっていい。地域ごと、記念館ごとに違う視点があっていいと思うんです。そうなってくると、この視点に必要なのは原画だけでも、別の視点では、原画よりも出版物の方が重要かもしれない。

そういういろんな切り口、多数性が確保されることで、自治体の記念館づくりをめぐるバッチングも、発展的に回避できるんじゃないか、そんなところに可能性があるのかなという気がします。

○吉村 その唯一でないというのが、先ほどから言っているアートとマンガの違いが本質的にあると思うのですけど。

ヤマダさんとか、どうですか。来ている話だけでなく。積極的に、それをやっていくという館ではないという話ではあるにせよ。東京という立地において。

○ヤマダ 東京の例は、ちょっといま、ぱっと思い浮かばないですけども。お話を聞きながら、大事と思うことが一点ありました。

地元作家さんの館を建てて、そこに収めるという切り口以外の収蔵方法があるのと、先ほどの、倉持さんの弥生美術館の例からヒントを得ました。もうすでに地方のいろんな美術館にマンガ原画を収める方法は、何かないかなと、私は前から考えていたのですが。

要は、どこの美術館にも歴史があって、各館の収蔵品にはたいてい特徴があるんです。そこに割と集まっていがちなテーマの作品というのがあります。具体的な館の例をすぐに思いつかないので、適当な例をでっちあげますが。例えば、女性の肖像画がいっぱい集まっている館があったとして、そこに、女性を描くのが得意なマンガ家さんの原画を収蔵していくというのは、ありなのかも。

そうしたら、「手塚治虫」のように名前が挙がっただけで分かるような作家さんではなくても、女性を描くことにすごく秀でたマンガ家さんの原画を収蔵してもらうということをすると、その美術館のコレクションが深くなっていくということができるのかも。それなら収蔵計画も立てやすいですし。その方法が提案できれば、地元の作家さん以外のコレクションのありようが生まれるかもしれない。

それは、前職で雑誌を収集するときに、まず考えたことです。もう、マンガは全部収集するなんて無理だと感じたときに、あそこの館では、青年誌が、こちら館では少女マンガ誌がいっぱいそろっているなど、充実させる資料のすみ分けを考えるということをしなないと。

付録

○吉村 あくまでどの軸が正しいとかいう話をしているわけではなくて。いろんな軸を、いま、考えようとしているということですね。いまの、専門的なお話も。

一方で、倉持さん。うちは、それこそ京都市と一緒に大学とやっているといいつつ、京都に色を出しているわけではない施設ですよ。むしろ、総合というところでやろうとしているので。

その上での、難しさを、今日、原画ダッシュ作品の選定で出してくれたと思うのですけれども。その辺り、今日の議論を踏まえて、もう少しコメントを出してもらえると。

○倉持 そうですね、いまヤマダさんの話を聞いて思ったことも含めてコメントさせていただきます。今回の事業で原画ダッシュと合わせてインタビュー部会というのも試みまして。マンガ原画に関わる人にインタビューをして、どんな原画の保存、活用方法が好ましいか、など意見を聞く会なのですが、今年度はささやななえこ先生（旧名ささやななえ）とその夫であり雑誌『JUNE』の編集長をされていた元編集者の佐川俊彦先生、今は京都精華大学の先生でもいらっしゃいますが、この二人にお話を聞いたのですが、その時のことを思い出しました。その時佐川先生がおっしゃっていたのは、「ささやななえだけなら個人ミュージアムは建たないけど、例えば、竹宮恵子ミュージアムだったら建つ可能性はある。そうしたら、そこに相乗りさせてもらい、そこで原画を収蔵させてくれたら嬉しいな」と。冗談交じりではありましたが、すごく重要な視点だなと思います。個人のミュージアムでもその作家の原画を収蔵するだけでなく、そのフォロワーや影響関係、同時代の作家なども一緒に集めることによって、その看板となる作家の姿がより見えてくると思いますので。

原画ダッシュ作品の選定でもそうですが、作家個人の流れだけでなく、全体のマンガ史の流れで重要なものや他の作家と並べることで意味を持つ作品もあるので、そういった点を意識しながら選ばなければならないと思いましたので、原画収集でも同じことが言えるのではないかと思います。

○吉村 その辺、なかなか時間もあれなのですけれども。もうちょっとだけ。

もともと、個人館を避けて、全体に開いて、そして、むしろ個人の作家の作品をまとまりで入って来るというのが、横手MMがやってこられた循環だったりするわけですよ。

だから、僕らが思っている意図と、そこから出てくる過程、結果には、思惑とどんどん違っていたり、それが、新しい可能性を開いたり、新しい風を背負い込んだりと思うのですが。

僕にとって、かなり重要なのは、どのポジションにいたとしても、プレーヤーになった瞬間、この価値の創造性にいや応なく関わるということです。絶対、そこは外せないわけです。それが、どんな価値であれ。

ある種の覚悟であったり、その方向付けを引っ張っていくための推進を担うんだという気概であったり、というのが、相当求められていくわけです。そのときに、その熱を、ある意味クールに見せてくれるためのマップというものが一緒にあると、先ほどのすみ分けという

付録

ことも大切だろうし、どういうふうに使っていったらいいだろうと分からない人たちにとっての手助けにもなり得るし。

おそらく、プレーヤーによって、どんどん価値付けがされていくことによって、そういう事例がたくさん貯まれば、どこに持っていけばいいんだなという人たちの思惑も変わると思えます。ありていに言ってしまえば、こんなに自分の作品が、また再刊されたり、グッズ化されたりして、ある意味、経済的にも潤うのだったら、こちらに行こうというのが。事例が貯まれば貯まるほど、そちらの引力も強くなるだろうし。文化的価値というのも、そういう館が広がれば広がるほど、もちろん高まっていくとは思うのです。

そこは、なかなか見通しが難しいというのがあるのですが、その難しさは、今日、イトウ君が最後に問題提起された、既存の美術館という、僕ら思っている美術館というところから、このマンガの美術館が、ミュージアムが、どう関わっていくかという本質的な問題を抱えているのだろうなと思います。その辺り、すみません、イトウ君の方で全体的なコメントをお願いします。

○イトウ これは、そもそも「マンガミュージアムとは何か」といった話になってしまうと思います。

日本のマンガ関連施設は、「美術館」とか「図書館」とか「ミュージアム」とか、それまでの文化施設の呼び方をそのまま使っていることが多いわけですが、おそらく、もう何か、これまでの「美術館」や「図書館」や「ミュージアム」とは全然違うモードの施設というか、「場」みたいなものができているということがあると思います。

地方自治体は地元の作家さんのものは集めやすいといった既存の価値観にまずは戦略的に乗っていく、というのは重要だと思いますが、少なくとも僕がしたいと思っていることは、マンガだからできること、「マンガ」と「ミュージアム」という、二つの、ある意味矛盾した概念をつなげたからこそできる新しい価値みたいなことを可視化できたらいいなと思っています。

展覧会とか、イベントとか、こういうシンポジウムにおいて、そうしたイベントをやっている施設自身の存在価値を変更してしまえるというか、創造できるというのが、面白いと思うんです。それまでの近代的な美術館とか博物館とかだと、あらかじめ、その施設の存立価値が決まっていて、そこに合致するようなものを集めていく、みたいなことがあったと思います。

これまでの近代美術館とか、近代的博物館と逆のことができるという、すごく創造的な場に、僕らはいま皆さんも含めて関わっていると思うので、そのことを意識して、そういうことができる場所なんだよみたいなことを言えたらいいなと。

質疑応答

○吉村 もう、ほとんど時間がありませんが、これは言っておきたいというコメントが登壇者なり、フロアからでもあれば。一人、二人はいけると思いますので、いかがでしょうか。

付録

○イトウ マイクを回しますよ。

○吉村 登壇者も大丈夫ですよ。

○質問 1 寿限無の池川といいます。ちょっと思考実験的な話でいうと、寺沢大介さんの事例というのは、例えば、いま出ている、このマップでいうと、右下のところ、販売をするということをしつつ、かつ、デジタル活用もされているわけですね。実際には、本を、まだ販売しているわけですから。デジタル化したものを出版活用しているので、右側の部分の上と下に入るといのかたちですよ。

例えば、そこからさらに左にも、つまり、デジタル化はされていれば、さらにその左へも行くので、公開という方にも行けるわけですよ。例えば、原画を売ってしまうということは、博物館とは一切、それで距離を置いてしまうわけでもなく、原画を売るということも、その博物館で公開ということは、実は両立することもあり得るというようにも、このマップを見ると見えるんです。だから、そういうことも、ちょっと見えるのではないかと思って、ちょっとコメントしました。

○吉村 それも、いわゆる美術展と全然違う発想ですよ。

○イトウ 本当にマトリクスみたいなこういう図は、ある種極端に分けているわけですが、実際はスペクトラムというか、グラデーションがあります。分かりやすく可視化するというかたちで。

こういう試みは、僕らの間でも案外、隣で作業していることは分かっているのですが、お互い、では、相対的にどういう位置関係に僕らはいらんだろうみたいなことは、実はこの数年、あまりちゃんと考えたことがなかったのです。

こういうふうにまとめて考えるということ、僕らの間で少なくとも理解できなかったら、一般の人たちとか、駆け込みたいと思っている原画を持っている作家さんとか、遺族の方たちには、さらに、このプロジェクトにアクセスしづらいだろうということで、こういうマップみたいなものをつくってみてはどうだろうかという出発点でした。

時間も結構来てしまったので、ぜひ。このいまのマップみたいなものに限らず、先ほど、表さんからありましたけど、別の方式でもいいんじゃないとか、倉持さんみたいに、心理テスト型の方が面白いんじゃないとか、そういったことも含めて、あるいは、こういう価値観があるよとか、こういう活用の仕方があるよみたいな、そういう話も、いつでも、どんなかたちでもいいので、ぜひ、お話をいただけたらと思います。

○吉村 いまさらながらなのですが、僕自身の立場は、この研究推進オブザーバーというやつなので、全体を最後にまとめてしまいます。

冒頭に言いました、このメディア芸術連携促進事業の一環なので、先ほどから出ている利活用しようと意図している館同士の間でも、いろんな違いがありますが、さらにその上には、ジャンルの違いであったり、それをつないでいくための人材の育成であったりという課題、山積みなのです。

付録

先ほど、出ていました価値創造性という意味では、既存のアートと違う、ベクトルが反対を向いているであろう対象に、どのようにアプローチしていくのかという意味で、かなりスリリングな試みが今後も続いていくと思います。

ですので、ぜひ大胆な発想の転回で、しかし、これまでの美術の在り方にも学びつつ、このプロジェクトを来年度も続けていきたいと思っていますので、引き続き、この4館の皆さま方には協力願います。さらに、プレーヤーが広がっていく中で、新しいシーンを迎えられたらと思いますので、フロアの皆さんも今後の展開に、また、ご期待いただければと思います。

今日は、少し時間が押してしまいましたけれども、最後までご清聴いただきありがとうございます。ステージの皆さんにも拍手を送って、これにて終了といたします。どうもお疲れさまでした。

ということで、このあとは原画ダッシュを観に行ってほしいですね。展覧会へどうぞ。
(終了)

本報告書は、文化庁の委託業務として、大日本印刷株式会社が実施した平成 29 年度「メディア芸術連携促進事業 連携共同事業」の成果をとりまとめたものであり、第三者による著作物が含まれています。転載複製等に関する問い合わせは、文化庁にご連絡ください。